

泊リユウサキ遺跡

—福岡県前原市前原北部研究施設等建設に係る文化財調査報告書—

前原市文化財調査報告書

第102集

2009

前原市教育委員会

泊リユウサキ遺跡

—福岡県前原市前原北部研究施設等建設に係る文化財調査報告書—

前原市文化財調査報告書

第102集

2009

前原市教育委員会



泊リュウサキ遺跡と元岡遺跡

【卷頭図版2】



a 1号木簡(表・裏)



b 2・3・4号木簡

序

前原市は3世紀の中国の歴史書『魏志』倭人伝に登場する「伊都国」が存在したと考えられている場所で、古来より中国・朝鮮半島との積極的な交流が展開され、当時の政治・経済・外交の拠点としてわが国の文化形成に重要な役割を果たしてきました。そのため、市内には弥生時代・古墳時代の遺跡を中心に、国指定史跡5箇所をはじめとする数多くの貴重な文化財が点在しており、歴史と自然が息づく素晴らしい景観を含めてその保護と活用が必要であり、開発による活気あるまちづくりとの調整が図られているところであります。

さて、本書に収められた泊リュウサキ遺跡は前原市で計画を進めている前原北部研究施設等の造成に伴う発掘調査で確認された遺跡で、旧石器時代から中世までの遺構・遺物が確認されています。なかでも奈良時代後半の井戸から出土した木簡は市内初出土の資料であり、古代の糸島の様相を解き明かす重要な情報を含んでいると考えられます。

最後になりましたが、発掘調査にあたりご理解とご協力をいただきました周辺住民の方々、ご指導とご助言を賜りました先生方、また、暑さや寒さを厭わず調査に参加された作業員の皆様に心から感謝申し上げます。

平成21年3月31日

前原市教育委員会
教育長 中原一憲

例 言

- 1 本書は前原市大字泊字リュウサキにて実施される前原市北部研究施設等整備事業にともない行った文化財調査報告書である。
- 2 本書に使用した遺構の実測および平板による地形の測量は主に瓜生秀文、平尾和久、榎崎直子、田中裕美が行った。
- 3 現場における写真および出土遺物の撮影は瓜生・平尾・田中が行った。
- 4 現場における空中写真撮影は有限会社空中写真企画(代表 壇睦夫)に委託した。
- 5 本書に掲載した遺構図および全体図で使用した座標は国土座標系第2系を用いている。方位に関しては磁北で示している。
- 6 遺物の復元は主に友池真由美・末益真奈美・藤森啓子・和多治子・柏田睦子が行った。
- 7 遺物実測は泊リュウサキ遺跡については主に平尾・田中が行った。なお、石器の一部については江野道和が、細石刃核については夏木大吾(福岡大学)が行った。また、泊桂木遺跡については榎崎が行った。
- 8 製図は主に友池・末益が行った。また、遺物実測図内の■はコゲ・スス、■は黒斑、■は丹塗りをしめし、■は特に濃いところをしめす。
- 9 本書の挿図中の遺物番号は写真図版の番号と統一している。なお、写真図版中の遺物は主なものを選択して掲載した。
- 10 本書に掲載した遺物や記録類は順次、伊都国歴史博物館にて収蔵保管する予定である。
- 11 本書の執筆は泊リュウサキ遺跡のⅢ(1)を田中が、その他を平尾が行い、泊桂木遺跡は榎崎が行った。全体的な編集は平尾と田中が協力して行った。

本文目次

1. 泊リュウサキ遺跡	
I .はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の経過	1
3. 調査の組織	2
II . 調査の記録	3
1. 位置と環境	3
2. I区の調査	6
3. II区の調査	17
4. III区の調査	44
III. まとめ	76
(1) 泊リュウサキ遺跡出土の穿孔土器について	77
(2) 井戸出土木簡について	82
2. 泊桂木遺跡	
1. 調査に至る経緯	83
2. 調査の組織	83
3. 調査地点の概要	83
4. 遺構と遺物	84

挿図目次

- 第 1 図 泊リュウサキ遺跡調査区配置図
- 第 2 図 泊リュウサキ遺跡と周辺の主な遺跡(1/25,000)
- 第 3 図 遺跡周辺の地形(1/5,000)
- 第 4 図 I区基本層序(1/60)
- 第 5 図 I区1～3号住居跡実測図(1/60)
- 第 6 図 I区住居跡出土遺物実測図(1/4)
- 第 7 図 I区1～3号掘立柱建物実測図(1/60)
- 第 8 図 I区土坑実測図(1/30)
- 第 9 図 I区1・2号土坑出土遺物実測図(1/4)
- 第10図 I区3・4号出土遺物実測図(1/4)
- 第11図 I区奈良時代畦畔出土遺物実測図1(1/4)
- 第12図 I区奈良時代畦畔出土遺物実測図2(1/3・1/4)
- 第13図 I区谷部包含層出土遺物実測図1(1/3・1/4)
- 第14図 I区谷部包含層出土遺物実測図2(1/4)
- 第15図 I区中央溝・ピット・西側落込み・遺構検出時出土遺物実測図(1/4)
- 第16図 I・Ⅲ区出土石器・鉄器実測図(1/1・1/3・3/4)
- 第17図 Ⅱ区基本層序(1/60)
- 第18図 Ⅱ区1～3号住居跡実測図(1/60)
- 第19図 Ⅱ区1～4号住居跡出土遺物実測図(1/3・1/4)
- 第20図 Ⅱ区5号住居跡・石錘出土状況実測図(1/60・1/10)
- 第21図 Ⅱ区5号住居跡、5号住居跡・井戸出土遺物実測図(1/3・1/4)
- 第22図 Ⅱ区井戸実測図、木簡実測図(1/60・1/2)
- 第23図 Ⅱ区井戸出土遺物実測図1(1/3・1/4)
- 第24図 Ⅱ区井戸出土遺物実測図2(1/3)
- 第25図 Ⅱ区1・2号掘立柱建物実測図(1/60)
- 第26図 Ⅱ区3号掘立柱建物実測図(1/60)
- 第27図 Ⅱ区土坑実測図(1/30)
- 第28図 Ⅱ区土坑出土遺物実測図(1/4)
- 第29図 Ⅱ区甕棺出土状況実測図、甕棺実測図(1/20・1/6)
- 第30図 Ⅱ区ピット出土遺物実測図(1/4)
- 第31図 Ⅱ区谷部包含層出土遺物実測図1(1/4)
- 第32図 Ⅱ区谷部包含層出土遺物実測図2(1/4)
- 第33図 Ⅱ区谷部包含層出土遺物実測図3(1/4)
- 第34図 Ⅱ区谷部包含層出土遺物実測図4(1/4)
- 第35図 Ⅱ区谷部包含層出土遺物実測図5(1/4)
- 第36図 Ⅱ区谷部包含層出土遺物実測図6(1/4)
- 第37図 Ⅱ区谷部包含層出土遺物実測図7(1/4)
- 第38図 Ⅱ区谷部包含層出土遺物実測図8(1/4)
- 第39図 Ⅱ区谷部包含層出土遺物実測図9(1/4)
- 第40図 Ⅱ区谷部包含層出土遺物実測図10(1/4)
- 第41図 Ⅱ区谷部包含層出土遺物実測図11(1/4)
- 第42図 Ⅱ区谷部包含層出土遺物実測図12(1/4)
- 第43図 Ⅱ区谷部包含層出土遺物実測図13(1/4)
- 第44図 Ⅱ区谷部包含層出土遺物実測図14(1/4)
- 第45図 Ⅱ区谷部包含層出土遺物実測図15(1/4)
- 第46図 Ⅱ区谷部包含層出土遺物実測図16(1/4)
- 第47図 Ⅱ区出土石器・鉄器・土製品実測図1(1/3・1/4)
- 第48図 Ⅱ区出土石器・鉄器・土製品実測図2(1/1・1/3)
- 第49図 Ⅱ区出土石器・鉄器・土製品実測図3(3/4・1/3)
- 第50図 Ⅲ区基本層序(1/80)
- 第51図 Ⅲ区1・2号住居跡実測図(1/60)
- 第52図 Ⅲ区1号住居跡出土遺物実測図(1/3・1/4)
- 第53図 Ⅲ区2号住居跡出土遺物実測図1(1/4)
- 第54図 Ⅲ区3～5号住居跡実測図(1/60)
- 第55図 Ⅲ区2～5号住居跡出土遺物実測図(1/3・1/4)
- 第56図 Ⅲ区6～9号住居跡実測図(1/60)
- 第57図 Ⅲ区5～9号住居跡出土遺物実測図(1/4)
- 第58図 Ⅲ区10～12号住居跡実測図(1/60)
- 第59図 Ⅲ区9～12号住居跡出土遺物実測図(1/4)
- 第60図 Ⅲ区12号住居跡、2・4号掘立柱建物、焼土坑出土遺物実測図(1/4)
- 第61図 Ⅲ区13・14号住居跡実測図(1/60)
- 第62図 Ⅲ区15・16号住居跡実測図(1/60)
- 第63図 Ⅲ区1～3号掘立柱建物実測図(1/60)
- 第64図 Ⅲ区4・5号掘立柱建物実測図(1/60)
- 第65図 Ⅲ区6～8号掘立柱建物実測図(1/60)
- 第66図 Ⅲ区2～4、6～8号土坑実測図(1/30)
- 第67図 Ⅲ区4号土坑出土遺物実測図(1/4)
- 第68図 Ⅲ区6～8号土坑出土遺物実測図(1/3・1/4)
- 第69図 Ⅲ区5号土坑実測図(1/20)

第70図	Ⅲ区5号土坑出土遺物実測図1(1/4)	b	I区3号土坑
第71図	Ⅲ区5号土坑出土遺物実測図2(1/4)	c	I区4号土坑
第72図	Ⅲ区焼土坑実測図(1/30)	図版5 a	Ⅱ区調査区全景
第73図	Ⅲ区溝出土遺物実測図(1/3・1/4)	b	Ⅱ区住居跡全景
第74図	Ⅲ区ピット出土遺物実測図1(1/4)	図版6 a	Ⅱ区1号住居跡
第75図	Ⅲ区ピット出土遺物実測図2(1/3・1/4)	b	Ⅱ区5号住居跡
第76図	Ⅲ区包含層出土遺物実測図(1/3・1/4)	c	Ⅱ区甕棺墓
第77図	Ⅲ区出土石器・鉄器・土製品実測図1(1/2・1/3)	図版7 a	Ⅱ区井戸完掘状況
第78図	Ⅲ区出土石器・鉄器・土製品実測図2(1/1・1/2・1/3・1/4・3/4)	b	Ⅲ区調査区と元岡遺跡遠景
第79図	泊桂木遺跡第3次調査区全体図(1/100)	図版8 a	Ⅲ区全景
第80図	1号土坑実測図(1/30)	b	Ⅲ区1号住居跡
第81図	1号土坑出土遺物実測図(1/2・1/3)	図版9 a	Ⅲ区2号住居跡
第82図	2号土坑実測図(1/30)	b	Ⅲ区3号住居跡
第83図	2号土坑出土遺物実測図(1/3)	c	Ⅲ区4号住居跡
第84図	1号掘立柱建物実測図(1/60)	図版10 a	Ⅲ区5号住居跡
第85図	1号掘立柱建物出土遺物実測図(1/3)	b	Ⅲ区7号住居跡
第86図	1号溝実測図(1/60)	c	Ⅲ区9号住居跡
第87図	1号溝出土遺物実測図(1/2・1/3)	図版11 a	Ⅲ区2号土坑
第88図	2・3号溝実測図1(1/60)	b	Ⅲ区3号土坑
第89図	2号溝出土遺物実測図(1/2・1/3)	c	Ⅲ区5号土坑1
		図版12 a	Ⅲ区5号土坑2
		b	Ⅲ区焼土坑
		c	Ⅲ区基本層序
		図版13	I区住居跡、土坑、奈良時代水田畦畔出土遺物
		図版14	I区奈良時代水田畦畔、包含層出土遺物
		図版15	I区包含層、その他の遺物、Ⅱ区1・3号住居跡出土遺物
		図版16	Ⅱ区3～5号住居跡、井戸出土遺物
		図版17	Ⅱ区土坑、甕棺、ピット、その他の遺物、Ⅲ区1号住居跡出土遺物
		図版18	Ⅲ区2～9号住居跡、5号土坑出土遺物
		図版19	Ⅱ区井戸出土1～4号木簡
		図版20 a	泊桂木遺跡第3次調査地点(西から)
		b	調査区全景(南東から)
		図版21 a	1・2号土坑(北東から)
		b	1号掘立柱建物および2号・3号溝(南東から)
		図版22	泊桂木遺跡第3次調査出土遺物

図版目次

巻頭図版1 泊リユウサキ遺跡と元岡遺跡

巻頭図版2 a 1号木簡(表・裏)

b 2・3・4号木簡

図版1 a I区調査区全景

b I区1～3号住居跡全景

図版2 a I区調査区遠景

b I区1・2号住居跡遠景

c I区1号住居跡

図版3 a I区2号住居跡

b I区3号住居跡

c I区1号土坑

図版4 a I区2号土坑

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

泊リュウサキ遺跡は福岡県前原市大字泊字リュウサキに所在する。

前原市は福岡市の西隣にあり、以前から福岡都心部への通勤圏内として注目されていた。近年はJRと福岡市営地下鉄の相互乗り入れや筑肥線の複線化、西九州道と福岡都市高速道路との接続などの要因により、都心部への移動時間の短縮が図られ、人口の増加が急速に進んでいる。また、九州大学伊都キャンパスの開校にともない、学生人口の増加や周辺産業の発達も見込まれている。

このような状況の中、本市でも九州大学糸島キャンパスに隣接した泊地区で前原北部研究施設等整備事業が計画され、約2万㎡の造成が実施されることとなった。

しかし、事業対象地域が周知の埋蔵文化財包蔵地に含まれていたため、事業主体者である前原市都市開発公社より平成19年9月28日付けで文化財保護法94条の規定に基づく埋蔵文化財発掘の通知を受け、同年11月1日より文化課による試掘調査を実施した結果、遺跡の存在が確認された。

2. 調査の経過

泊リュウサキ遺跡では試掘調査の結果、事業対象地の西側半分が谷であることから、遺構の残りの良い東側を中心に約2400㎡の発掘調査を行った。

調査対象地をⅠ～Ⅲ区に分割して調査を実施したが、埋蔵文化財発掘の通知が平成19年度後半に行われたことなどから、発掘調査が平成19年度と平成20年度の2カ年度に跨ることとなった。

発掘調査は同年12月10日から開始し、翌20年3月31日までにⅠ・Ⅱ区を、平成20年4月11日から6月16日までⅢ区の調査を実施した。

また、平成19年度の調査最終日にⅡ区の井戸から木簡が出土するなど大きな成果が認められたが、平成20年度初頭の人事異動により調査担当者が他課へ異動したことで、急遽、別の職員が調査を引き継ぐこととなり、木簡の史的価値の調査が遅れたことは反省すべき点であった。

発掘調査途中、平成20年6月9日に木簡に関する記者発表を行い、6月14日に現地説明会を開催した。

なお、発掘調査ならびに出土品整理段階で多くの方々にご教示を頂きました。ご芳名を記して感謝申し上げます。

武末純一(福岡大学)、常松幹雄・菅波正人・比佐陽一郎(福岡市教育委員会)、坂上康俊(九州大学大学院)、柴田博子(宮崎産業経営大学)、永山修一(ラ・サール学園)、酒井芳治・杉原敏之(九州歴史資料館)、平川南(国立歴史民俗博物館)、片多雅樹(福岡市埋蔵文化財センター)、福田博右

3. 調査の組織

平成19・20年度の発掘調査に係る組織は以下のとおりである。

調査主体者：前原市教育委員会

平成19年度(I・II区調査)

総括	教育長	中原一憲
	教育部長	坂巻善直
	文化課長	久保静代
	発掘調査係長	角 浩行
庶務	文化振興係主事	矢野真司
調査	発掘調査係主査	瓜生秀文
	主事	江崎靖隆
	主事	檜崎直子

平成20年度(III区調査、整理・報告)

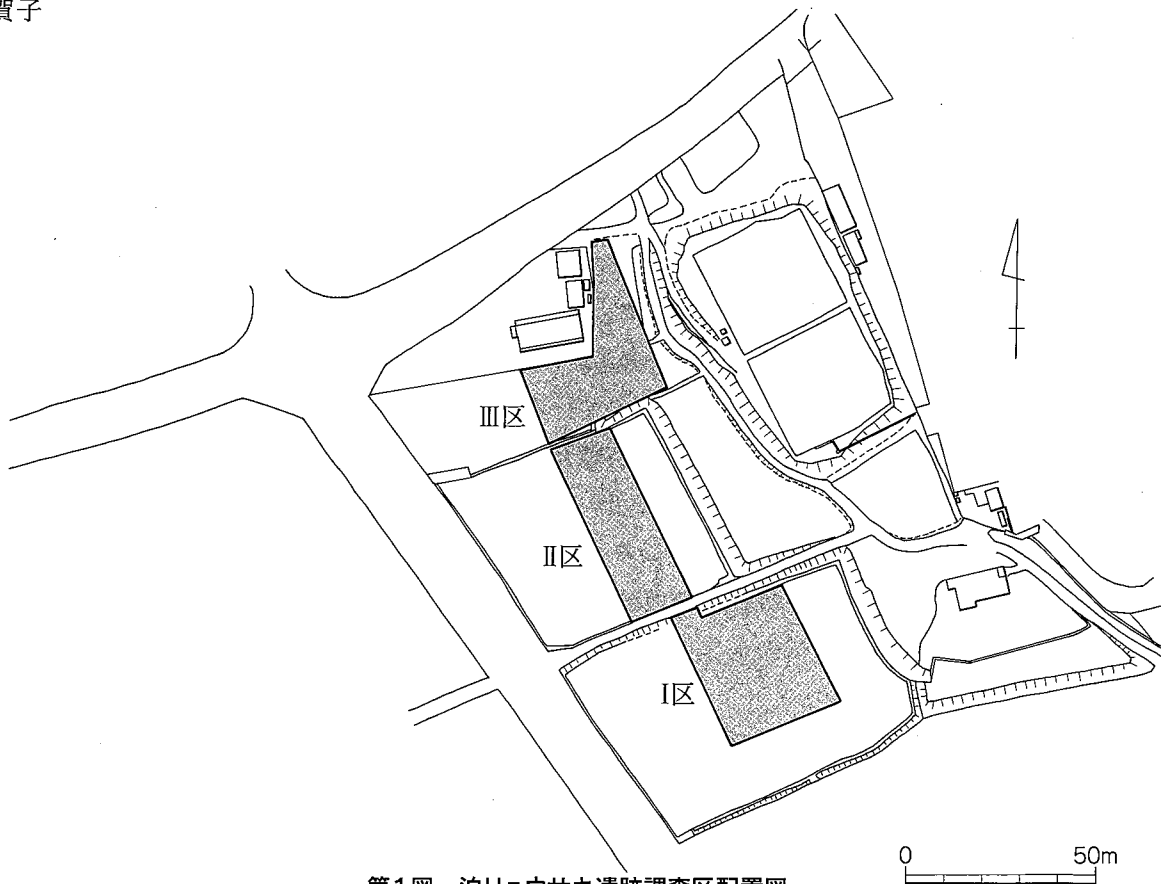
	中原一憲
	坂巻善直
	谷口正和
	角 浩行
	岡本由貴
発掘調査係主任	平尾和久
臨時職員	田中裕美
	龍 孝明

発掘作業

江藤晴美・川内真智子・浦上良枝・山下智子・柴田敏一・伊藤和雅・山村康久・杉山寛司・米山八重子・川上久美子・藤木和子・市丸千賀子・柏田睦子・和多治子・藤森啓子・馬場義照・宮本ミキヨ・酒田恵子・吉田弘・中村貴美・蓑田ミツ子・山本千賀子・井上まり子・末松繁光・福井菊雄・中山健介・田角節子

整理作業

友池真由美・末益真奈美・柏田睦子・和多治子・藤森啓子・米山八重子・川上久美子・藤木和子・市丸千賀子



第1図 泊リュウサキ遺跡調査区配置図

II. 調査の記録

1. 位置と環境

泊リュウサキ遺跡は前原市の北部、標高5～10mの低地に位置し、北は志摩町、東は福岡市に接している。東側の福岡市元岡・桑原地区では九州大学の移転に伴う遺跡の調査が継続的に行われており、今日まで大きな成果を上げている。

今回調査した泊リュウサキ遺跡の周辺は現在、江戸時代の干拓等により水田が広がっているが、本来は遺跡の東側から古今津湾、西側から古加布里湾が湾入しており、わずかに志登地区が陸橋部として南北をつなぐ役割を果たしていたようである。

このことは貝原益軒著『筑前国続風土記』によると「…昔の入海よりむかひに、泊村あり。是むかしの海の入江にて、船の泊まりし所にて唐船をも、ここにつなげりと云。…」とあり、「泊」という地名の由来と考えられるとともに、泊地区が交通の要衝であったことを如実に示している。

泊地区では昭和40年代に泊熊野遺跡で大量の水銀朱が納められた甕棺が発見されたことが、記録された考古学的所見の始まりである。この甕棺は現在県立糸島高等学校の郷土博物館に収められ公開されている。その後、しばらく発見事例がない時期が続くが、周辺の丘陵部を見てみるとミカン畑が展開しており、1960年代の開墾等により十分な発掘調査が行われないうまま破壊されていることが想定される。

1986年には糸島古文化研究会による御道具山古墳の墳丘確認調査が行われた。その結果、全長65mの前方後円墳であることが確認され、墳裾から布留式古段階の土師器が確認されている。

その後1990年代に入るまで、この地域の発掘調査はほとんど行われなかったが、1994年の泊桂木遺跡の調査で弥生時代中期から古墳時代前期にかけての集落が確認された(岡部編1997)。また、2006年には泊地区を横断する県道の拡幅にともなう事前の発掘調査が行われ集落が確認されている(福田編2008)。

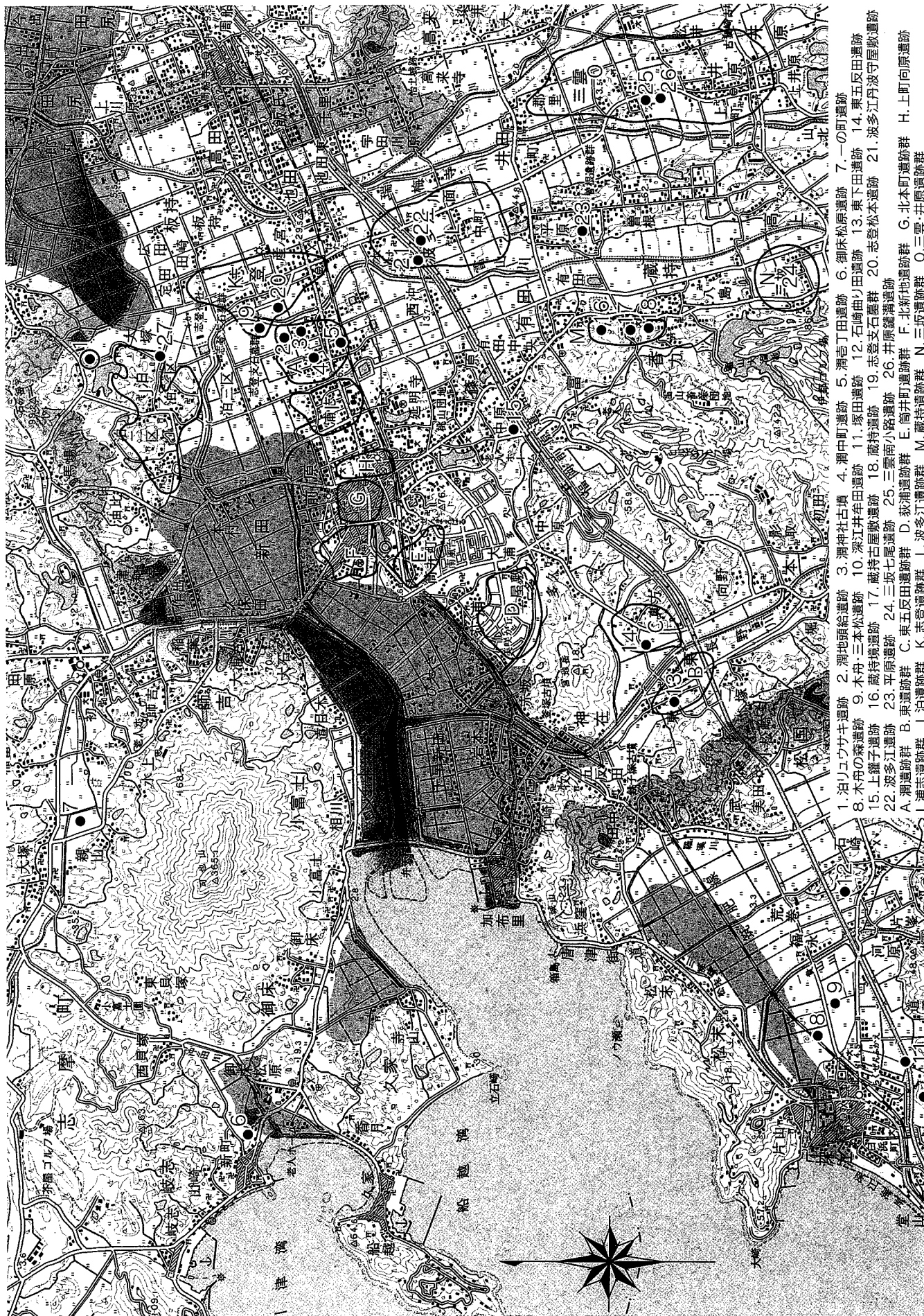
すこし周囲の遺跡をみても、東側には元岡・桑原遺跡群が広がっている。泊リュウサキ遺跡に隣接している元岡遺跡42次調査では流路のなかに大量の弥生時代後期の土器が投棄された状態で出土し、新代の貨幣である貨泉をはじめとする対外交流の痕跡を示す資料が出土している。

また、20次調査では奈良時代の木簡や巡方、丸軋などのベルト飾り、また円面硯や墨書土器も出土したことにより公的施設の存在をうかがわせる。24次調査では数多くの製鉄炉が確認されており、大宰府直属の官営工房であったことが想定されている。

泊地区の南側には弥生時代早期の志登支石墓があり、8号支石墓からは柳葉形磨製石鏃4本が、6号支石墓からは黒曜石製の打製石鏃6点が出土している。なお、このように副葬品をもつ支石墓は糸島地域に集中することも近年注目されている。

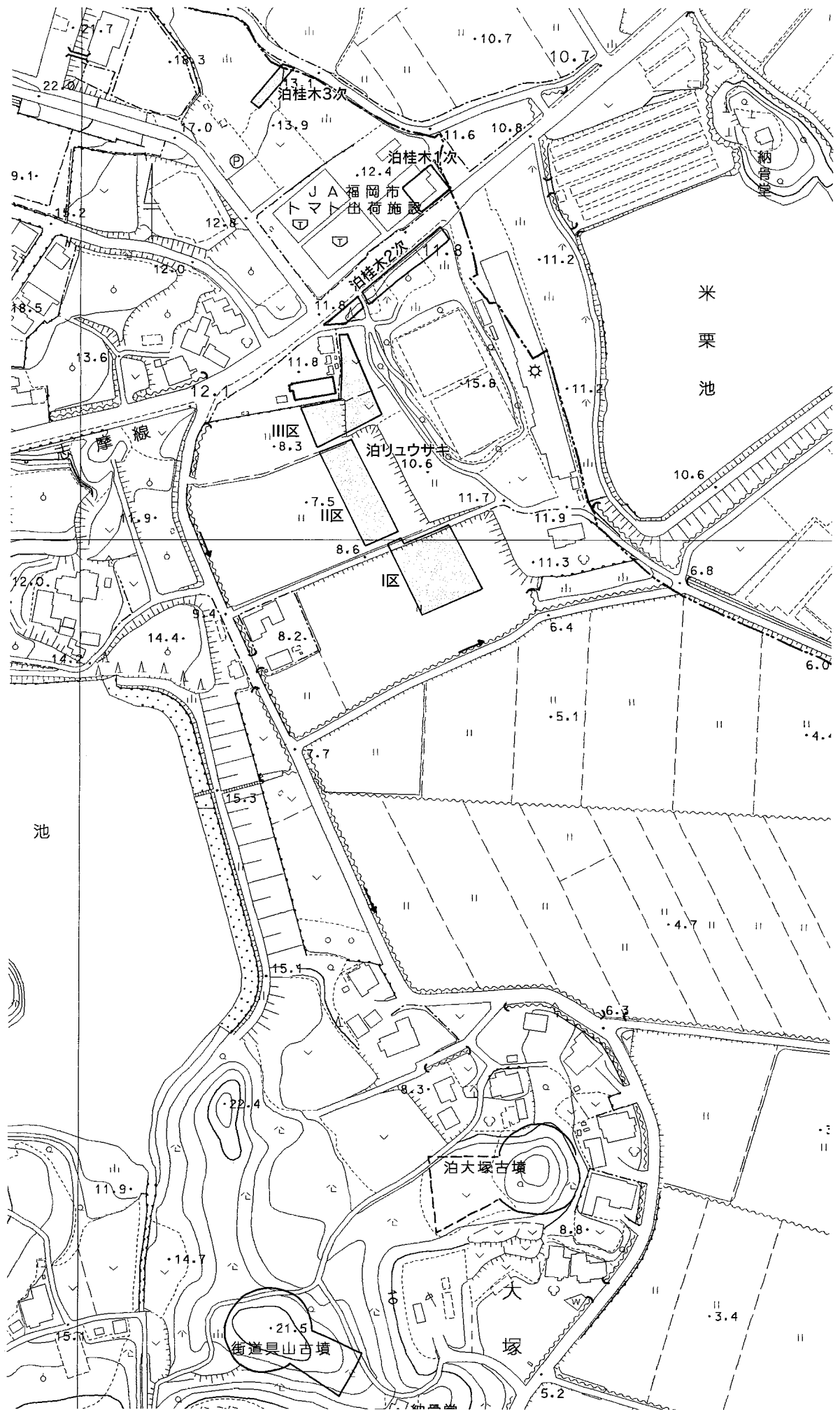
なお、平成15年から調査が行われた潤地頭給遺跡では弥生時代中期の甕棺墓群や弥生時代終末期から古墳時代早期にかけての玉作り工房群が確認されており、現在、出土品の整理および報告書の刊行が続けられている。

このように近年、前原市沿岸部の発掘調査の事例が増加し、それにともない注目すべき調査成果も上がってきている。今後は伊都国の王都と目される三雲・井原遺跡との関連性など、やや広い視野に立



- 1. 泊リユウサキ遺跡 2. 酒地頭給遺跡 3. 酒神社古墳 4. 酒中町遺跡 5. 酒石田遺跡 6. 御床松原遺跡 7. 一の町遺跡
- 8. 木舟の森遺跡 9. 木舟三本松遺跡 10. 深江井半田遺跡 11. 塚田遺跡 12. 石崎曲り田遺跡 13. 東下田遺跡 14. 東五反田遺跡
- 15. 上羅子遺跡 16. 蔵持塚遺跡 17. 蔵持古屋敷遺跡 18. 蔵持遺跡 19. 志登支石墓群 20. 志登松本遺跡 21. 波多江丹波守屋敷遺跡
- 22. 波多江遺跡 23. 平原遺跡 24. 三坂七尾遺跡 25. 三雲南小路遺跡 26. 井原遺跡
- A. 濁遺跡群 B. 東遺跡群 C. 東五反田遺跡群 D. 萩浦遺跡群 E. 筒井町遺跡群 F. 北新地遺跡群 G. 北本町遺跡群 H. 上町向原遺跡
- I. 浦志遺跡群 J. 泊遺跡群 K. 志登遺跡群 L. 波多江遺跡群 M. 蔵持遺跡群 N. 三坂遺跡群 O. 三雲・井原遺跡群

第2図 泊リユウサキ遺跡と周辺の主な遺跡(1/25,000)



第3図 遺跡周辺の地形 (1/5,000)

つ調査・研究が必要な時期を迎えているといえるだろう。

【参考文献】

江崎靖隆編 2007『潤地頭給遺跡II』前原市文化財調査報告書第96集

江野道和編 2006『潤地頭給遺跡I』前原市文化財調査報告書第93集

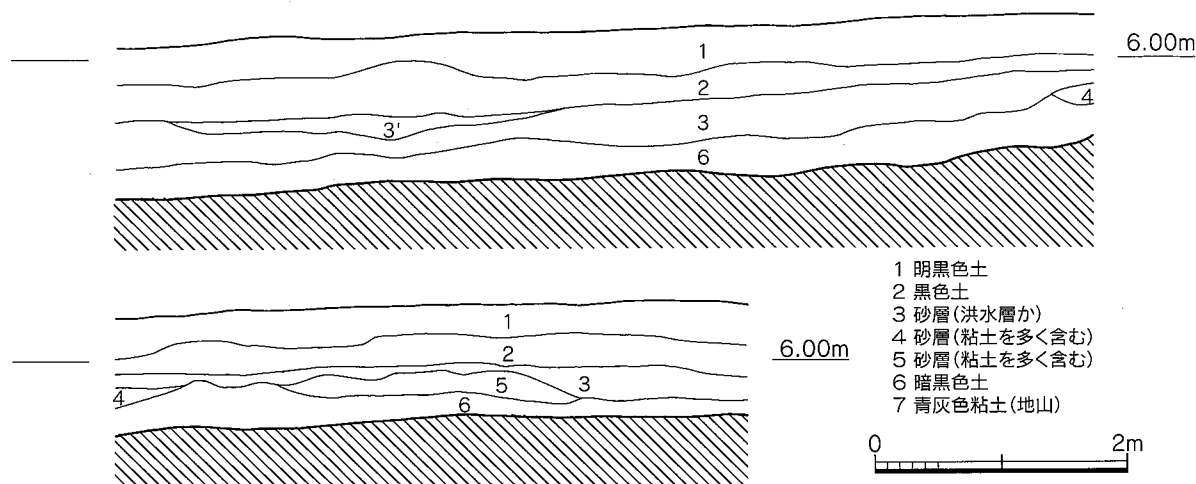
岡部裕俊編 1997『泊桂木遺跡』前原市文化財調査報告書第64集

貝原益軒 2001『筑前国続風土記』(第四刷)文献出版

菅波正人編 2007『元岡・桑原遺跡群8』福岡市埋蔵文化財調査報告書第962集

福田博右編 2008『泊桂木遺跡II』前原市文化財調査報告書第98集

文化財保護委員会 1956『志登支石墓群』文化財保護委員会調査報告書第4



第4図 I区基本層序(1/60)

2. I区の調査

(1) 概要

調査対象地域のうち最も南側のものをI区とする。調査面積は約800m²である。確認された主な遺構は住居跡5棟、土坑4基である。

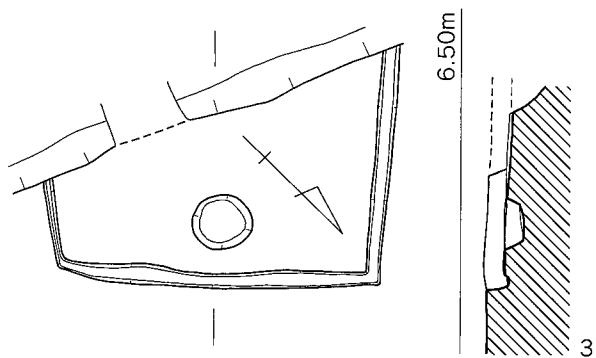
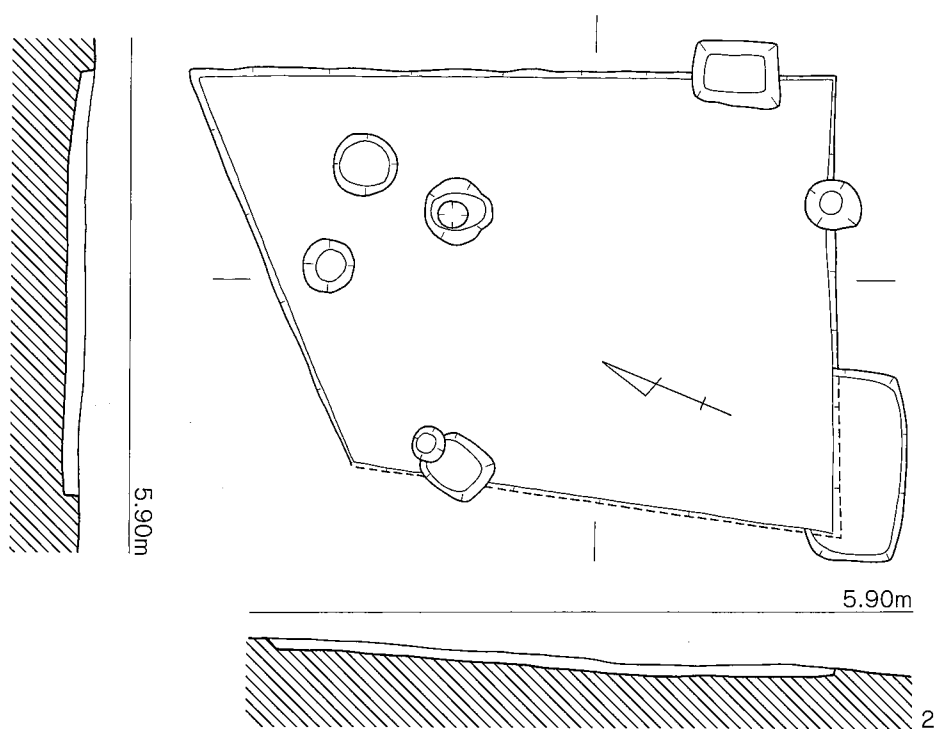
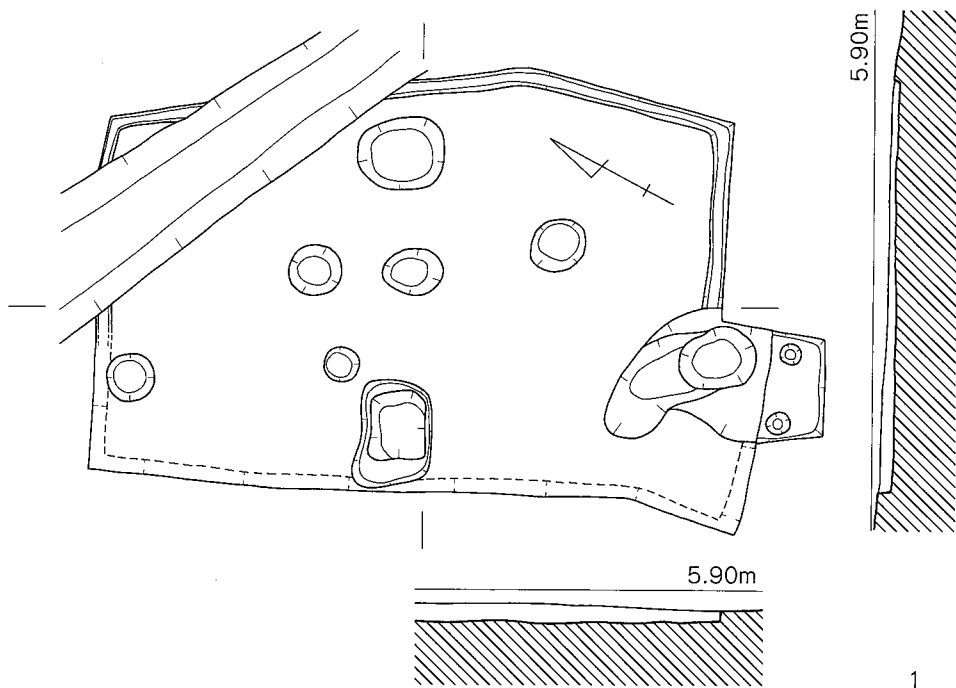
(2) 住居跡

1号住居跡(第5図1)北西-南東方向に長軸を持つ長方形の住居跡で北側を溝に切られる。東半分の壁際には溝を添わせる。長軸5.01m、短軸3.27mを測る。出土遺物はない。

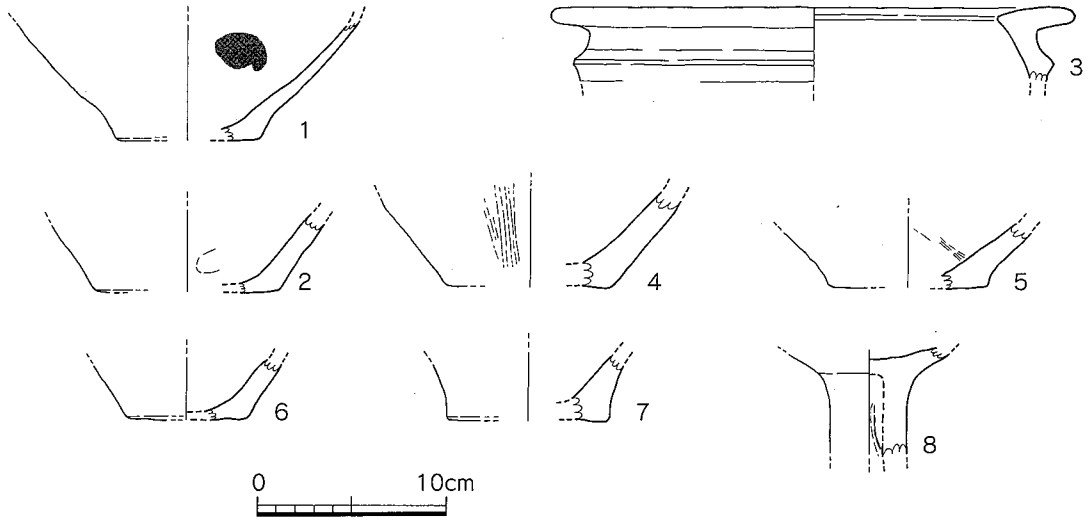
2号住居跡(第5図2)調査区の西側に位置する住居跡で長軸5.15m、短軸3.76mを測る。平面形態は台形になっているが、本来は長方形であろう。主柱穴は不明確である。

出土遺物(第6図1・2)2号住居跡からは甕の底部が2点出土した。1は底部から内湾しつつ立ち上がり、内面にススの痕跡を残す。2は底部から直線的に立ち上がり、内面の所々にコゲが付着する。いずれも平底である。

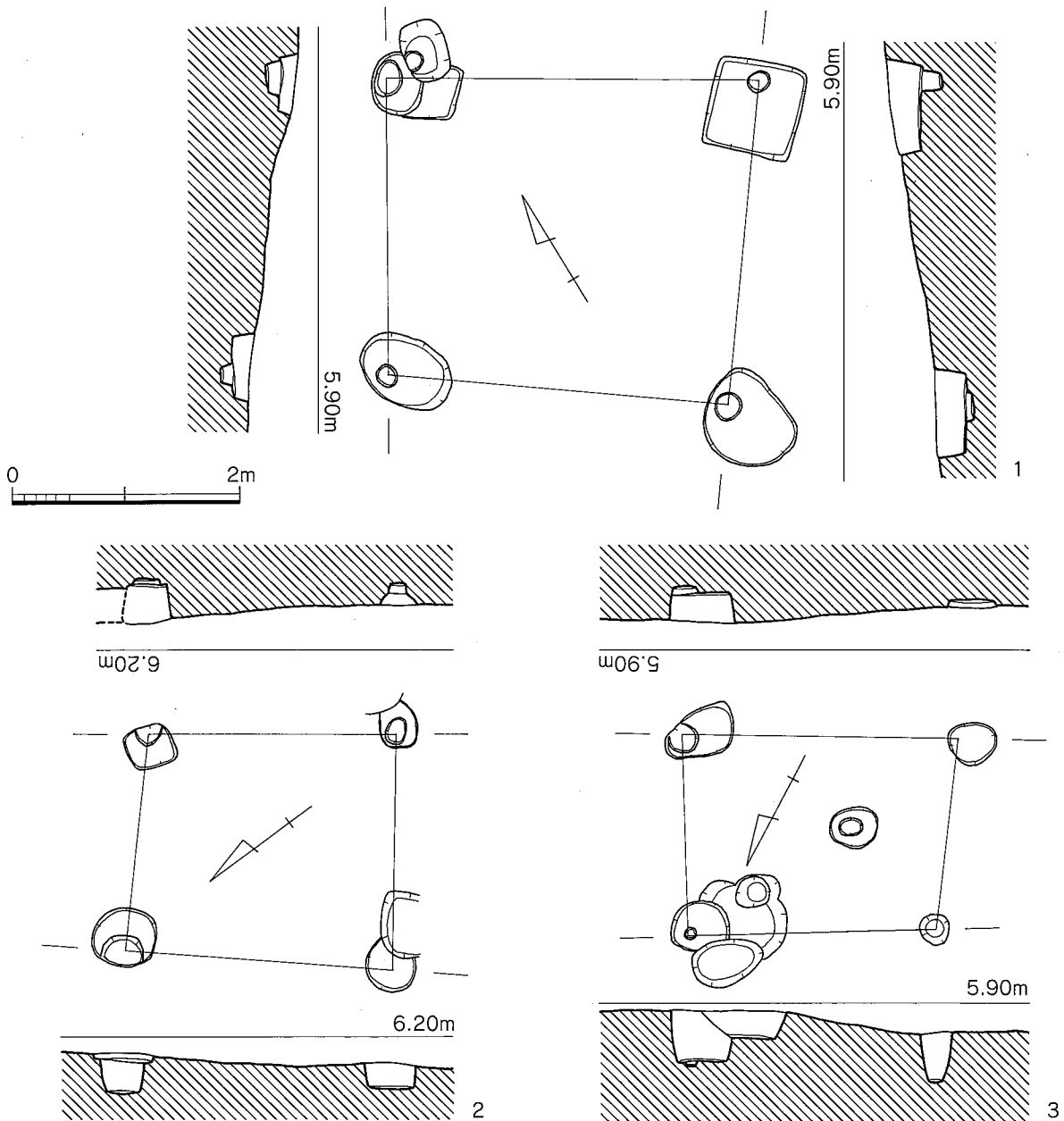
3号住居跡(第5図3)調査区の中央に位置する小型の住居跡。南半分を溝に切られる。現存で2.58×1.80mを測る。



第5图 I区1~3号住居跡实测图(1/60)



第6图 I区住居迹出土遗物实测图(1/4)



第7图 I区1~3号掘立柱建物实测图(1/60)

出土遺物(第6図3~8) 3号住居跡からは土器が6点出土した。3は甕の口縁で、その端部はやや跳ね上がる。突帯は三角である。4~7は底部である。このうち、4~6は住居内に設定したベルトから出土した。4は底部から直線的に立ち上がり、外面にハケメを施し、一部ススが付着する。6・7の底部裏面には黒斑がのこる。8は高坏の坏部と脚部の接合部付近の破片。外面はナデで、内面には絞り痕をのこす。

(3) 掘立柱建物

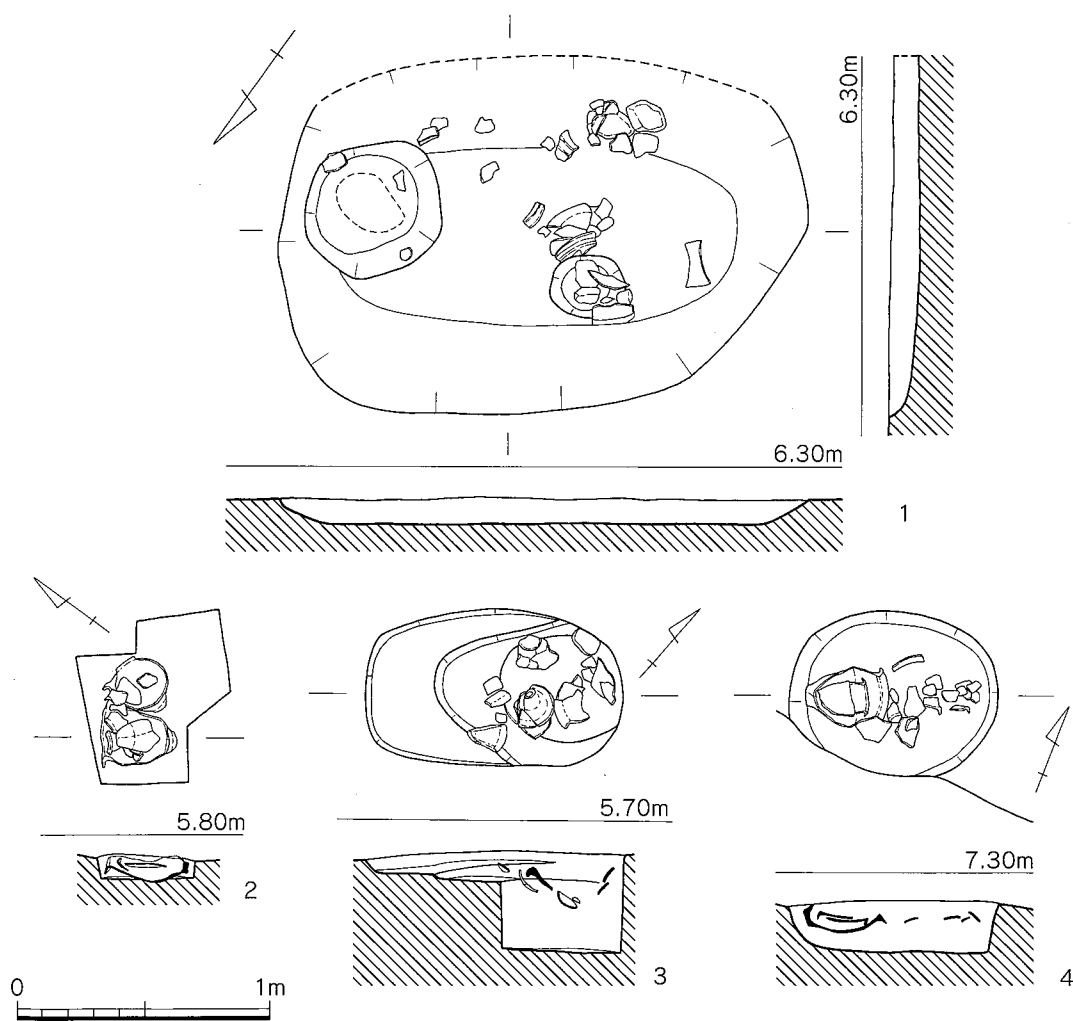
1号掘立柱建物(第7図1) 調査区の中央に位置する1間×1間の掘立柱建物で2.98×2.86mを測る。出土遺物はない。

2号掘立柱建物(第7図2) 調査区の中央に位置する1間×1間の掘立柱建物で2.05×2.35mを測る。出土遺物はない。

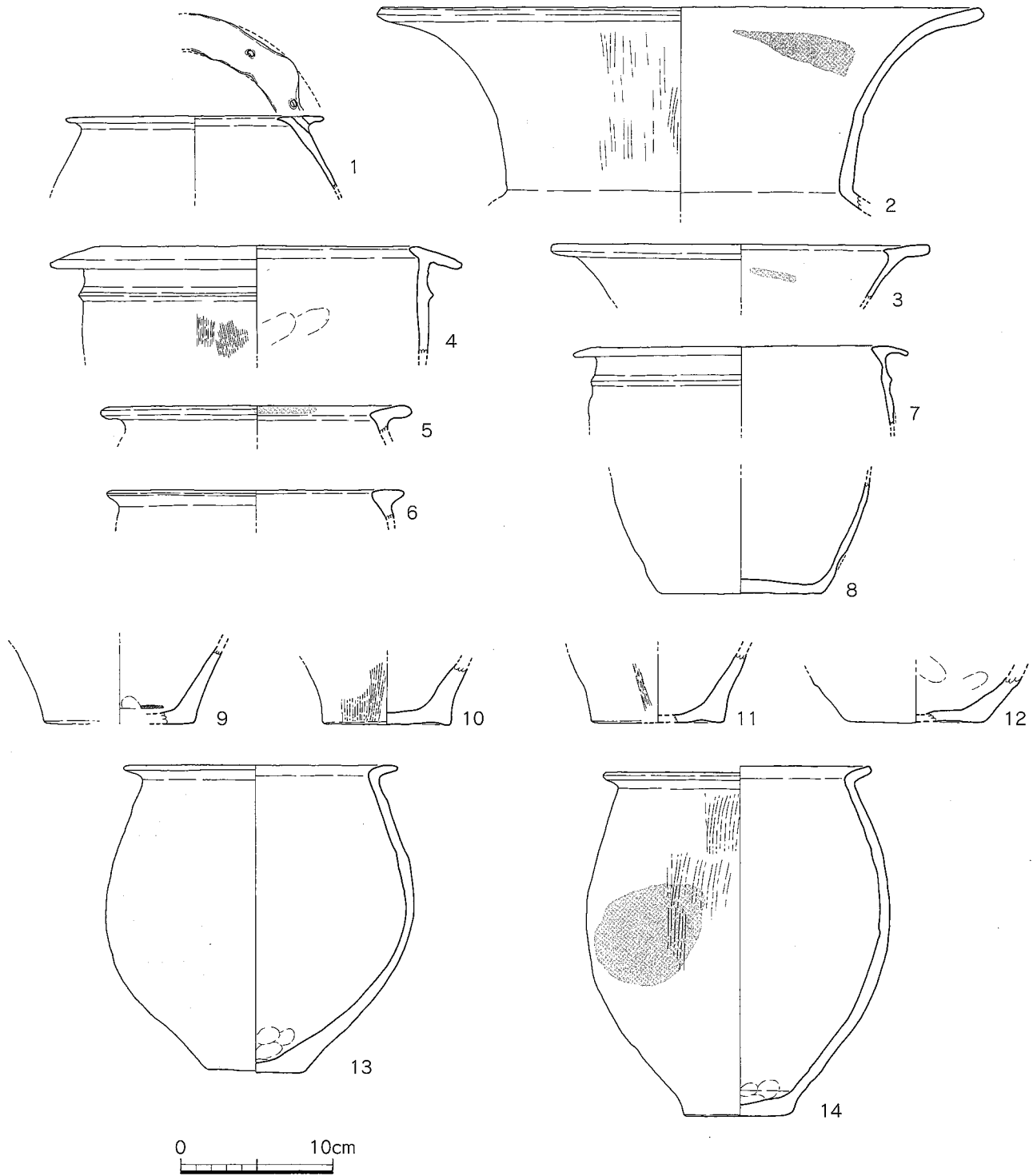
3号掘立柱建物(第7図3) 調査区の中央に位置する1間×1間の掘立柱建物で1.70×2.17mを測る。長軸を東西方向にもち、出土遺物はない。

(4) 土坑

1号土坑(第8図1) 楕円形の土坑で長軸2.10m×短軸1.42m、深さ0.10mを測る。

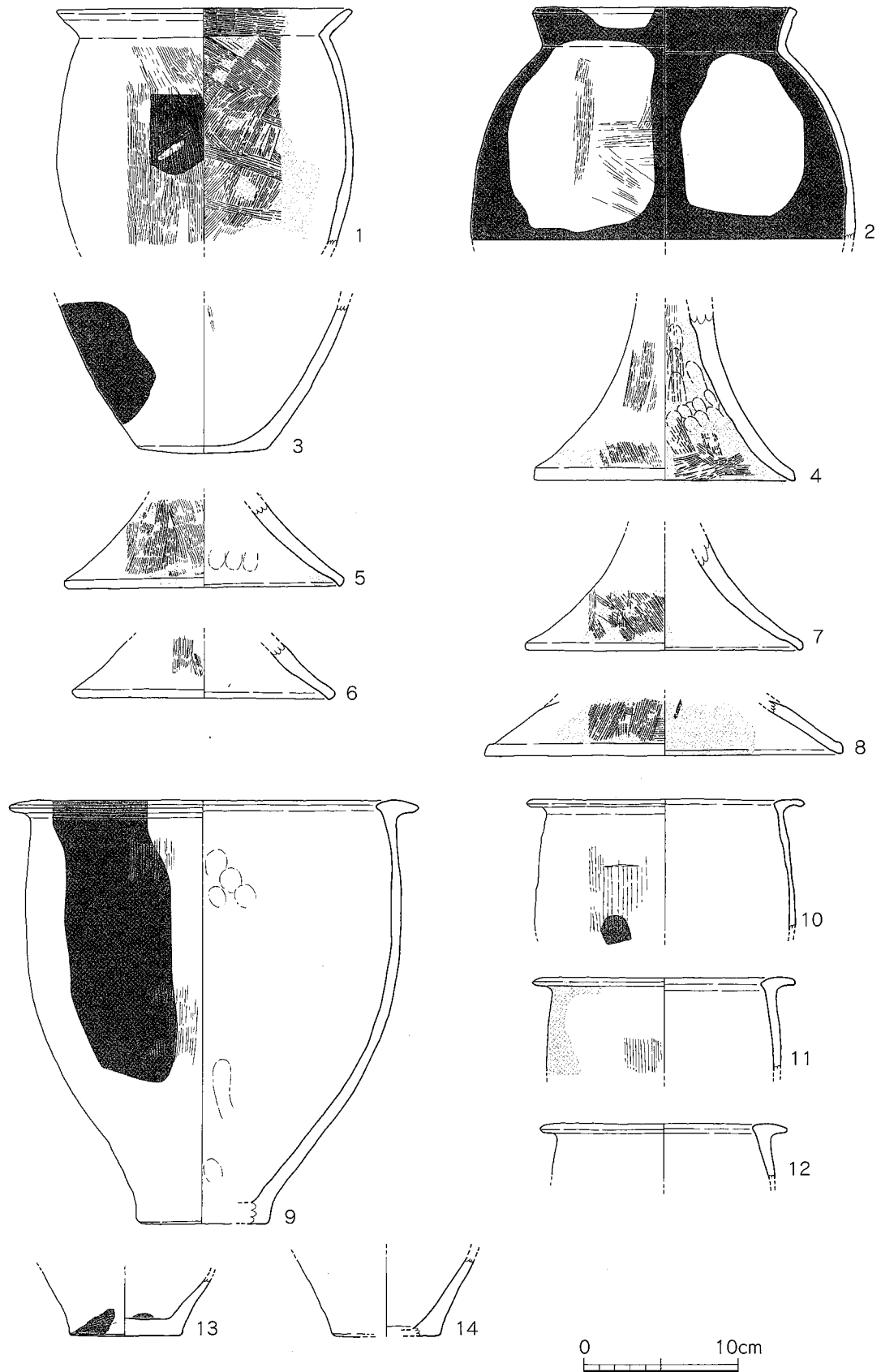


第8図 I区土坑実測図(1/30)



第9図 I区1・2号土坑出土遺物実測図(1/4)

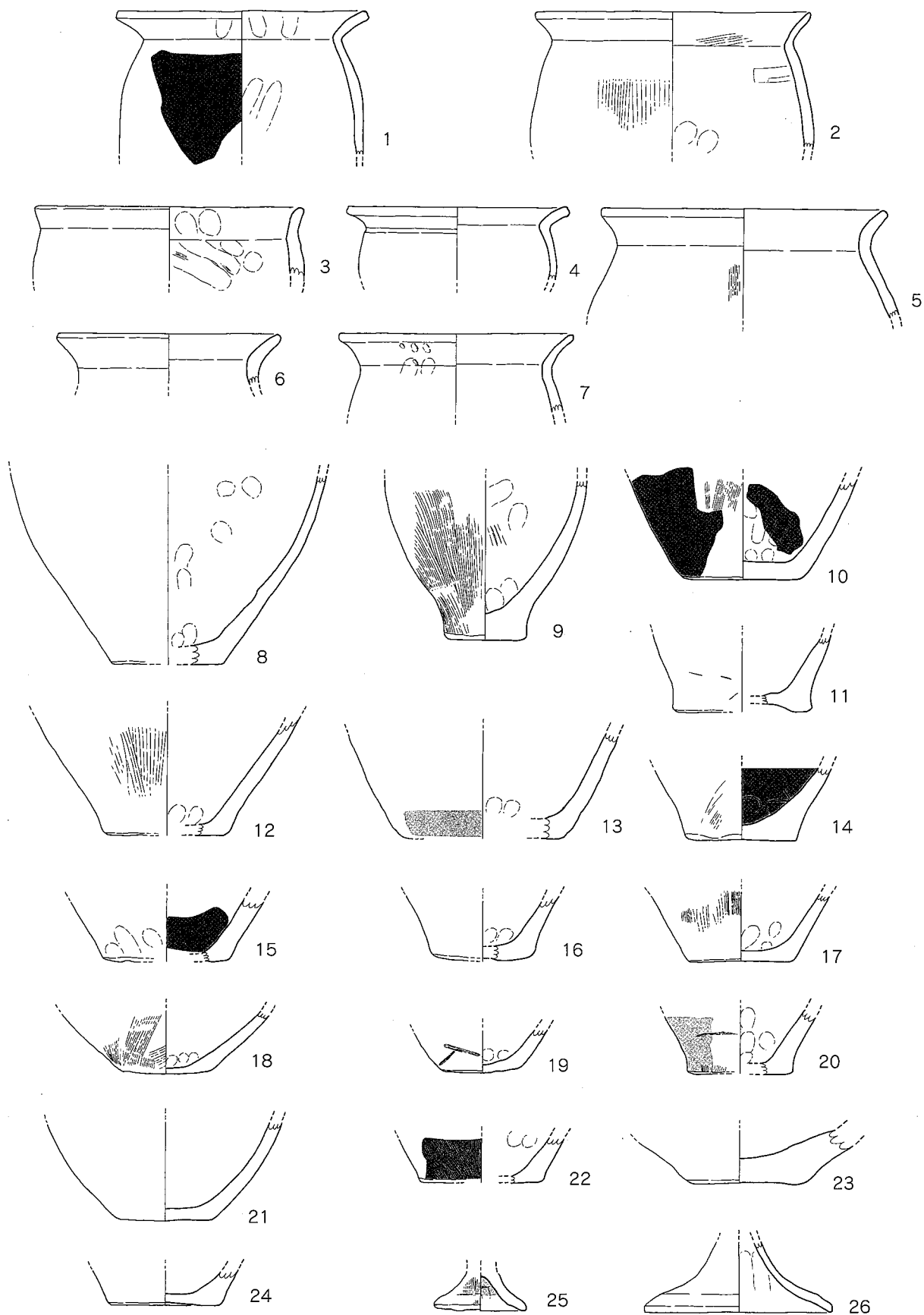
出土遺物(第9図1~12) 1~3は壺の口縁部。1は蓋をのせる無頸壺の口縁部である。端部を一部欠くが、打ち欠きかどうかは不明。蓋を閉じ合わせる孔を2個持つ。2は広口壺の口縁部である。外面は丹塗りで暗文状の縦ミガキを施すが、剥離が著しく単位は確認できない。内面の丹塗りで、口縁端部付近に黒斑をもち、端部を若干つまみ上げる。3は鋤先口縁の広口壺か。口縁部が若干跳ね上がる。4~7は甕の口縁部である。4・7は端部が外に垂れる口縁部で三角突帯を



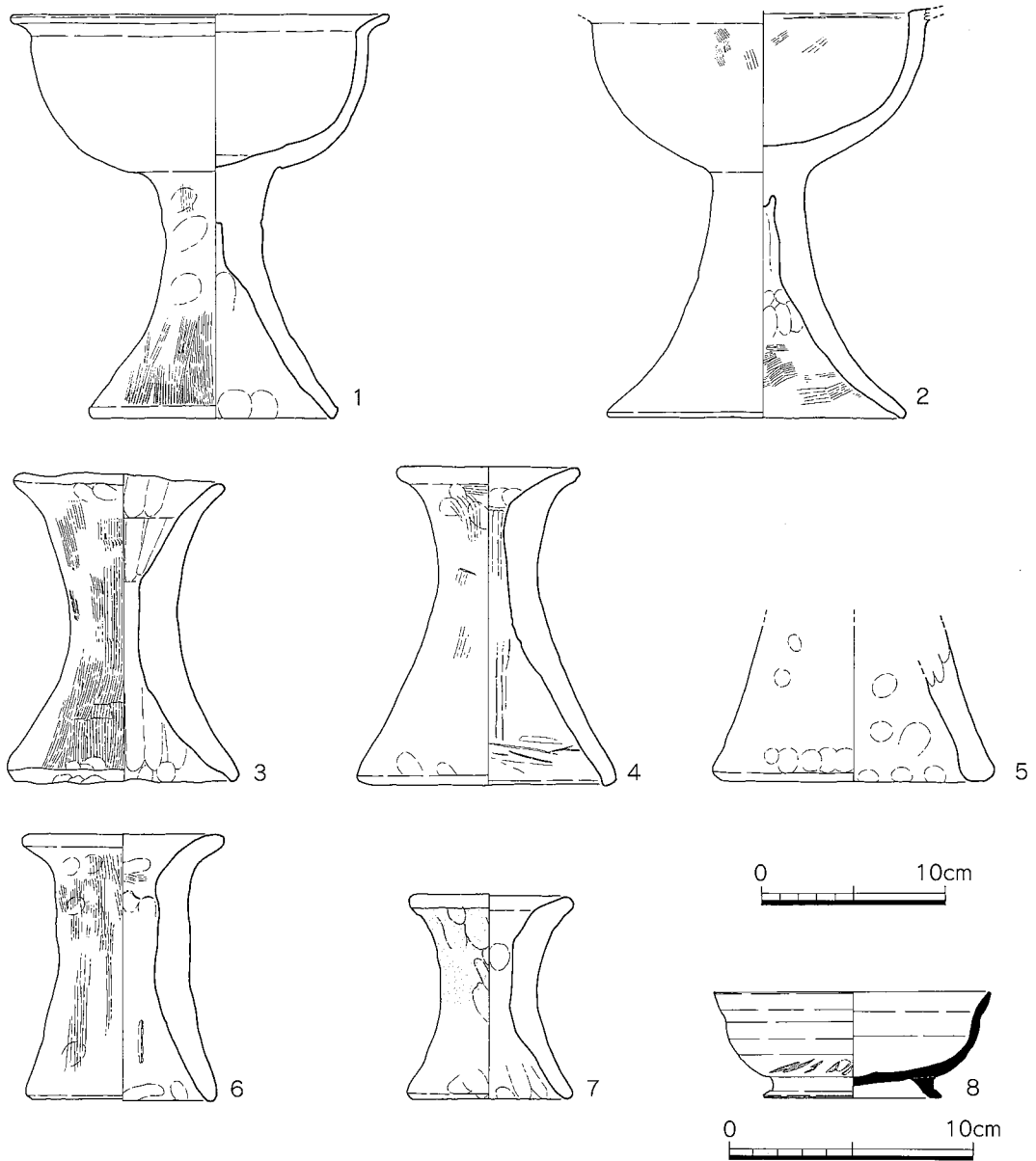
第10図 I区3・4号土坑出土遺物実測図(1/4)

もつ。5は跳ね上がる口縁部で、6は断面三角形の口縁部である。6は若干古い。8～12は底部。8は平底で裏面にススが付着する。壺の底部であろう。9～11は甕の底部。10・11の外面にはハケメをのこす。12は平底で直線的に立ち上がる。壺の底部か。

2号土坑(第8図2)平面プランが不思議な土坑で、プランの確認違いの可能性が高い。土坑か



第11图 I区奈良時代畦畔出土遺物実測图1(1/4)



第12図 I区奈良時代畦畔出土遺物実測図2(1/3・1/4)

らは甕が2点並んで出土している。

出土遺物(第9図13・14) 13は完形に復元できる無頸壺に近い甕で、口縁部が若干跳ね上がる。最大径が胴部中央よりやや下であり、外面に被熱痕を残す。なお、外面は剥離が著しく調整不明。14は甕である。平底で跳ね上がる口縁部をもち、胴部の中央に黒斑をもつ。

3号土坑(第8図3) 長軸0.99m、短軸0.60mを測る土坑である。土坑の東側が深くなっており、そこに流れ込むような形で遺物が出土している。

出土遺物(第10図1～9) 1は口縁断面く字形の長胴甕である。内外面にハケメを施す。内外面ともに胴部下方に黒斑をもつ。口縁端部は丸く収める。2は直口壺の上半部である。外面にハケメを施し、胴部上半にはススが付着する。内面にはコゲが付着する。3は甕の底部である。内面にススが付着する。若干凸レンズ底である。4～8は高坏の脚部である。いずれも脚端部を丁寧に整形し、黒斑をもつものが多い。いずれも外面ハケメを施す。

4号土坑(第8図4)楕円形の土坑で長軸0.81m、短軸0.63cmを測る。甕が入れ子状態で確認されている。

出土遺物(第10図9~14)9は図上で完形に復元された甕である。外面にハケメを施すが、剥離が著しく詳細不明。外面上半部にススが付着する。10~12は甕の上半部である。10は外面にハケメを施すが、部分的に著しい剥離がみられ、ススも付着する。11は若干跳ね上がる口縁をもち、外面にハケメを施す。胴上半部にうっすらとススが付着する。13・14は甕の底部である。いずれも平底である。13の外面には帯状にススが付着し、内面底部にはコゲがのこる。

(4) その他

①奈良時代畦畔出土遺物(第11・12図)

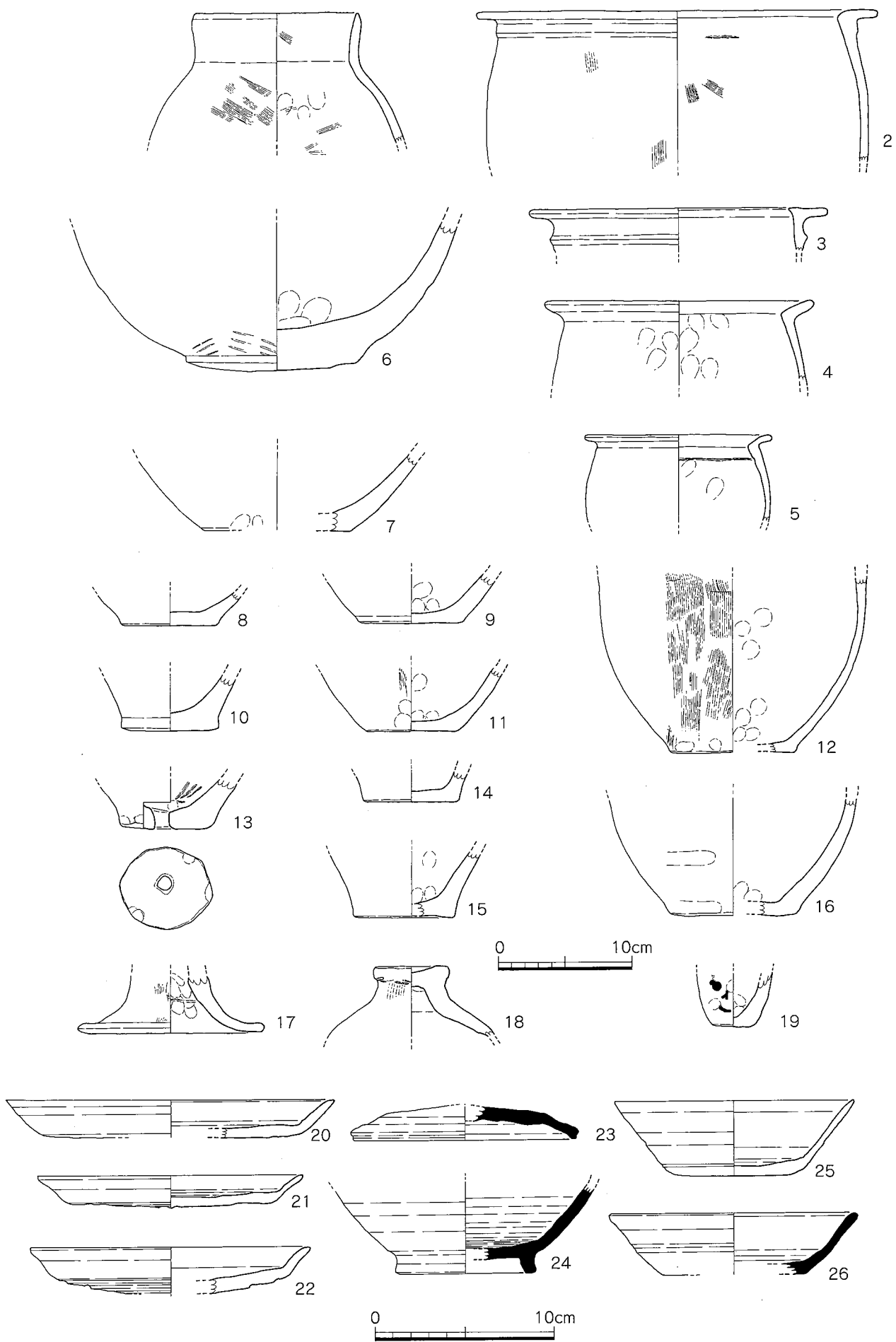
遺物を整理する段階で「奈良時代畦畔」と記されたカードを伴う一群が確認されたのでここで報告する。しかし、遺物的には弥生土器が大半であり、遺物包含層である可能性が高いと考える。第11図1~7は甕の上半部である。3・6を除きいずれも弥生時代後期のものである。3は頸部のしまりがほとんどない甕で、器壁も厚い。内面に強いナデを施す。6は甕の口縁端部で胴部と比べ肥厚する。8~24は底部である。一部壺も含まれるが大部分は甕の底部であろう。16・18・19は凸レンズ底であるが、それ以外は平底である。25はミニチュア土器の脚部である。上半部は欠けているが高坏であろうか。外面にハケメを施し、黒斑も認められる。26は高坏の脚部である。5世紀代か。第12図1・2は高坏である。1の坏部は跳ね上がる口縁部をもつ椀形である。脚部はしまりのない脚柱部からゆるく広がり端部に至る。2は口縁端部を欠くがおおよそ1と同じ形態である。3~7は器台である。3・7は中央部にくびれをもち、4・6は上半部にくびれをもつ。5は破片であるが、くびれは上半部に位置するであろう。8は須恵器の脚付坏である。坏と脚の接合部付近には工具痕がのこる。

②谷部包含層出土遺物(第13・14図)

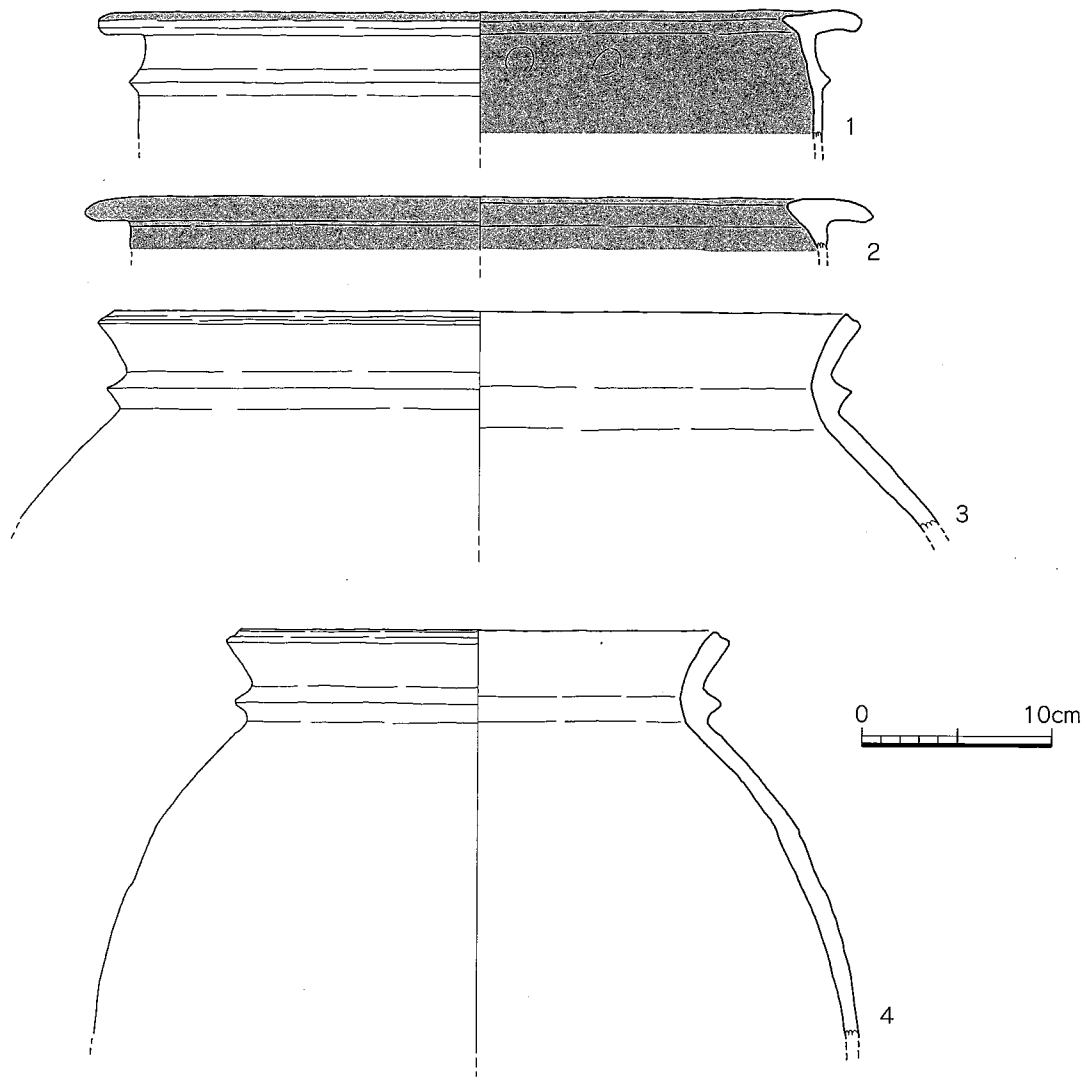
調査区の西側は谷になっており、そこから各時代の遺物が出土している。第13図1は直口壺の上半部である。口縁端部の調整は甘く、外面にハケメを施す。2~5は甕の上半部である。2・3の口縁部は水平で、4・5は跳ね上がる。5の内面には接合痕が認められる。6・7は壺の底部である。6はタタキの痕跡をのこし、7は外湾しつつ立ち上がる。8~16は底部の破片である。一部、壺の底部を含むが、大部分は甕の底部である。12は器壁を薄く仕上げ、13は底部穿孔が認められる。これは土器の焼成前に両面から穿孔されている。17は高坏の脚部である。おそらく低脚のものであろう。18は蓋か。19はミニチュア土器の底部破片である。基本的に手づくねであり、外面の一部にハケメを施す。20~26は古代の須恵器と土師器である。20~22は皿で、23は蓋坏である。24は長頸壺の下半部で、25・26は坏身である。第14図1・2は甕の上半部である。1は口縁部下に三角突帯をもつ。2は口縁部のみである。3は大型の甕の上半部である。口縁端部は丁寧なナデで整形し、頸部には三角突帯をもつ。4は頸部がしまる。

③中央溝(第15図1)調査区の中心に溝があるが、これを中央溝としている。図化できる遺物は1点のみで、1は甕の上半部である。口縁は外に垂れ、低い三角突帯をもつ。

④ピット出土遺物(第15図2~10)2は甕の上半部で断面三角形の口縁をもつ。ピット11出土。3はピット51出土の甕である。口縁部は内湾しながら立ち上がり、胴部は張りをもつ。4・7はピット52出土の甕の底部である。平底で裏面にススが付着する。5・8はピット50出土である。5



第13图 I区谷部包含層出土遺物実測圖1(1/3·1/4)



第14図 I区谷部包含層出土遺物実測図2(1/4)

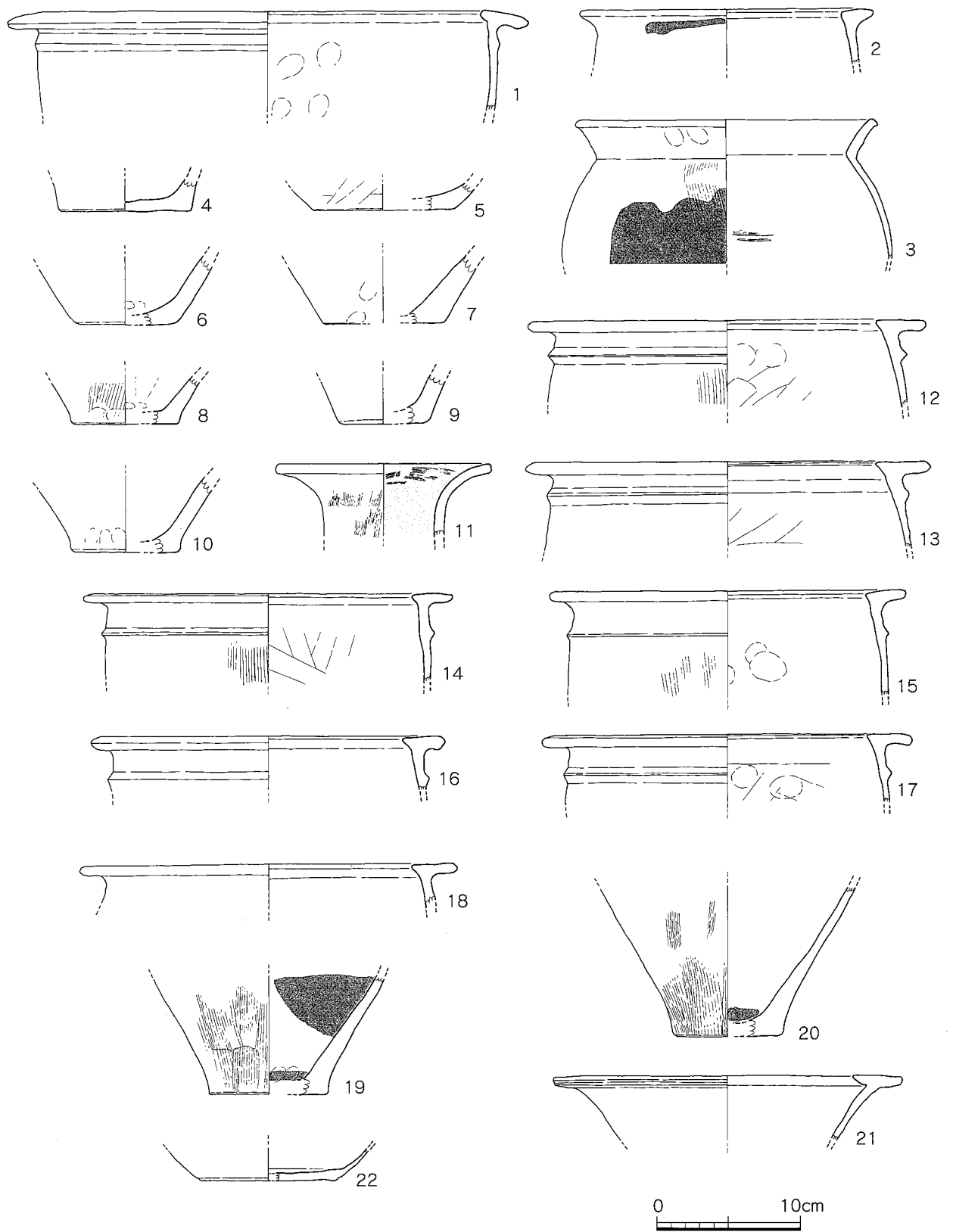
は壺の底部、8は甕の底部である。6はピット67出土の甕の底部である。9はピット33出土の甕の底部で、10はピット25出土の甕の底部である。

⑤西側落込み出土遺物(第15図11)11は器台の上半部か。内外面ともにハケメを施し、内面に黒斑をもつ。

⑥検出時トレンチ出土遺物(第15図12~22)12~18は甕の上半部である。18を除くいずれにも口縁部下に三角突帯が付く。15は若干口縁部が跳ね上がる。19・20は甕の底部である。いずれも平底で外面にハケメを施す。21は高坏か。鋤先口縁である。22は土師器坏身で底部はヘラ切りである。

(5) 石器・鉄器

出土遺物(第16図)I区からは少量の石器・鉄器が出土している。2はピット20出土の磨石である。3は輝緑凝灰岩製の石包丁である。孔は両面穿孔で敲打痕をのこす。4は打製石鏃で翼部端部を一部欠く。5は長さ10.0mm、幅5.5mm、厚さ2.0mmを測る扁平な小型の勾玉である。奈良時代水田畦畔出土とカードにあるが包含層出土であろう。勾玉の上部は穿孔時に欠けたものか。勾玉の形態や孔径から古墳時代後期以降のものと判断される。石材は質の悪い翡翠と思われる。6・7は鉄滓である。

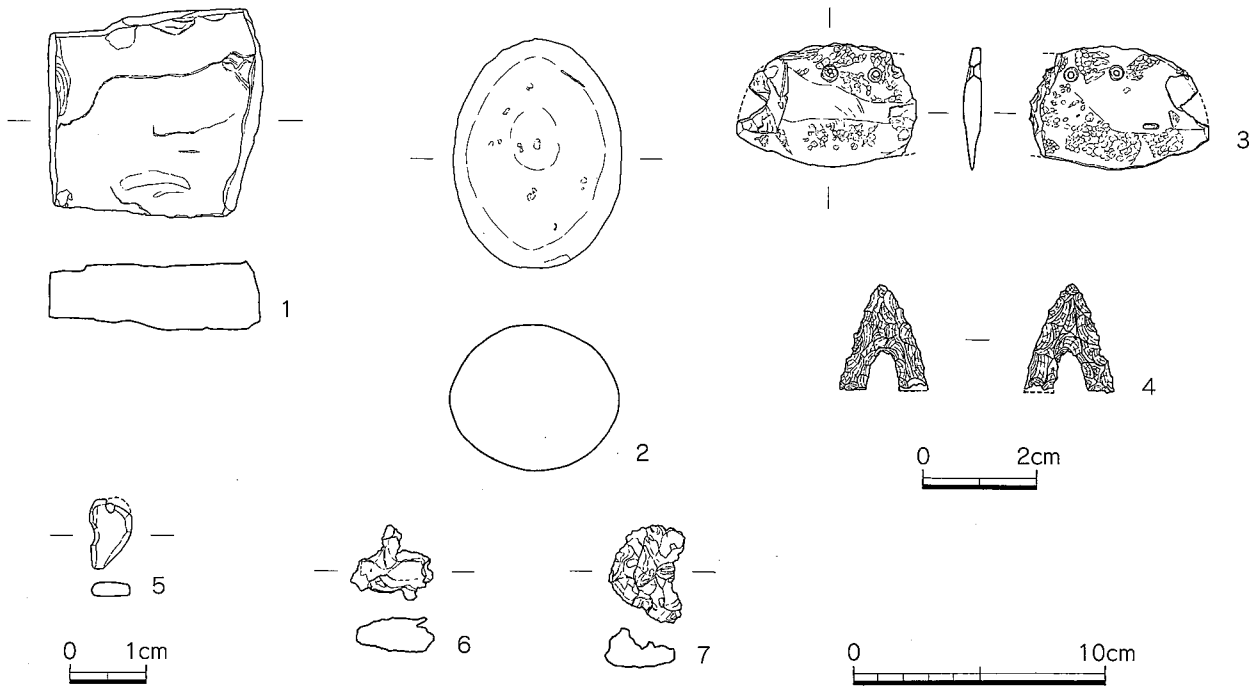


第15図 I区中央溝・ピット・西側落ち込み・遺構検出時出土遺物実測図(1/4)

3. II区の調査

(1) 概要

調査対象地域の中央に位置する正方形の調査区である。面積は約910m²を測る。西半部が谷で



第16図 I・III区出土鉄器・石器・土製品実測図(1/1・1/3・3/4)

大量の遺物が出土している。東半部に台地の縁がのこり住居跡5棟、掘立柱建物3棟、土坑、井戸1基を検出した。

(2) 住居跡

1号住居跡(第18図1) 調査区の北東部に位置する4.26×3.10mを測る住居跡で主軸を南北方向にもつ。中央に土坑をもつが支柱穴は不明である。南側壁付近に幅15cmの溝を設ける。また、住居跡の北西側は調査区外に延びる。

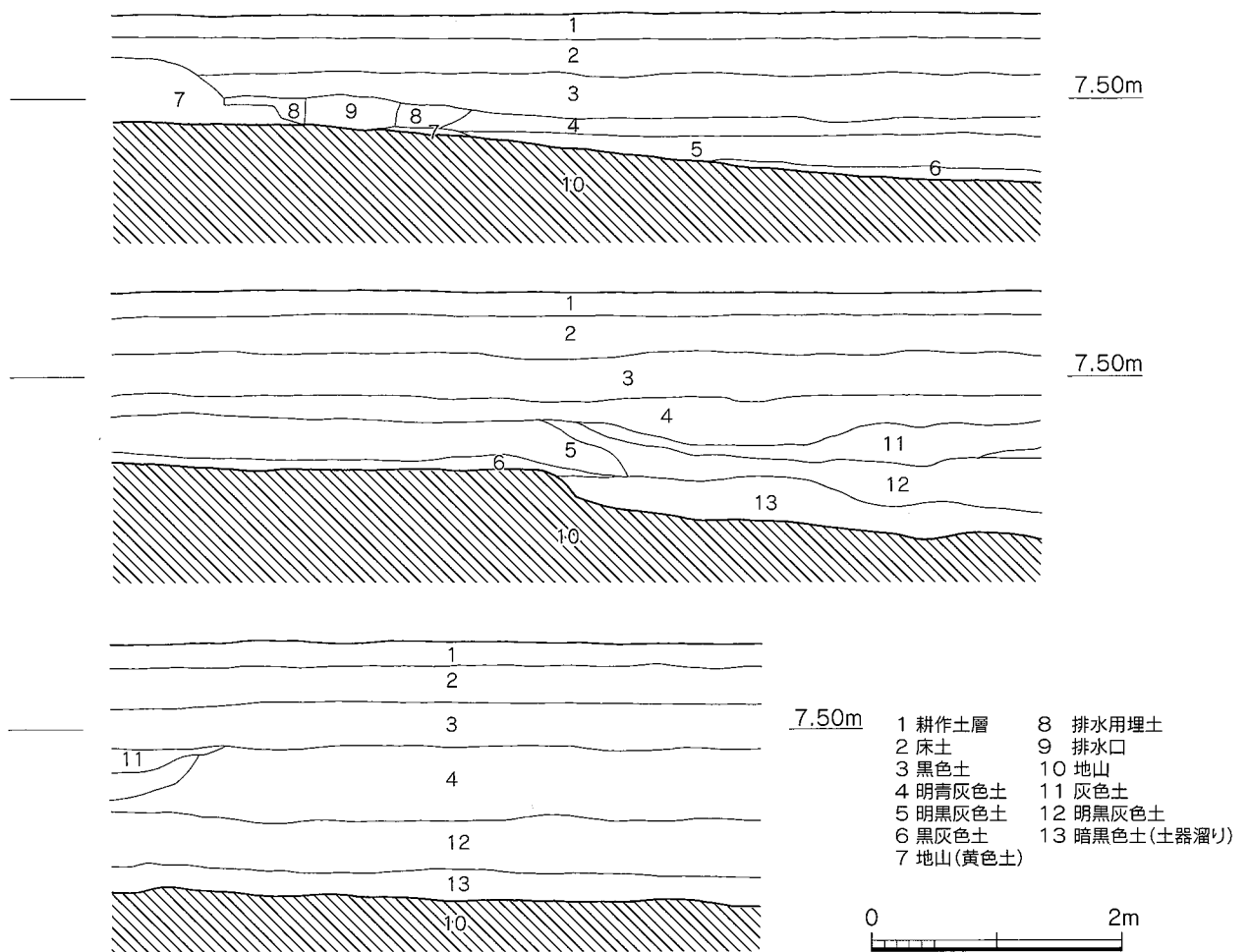
出土遺物(第19図1～6) 1は図上で完形に復元される甕である。形態的にやや傾き、口縁部は若干跳ね上がる。底部は平底である。外面にはハケメを施すが、部分的な剥離が多い。胴部の大半にススが付着する。2は甕の上半部で、口縁が若干跳ね上がる。口縁部下には低い三角突帯をめぐらす。3は壺の底部で大きく内湾しつつ立ち上がる。4は蓋である。5・6は古墳時代の高坏である。5は坏部で口縁端部が反り、部分的に黒斑をもつ。6は脚裾部である。

2号住居跡(第18図1) 北側を1号住居跡に切られる住居跡であるが、平面図のみ図化されており、床面の状態は不明である。

出土遺物(第19図7) 7は深みのある碗で丸底である。外面下半にヘラケズリを施し、口縁端部は丸く収める。内外面ともに底部付近に黒斑をもつ。

3号住居跡(第18図2) 調査区の北端に位置する住居跡であるが詳細不明。記入されているレベルと写真をみながら断面図を作成している。

出土遺物(第19図8～14) 8は甕の上半部で、胴部に強い熱をうけ赤変と黒斑をもつ。口縁部は頸部から直線的に立ち上がり、内面はヘラケズリを施す。9は碗か。胴が全く張らず、口縁部から底部に向けて直線的にすぼまる。底部は欠くが丸底であろう。10は甕の底部である。底部裏面は接合がはがれており、製作技法がよくわかる資料である。11は器台である。上半部を欠くが、肉厚で



第17図 II区基本層序(1/60)

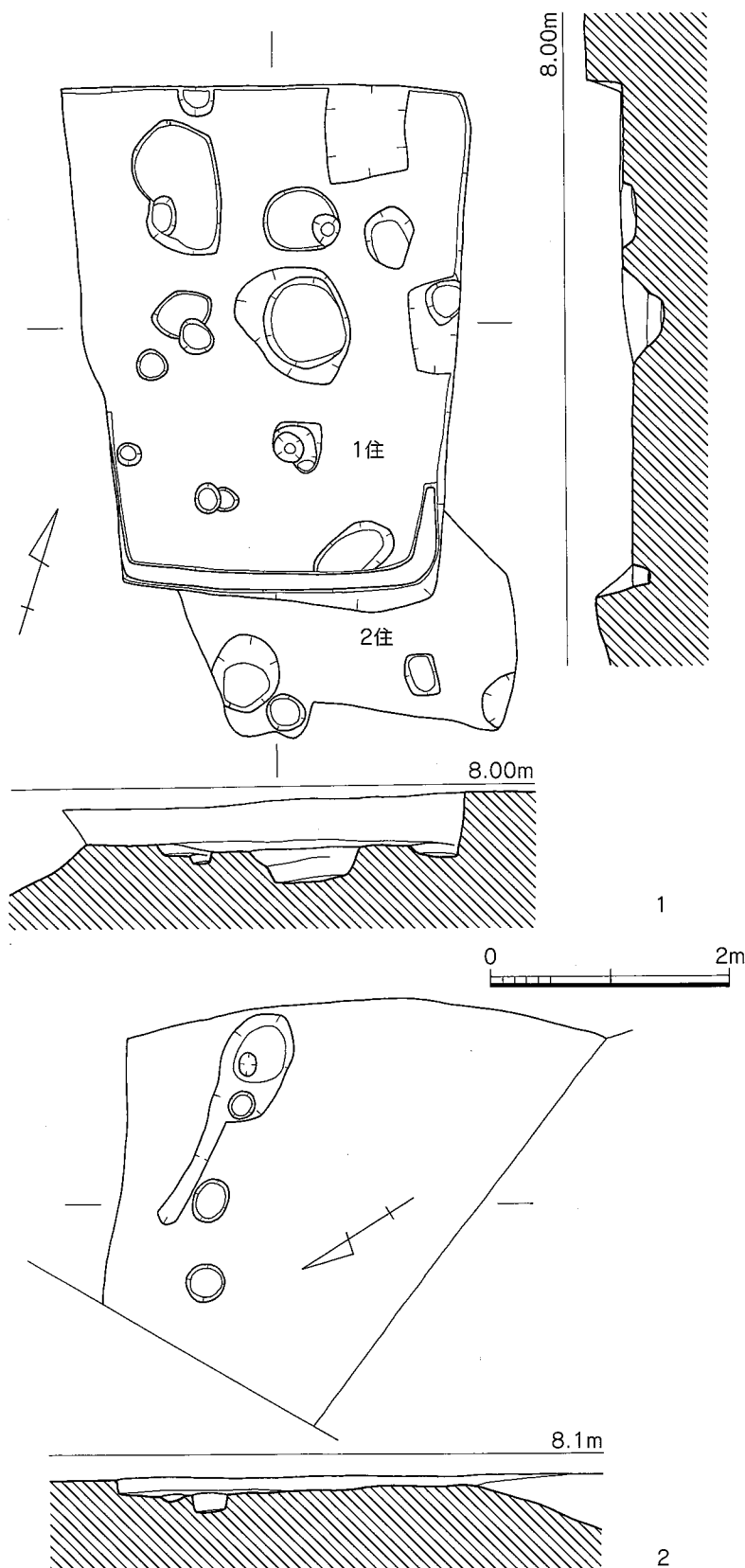
器表面をナデで仕上げる。12は土師器の蓋坏で宝珠状のつまみをもつ。13は須恵器の蓋坏で直径16.5cmを測る。14は土師器の坏身である。口縁端部の調整は甘い。

4号住居跡 円形住居跡であるが大部分が調査区外に伸びているため図化できていない。

出土遺物(第19図15~18) 15・16は甕の上半部である。15の口縁部はほぼ水平に伸び、外面にハケメを施す。胴部中央に被熱による剥離が認められる。16はやや跳ね上がる口縁部をもつ甕で、外面にハケメを施し、胴部にほとんど張りはない。17は甕の胴部である。18は器台で、上半部を欠く。

5号住居跡(第20図) 調査区の北側に位置する住居跡で北側を井戸に切られる。住居跡の平面プランは確認されるが南側を除きのこりが悪い。住居跡南側壁際には大型の石錘がまとまって置かれていた。床面の中央部には焼土が確認された。長軸4.5m、短軸3.45mを測る。柱穴は不明確である。

出土遺物(第21図) 5号住居跡は井戸に切られており、遺物も「5号住居跡」「5号住居跡・井戸」というカードをもつ袋に収められていた。そこで、まず「5号住居跡」出土品から報告し、そ

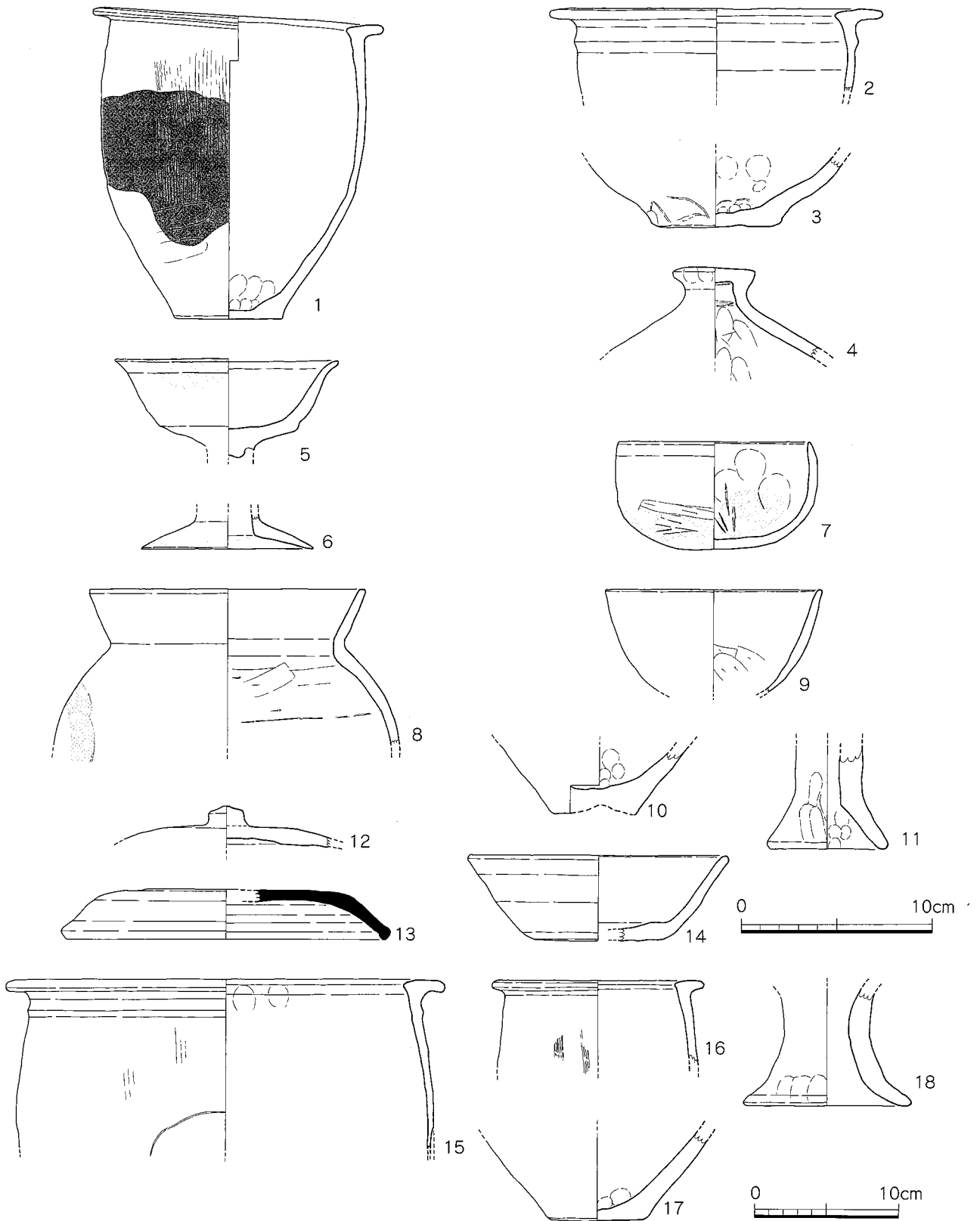


のあと「5号住居跡・井戸」出土品を報告する。

1～4は甕の口縁である。1・3・4は若干跳ね上がる口縁をもち、その下に低い三角突帯をもつ。2は弱く垂れ下がる口縁を持ち、弱い三角突帯をもつ。外面にはハケメを施す。5～11は甕もしくは壺の底部である。5・6は肉厚の上底で外面にハケメを施している。5は内面底部と胴部に炭化物らしきものが付着する。7～11は底部である。7～9は直線的に立ち上がる。10は内湾しつつ立ち上がり、外面にハケメを施す。11は小型の甕の底部か。13は口縁部を欠く器台である。胴部のしまりがなく、外面にハケメを施す。以上が「5号住居跡」出土遺物である。

14は甕の把手で、粗いナデで整形されている。15は甕である。胴部内面は粗いヘラケズリで薄く仕上げられるが、口縁部は肥厚する。外面は縦・横のハケメを施す。底部は欠くが丸底であろう。胴部全面にススが付着する。16は内面にヘラケズリ、外面にナデを施す甕で底部を欠く。外面にはススが付着し、口縁部は外に大きく広がる。18もほぼ同じ形であるが、口縁部が内湾する。19は口縁部が肥厚する。17は肉厚な胴部から若干外湾して口縁部となる。調

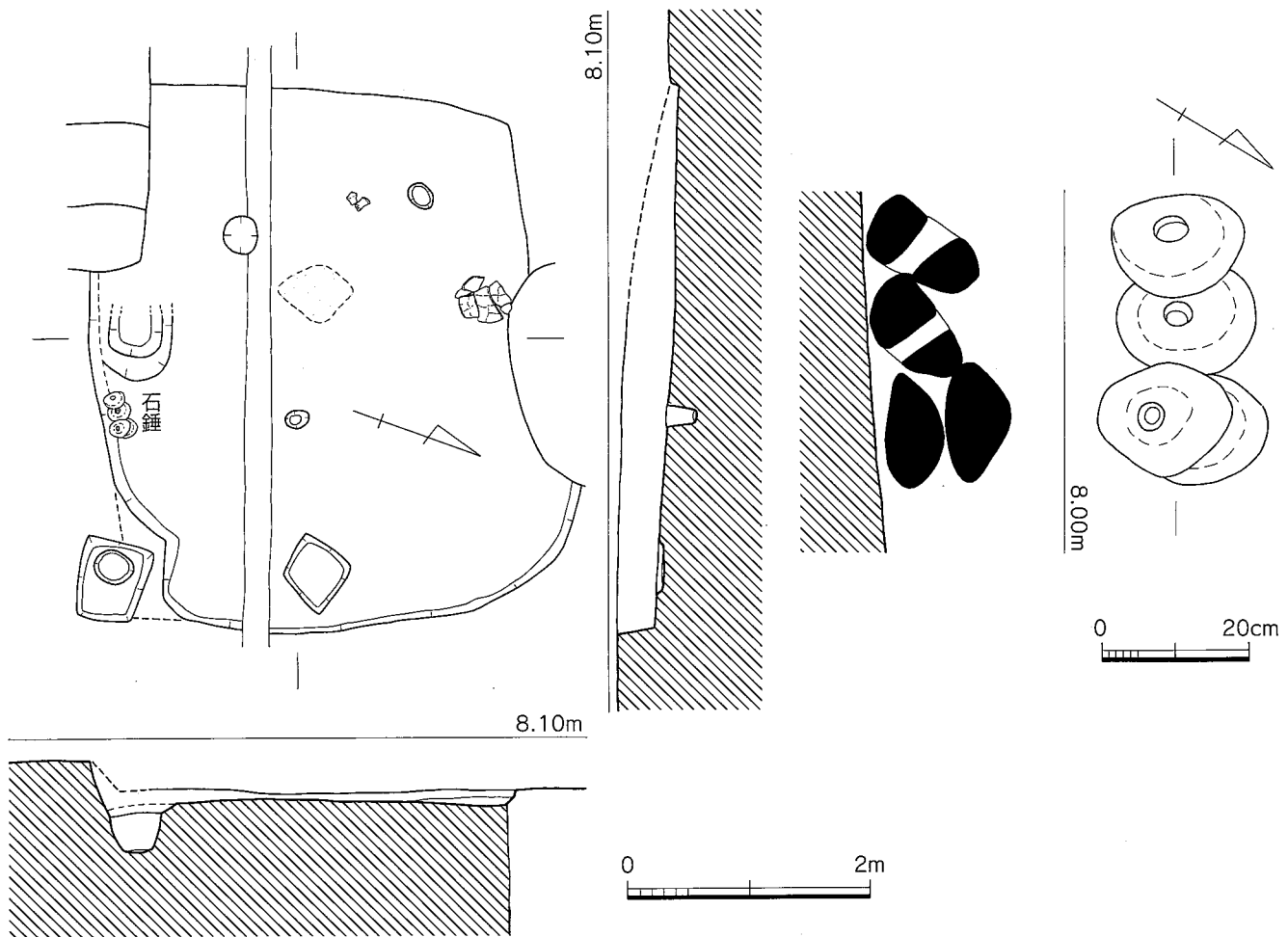
第18図 II区1～3号住居跡実測図(1/60)



第19図 II区1~4号住居跡出土遺物実測図(1/3・1/4)

整は甘く、外面に黒斑をもつ。20もほぼ同じであるが、小型のものである。21は須恵器の長頸壺か。22は須恵器の蓋環である。直径17.4cmである。14~22は井戸に伴うものだろう。23~25は甕・壺の底部である。これらは本来5号住居跡にともなうものであろう。

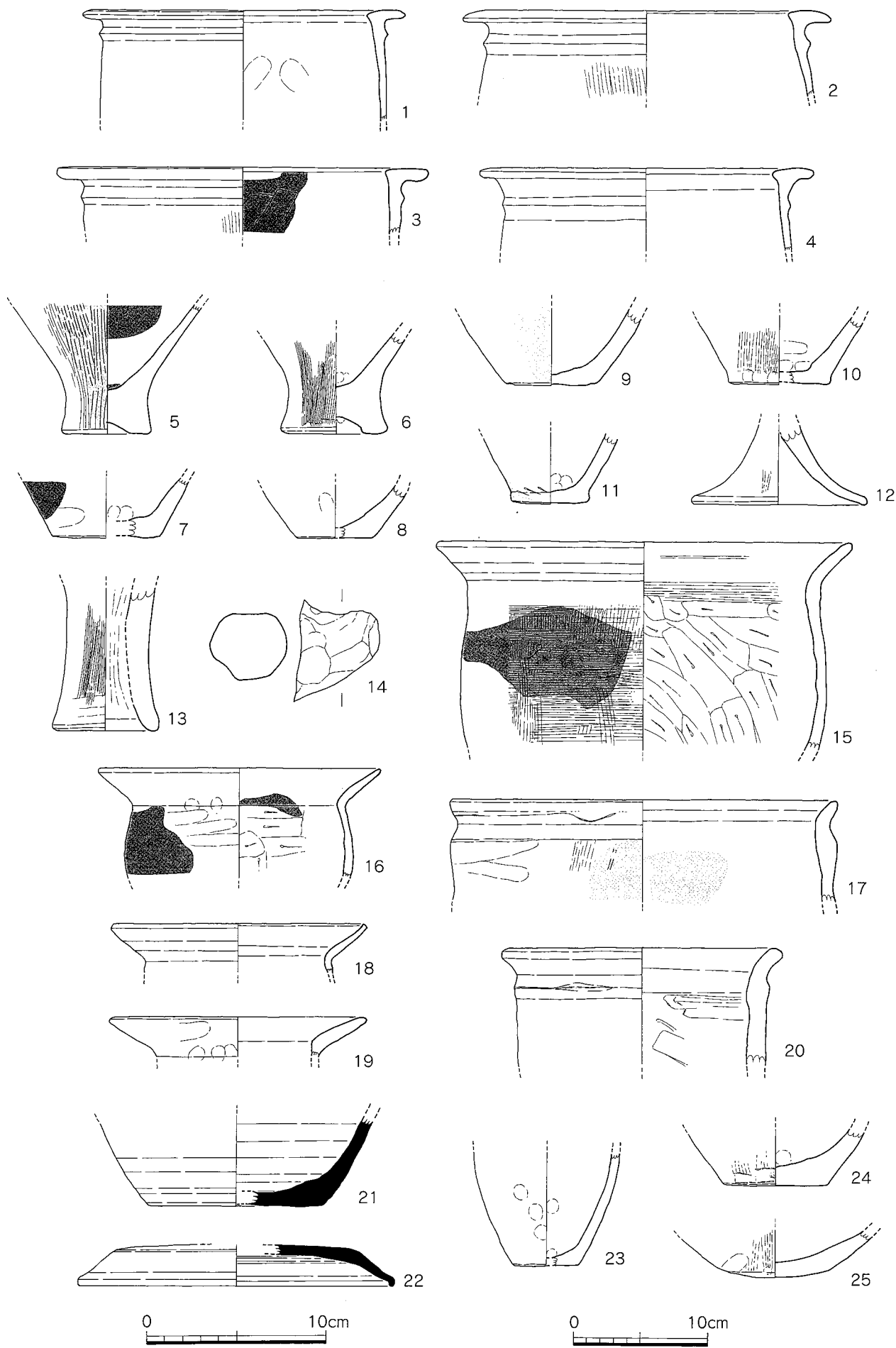
(3) 井戸



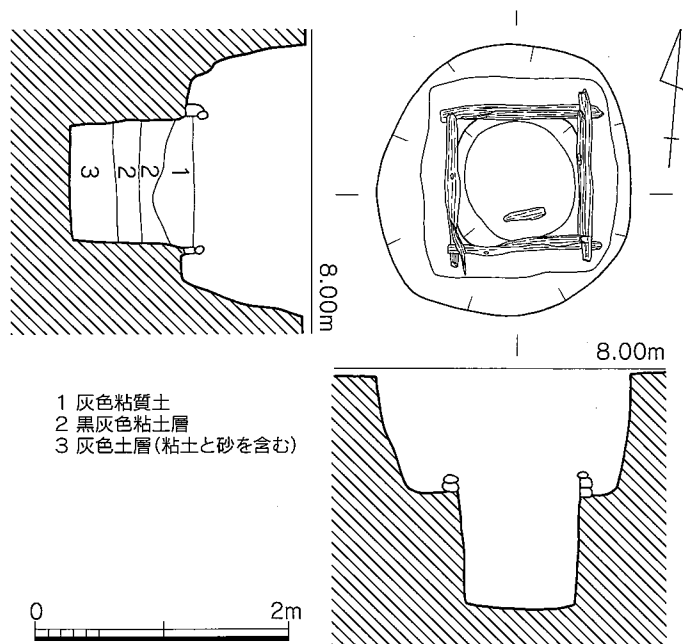
第20図 II区5号住居跡・石錘出土状況実測図(1/60・1/10)

II区の東側中央部で5号住居跡を切る形で確認された井戸である(第22図)。上半部の詳細は不明であるが、確認段階の平面プランで2.16m×2.00m、深さ1.86mを測る。遺構確認面から約0.8m下に1.14m×1.14mの井桁が確認される。そこからで1.10m下が井戸底になる。発掘調査段階では井桁のところから土層図が取られており、上から①灰色粘土層、②黒灰色粘土層、③灰色土(粘土と砂を含む)層の3層に分けられている。このうち②黒灰色粘土層からは大量の藁が出土している。この藁には肉眼で観察する限り稲粃は認められない。以下で報告する木簡や墨書土器は③灰色土層から出土している。

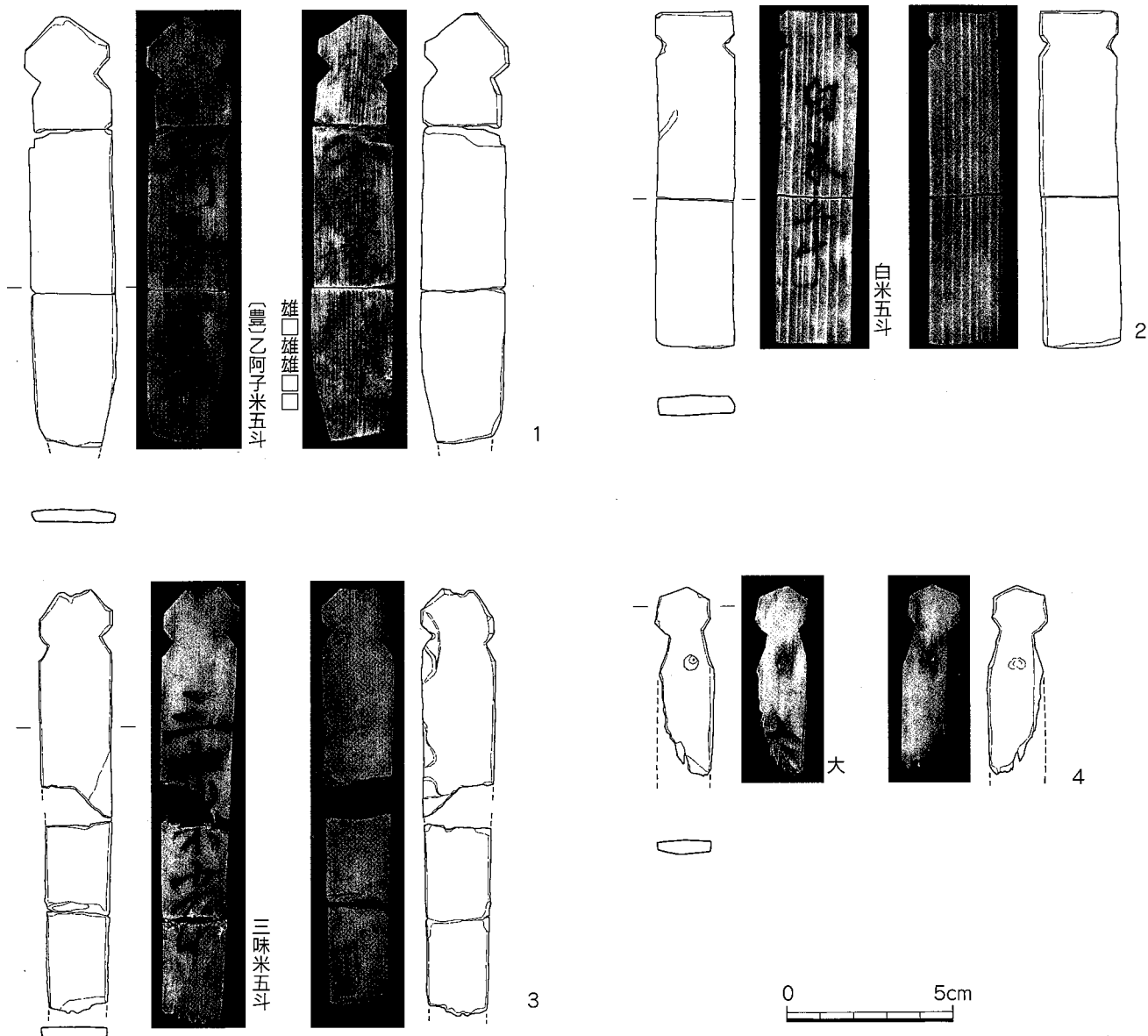
出土遺物(第22図1~4、第23・24図)木簡はいずれも井戸内灰色土層から出土しているが、出土状況等は確認されていない。第22図1は3つに割れている木簡で下部は欠けている。現存長13.0cm、幅2.5cm、厚さ3.5mmを測る。文字は木簡の両面に記されているが、文字の線の太さが全く異なっていることから、いらなくなった木簡を再利用したものと考えられる。表面には細い線で「雄□雄雄□□」と同じ字を繰り返し書いており、裏面には「【豊】乙阿子米五斗」と記される。裏面の「豊」は表面の「雄」と線が似た太さで書体も近いことから、本来は習書木簡として用いられたものを「豊」と記した部分を一度削り、荷札木簡として再利用したと考えられる。このことは、紐をくくるために宝珠上に整形した部分に「豊」と記されていることからわかる。



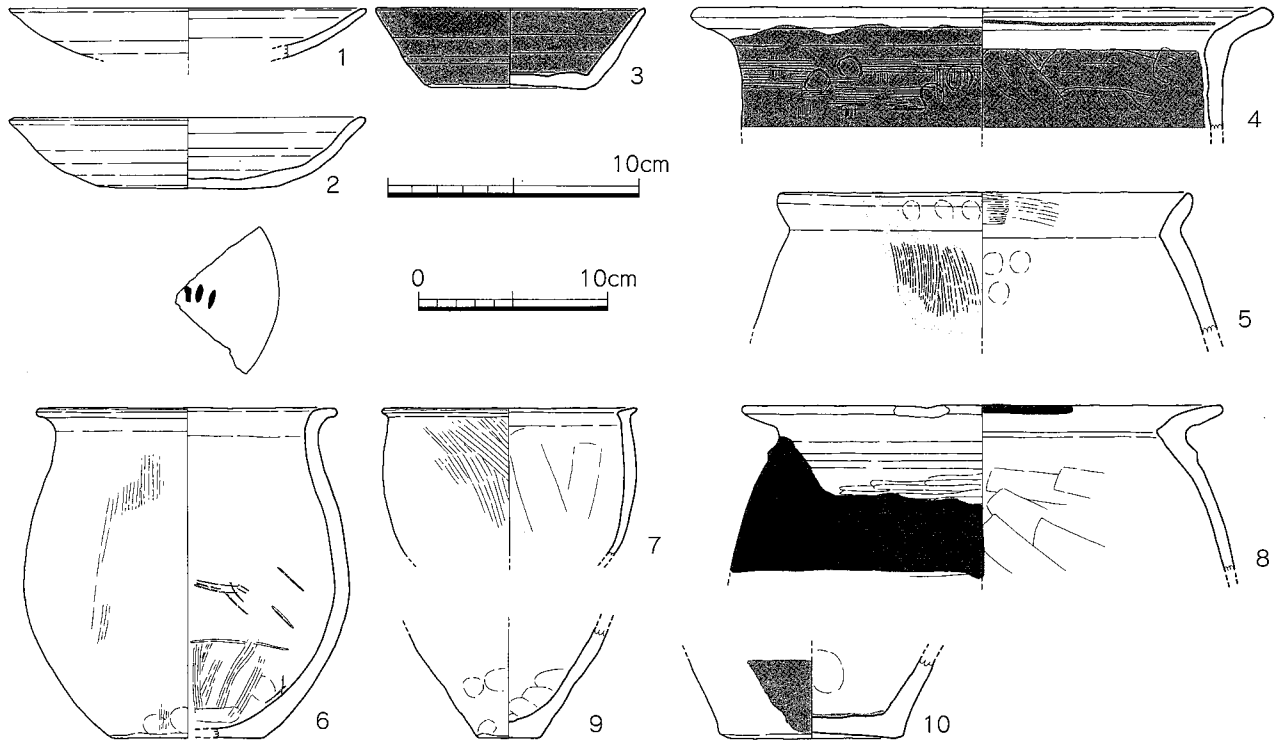
第21图 II区5号住居跡、5号住居跡・井戸出土遺物実測図(1/3・1/4)



- 1 灰色粘質土
- 2 黒灰色粘土層
- 3 灰色土層(粘土と砂を含む)



第22図 II区井戸実測図、木筒実測図(1/60・1/2)



第23図 II区井戸出土遺物実測図1(1/3・1/4)

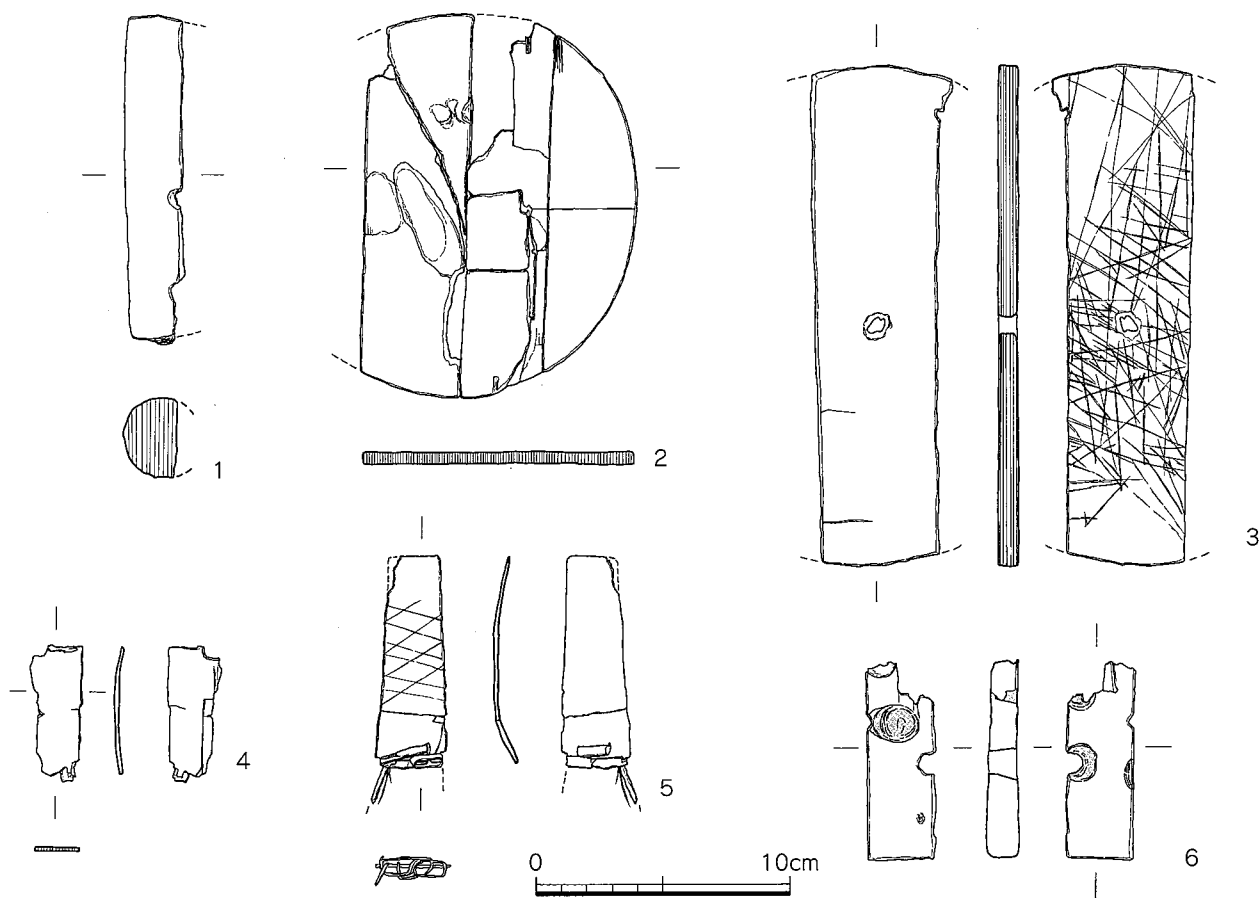
2は2つに折れた木筒で、字の納まり具合からおそらくこれで完結しているものと思われる。長さ10.2cm、幅2.3cm、厚さ6.0mmを測る。文字は片面だけに「白米五斗」と記される。木筒上部に紐をくくるための抉りを入れる。

3は3つに分かれた木筒で、途中が大きく欠けるものの一部が接合すると判断した。また、下部も完結していない。現存長12.5cm、幅2.0cm、厚さ3.0mmを測る。文字は片面のみに「三味米五斗」と記される。木筒の上部には抉りを入れ、宝珠状に形を整える。

4は上半部のみで側面も折れている。現存長5.6cm、現存幅1.7cm、厚さ5.0mmを測る。文字は片面のみに認められるが「大」一文字しか判断できない。木筒の上部は宝珠状に整えられている。なお、穴を開けた痕跡らしきものがあり、赤外線写真で確認したが、穴かどうか判断できなかった。

第23図は井戸から出土したものである。5号住居跡を切っているために弥生土器も混じる。1・2は土師器の皿である。1は直径14.1cmを測る。2は図上で完形に復元されるもので、底部に墨書がある。ただ、墨書の部分が欠けており、「三」なのか「さんずい」なのか判断できない。3は土師器の坏身である。図上で完形に復元される。全体的に調整が甘く、口縁部に濃いススがつく。4は甕である。内面は粗いヘラ削りで器壁を薄く仕上げるが、口縁部は肥厚する。外面は縦・横のハケメを施し、口縁部下にはススが付着する。内面の口縁部付近にはコゲがつく。5～10は本来、5号住居跡にともなう土器である。8は跳ね上がる口縁をもつ甕で、口縁の一部を打ち欠く。外面胴部には横ヘラミガキを施す。

第24図は井戸出土木製品である。1は約半分を欠くが、断面円形の棒状の木製品である。上下端部は切り込みを入れ折り取られている。また下部に穴を2つもつ。長さ13.0cm、直径3.2cmを測る。2は曲物の底板破片で直径15.1cm、厚さ4.0～5.0mmを測る。小片化しているが本来は一枚であろう。3も曲物の底板か。上下面は丸みをもつように加工され、稜側面は折れている。また、中心には6.0mmの、右上部には3.0mmの穿孔を施す。なお裏面には刀子の痕跡が無数にのこる。長さ29.9cm、幅4.8cm、厚さ8.0mmを測る。5も曲物の部材か。下端部のみ



第24図 II区井戸出土遺物実測図2(1/3)

を失うが、現存長8.3cm、幅1.6~2.7cm、厚さ1.0mmを測る。全体的に状態が悪く、一部折れている。なお、裏面には刀子状の工具で斜格子状に線を刻む。下端部には長方形の穴に木の革を通し何かと組み合わせられていたものと思われる。4は薄い板の小片であるが、赤外線カメラを用いた観察で字までは判読できなかったが、墨痕を確認した。現存長5.1cm、幅2.0cm、厚さ2.0mmを測る。6は火雉白で両面を用いている。なお、図化できていないが、井戸からはほかにも桃核、黒灰色粘土層からは大量の葉が出土している。

(4) 掘立柱建物

1号掘立柱建物(第25図1) 調査区の北東部に位置する1間×1間の2.55×4.02mを測る掘立柱建物である。出土遺物はない。

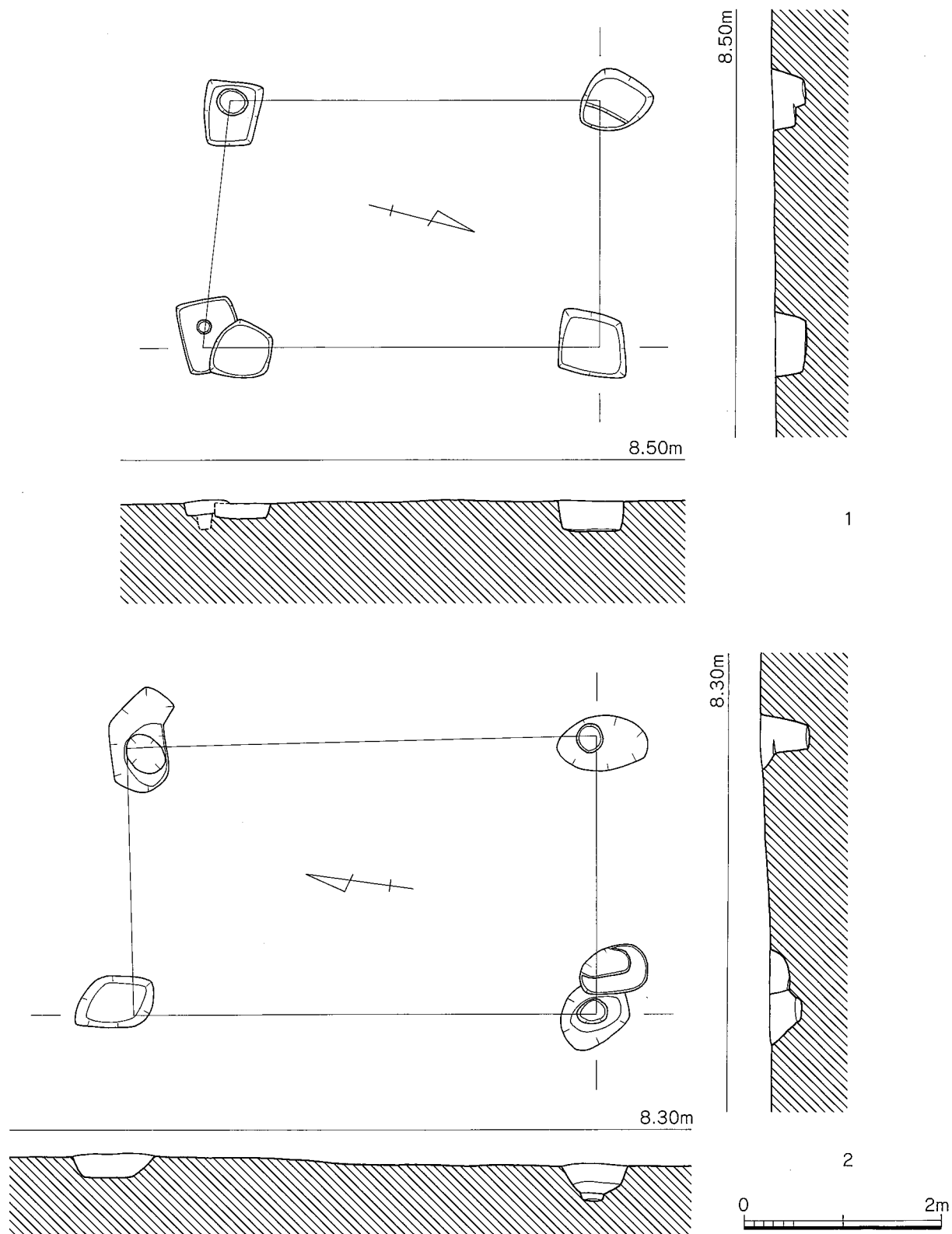
2号掘立柱建物(第25図2) 調査区の北東部で確認された1間×1間の2.82×4.71mを測る掘立柱建物である。出土遺物はない。

3号掘立柱建物(第26図) 調査区の中央部に位置する1間×1間の4.95×2.82mを測る掘立柱建物である。出土遺物はない。

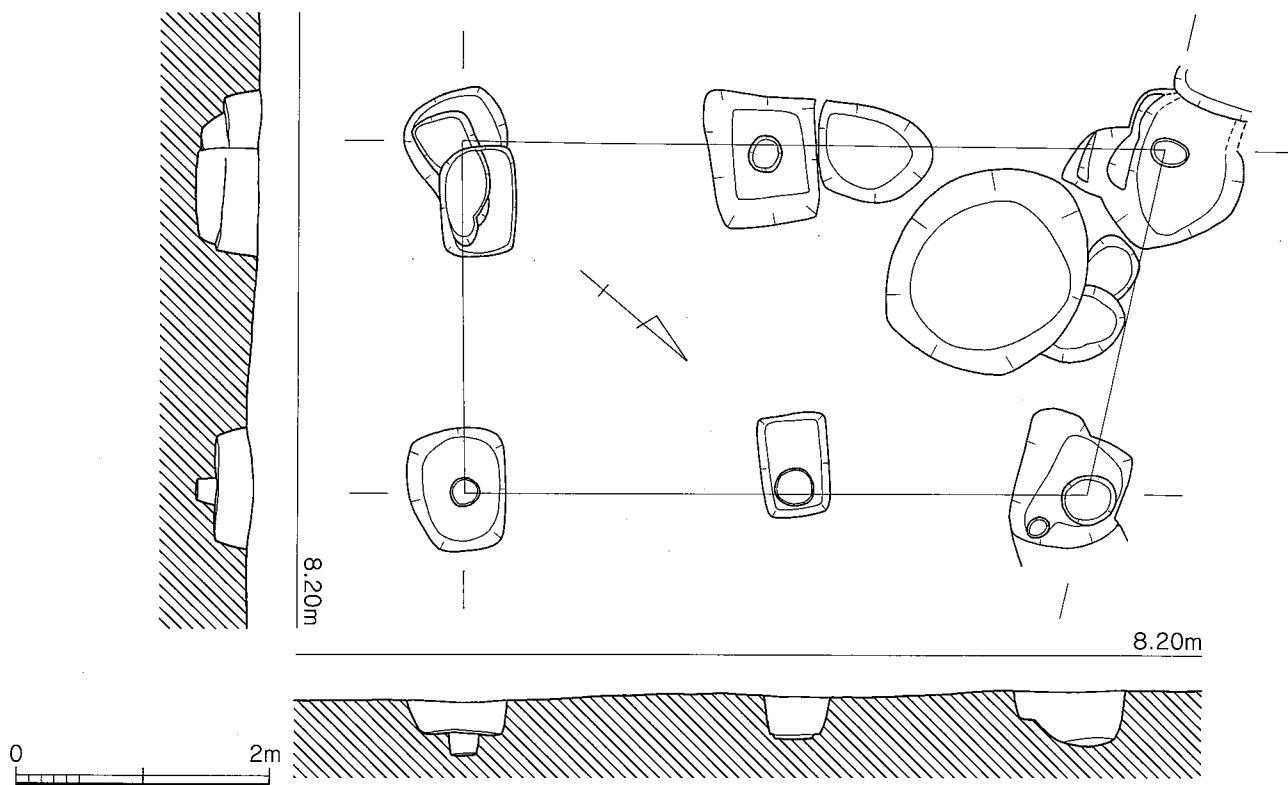
(5) 土坑

調査区の中央部で確認された円形土坑で1.57×1.57mを測る(第27図)。断面は方形で、底部はほぼ水平である。出土遺物は上半部から出土している。

出土遺物(第28図) 1は長胴甕の上半部である。口縁部は短く、外面にはハケメを施す。内面には



第25图 II区1·2号掘立柱建物实测图(1/60)



第26図 II区3号掘立柱建物実測図(1/60)

コゲがみられ、外面にはうっすらとススが付着する。2・5は甕の底部で内湾しながら立ち上がる。3は底部で壺の可能性があり。底部には焼成後に外側からの敲打による穿孔がある。4は鉢である。整形が甘く口縁部が波打つ。底部には穿孔があり、焼成前に開けた孔を、焼成後に広げた痕跡が確認された。また、底部付近には黒斑がある。6は器台か高坏の脚部である。7は三足鍋の脚部片か。混入品である。

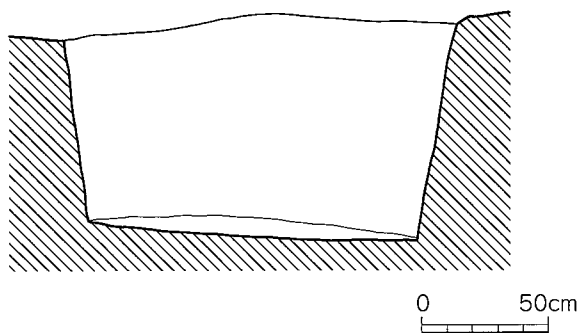
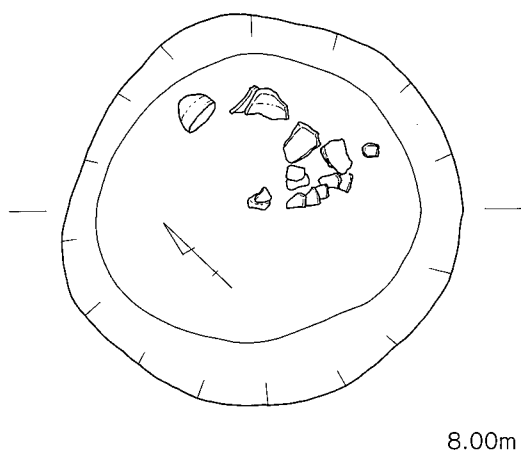
(6) 甕棺墓

調査区の北部で確認された甕棺墓で0.85×0.72mの隅丸方形の墓壙をもつ(第29図)。甕棺は壺を用いた単棺で、断面図では口縁部を下斜めに向けているが、写真では水平に近い印象を受ける。甕棺墓の上半部は削られている。副葬品は確認されていない。

甕棺(第29図)底部と口縁部を欠くが、口縁部は埋葬当時から打ち欠かれている可能性がある。胴下半と頸部に突帯をめぐらし、頸部突帯には刻目を施す。胴の張りは弱く、口縁部は直線的に立ち上がりながら、上半で大きく広がる。胴部上半には黒斑をもつ。1/3程度の破片から図上復元している。

(7) その他

①**ピット出土遺物(第30図)**1はピット63出土の無頸壺で、外面丹塗りである。2・4・6はピット63出土の甕である。2は大型の甕で低い三角突帯をもつ。3はピット30出土の壺で胴の張りがやや強い。5はピット88出土の甕で口縁下に三角突帯をもつ。7はピット76出土の甕で器壁がやや厚い。8はピット27出土の甕で口縁部が外湾しつつ立ち上がる。9はピット17の甕の上半部である。10はピット4出土の甕で短い口縁部をもつ。11はピット69出土の甕で全体的に整形が粗く、外面にススがつく。12はピット28出土の甕で短い口縁をもつ。13はピット27出土の甕で外

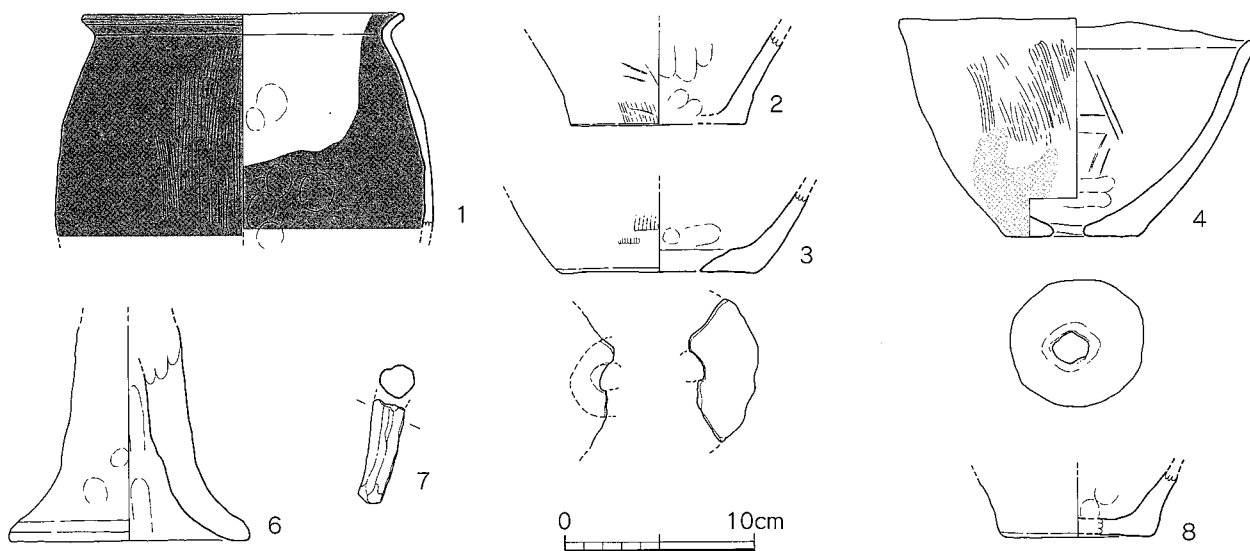


第27図 II区土坑実測図(1/30)

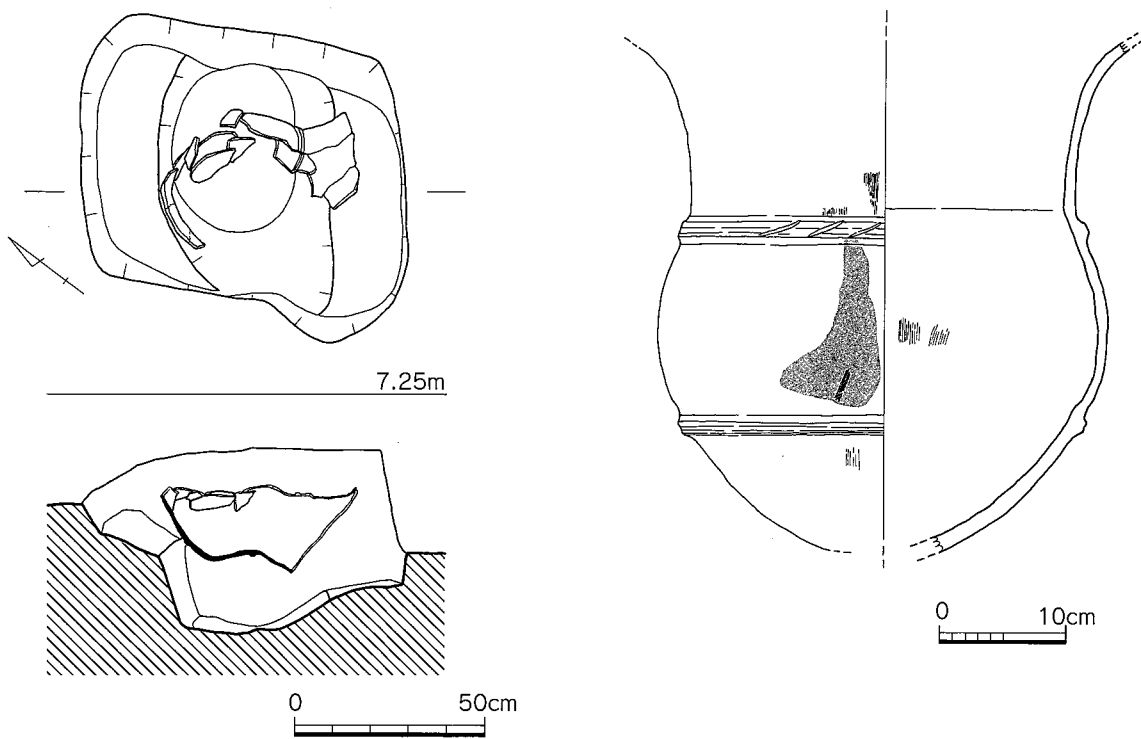
面にススが付着する。14はピット60出土の甕の口縁部で端部の調整を丁寧に行う。15～19は甕の底部である。15～17はピット85出土。18はピット30出土。19はピット27出土。20はピット4出土の器台の裾部である。21はピット90出土の器台で口縁部の調整が粗い。22はピット64出土の鉢である。外面にはススが付き、部分的に剥離が認められる。内面にはコゲが付着する。23はピット96出土の鉢である。底部を欠くが平底か。

②谷部包含層(第31～46図)II区の西側は谷を形成している。遺物を整理している段階で「包含層」「谷部」「谷部包含層」と記されたラベルがあり、いずれも同一であることが想定されたため、ここでまとめて表記する。第31図1～7は広口壺の口縁部でいずれも内外面は丹塗りである。1・5・6には暗文状のヘラミガキを施す。8は口縁の全周を打ち欠いた鋤先口縁壺である。頸部には暗文状のタテミガキを施す。内外面ともに丹塗りである。9・10は複合口縁壺である。9の口縁部の稜は明瞭で端部は丁寧にナデを施す。10の口縁端部は調整が甘い。11・12は蓋をとまなう無頸壺である。13～16は無頸壺である。反転して図化しているため本来は孔をもつ可能性もある。17～22は蓋の頂部である。19の成形は粗く、20の外面にはハケメを施す。23・24は蓋の裾部。24の内面には黒斑をもつ。

第32～39図までは甕の上半部である。弥生時代中期のものが大半を占める。数が多いので特徴的



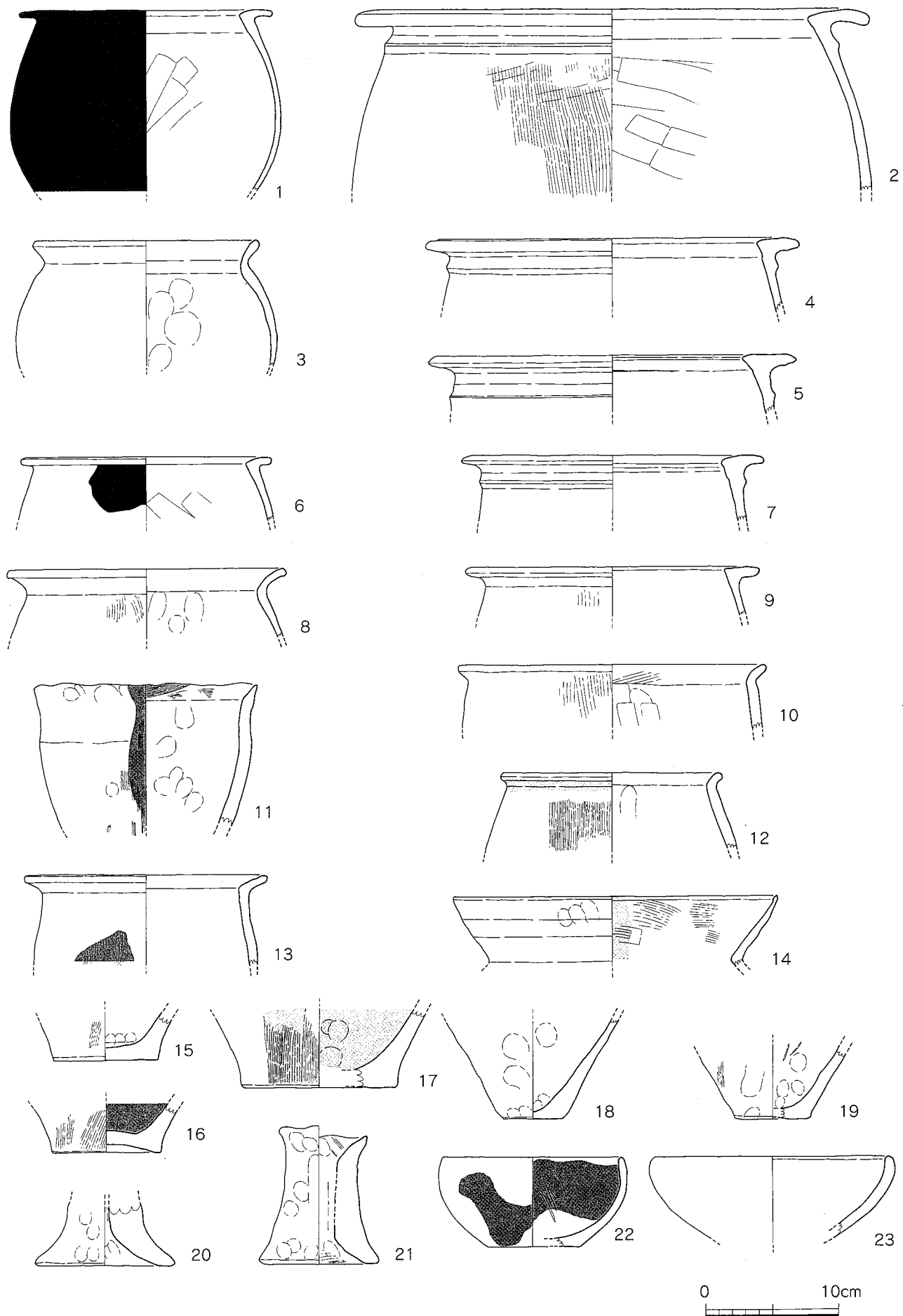
第28図 II区土坑出土遺物実測図(1/4)



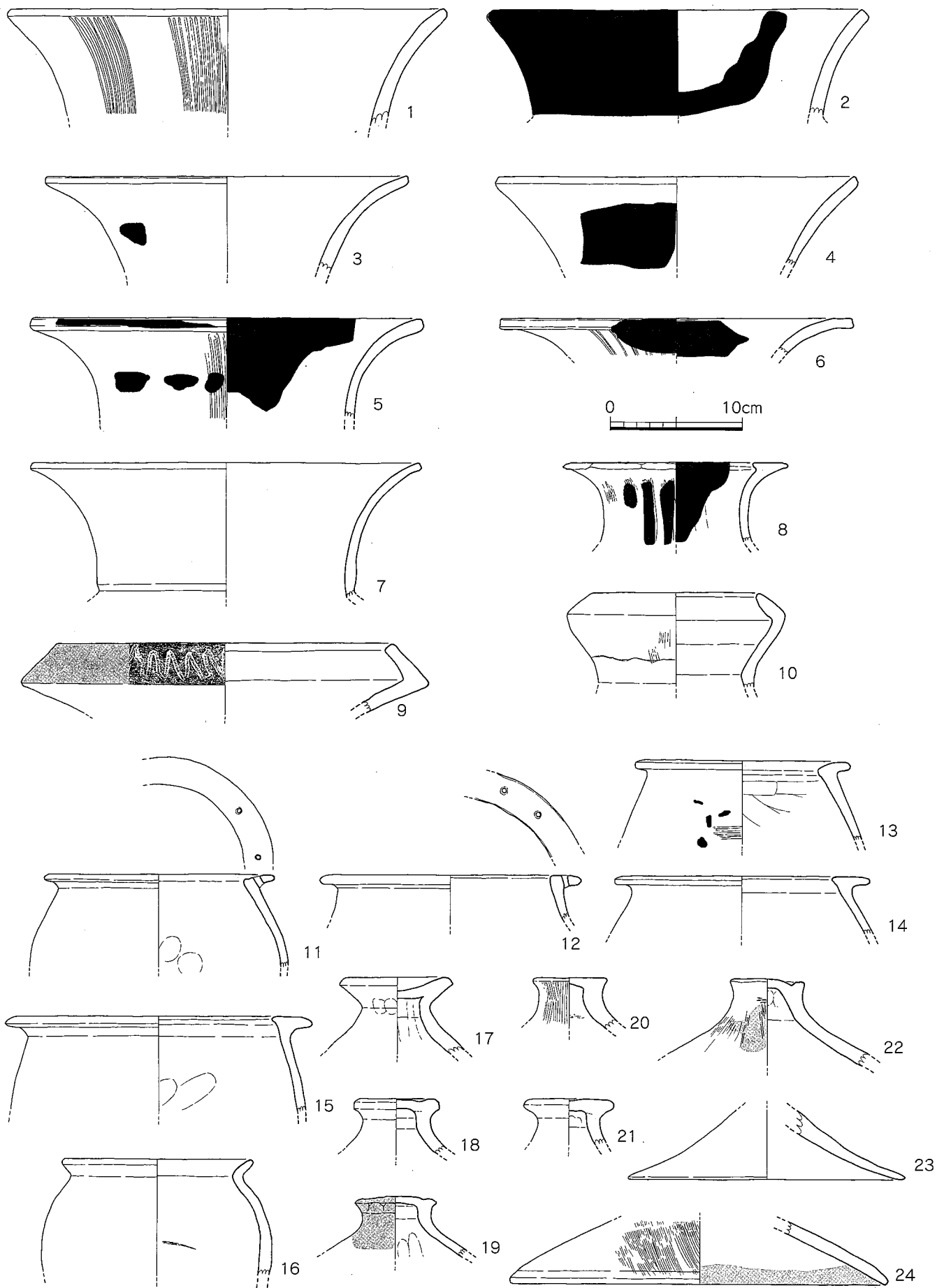
第29図 II区甕棺出土状況実測図、甕棺実測図(1/20・1/6)

なもののみ報告する。第32図17はほぼ水平な口縁をもち、その下に低い三角突帯をめぐらす。胴部には内側から孔が開けられている。18は外面に黒斑をもつ。20の胴部外面は熱をうけて弾けたように剥離している。第33図4も同様で熱をうけ器表面が剥離している。7は胴部に黒斑をもつ。第34図7は胴の張りが強い甕である。18は口縁端部が跳ね上がる。第35図3と14は口縁端部を一部打ち欠く。13は口縁端部に刻目を施す。5は内面にススが付着し、16は胴部外面に黒斑をもつ。第36図3と17の外面にはうっすらとススが付着する。18の内面にはコゲがつく。第37図1～8は口縁端部が内湾しつつ立ち上がる甕で大型のものが多い。17は口縁端部を打ち欠き、胴部に黒斑をもつ。内外面ともに丹塗りである。18は内面上部にコゲが付着する。第38図は大型の甕である。3は甕棺の口縁に類似する。第39図2は口縁部が跳ね上がり胴部に黒斑をもつ。9の内面はナデの痕跡をよくのこす。10・11の外面は丹塗りで口縁部下にM字突帯をめぐらす。11の口縁部は跳ね上がり、端部に刻目を施す。

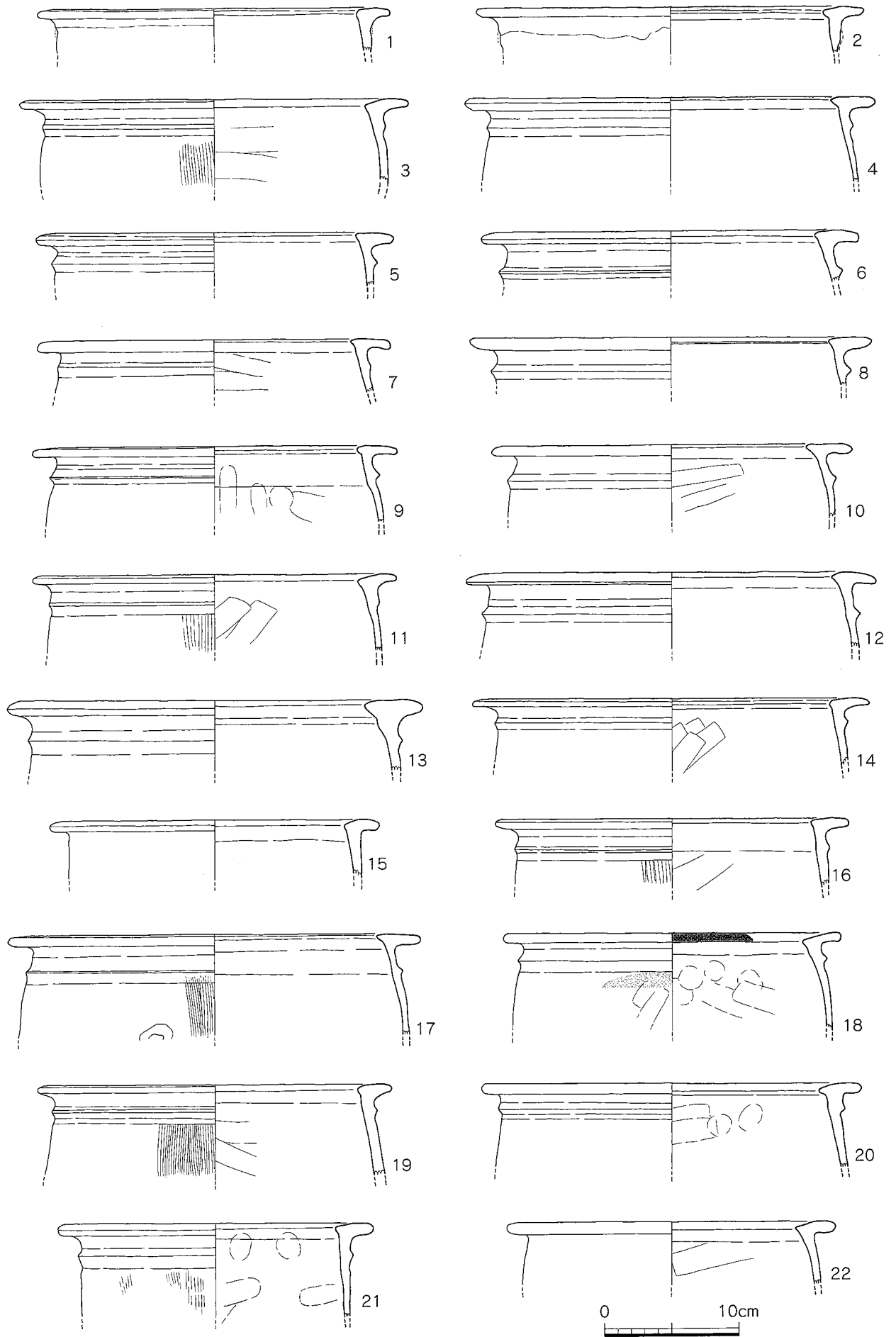
第40～43図は壺もしくは甕の底部である。第40図2は外面にミガキを施す壺の底部である。5の外側には黒斑をもつ。11～14は穿孔を施す底部である。11は焼成後に外側から敲打による穿孔を施す。底部は1/2程度の破片であるが、穿孔部はほぼ正円になるか。12は焼成後に外側より打撃を加え穿孔を施す。穿孔の位置は中心からずれる。打撃による穿孔のためか平面形態は不整形である。また、立ち上がりの形態から壺の底部と思われるが、底部穿孔をもつ弥生時代中期の壺は少なく貴重な事例である。13は焼成後穿孔で平面形態はほぼ正円か。14は焼成前に穿孔を施し、焼成後に形を整えたものであるが、欠損部分が多く詳細不明。第41図6・19・20の外面にはススが、12・15の外面には黒斑がつく。33の内面にはコゲが付着する。第42図3・20の外面にはうっすらとススが付着する。また、8・34・46などの内面にコゲがつく。第43図1・2の外面にはススがつく。8は極端に底の



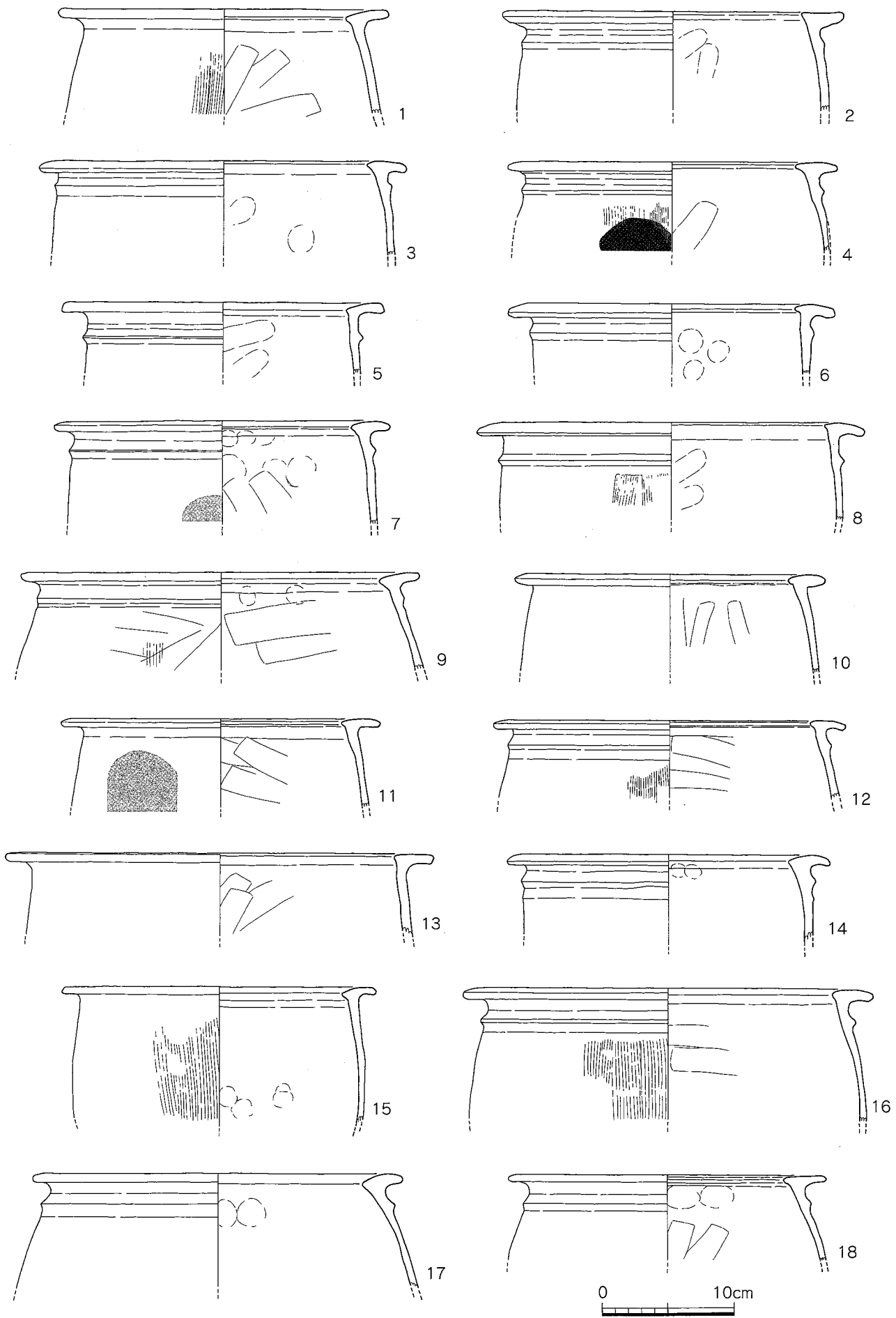
第30図 II区ピット出土遺物実測図(1/4)



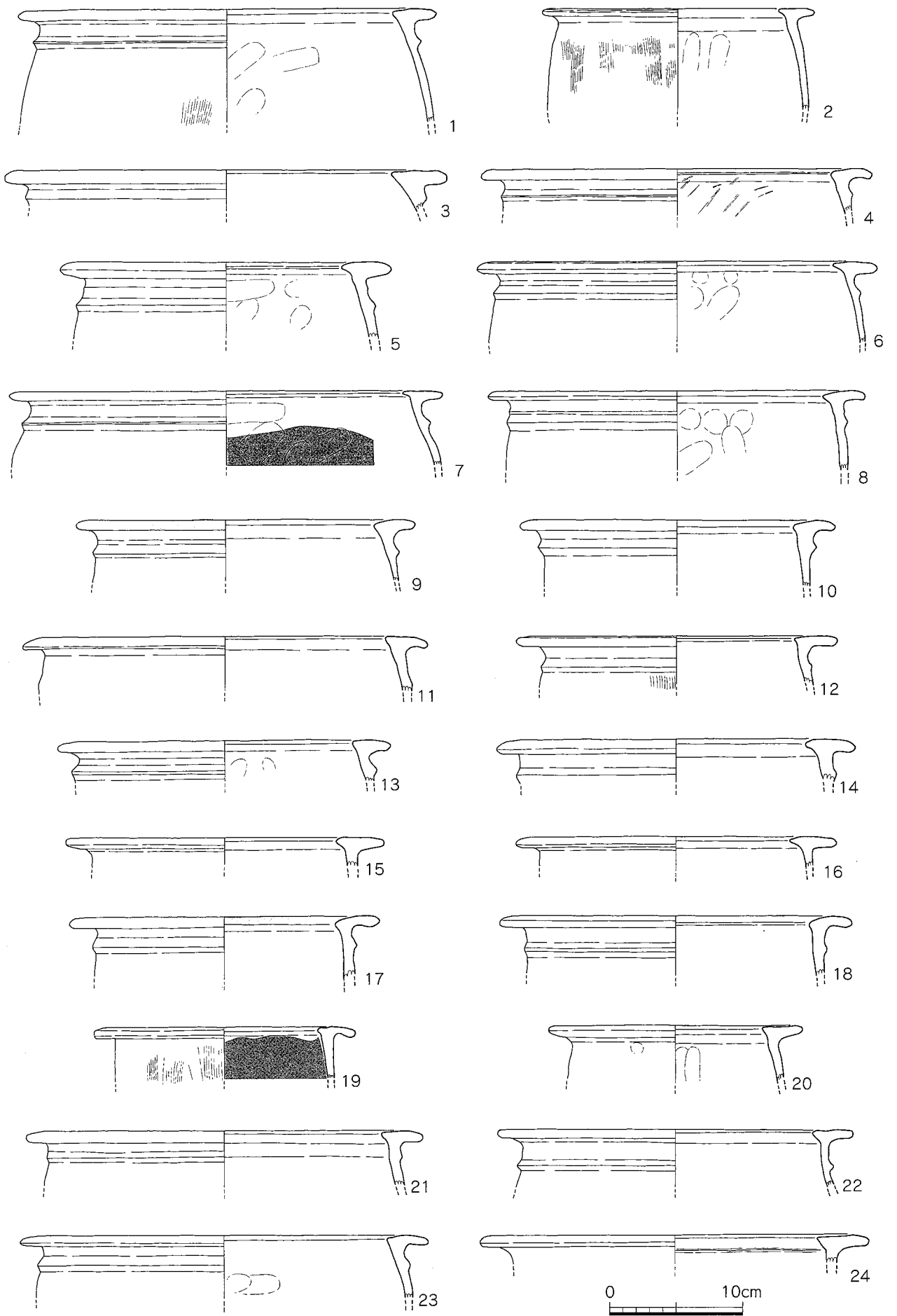
第31图 II区谷部包含層出土遺物実測图1(1/4)



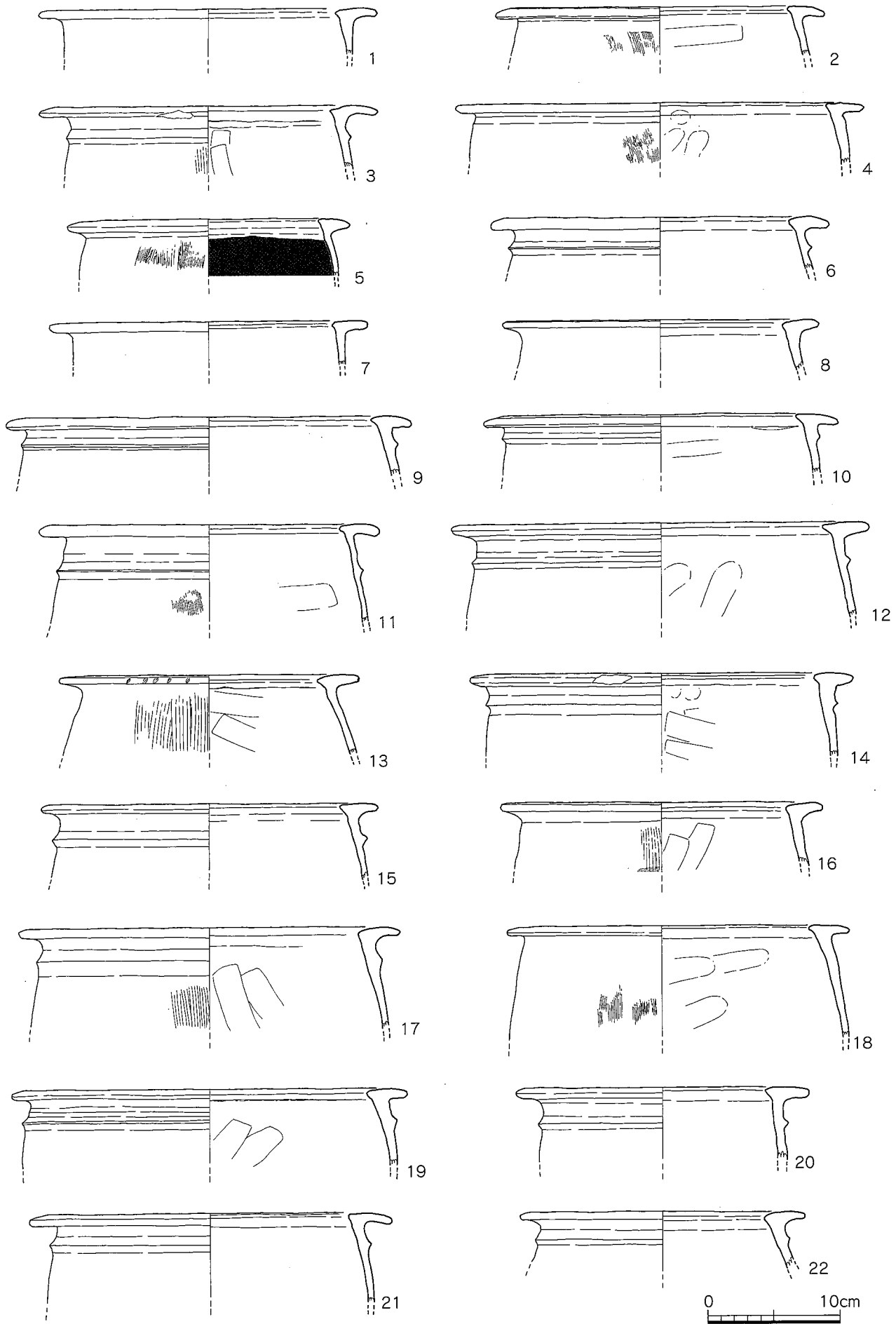
第32图 II区谷部包含层出土遗物实测图2(1/4)



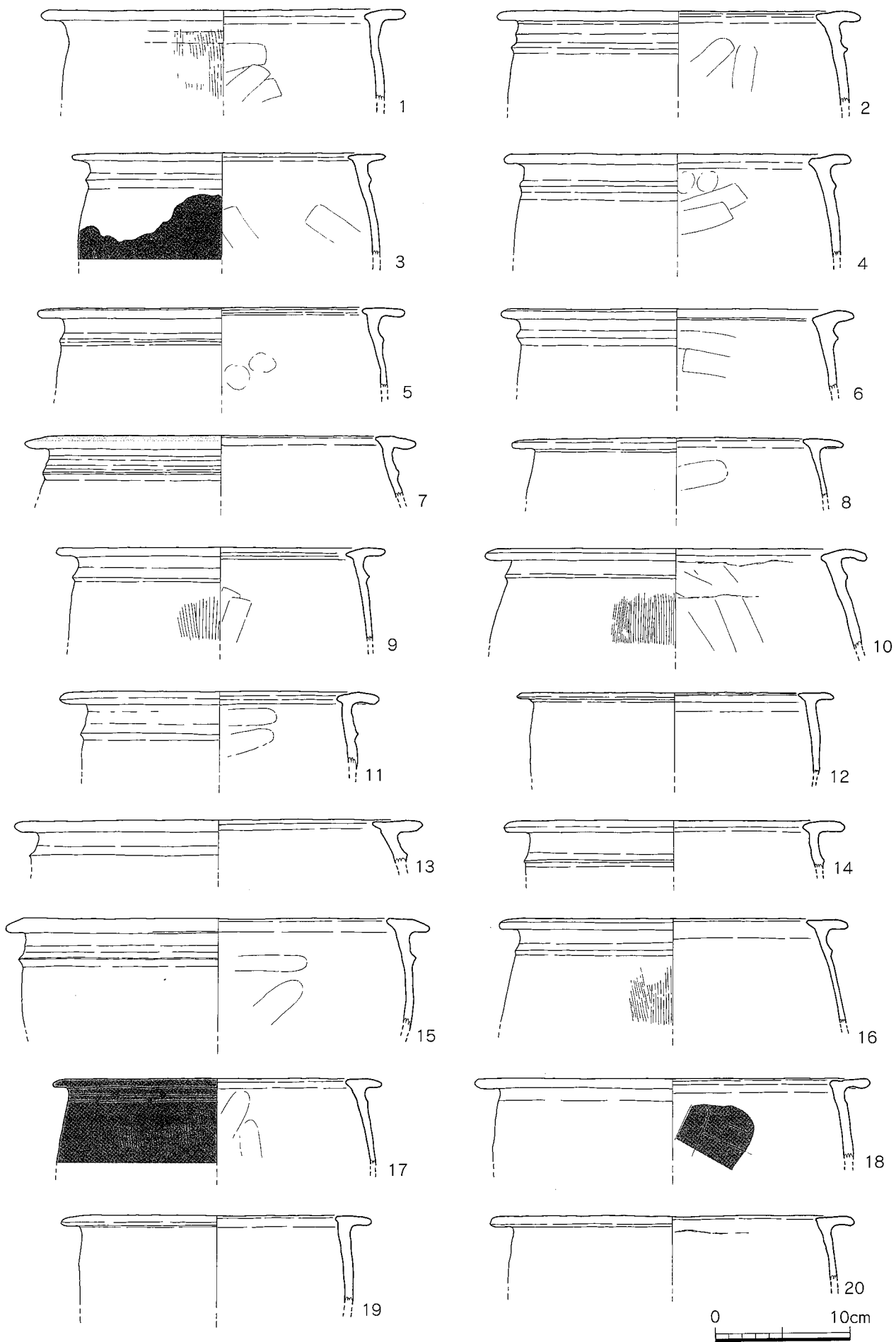
第33图 II区谷部包含层出土遗物实测图3(1/4)



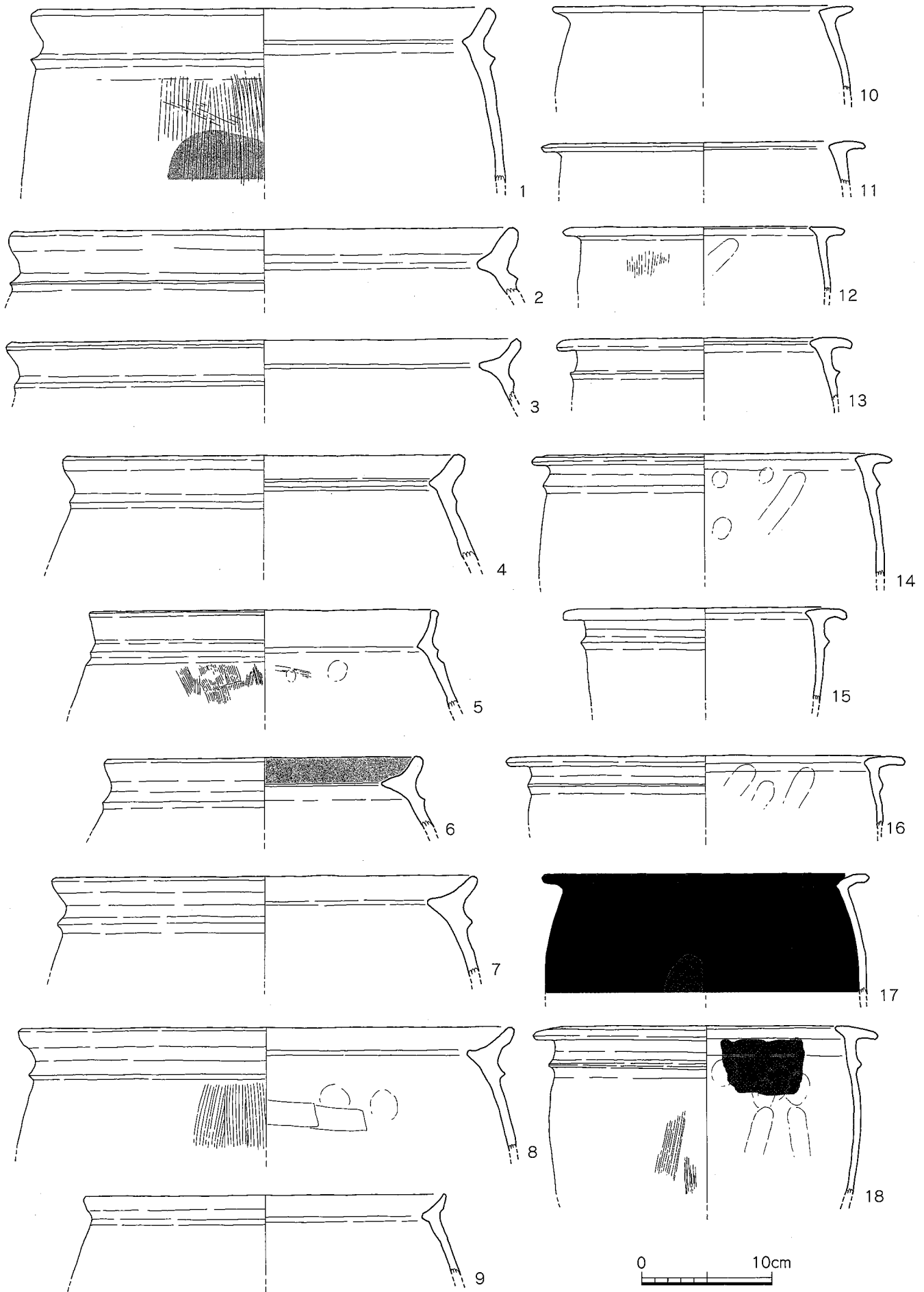
第34图 II区谷部包含層出土遺物実測図4(1/4)



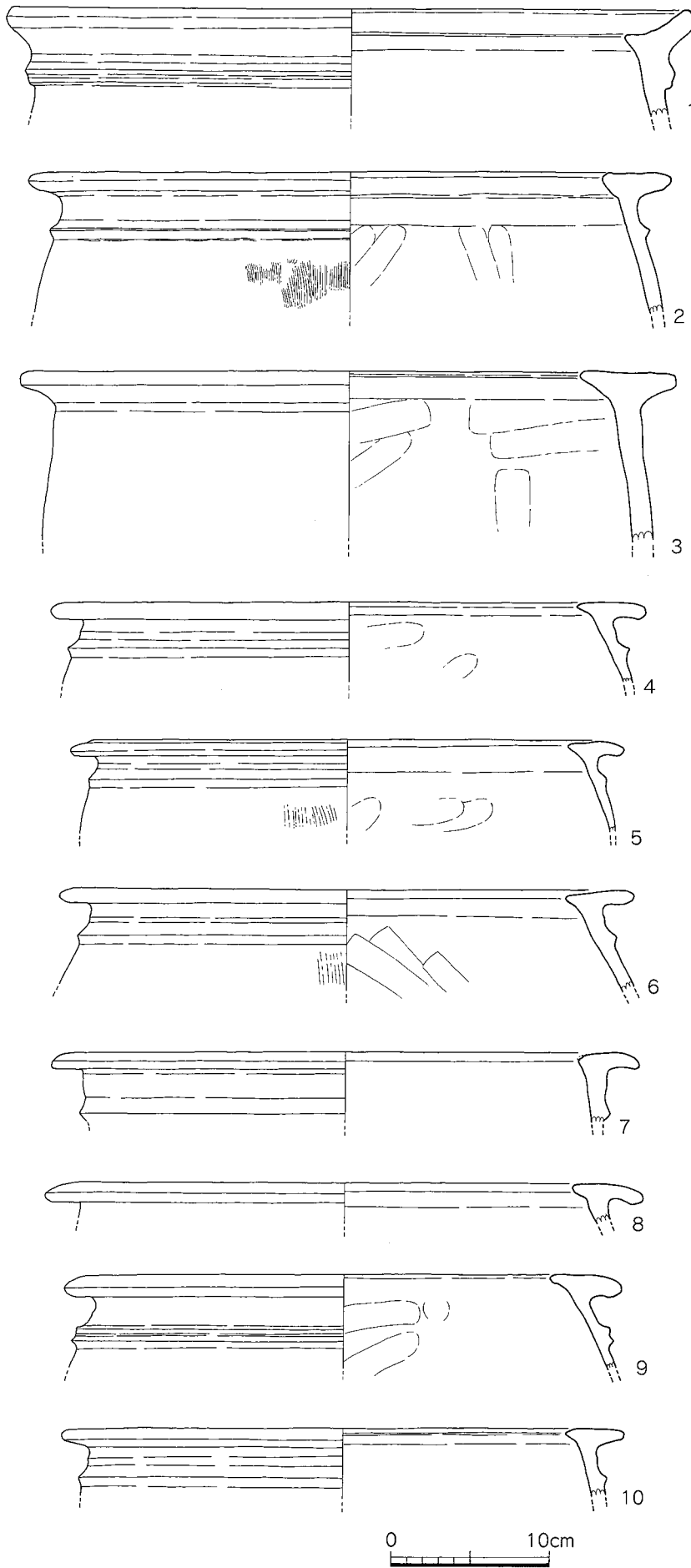
第35图 II区谷部包含层出土遗物实测图5(1/4)



第36图 II区谷部包含層出土遺物実測図6(1/4)



第37图 II区谷部包含层出土遗物实测图7(1/4)



第38図 II区谷部包含層出土遺物実測図8(1/4)

小さい。

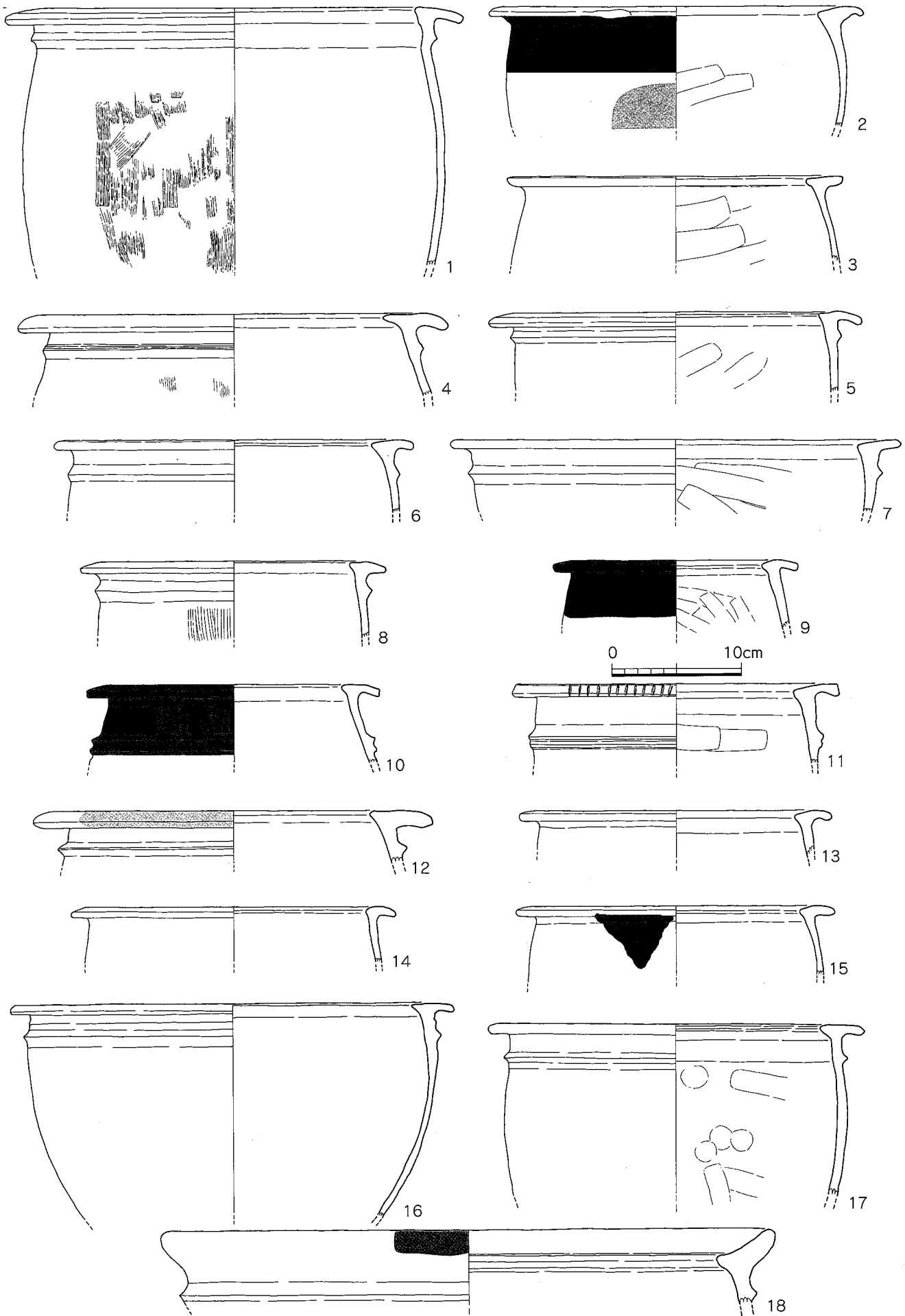
第44図は高坏と筒形器台である。1～7は高坏の坏部で、2を除くすべてが丹塗りである。1・2は碗形の坏部で6は口縁部下に突帯をもつ。8は高坏の脚裾部。9～11は筒形器台である。筒形器台は従来、糸島地域に少ない土器であったが、潤地頭給遺跡や三雲・井原遺跡などで事例が増えている。9は器表面が剥離しているが本来は丹塗りであろう。10・11は丹塗りであり11には透かしをもつ。

第45図は器台・支脚である。12は器台としたが蓋の可能性も否定できない。26も器台ではない可能性がある。22は被熱の結果、脚裾部が大きく剥離している。30～32はミニチュア土器である。31は器壁が厚く見た目よりも重量がある。底部は凸レンズ底である。

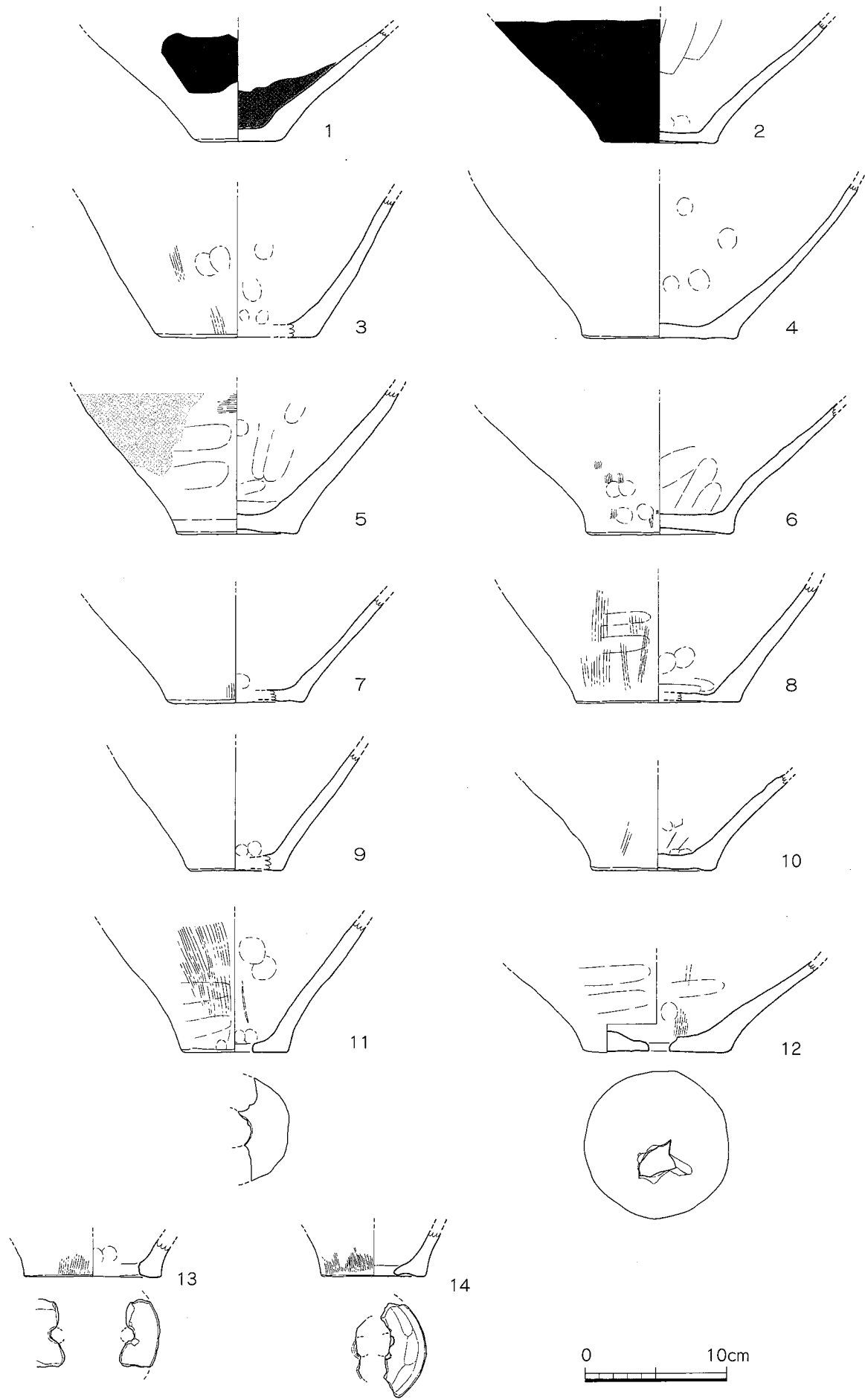
第46図は古墳時代以降の土器類である。1～4は甕で5・6は高坏である。7は甑の把手で、8・9は陶磁器の高台片である。

(1) 石器・鉄器・土製品

出土遺物(第47～49図) 1～4は5号住居跡出土の石錘である。いずれも円盤状で、中心に両面穿孔の孔を設ける。5は1号住居跡出土の土製丸玉である。6は1号住居跡出土の砥石で、上下面に磨いた痕跡をもつ。7は4号住居跡出土の磨製石剣の切先である。先端部と右側面に欠けがある。全体的に扁平で中心に緩やかに稜が入る。8は3号住居跡出土の小型の石材で、被熱の結果、全体にヒビが入る。9は5号住居跡出土の七角柱状の砥石でいずれの面も使われた痕跡がある。10は5号住居跡出土の打ち欠き石錘である。11は5号住居跡出土の扁平片刃石斧で全体的に丁寧な研磨を施す。12は3号住居跡出土の鑄造鉄板である。鑄造鉄斧の転用品か。13は5号住居跡出土の高坏状のミニチュア土器である。14は土坑出土の滑石製紡錘車の未製品である。側面はヨコケズリを施す。15～17は軽石製の浮子である。15は土坑、16・17はピット70出土。18は谷出土の小型の有溝石錘。長軸方向に溝をもつ。19はピット96出土の有溝石錘である。剥離が著しいが長軸と短軸に十字状に溝をもつ。

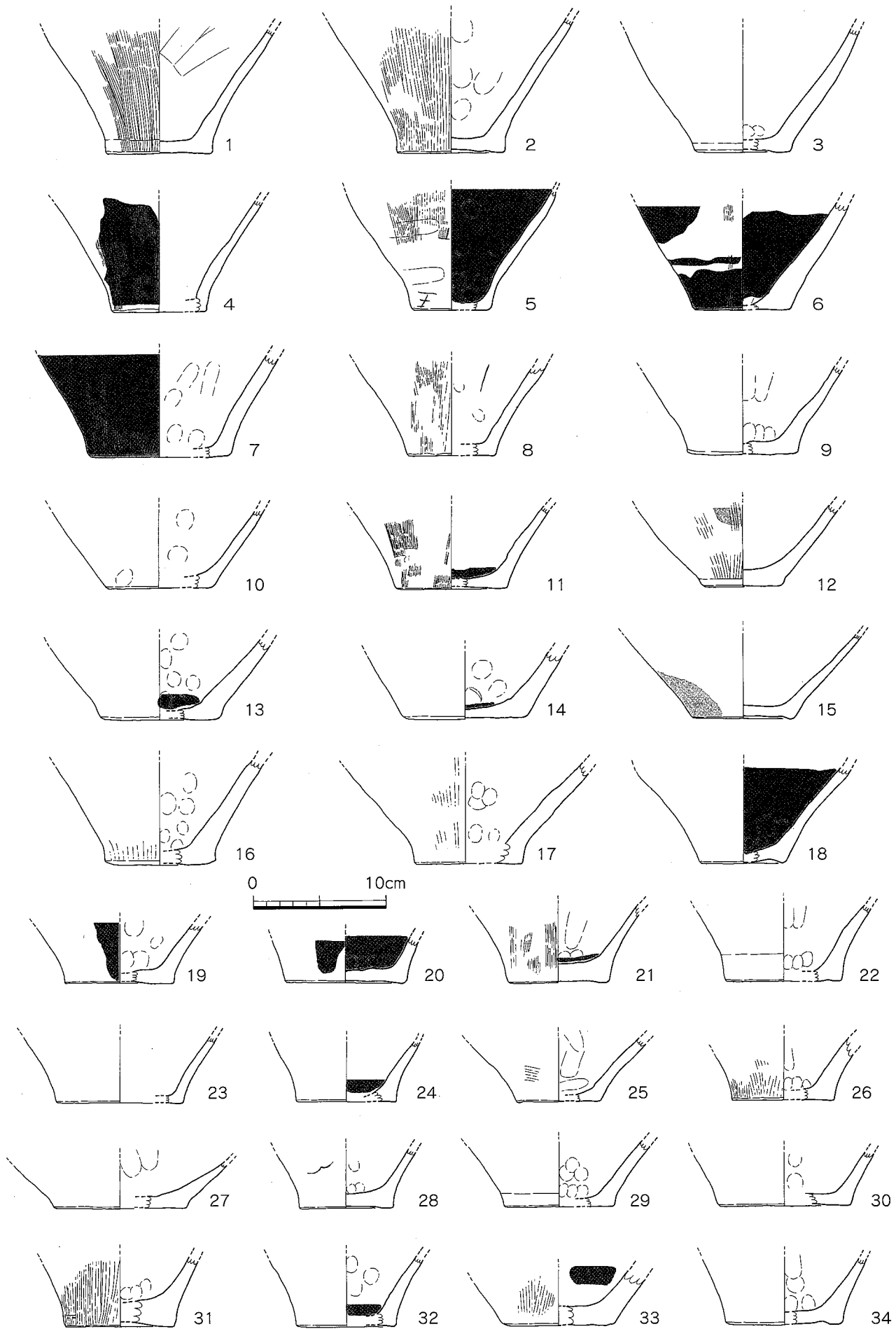


第39图 II区谷部包含层出土遗物实测图9(1/4)



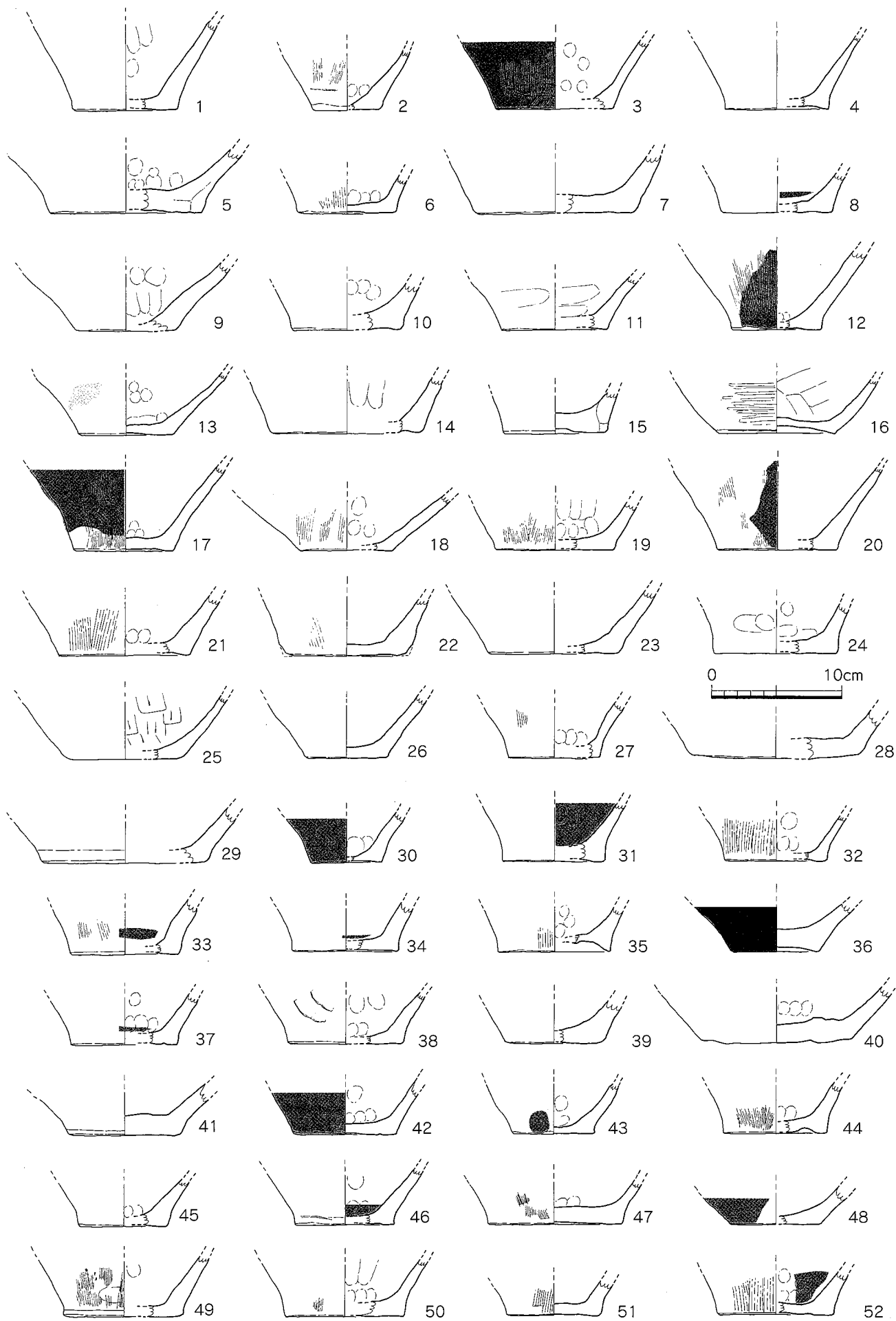
第40図 II区谷部包含層出土遺物実測図10(1/4)

第48図1は細石刃核である。整理作業中に確認し、出土状況等は不明である。腰岳系の黒曜石で、船野型に分類される。2・3は敲石である。2はピット4、3は谷部包含層より出土。4はピット4出土の磨石である。5～9は砥石である。5・7・8は谷部包含層、6は3号住居跡、9はピット13から出土する。10はピット95出土の軽石製浮子である。

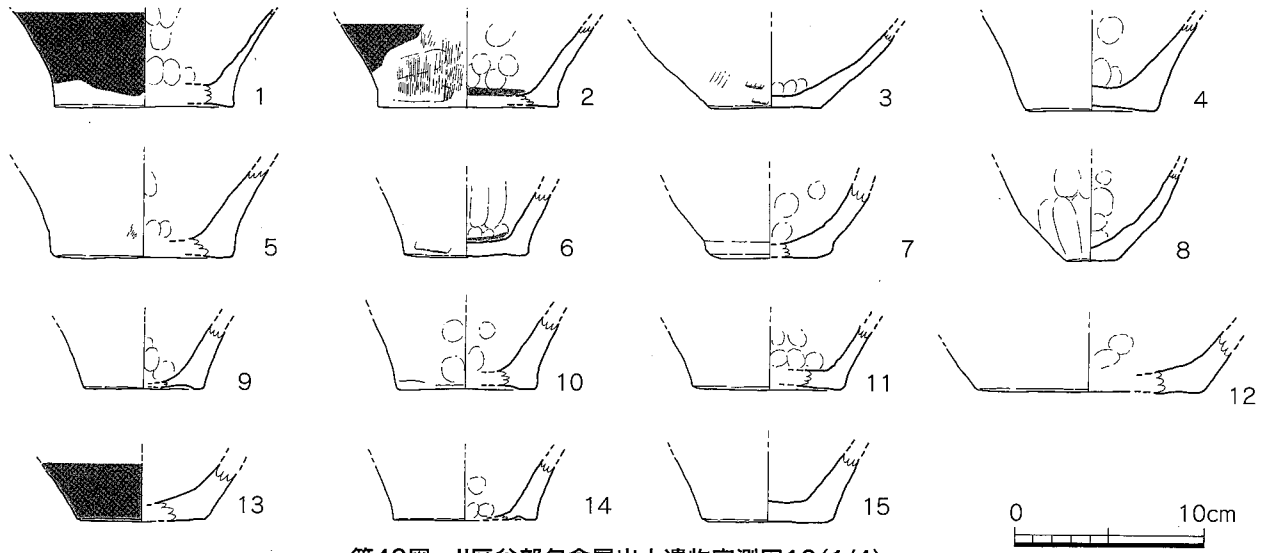


第41図 II区谷部包含層出土遺物実測図11(1/4)

る。第49図1～3は打製石鏃である。1は谷部包含層、2はピット2、3はピット3出土である。4は谷部包含層出土の輝緑凝灰岩製石包丁未製品である。5は石斧か。6はピット86出土の土製品で双孔土錘の可能性ある。7は谷部包含層出土の有溝石錘である。



第42图 II区谷部包含层出土物实测图12(1/4)



第43図 II区谷部包含層出土遺物実測図13(1/4)

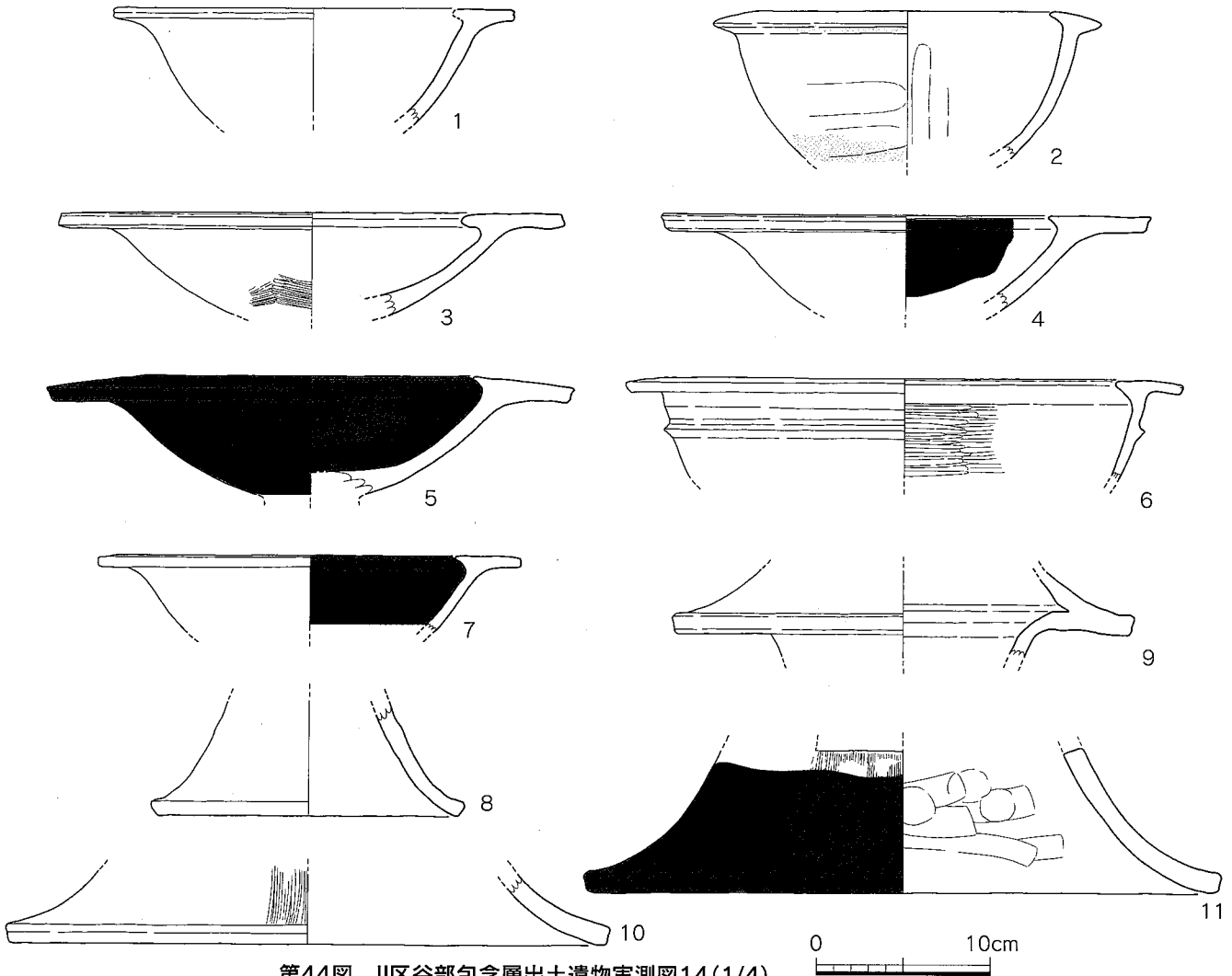
4. III区の調査

(1) 概要

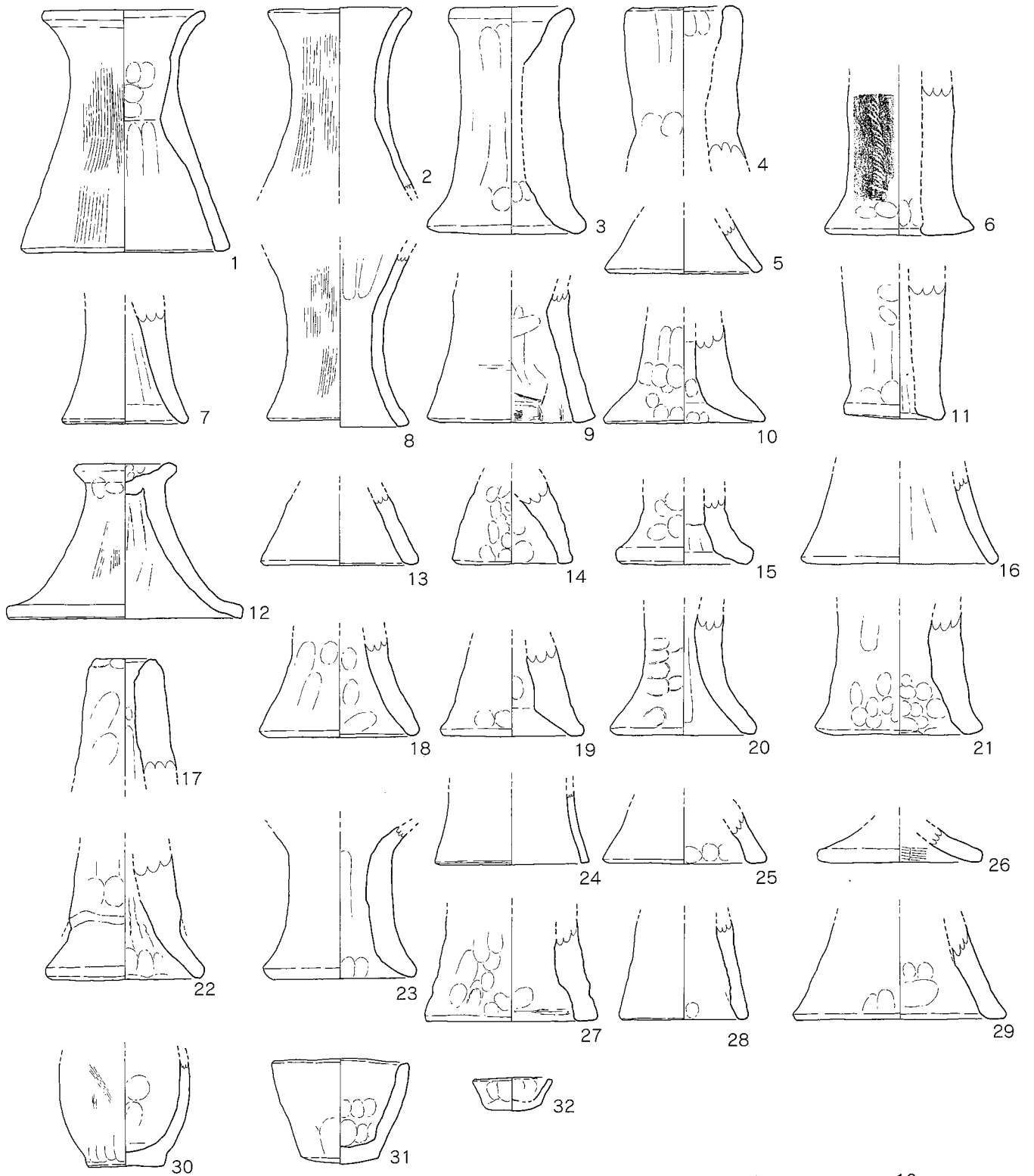
調査対象地の北端に設定した調査区約700m²を測る。丘陵から谷に向かう傾斜地で、住居跡16棟、掘立柱建物8棟、土坑8基、溝などが確認された。

(2) 住居跡

1号住居跡(第51図1)調査区の東丘陵部と西の谷部へ向かう緩斜面の境に位置する住居跡である。その中央に土層観察用のベルトがのこり、西側は調査区外側に延びている。緩斜面に築かれてるせいか東側がよくのこる。床面では碗が2~3個重ねられた状態で4セット確認された。確認される範囲で南北4.20m、東西3.30mを測る。



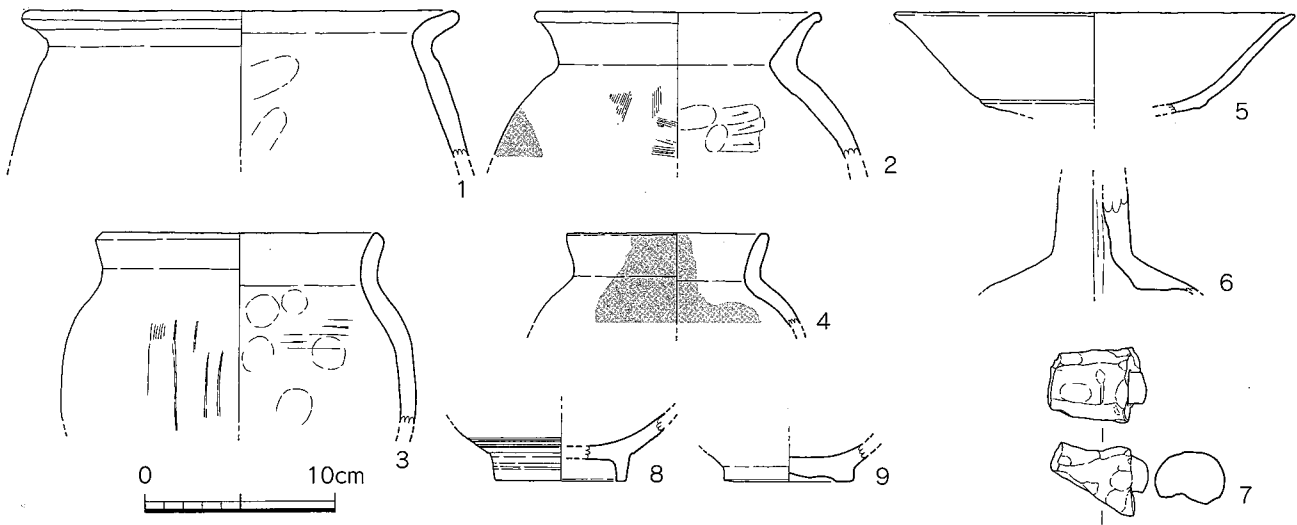
第44図 II区谷部包含層出土遺物実測図14(1/4)



第45図 II区谷部包含層出土遺物実測図15(1/4)



出土遺物(第52図、第16図1)第52図1は甕の上半部である。口縁部は内湾しつつ弱く立ち上がる。2~7は底部である。6は直線的に立ち上がり、側面には黒斑をもつ。8は器台の脚裾部で、9は蓋の頂部である。1~9は混入であろう。10は甕の上半部で胴部内面にヘラケズリを施す。口縁部はゆるく外湾しつつ立ち上がる。11・12は壺で、いずれも底部を欠くが丸底であろう。12の胴下半部に黒斑をもつ。13はミニチュア土器の甕である。手づくねで成形し、底部は不安定な平底である。14は

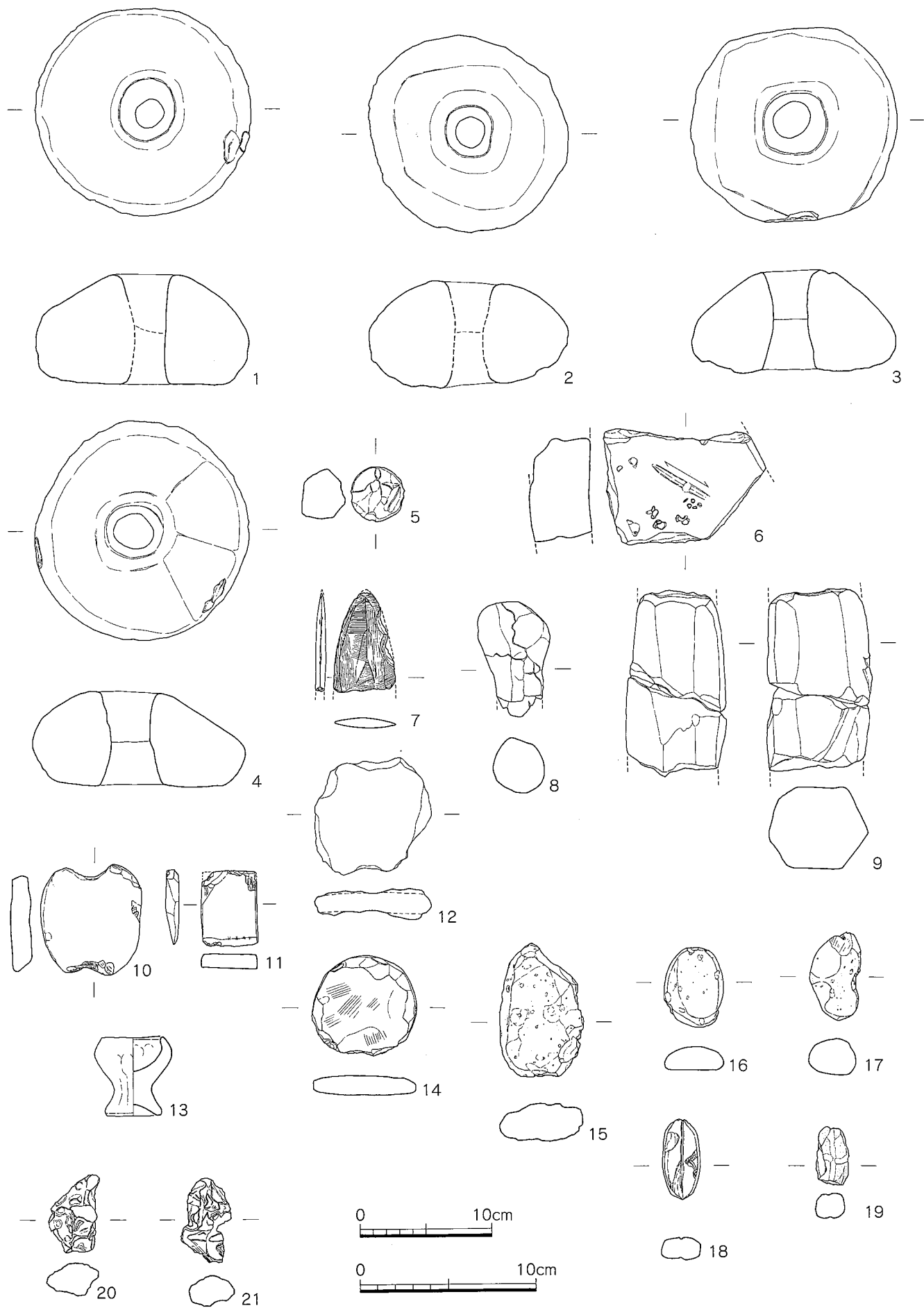


第46図 II区谷部包含層出土遺物実測図16(1/4)

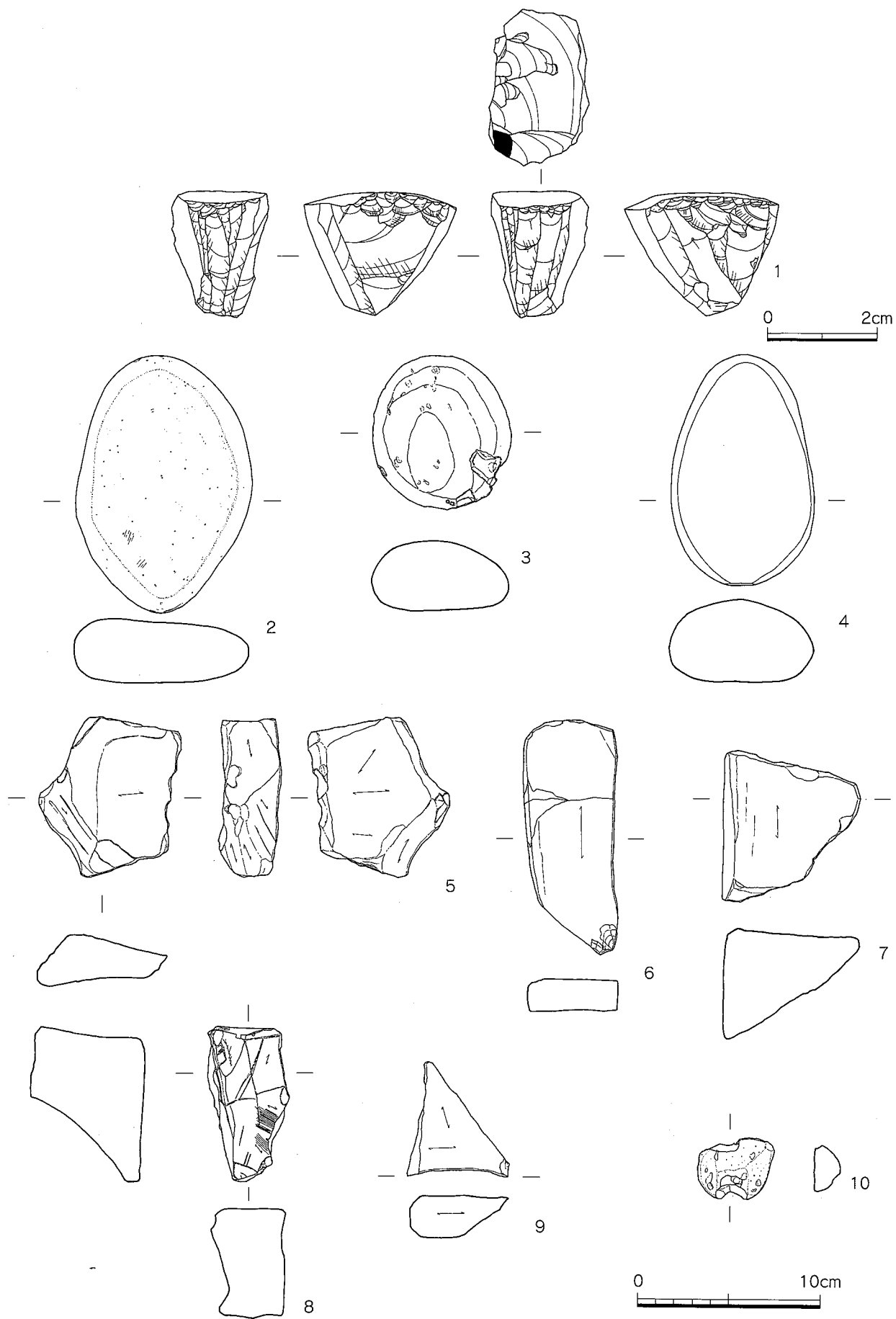
甕の底部1/2程度の破片である。底に6孔確認されるが本来は9孔か。15はミニチュア土器の脚柱部である。16は高杯の坏部で外面にハケメを施す。口縁部の一部は打ち欠いたもので、黒斑ももつ。17~25は碗である。いずれも住居跡床面で確認され、2・3点重ねた状態で出土した。17は平面楕円形の碗で口縁部と底部に黒斑をもつ。成形ならびに仕上げも粗い。18は口縁部に小さな打ち欠きをもつ碗で、外面は全体的に黒ずみ、内面にも黒斑をもつ。19は丸底の碗で外面にヘラケズリを施す。20は底部に黒斑をもつ碗である。21は口縁部を小さく打ち欠く碗である。22は丸みを帯びる碗で、外面上半部はハケメ、下半部はヘラケズリを施す。口縁部に2箇所の打ち欠きをもち、内面底部には炭化物が付着する。23は口縁部に小さな打ち欠きをもち、外面の半分は黒斑がみられる碗である。ヘラケズリが粗く、器表面の凹凸が著しい。24は内外面ともに黒斑をもつ碗である。口縁部は打ち欠き、底部には「×」印のヘラ記号をもつ。25は小ぶりの碗で口縁部に打ち欠き、底部に黒斑をもつ。26・27は土器器坏身である。第16図1は砥石である。剥離が著しく、左側面のみ研磨痕をのこす。

2号住居跡(第51図2) 調査区の東丘陵部と西の谷部へ向かう緩斜面の境に位置する住居跡で1号住居跡の南側に位置する。緩斜面に形成されたため西半分は削られて消失している。現存で南北3.69、東西1.47mを測る。遺物は床面と上層とに分かれて出土した。

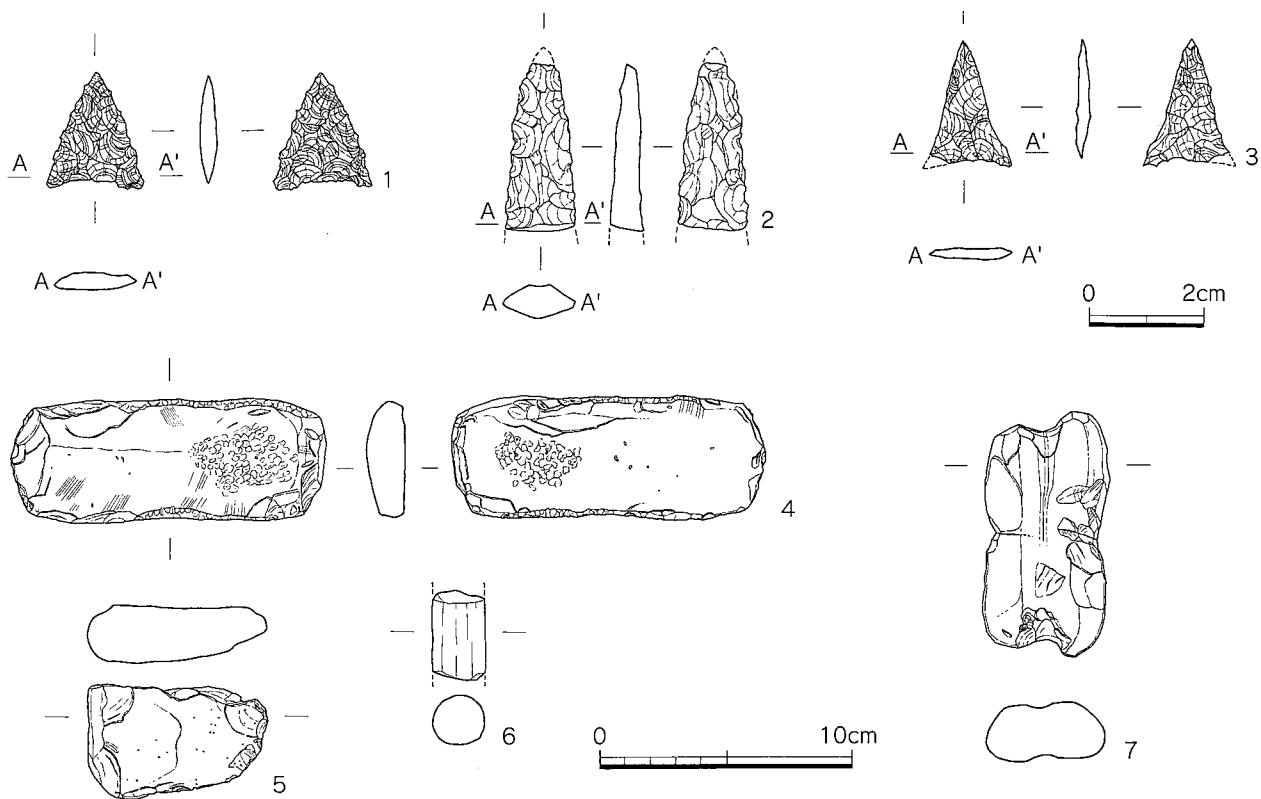
出土遺物(第53・55図1~16) 第53図1~3は弥生時代中期の甕である。1・2は口縁部下に弱い三角突帯をもつ。1・3の口縁部は若干跳ね上がる。4は甕の口縁部である。5~9は甕の上半部である。5の外面はヘラケズリを施す。7の外面は黒斑をもち、8の胴部内面はコゲが付着している。10は甕の口縁部である。11~33は甕もしくは壺の底部である。いずれも平底であるが、20は底部の中心部を盛り上げる。17・32は底部裏面に黒斑をもつ。30・33はミニチュア土器の底部か。第55図1は明瞭な稜をもつ複合口縁壺である。2・3は高杯の脚柱部で裾付近に円形の透かしをもつ。4は碗か。5は蓋の頂部で、6は脚部破片。剥離が著しく詳細不明である。7・8は支脚である。頂部の孔はいずれも外側から開けられており、比較的丁寧な作りである。9~14は器台である。9は図上で完全に復元される器台で、口縁部と脚部内面にハケメを施す。10は全体的に器壁が厚い。11~14は脚裾部の破片で、11・12は直線的に、13・14は内湾しつつ立ち上がる。15は須恵器坏身



第47图 II区出土石器·鉄器·土製品実測図1(1/3·1/4)



第48图 II区出土石器·鉄器·土製品実測図2(1/1·1/3)



第49図 II区出土石器・鉄器・土製品実測図3(3/4・1/3)

である。口径11.0cmを測る。16は須恵器坏身の小片である。

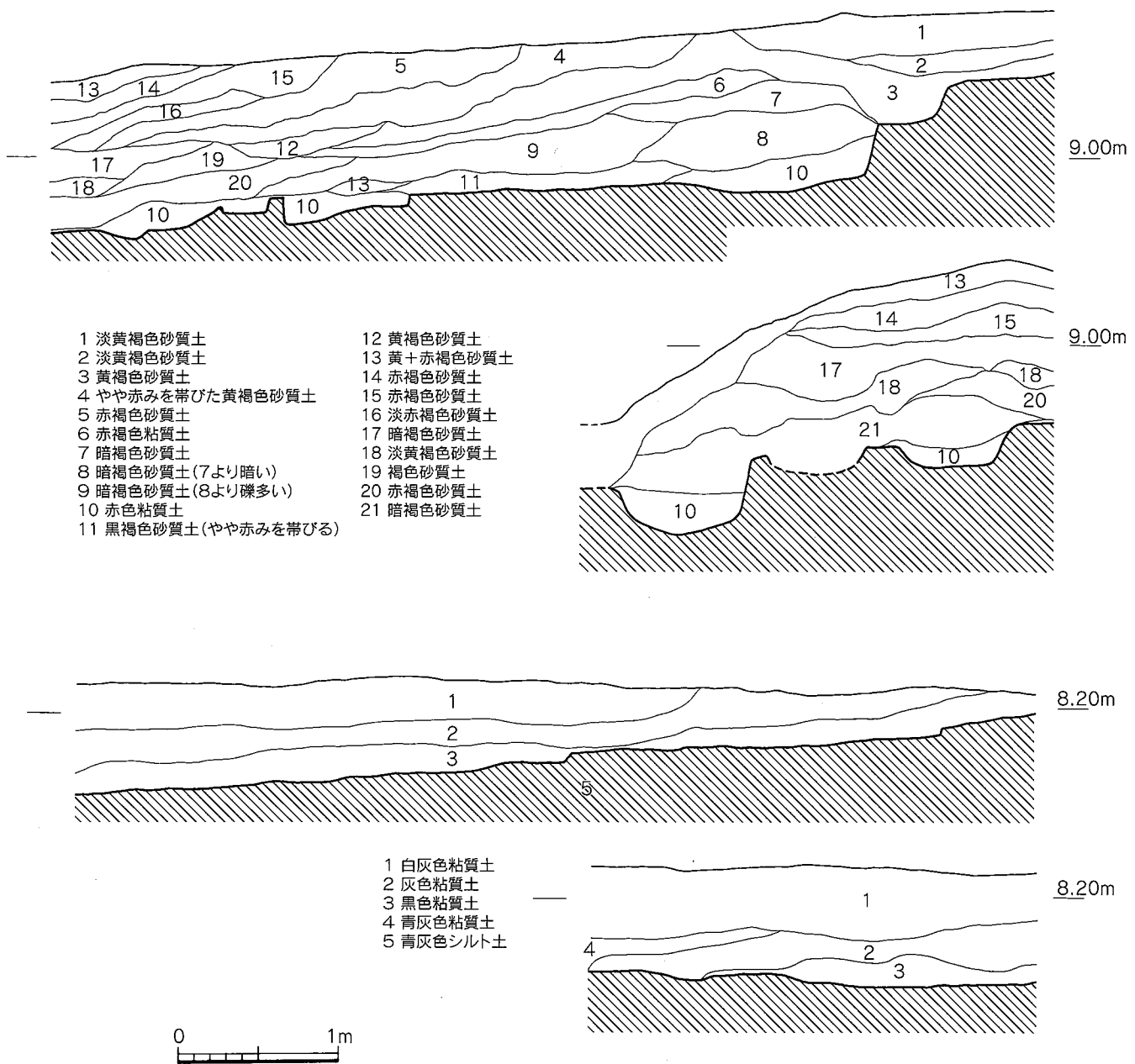
3号住居跡(第54図1) 調査区北側の緩斜面上に築かれた住居跡である。西側の大半が調査区外にのびる。南北4.20m、東西0.95m、深さ9cmを測る。長軸は南北方向か。住居跡にともなう柱穴は不明である。出土遺物はない。

4号住居跡(第54図2) 調査区の西側に位置する住居跡で、緩斜面を降り切った谷のすぐそばに位置する。住居跡は水田の暗渠に切られており、周溝は一部調査区外にのびている。床面には木材の炭化物がのこり、中心部分には弥生土器片が認められる。平面プランは南北3.82m、東西3.19mを測り、検出面のすぐ下は床面である。

出土遺物(第55図17~21、第78図16) 17は外湾しながら立ちあがる口縁部をもち、内外面ともにハケメを施す。18はやや跳ね上がる口縁部を持つ壺か高坏である。20~22は底部である。21は外面にハケメを施す凸レンズ底の甕である。19は器台の脚部で器壁を薄く仕上げる。第78図16は筒形土錘である。

5号住居跡(第54図3) 谷に向かう緩斜面の裾部に位置する住居跡で5号土坑の西に接する。北と西半分は削られて消失している。土器は埋土中から多く出土する。床面近くから砥石が出土した。

出土遺物(第55図22~29、第57図1~6、第78図1・5) 第55図22は明瞭な稜をもつ複合口縁壺である。23は無頸の袋状口縁壺である。25は長胴甕の上半部である。25は直線的な口縁部をもち、外面に黒斑、内面にスガが付着する。26~29は底部でいずれも平底である。第57図1・2も底部でいずれも平底であるが、1の上半部は被熱のためか剥離している。3~6は器台の脚裾部である。3は器壁が薄く直線的に、4・5は器壁が厚く内湾しつつ立ち上がる。6は高坏の脚裾部の可能性もある。第78図



第50図 III区基本層序(1/80)

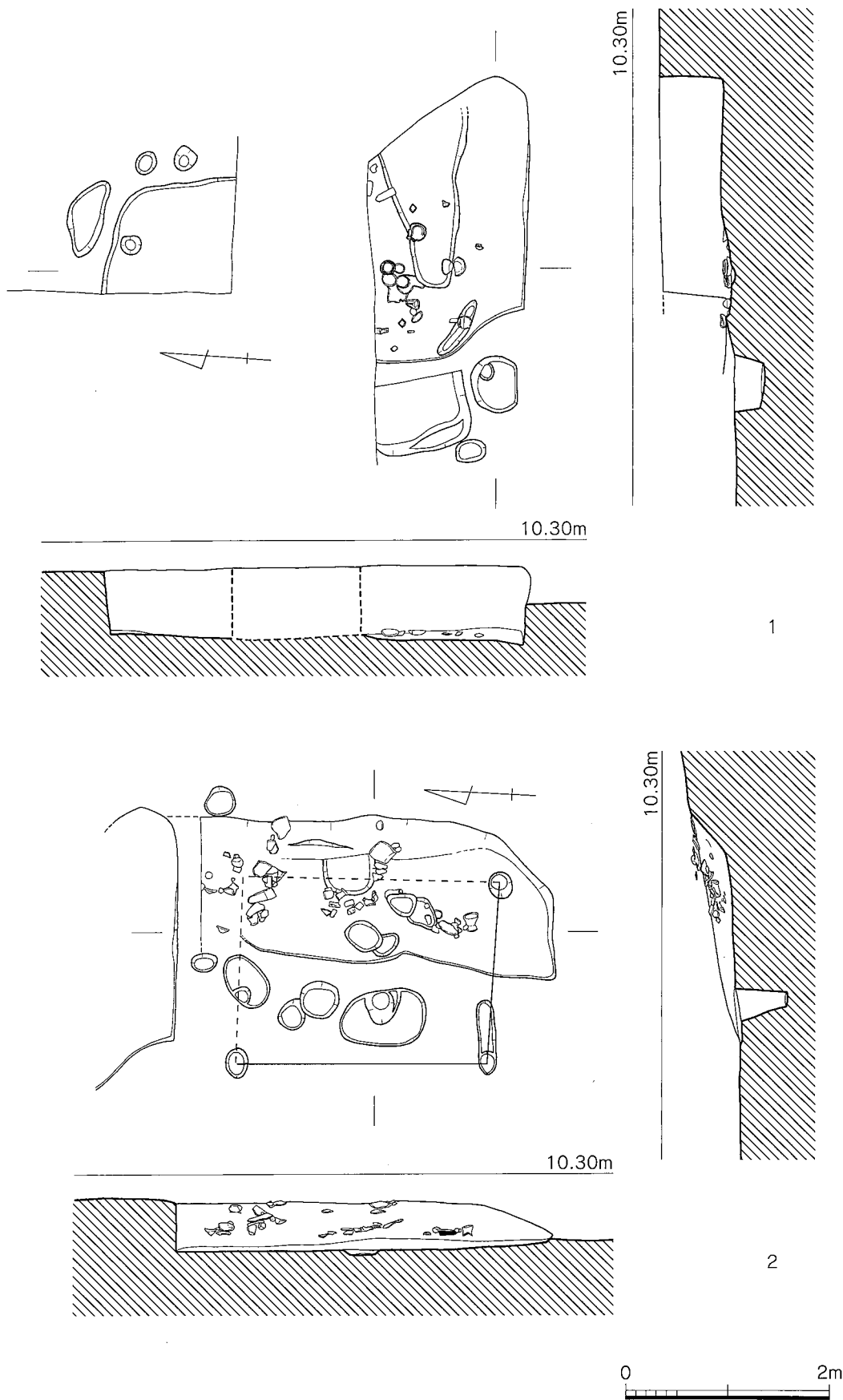
1は黒曜石製の打製石鏃で、5は小型の勾玉である。黒色の石を用いるが石材は不明である。

6号住居跡(第56図1)緩斜面裾部に位置する住居跡で南西隅部のみ確認された。検出面から6cm程度掘り下げると床面に達する。

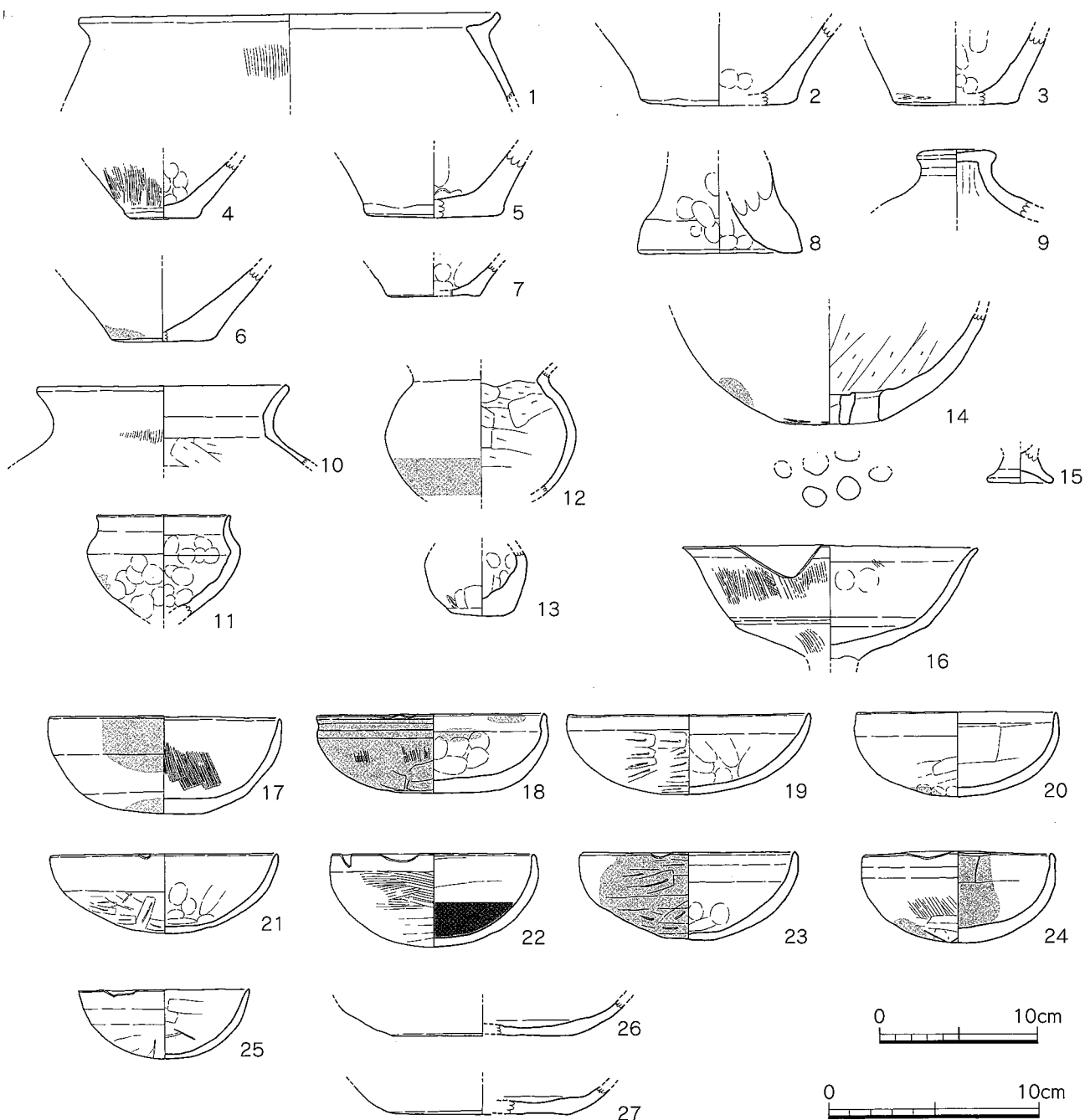
出土遺物(第57図7・8、第77図14)第57図8は甕の底部である。7は器台の脚裾部で端部を反転させる。第77図14はミニチュア土器である。

7号住居跡(第56図2)緩斜面に位置する住居跡で6号住居跡同様のこりが悪い。東側壁際と南側に溝がめぐる。東側溝内から小型丸底壺が出土した。

出土遺物(第57図9~12)9・10は小型丸底壺である。9は口縁部を打ち欠き、10は外面の広



第51图 III区1·2号住居迹实测图(1/60)

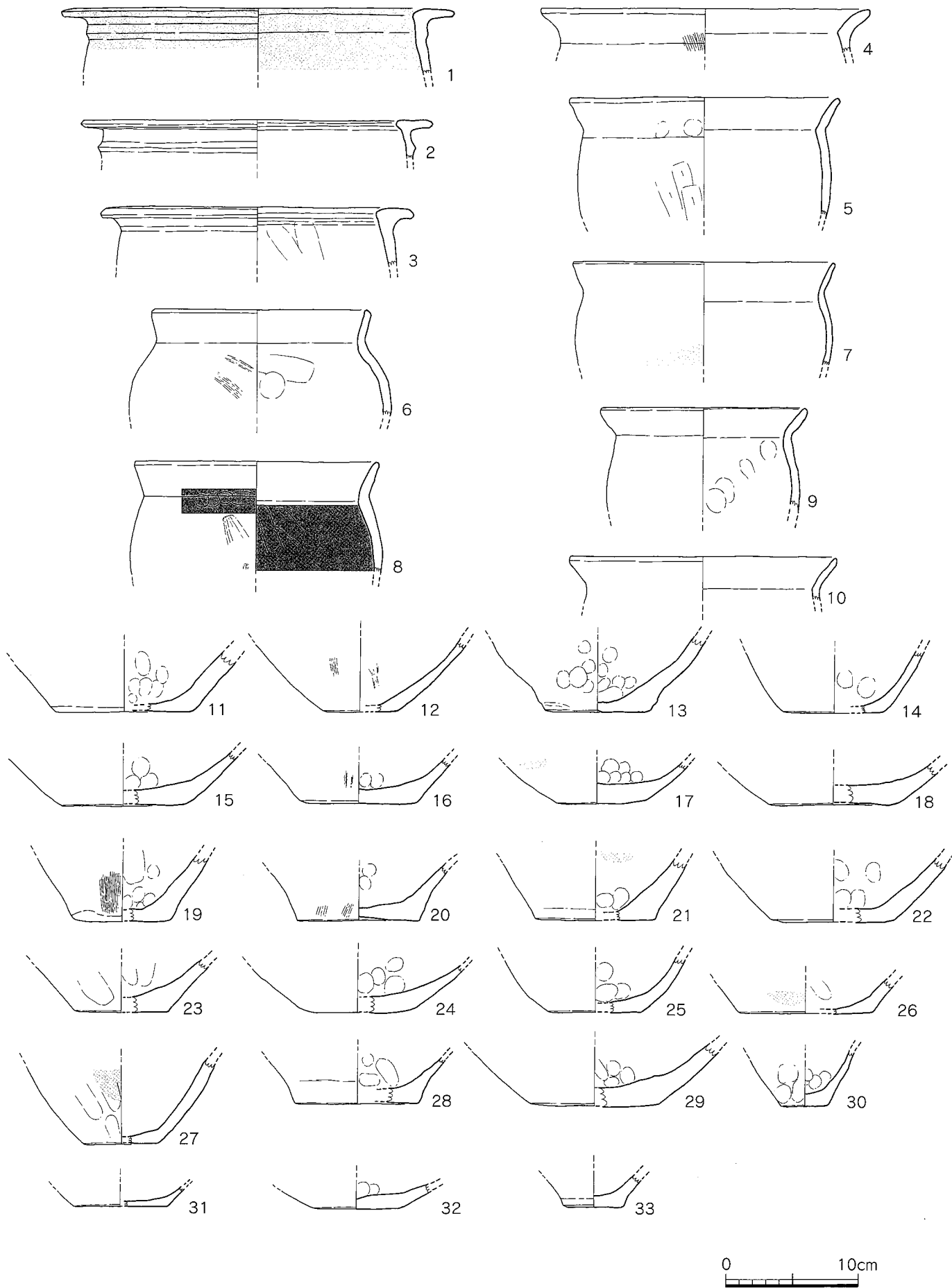


第52図 III区1号住居跡出土遺物実測図(1/3・1/4)

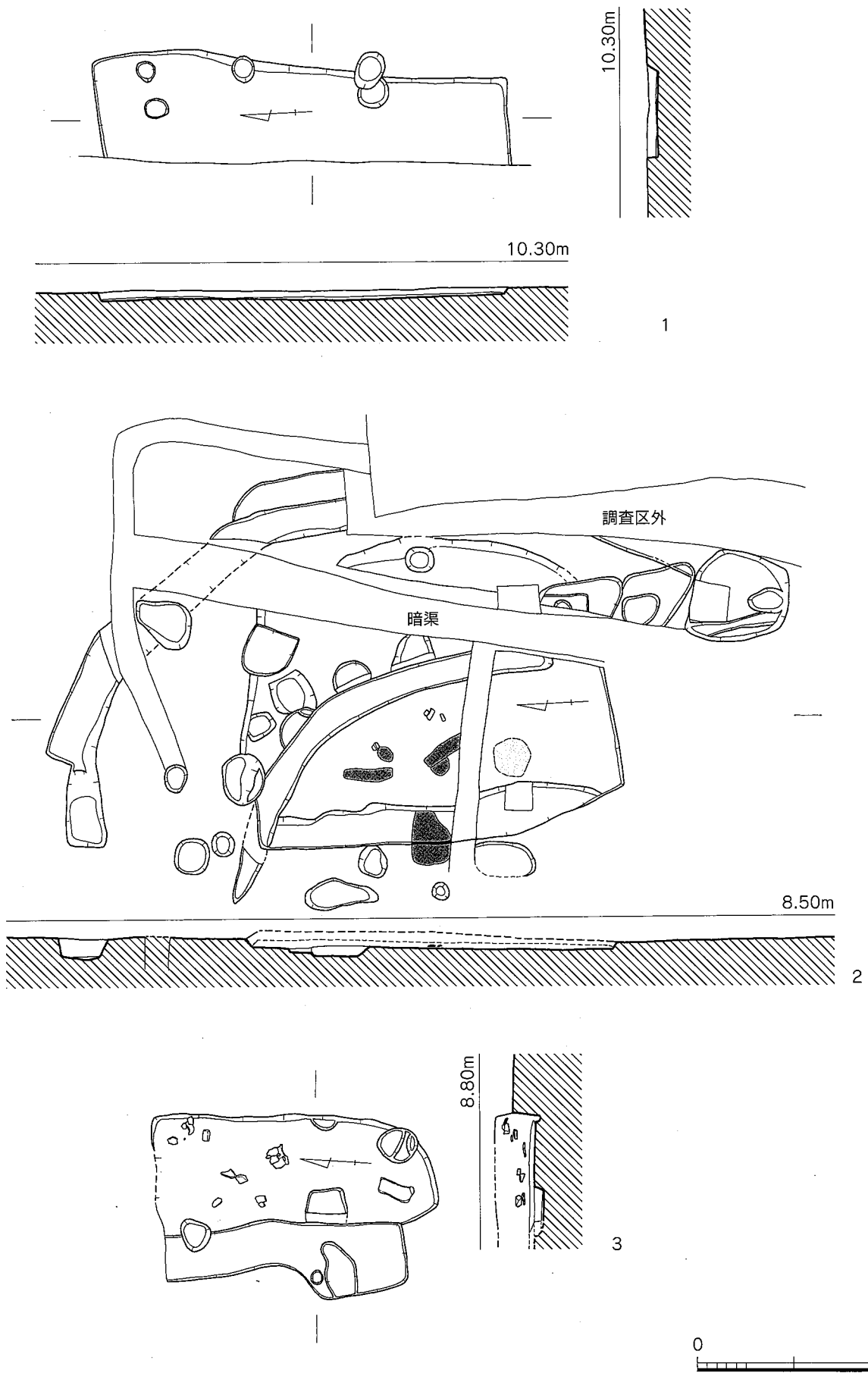
い範囲に黒斑をもつ。器壁も厚ぼったい印象を受ける。11は甕の口縁部で外面にハケメを施す。12は小型の碗である。

8号住居跡(第56図3)調査区東丘陵から少し下った場所に位置する住居跡で9号住居跡に切られる。床面に土器があるが、切りあいが激しく平面プラン等は分からない。

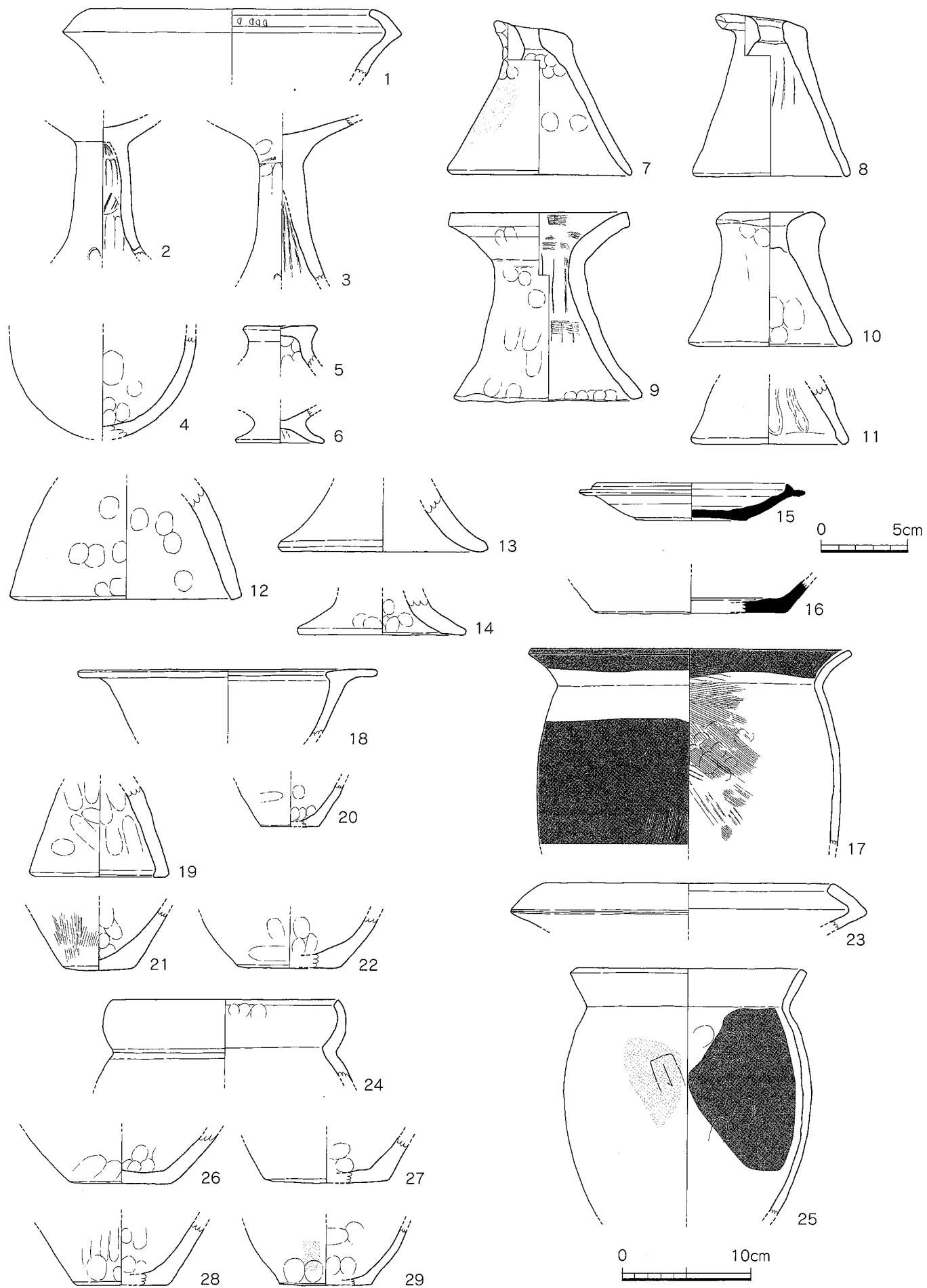
出土遺物(第57図13~15)13は口縁部が剥離した甕で、胴部に黒斑をもつ。内面はヘラケズリで外面はタタキの後にハケメを施す。14は直口壺である。張りの強い胴部に直線的に口縁部が立ち



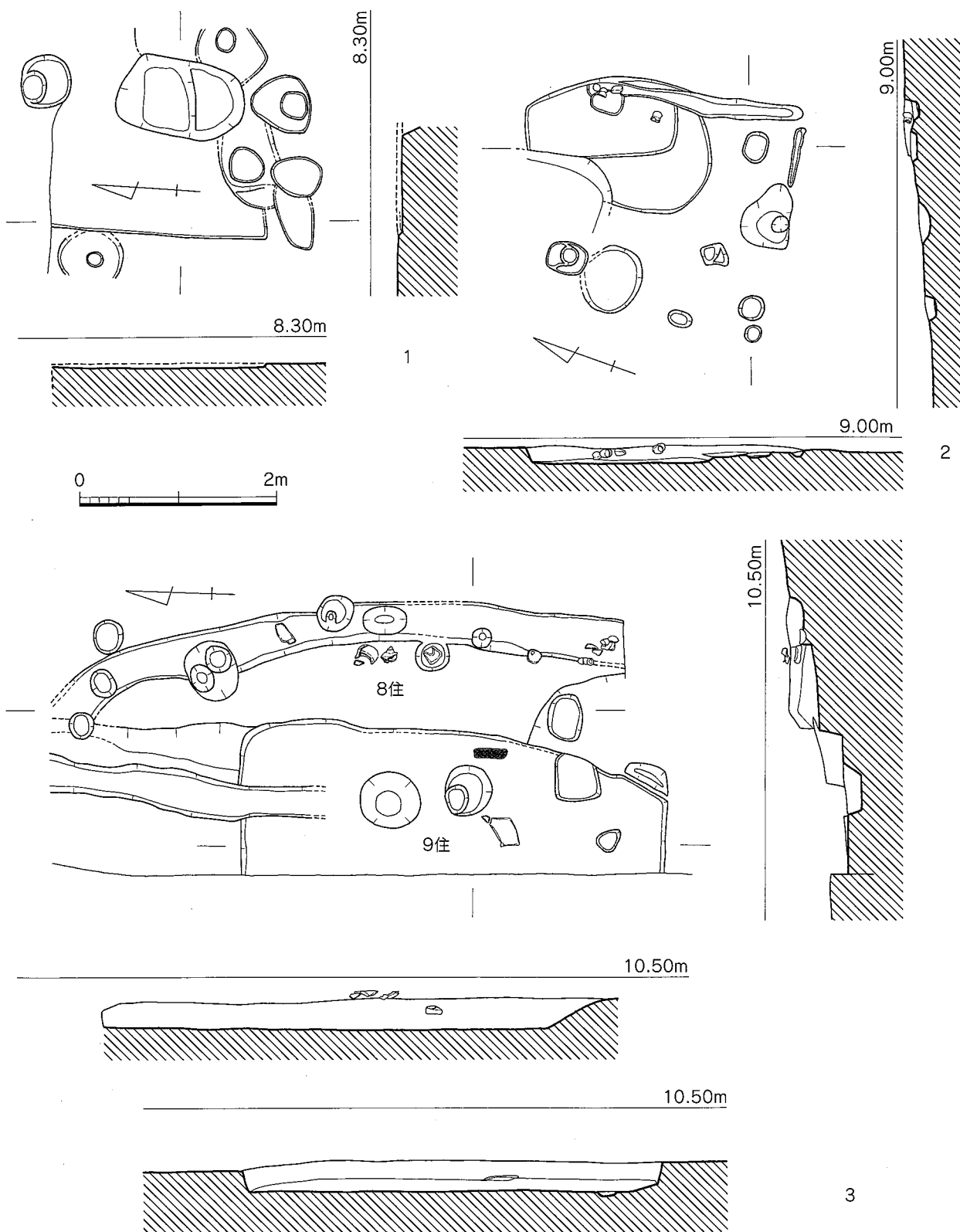
第53图 III区2号住居跡出土遺物実測図(1/4)



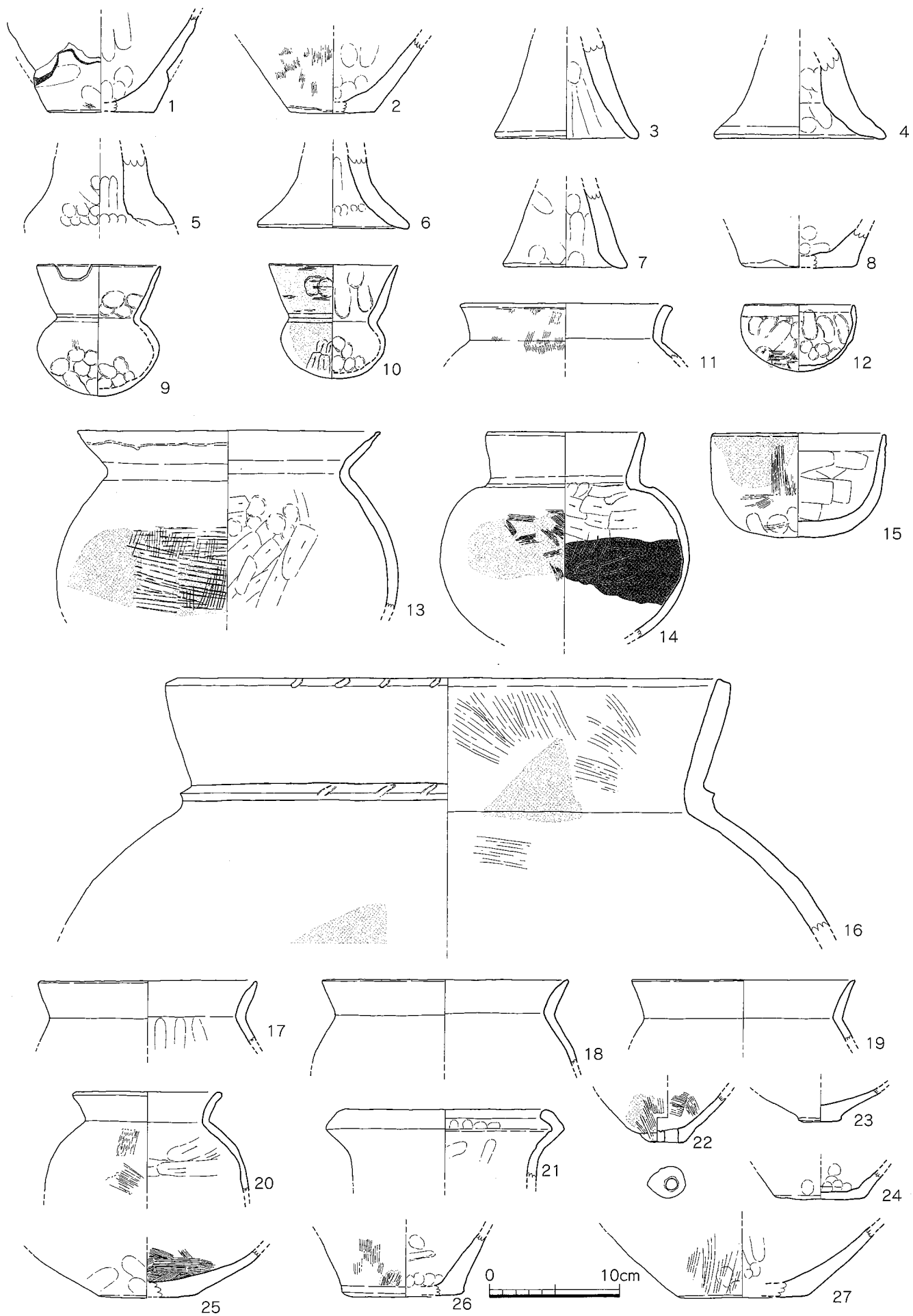
第54図 III区3~5号住居跡実測図(1/60)



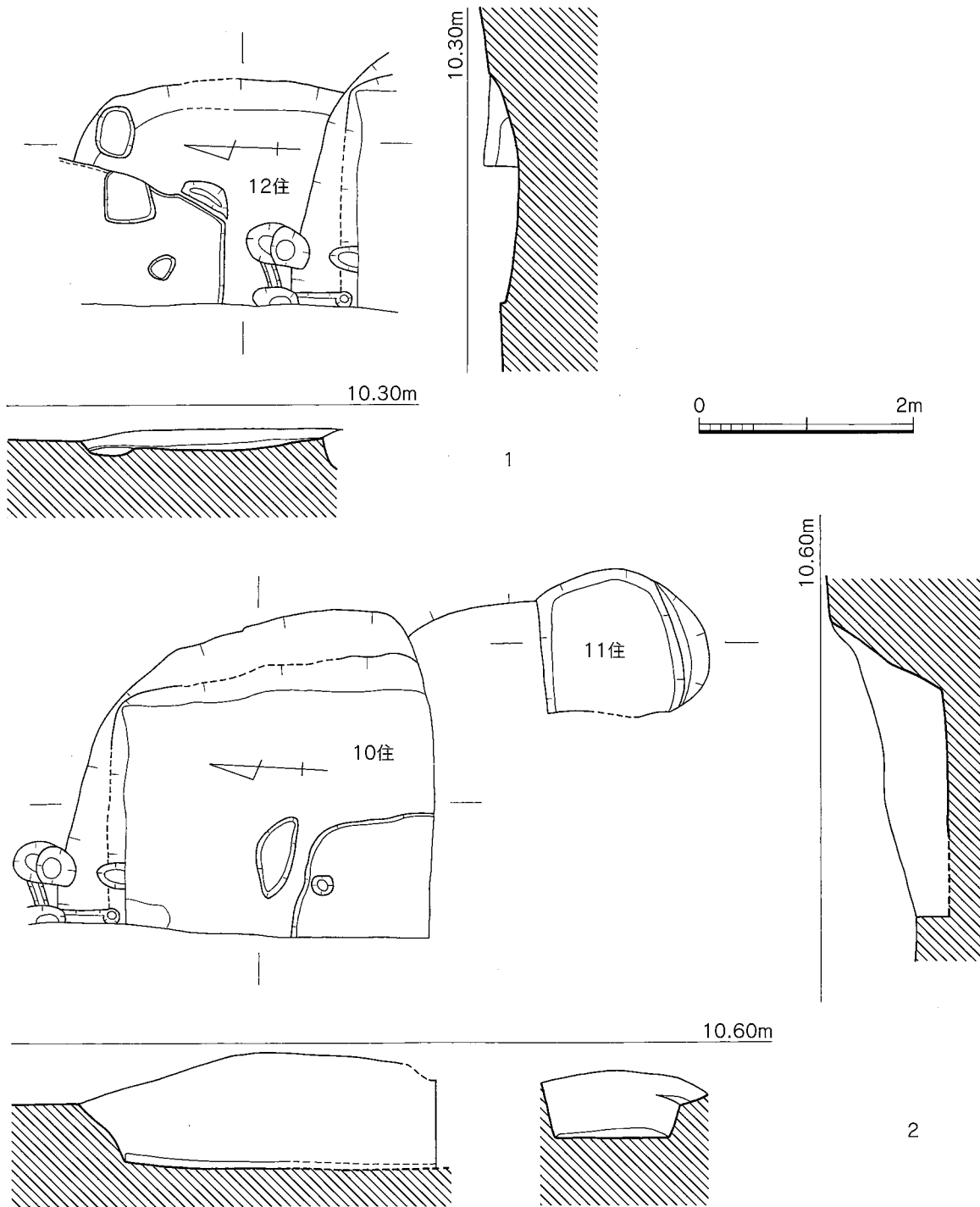
第55图 III区2~5号住居跡出土遺物実測図(1/3·1/4)



第56图 III区6~9号住居跡実測図(1/60)



第57图 Ⅲ区5~9号住居跡出土遺物実測図(1/4)

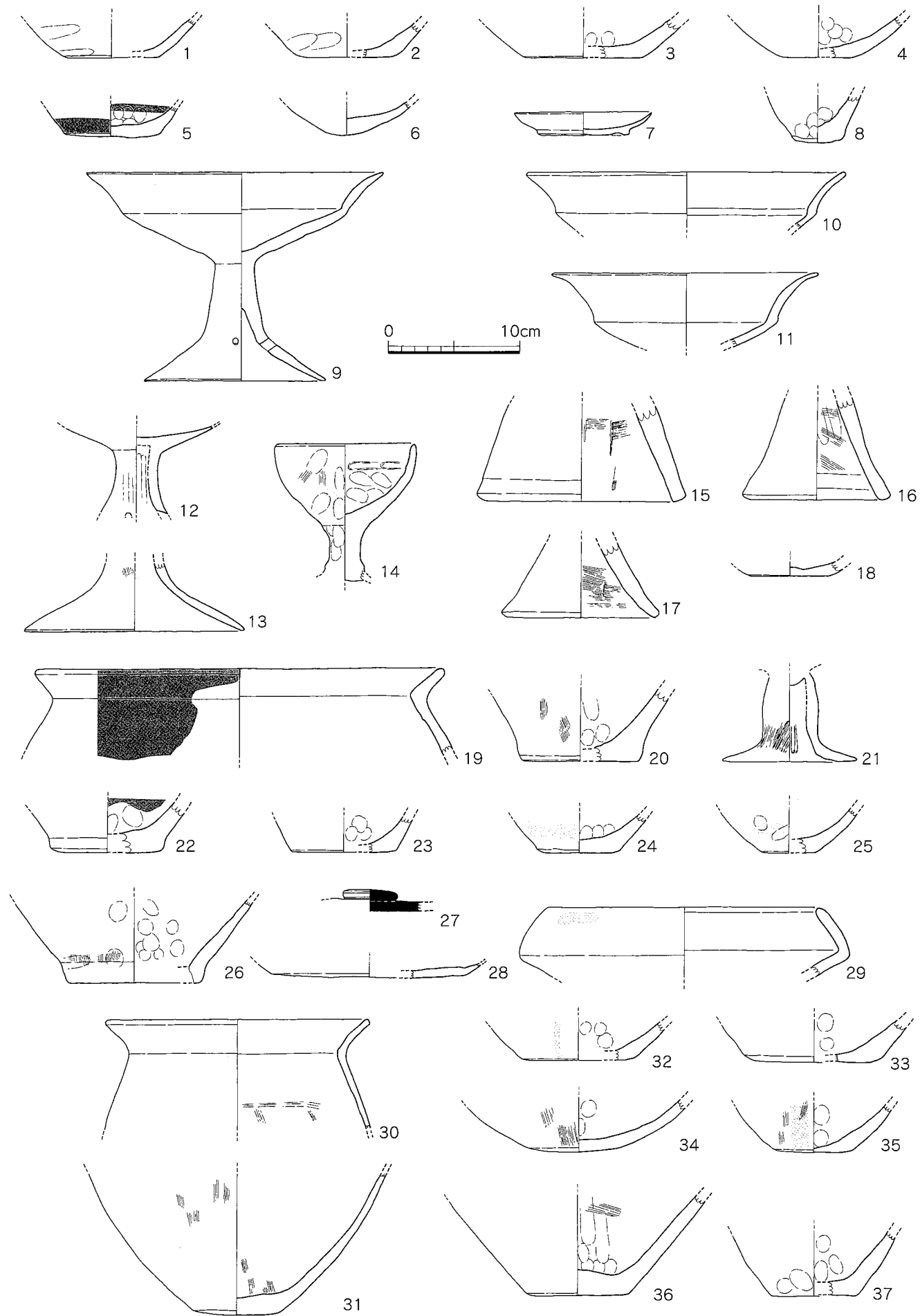


第58図 III区10~12号住居跡実測図(1/60)

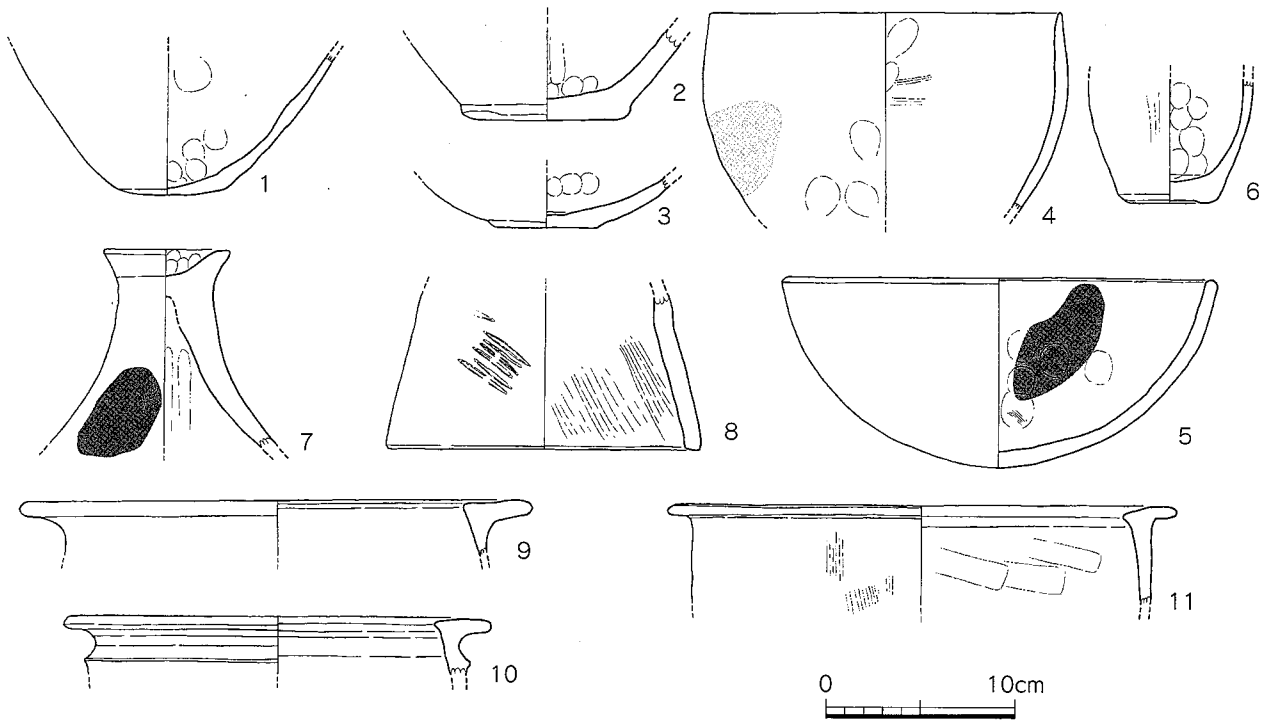
上がる。胴部外面には黒斑、内面にはコゲが付着する。15は碗である。器壁が厚く、口縁部付近に黒斑をもつ。

9号住居跡(第56図3) 調査区東丘陵から少し下った場所に位置する住居跡で西側に周溝がめぐる。住居跡は方形で西側が調査区外にのびる。現存で南北4.35m、東西1.50mを測る。

出土遺物(第57図16~27、第59図1~18、第78図4) 第57図16は大型の壺である。口縁端部と突帯に刻目を施す。胴部外面と口縁部内面に黒斑をもつ。17~19は甕の上半部である。20は丸みを帯びた胴部に口縁部が内湾しつつ立ち上がる。21は明瞭な稜をもつ複合口縁壺である。22~27は底部である。22は焼成前に両面から開けられた底部穿孔をもつ。23は底部がやや突出する。25・27は壺の底部。26は黒斑をもつ甕の底部である。第59図1~6は壺・甕の底部である。1~5は平底、6



第59图 Ⅲ区9~12号住居跡出土遺物実測図(1/4)



第60図 Ⅲ区12号住居跡、2・4号掘立柱建物、焼土坑出土遺物実測図(1/4)

は尖底である。7は脚台をもつ皿状の土器である。8はミニチュア土器の甕か。9～13は高坏である。9の坏部は肉厚で、反転部の内外面に稜が入る。脚裾部はラッパ状に広がり、円形透かしを3つもつ。10は9と同様の反転部をもつが、器壁は薄い。11はやや小型の高坏で、反転部が長い。12は脚柱部の破片。円形透かしを2つもつ。13は脚裾部で端部に向かって大きく広がる。14は碗状の坏部をもつもので、脚柱部は手づくねで坏部に黒斑をもつ。製塩土器の可能性もある。15～17は器台の脚裾部である。いずれも器壁を薄く仕上げる。18は土師器坏身である。第78図4はガラス管玉で、色調はスカイブルーである。

10号住居跡(第58図2) 東丘陵の西側端部に位置する非常に残りのよい住居跡であるが、西側は調査区外にのびる。現存で南北3.30m、東西3.06mを測る。

出土遺物(第59図19～23、第77図4・10) 19は甕の上半部で頸部に稜をもつ。外面口縁部から胴部にかけてススが付着する。20・22・23は甕の底部。いずれも平底である。21は高坏の脚部で脚柱部がやや膨らむ。第77図4は磨石で、13は土製丸玉である。

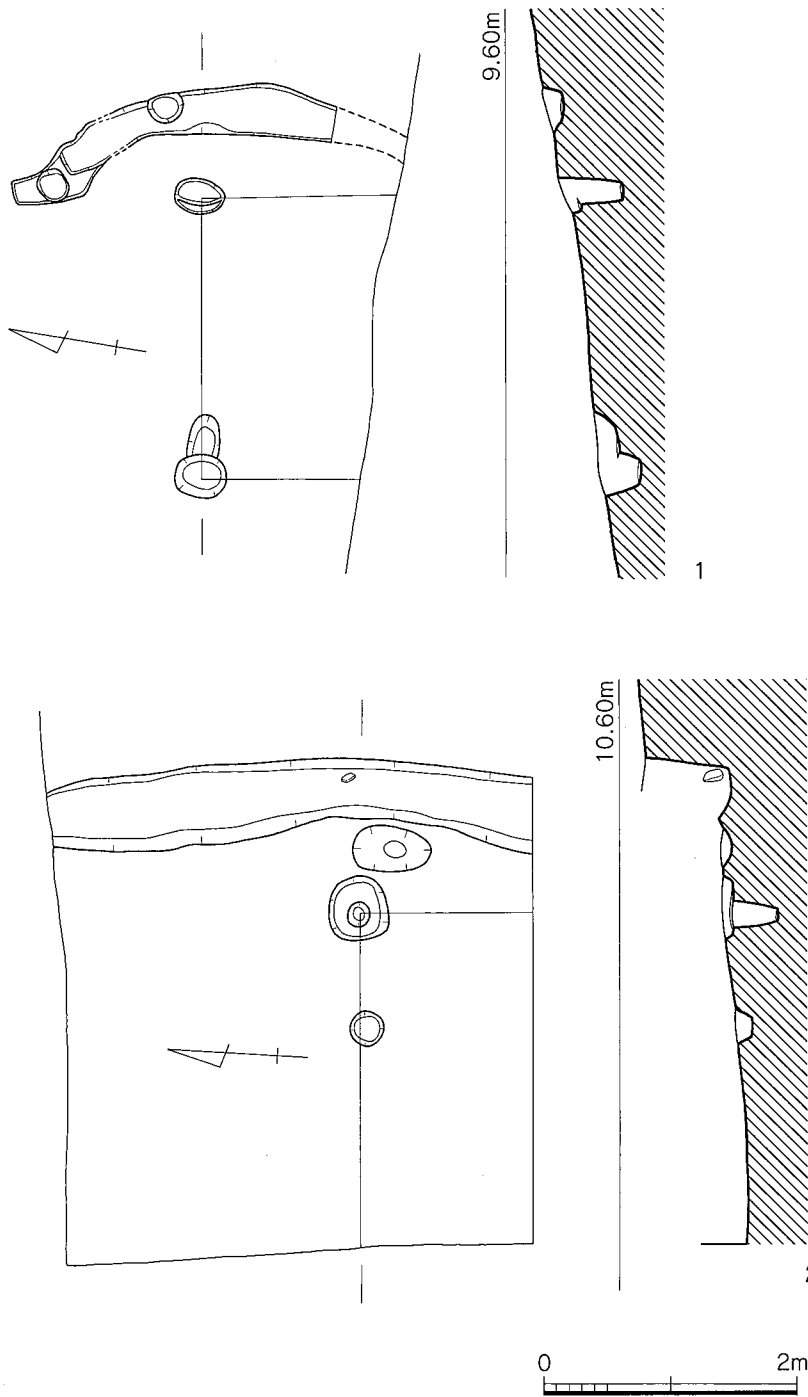
11号住居跡(第58図2) 10号住居跡の南側に位置する住居跡である。平面プランからは10号住居跡の続きになると思われたが、床面のレベルが全く異なっており、別の住居跡とした。

出土遺物(第59図24～28) 24～26は底部である。25は外面に黒斑をもつ。27は須恵器の蓋坏である。円形つまみのみの破片である。28は土師器の坏身である。

12号住居跡(第58図1) 調査区東丘陵の西端部に築かれた住居跡で9・10号住居跡に切られ、西側は調査区外にのびる。非常にのこりが悪い住居跡であるが遺物は比較的多く出土している。

出土遺物(第59図30～37、第60図1～8) 第59図29は丸みをもつ複合口縁壺である。30は長胴甕の上半部である。頸部の締めりは緩いが内外面ともに稜が入る。31～37は底部である。31と34は凸レンズ底であるが、それ以外は平底である。第60図1～3は底部である。1は凸レンズ底で、2・3は平底である。4は碗である。器壁を薄く仕上げ、胴部外面に黒斑をもつ。5は鉢である。丸底で、内面にコゲが付着する。6はミニチュア土器である。平底の甕であろう。7は蓋の上半部か。頂部はくぼみ、外面にはススが付着する。8は器台の脚裾部で、外面にタタキを施す。

13号住居跡(第61図1) 緩斜面に築かれた住居跡であるが削平を受け、住居跡外をめぐる溝と支柱



第61図 III区13・14号住居跡実測図(1/60)

穴2つのみ確認された。住居跡の南側は調査区の外側に広がる。支柱穴間は2.25mを測る。出土遺物はない。

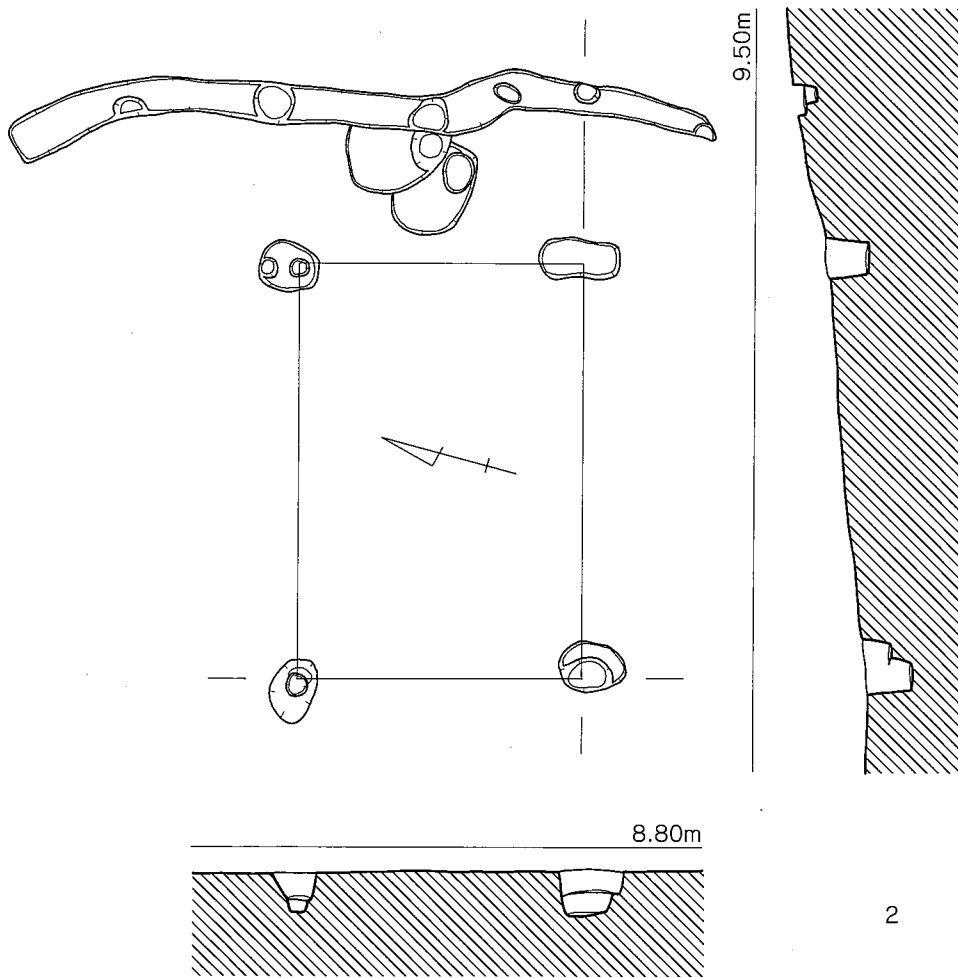
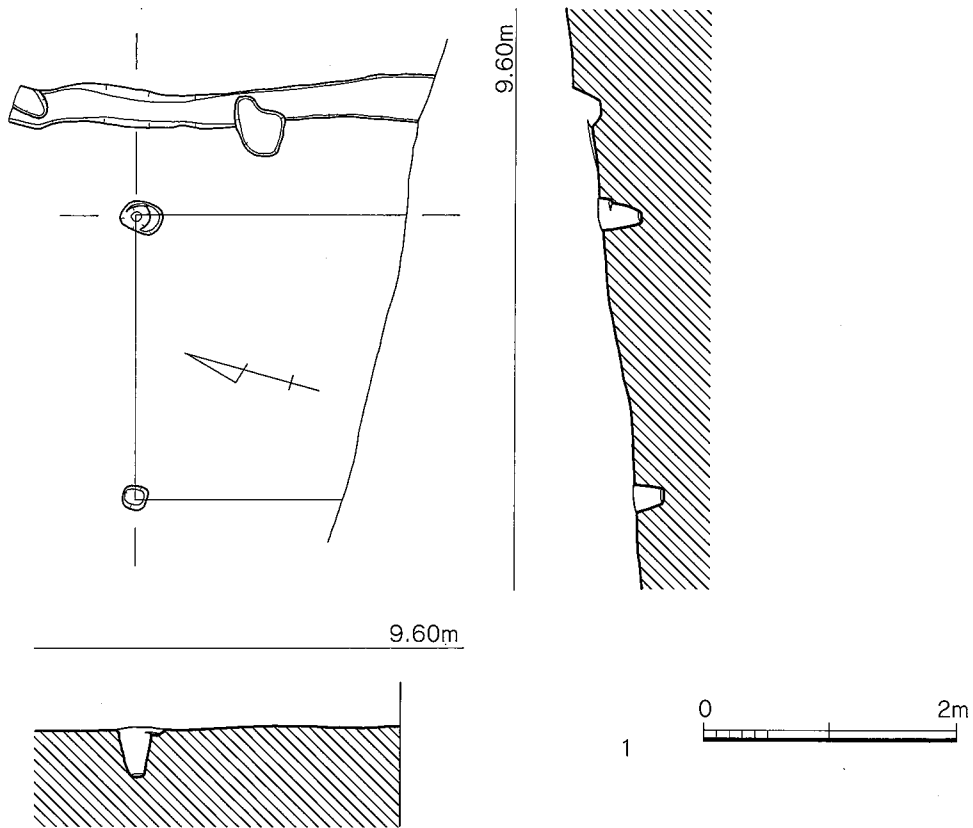
14号住居跡(第61図2) 調査区の北端で確認された住居跡で北側と西側が調査区外に広がり、南側を試掘トレンチに切られる。東丘陵の端に築かれているため、東側壁ののこりはよい。支柱穴は1つのみ確認された。床面には所々焼土がのこる。床面上から磨製石斧が出土した(第77図2)。

15号住居跡(第62図1) 調査区緩斜面の南端に位置する住居跡で、南側半分は調査区外にのびる。住居跡の平面プランは削平のため不明であるが、支柱穴と住居跡外側をめぐる溝が確認された。支柱間は2.25mを測る。出土遺物はない。

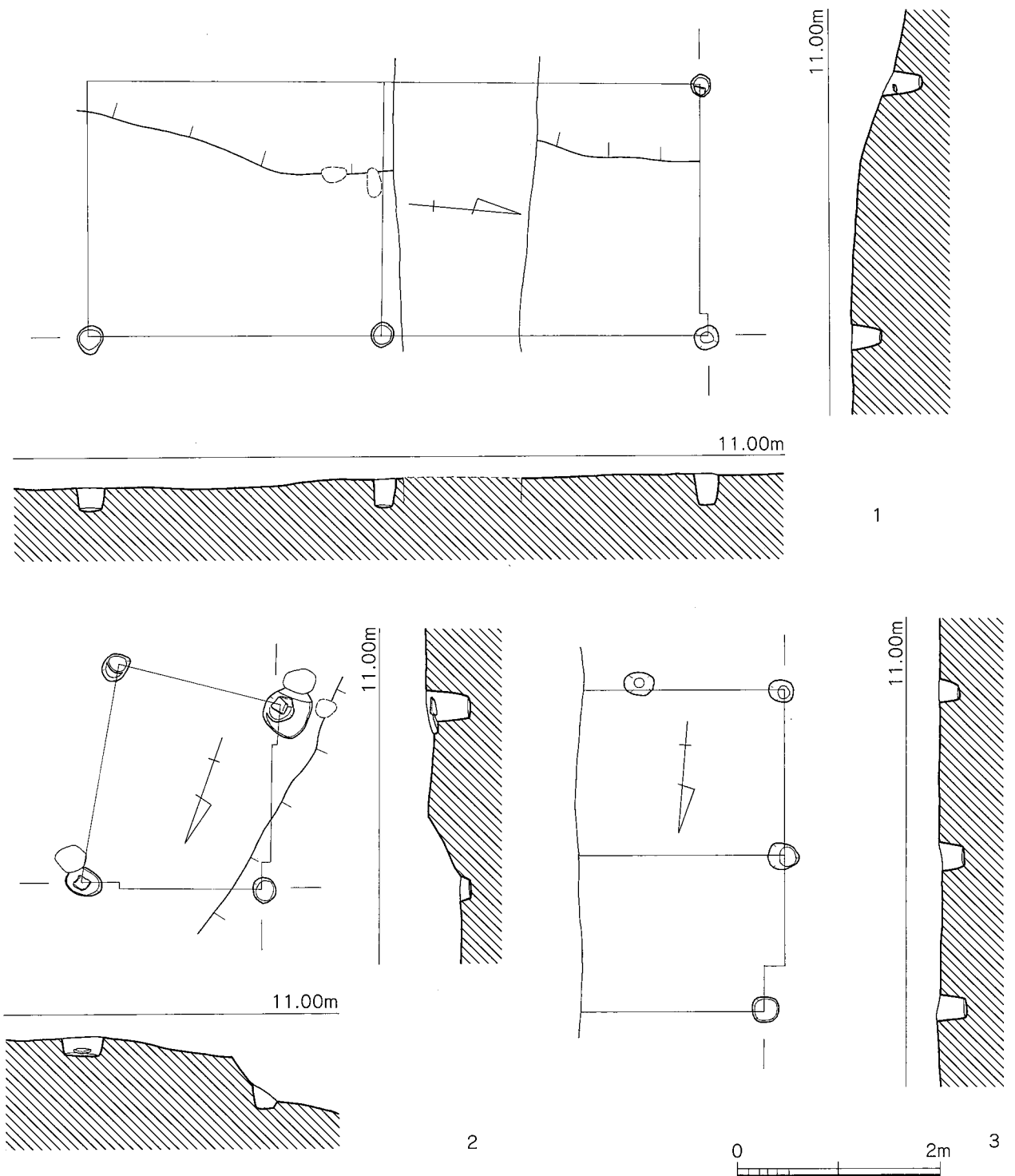
16号住居跡(第62図2) 緩斜面に位置する住居跡で本来7号住居跡と重複するが削平により平面プランが分からなくなっている。支柱穴4つと住居跡の西側をめぐる溝のみ確認されている。支柱間は3.30×2.40mで平面プランも東西に長軸をもつ長方形の可能性はある。出土遺物はない。

(3) 掘立柱建物

1号掘立柱建物(第63図1) 調査区東丘陵部北側と谷に向かう緩斜面の境に位置する1間×2間の掘立



第62图 III区15·16号住居跡実測图(1/60)



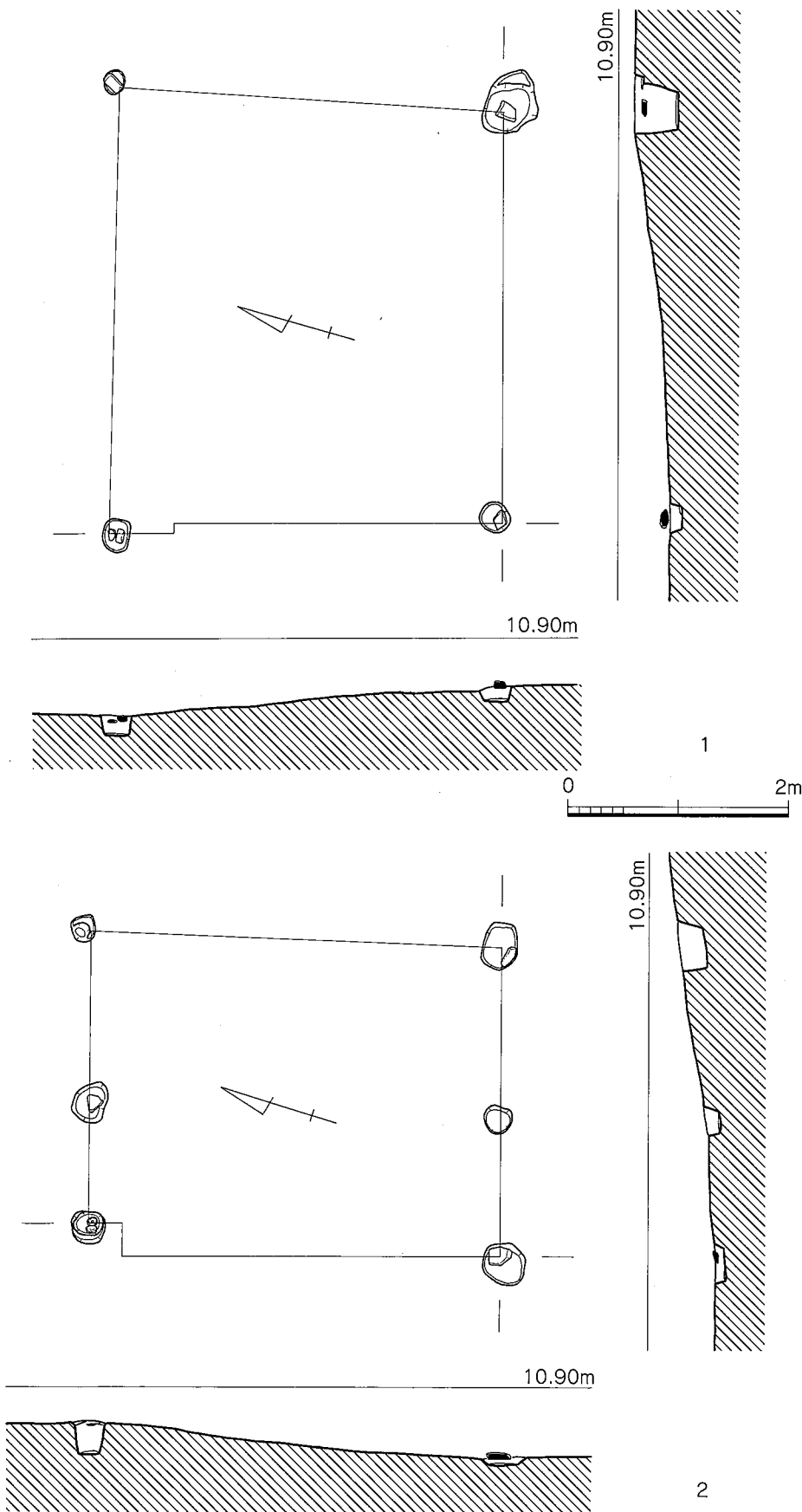
第63図 III区1~3号掘立柱建物実測図(1/60)

柱建物で2.47×6.08mを測る。斜面側の柱穴は削られて消失している。いずれの柱穴も径が小さく中世の掘立柱建物の可能性が高い。

2号掘立柱建物(第63図2) 調査区東丘陵部北側と谷に向かう斜面の境に位置する1間×1間の掘立柱建物で1.88×1.82mを測る。平面プランはややいびつであるが、柱穴に礎石をもつものがある。出土遺物はない。

3号掘立柱建物(第63図3) 調査区東丘陵上に位置する2間×1+α間の掘立柱建物で、3.19×1.79mを測る。柱穴の径が小さいので中世の掘立柱建物か。出土遺物はない。

4号掘立柱建物(第64図1) 調査区の東丘陵部に位置する掘立柱建物でそれぞれに礎石を1・2



第64図 III区4・5号掘立柱建物実測図(1/60)

個もつ。1間×1間で、3.73×3.49mを測る。柱穴の径は小さいものが多く、中世の掘立柱建物と考えられる。

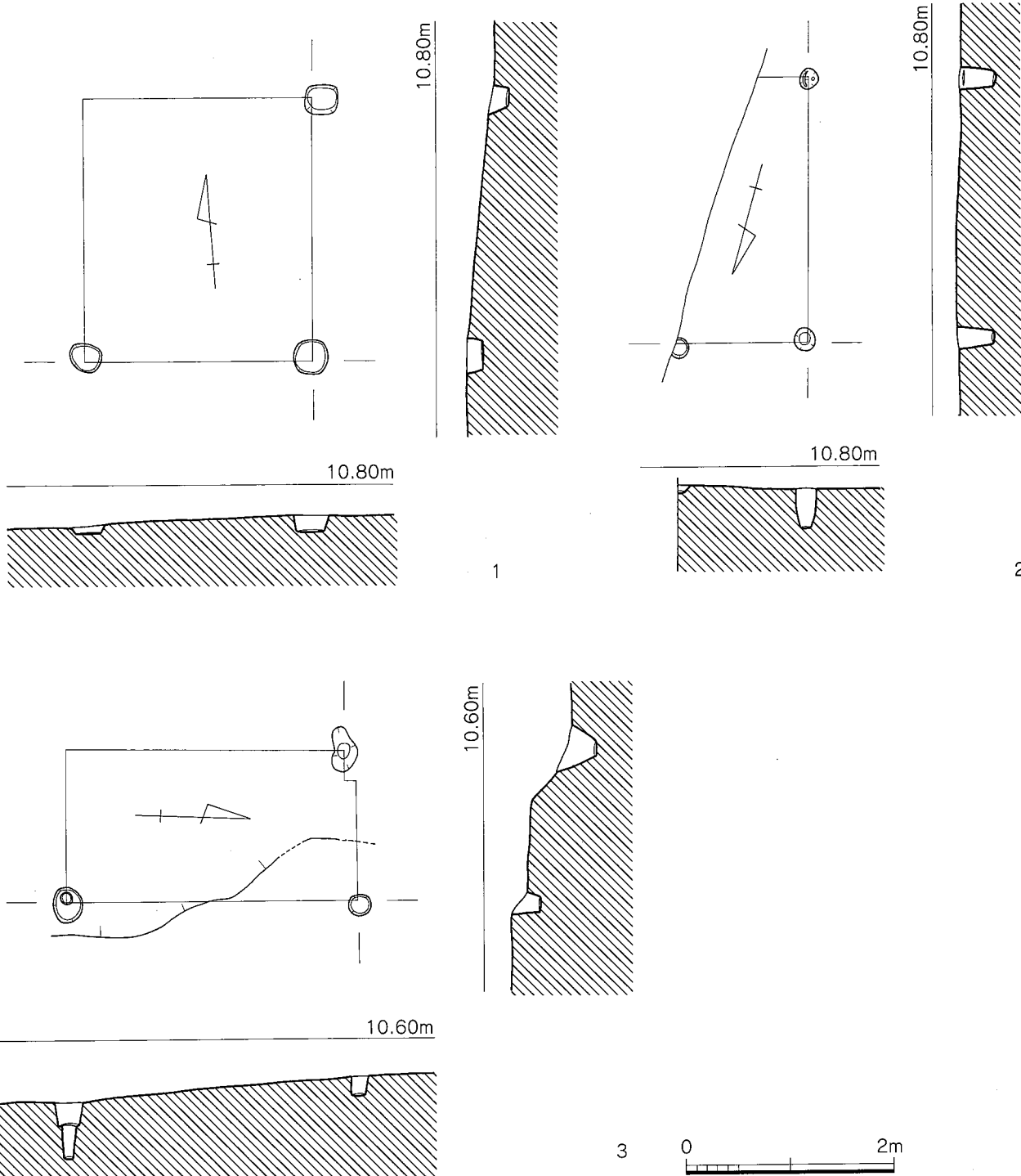
出土遺物(第60図9) 9は甕の口縁部である。

5号掘立柱建物(第64図2) 調査区の東丘陵部に位置する1間×2間の掘立柱建物で3.88×2.83mを測る。ピット25からは土師皿が3点出土した。

6号掘立柱建物(第65図1) 調査区の東丘陵部北側に位置する1間×1間の掘立柱建物である。2.17×2.53mを測り、南北方向に主軸を持つ。柱穴の深さはいずれも15m程度とのこりが悪い。遺物は出土していない。

7号掘立柱建物(第65図2) 調査区南側の丘陵上に位置する掘立柱建物で南東部は調査区外にのびる。1間×(2+α)間と思われ、確認される範囲で2.47×1.19mを測る。柱穴は径が小さいことから中世の掘立柱建物の可能性がある。出土遺物はない。

8号掘立柱建物(第65図3) 調査区南側の丘陵から斜面への変換点に位置する掘立柱建物で、南北に長軸をもつ。1間×1間の1.49×2.83mを測る。南西隅の柱穴はほかの遺構に切られており確認できなかった。出土遺物はない。



(1) 土坑

第65図 III区6~8号掘立柱建物実測図(1/60)

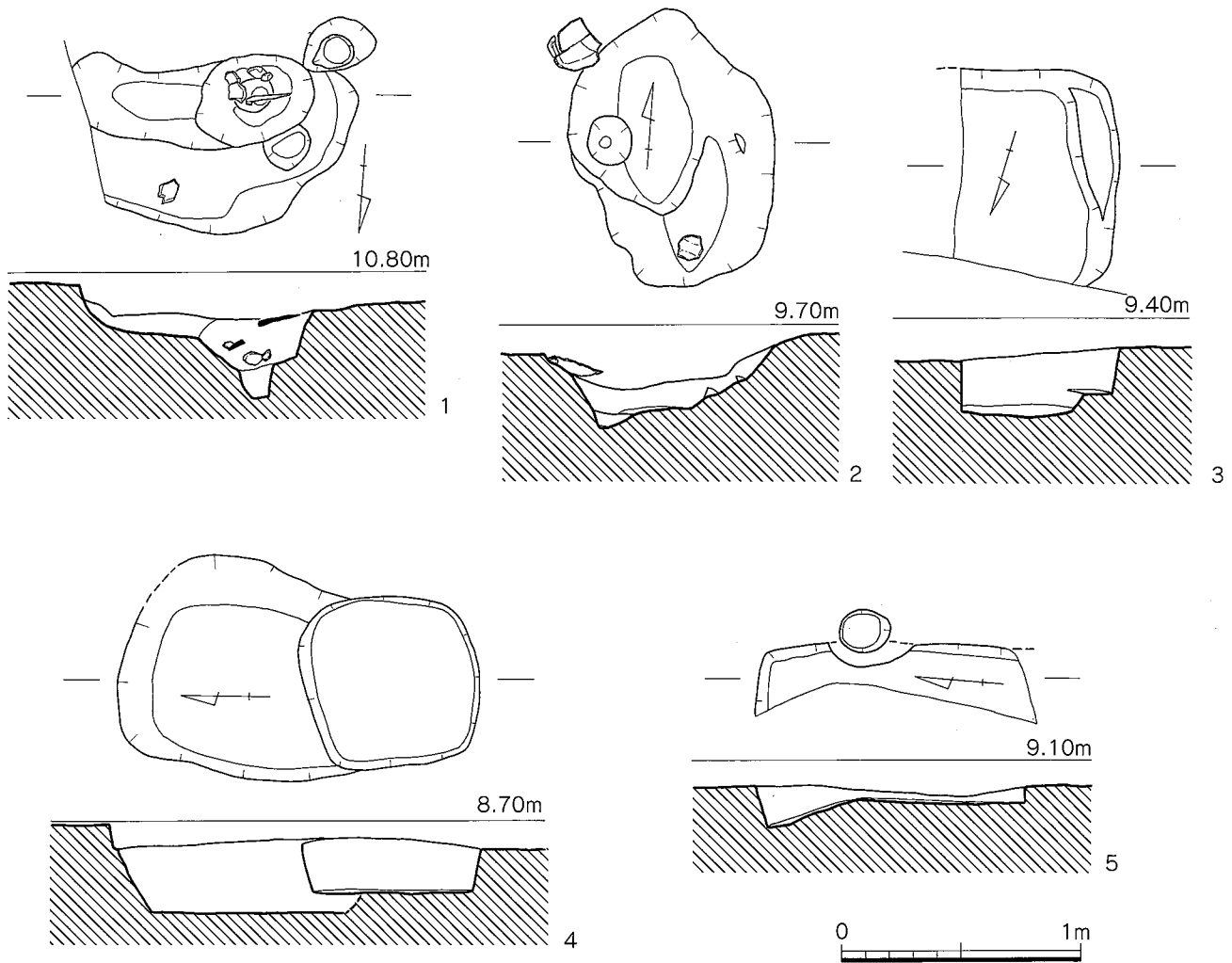
1号土坑 欠番である。

2号土坑(第66図1) 調査区東丘陵上に位置する土坑で長軸0.97m、短軸m、深さ0.34mを測る。西側には一段深くなった落ち込みがあり、その中から石鍋片2、短刀が出土する。また、2号土坑のやや北側からも石鍋片が出土するが同一個体ではない。

出土遺物(第77図9・10、第78図9) 第77図9・10は石鍋片である。両者は近くから出土したが接合しない。第78図9は短刀である。先端部と茎端部を欠くが、19.4cmを測る。

3号土坑(第66図2) 調査区南側の緩斜面上に位置し長軸1.16m、短軸0.87m、深さ0.29mを測る。土坑西肩には土器が存在する。埋土中から有茎の銅鏃が出土した。

出土遺物(第78図13) 弥生土器と銅鏃が出土している。第78図13は銅鏃である。茎端部を欠くが全長3.35cmを測る。茎の側面には研磨痕がない。

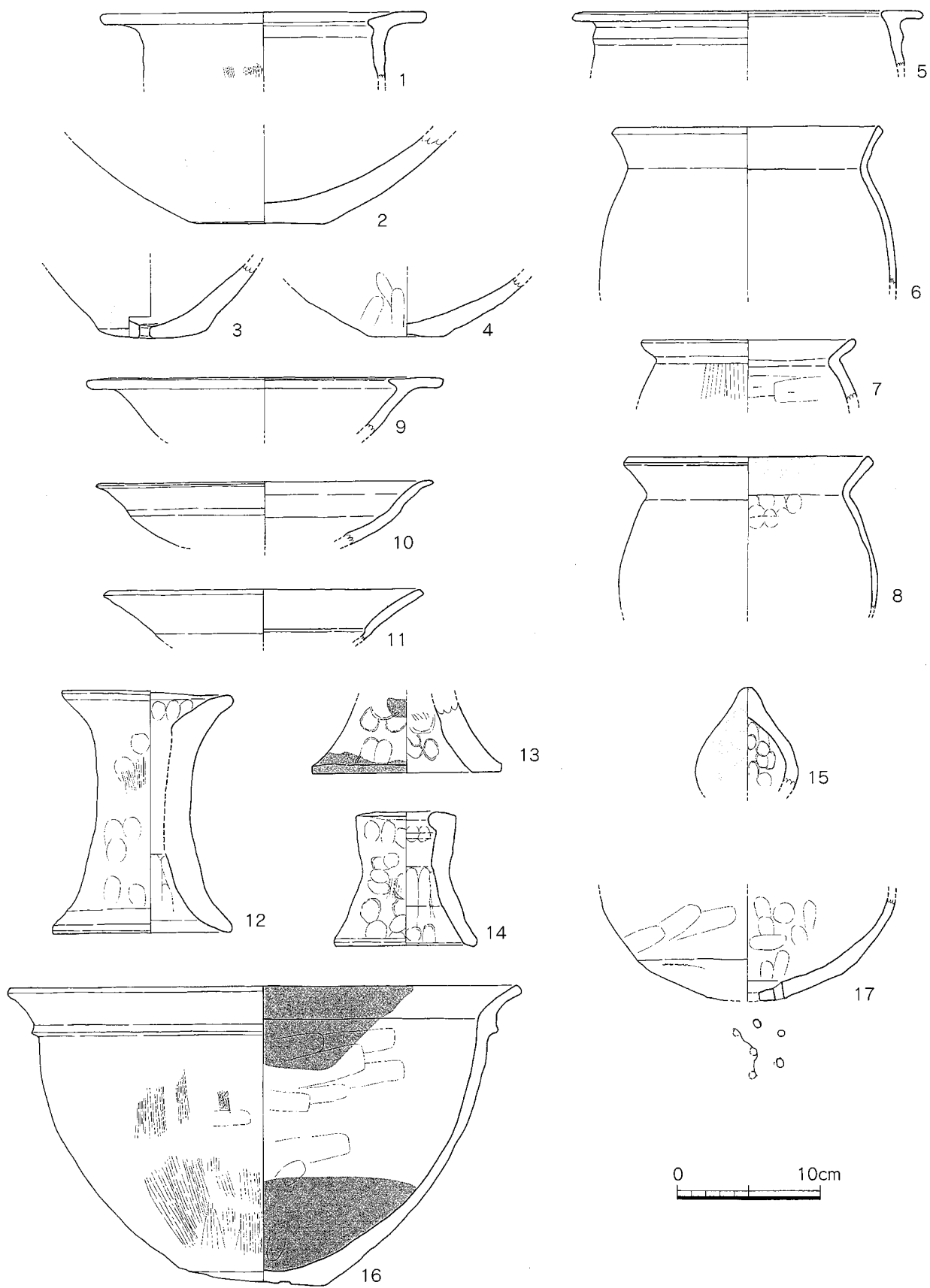


第66図 Ⅲ区2～4、6～8号土坑実測図(1/30)

4号土坑(第66図4) 緩斜面の裾に位置する土坑で8号土坑に切られる。主軸を南北にもつ長軸(0.77+ α)m、短軸0.92m、深さ0.29mを測る。底は平底である。小さな土坑であるが遺物が多く出土する。

出土遺物(第67図、第77図19) 1はやや跳ね上がる鋤先口縁をもつ壺である。2～4は底部である。2は大型壺の底部で器壁も厚い。3は底部穿孔があり、外面に黒斑をもつ。穿孔は焼成前に外側から施される。4は壺の底部か。5～8は甕の上半部である。5の口縁部下に低い三角突帯がめぐる。6は長胴甕の上半部である。頸部は緩くしまるが内外面ともに稜が入る。7は外面にハケメ、内面にヘラケズリを施す。8は長胴甕の上半部である。口縁端部は肥厚し、内面に黒斑をもつ。9～11は高坏の坏部。9は鋤先口縁の高坏で内外面ともに丹塗りである。10・11は口縁が反転しつつ立ち上がる高坏である。11がより直線的な口縁である。12～14は器台である。12は器壁が厚く、しまりがない。13は脚裾部で外面にススが付着する。14は小型の器台で、口縁部が内面にせり出す。15は水玉形の土製品である。鐸形土製品の一種か。類例に北九州市小倉南区長尾小西田遺跡出土品がある(前田編2001)。16は大型の鉢で、底部は不安定である。内面の口縁部にコゲが、底部にススが付着する。17は丸底の底部である。1/3ほどを欠く資料であるが、穿孔が6個確認される。本来は7孔か。孔径は0.8～0.9cmで断面円筒状である。甗として用いられたものか。第77図19は有溝石錘である。

5号土坑(第69図) 調査区の南側、西側の谷に向かって降る緩斜面で確認された大型の土坑である。平面形態は長楕円形で長軸3.18m、短軸1.31m、深さ0.28mを測る。遺物は西側の上層部に集中している。



第67图 III区4号土坑出土遗物实测图(1/4)

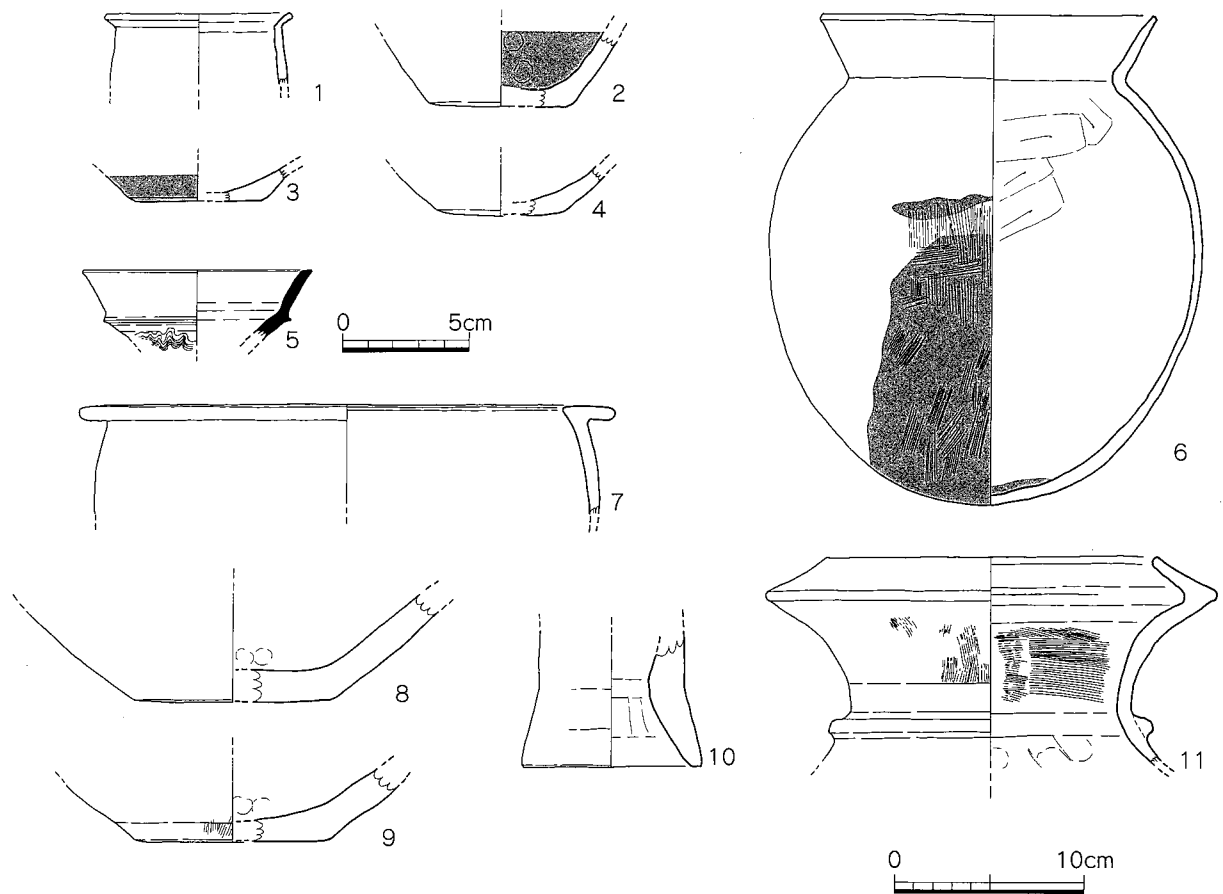
出土遺物(第70・71図、第78図2・5・15)第70図1は甕の上半部で外面にハケメを施す。2～8は底部である。2は径が小さく上げ底である。3～6は平底で4～6の外面にはススが付着する。7・8は凸レンズ底で8の外面に黒斑をもつ。9はミニチュア土器の甕である。丸底で外面に黒斑をもつ。10は大型の甕の口縁部である。口縁端部は丁寧なナデを施し、頸部には方形突帯がめぐる。11は図上で完形に復元される甕である。頸部のしまりは強く、口縁は外反しながら立ち上がる。内面にヘラケズリ、外面にハケメを施す。胴部～底部の外面にはススが大量に付着する。底部は丸底である。12は甕の上半部で、口縁部が肥厚する。13は甕の上半部である。頸部でしまり、口縁部が緩く開きながら立ち上がる。端部の調整は甘い。胴部外面に黒斑をもつ。14は図上で完形に復元される甕である。口縁部は緩く開き端部の調整は甘い。張りのない胴部から底部に至る。底部はやや尖る。外面の胴部から底部かけて黒斑がひろがる。15は甕の上半部で短い口縁部をもつ。端部の調整は丁寧で、口縁部付近に黒斑をもつ。16も甕の上半部で口縁部が肥厚する。口縁部から胴部にかけてススが付着する。17は小型の甕である。平底で胴部最大径が中位にある。18は丸底壺である。外面はハケメ、内面はヘラケズリを施す、底部は丸底で肥厚する。口縁部は緩く内湾しつつ立ち上がるが、端部の調整は甘い。19は小型丸底壺で内外面ともに整形が甘く、胴部最大径が中位にある。20はコップ形の土器である。底部を欠くが丸底であろう。手づくねで成形され、口縁は少し開く。第71図1～3は高坏の坏部である。1は深みのある坏部で全体的に丸みを帯びる。2は内面にハケメを施す。3は浅い坏部で口縁部が直線的に広がる。4は高坏の脚柱部である。5・6は高坏の脚部である。いずれもやや膨らむ脚柱部をもち、脚裾が横に広がる。7は高坏の脚裾部か。若干内湾しつつ立ち上がり、外面に黒斑をもつ。8は焼成前穿孔をもつ鉢である。外面の大部分にススが広がるが、孔の中には付着しない。穿孔は内から外へ開けられる。内面の口縁部付近にはハケメ、底部付近にはヘラケズリを施す。市内の類例に井原塚廻遺跡2号住居跡出土例(林編1992)がある。9～18は碗である。9～12は底部を欠くが、いずれも丸底であろう。10の口縁部は反転させる。13は大型の碗で胴部外面にハケメ、底部外面と内面にヘラケズリを施す。外面の底部には赤変を囲うように黒斑がある。14・15は丸みが強い碗である。いずれも肉厚で黒斑をもつ。16・17は口径がやや大きい碗である。いずれも器壁を薄く仕上げ、黒斑をもつ。18は小型の碗である。19は底部であるが、手づくねで成形されており、ミニチュア土器の可能性もある。20は陶質土器片である。おそらく壺の底部付近であろう。16cm×10cmを測るがゆがみが大きい。精選された胎土を用い、表面は青灰色、断面はにぶい赤色を呈する。外面は縄蓆文のタタキ、内面は丁寧なナデを施す。市内の類例に東下田遺跡出土陶質土器(伊都国歴史博物館2004)がある。第78図2は黒曜石製の打製石鏃で、8は鑿状鉄製品である。15は下部に刃をもつ石器である。上部を欠くがこのこりの側面に丁寧な研磨を施す。

6号土坑(第64図3)調査区緩斜面上に位置する土坑で1号住居跡に切られる。また、北半分は調査区外にのびている。現存で南北0.85m、東西0.67mを測る。

出土遺物(第68図1～5、第78図7)1は小型甕の上半部で内面は黒斑が広がる。2～4は甕の底部である。3は平底で外面にススが付着する。4は凸レンズ底である。5は須恵器の甕である。口縁部下の突帯も鋭いが波状文はやや粗い印象を受ける。第78図7は滑石製白玉である。

7号土坑(第66図6)5号土坑の東に接する土坑で、その大半は5号土坑に切られる。南北1.14m、東西0.22mを測る。

出土遺物(第68図6)6は布留甕の口縁部が直線化した甕である。図上で完形に復元される。胴部



第68図 III区6～8号土坑出土遺物実測図(1/3・1/4)

最大径はほぼ中位にあり、丸みを帯びたまま底部に至る。外面はハケメ、内面はヘラケズリを施す。底部内面にはコゲが付着し、胴部から底部の広い範囲にススが付着する。

8号土坑(第66図4) 緩斜面の裾部に位置する0.75m×0.72mを測る隅丸方形の土坑で4号土坑を切る。

出土遺物(第68図7～11) 7は甕の上半部で、ほぼ水平な口縁部をもつ。8・9は底部で器壁が厚い。甕の底部か。10は器台の脚裾部で器壁が厚い。11は複合口縁壺の上半部である。口縁には明瞭な稜をもち、頸部は短い。頸部突帯の断面は方形で、頸部内外面にハケメを施す。

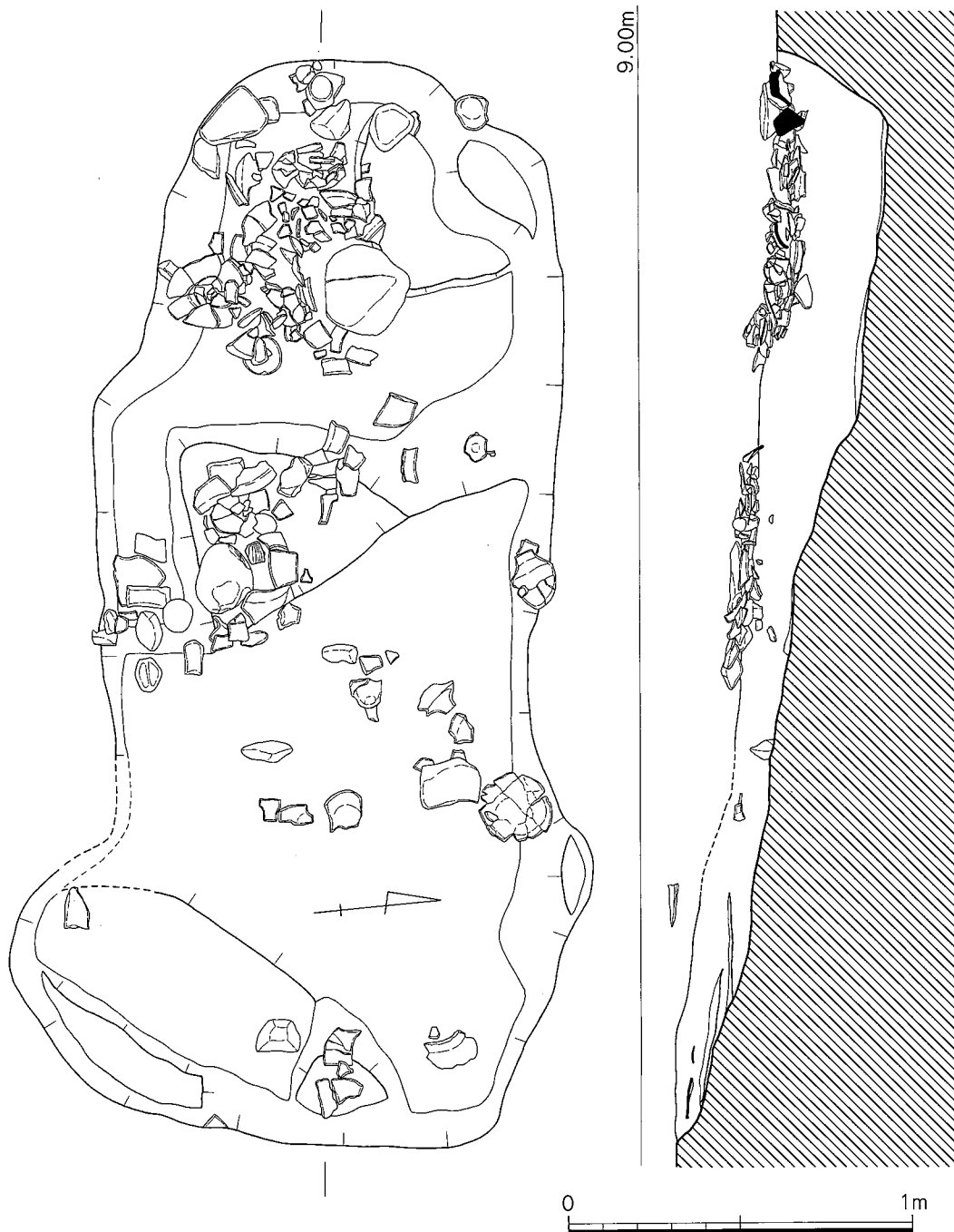
(5) 焼土坑

焼土坑(第72図) 調査区北側丘陵緩斜面に位置する焼土坑である。平面形態は0.64m×0.60mの不整形で、深さ7cmを測る。埋土は炭のみで床面は焼けていない。なお、焼土坑は緩斜面埋土に築かれていることから出土した弥生土器は焼土坑に伴うものではなく、埋土中のものである。

出土遺物(第60図10・11) 10は口縁部下に低い三角突帯をもつ甕である。11はやや跳ね上がる口縁をもつ甕である。

(6) 溝

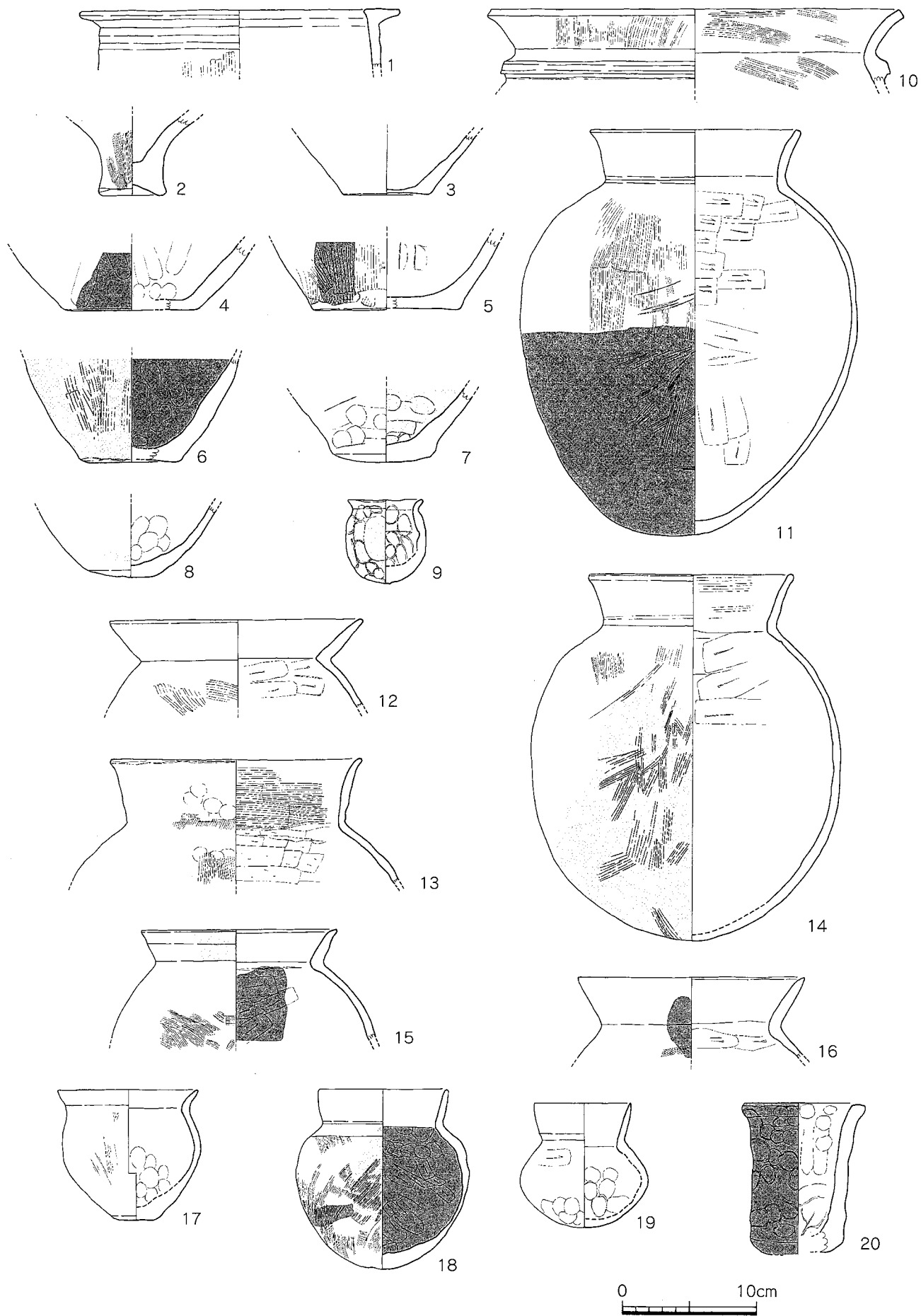
出土遺物(第73図) ここでは溝から出土した遺物を報告する。1～3は1号溝出土品である。1は器台脚裾部で器壁を薄く仕上げる。2は須恵器の坏蓋で復元径15.8cmを測る。3は土師皿である。4は5号溝出土の鉢で口縁端部を丸く仕上げる。外面にスス、内面にコゲが付着する。5は6号溝出土の脚付鍋である。底部はタタキ、内面はハケメを施す。外面にスス、内面にコゲが付着する。6は7号溝出土の甕で口縁下に三角突帯がめぐる。7～9は8号溝出土である。7・8は底部。7の内面にはコゲが付着する。8は壺の底部か。9は甕の上半部で内外面ともにナデで仕上げる。10～16は9号



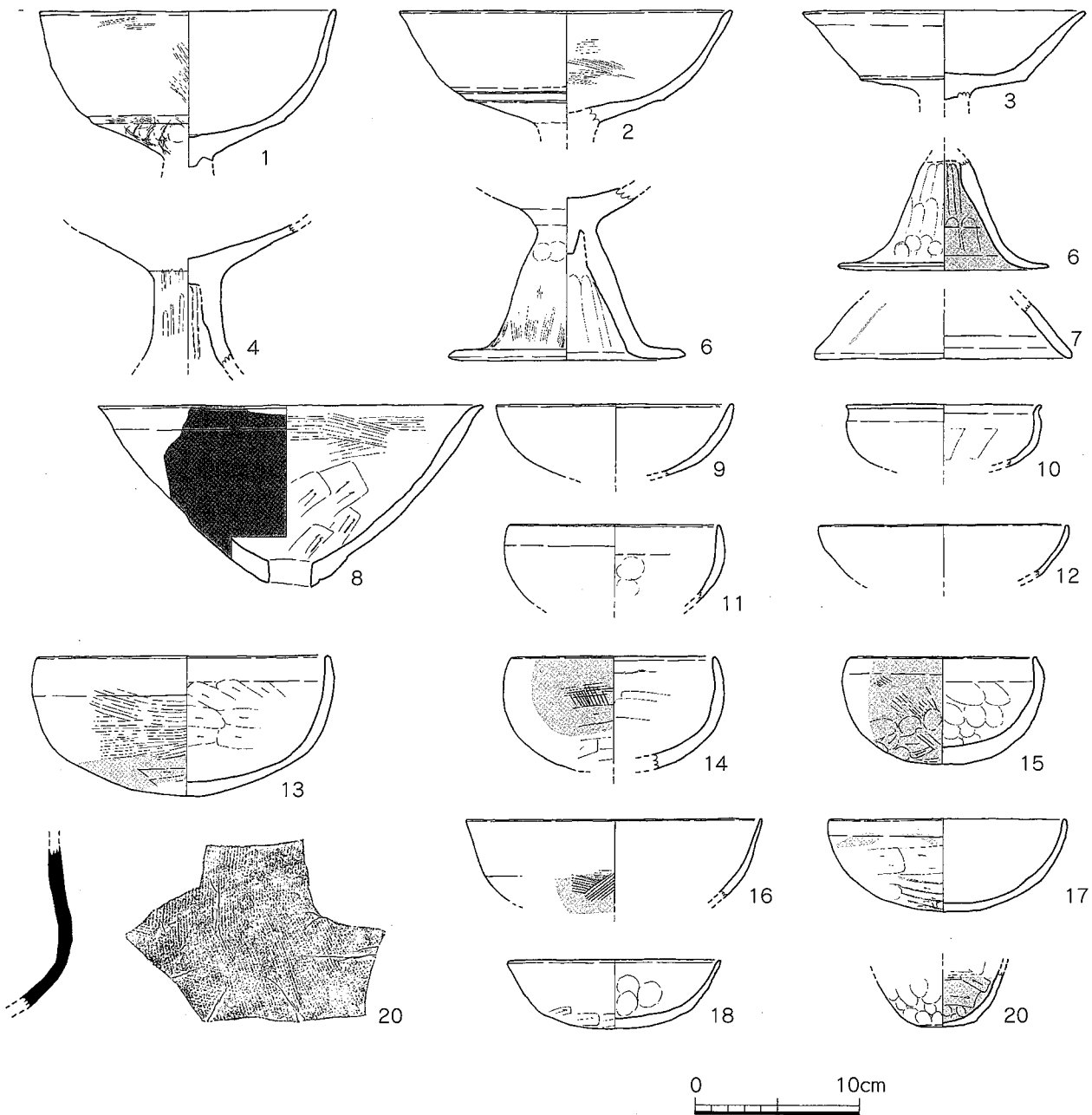
第69図 III区5号土坑実測図(1/20)

溝出土品である。10～13は底部。10の内面にコゲが付着し、12の外表面は黒斑をもつ。14は甕の上半部で外表面にはススが付着する。頸部のしまりはゆるく、口縁が反転しながら立ち上がる。15・16は器台である。15の器壁は薄く、16は肉厚である。17は11号溝の甕の底部である。18は12号溝出土の底部で外表面に黒斑をもつ。19は16号溝出土の高杯の脚部である。脚柱部は直線的で裾がラッパ状に広がる。20は17号溝出土品で甕の底部である。21～23は20号溝出土品である。21・22は甕の底部で、23は高杯の杯部である。器壁は薄く、反転部に明瞭な稜がある。24は22号溝出土の長胴甕の上半部である。外表面はハケメ、内面にヘラケズリを施し、胴部内面に大きな黒斑をもつ。25～30までは24号溝出土品である。25・27は土師器の坏身で軟質である。27の内表面にはススが付着する。26は須恵器の坏身である。28は低い脚部で、29は器台の脚裾部である。30は復元直径22.8cmを測る。31は28号溝出土の布留甕である。口縁部はやや直線的で胴の張りが強い。外表面の口縁部と胴部下半にススが付着する。

(7) ピット

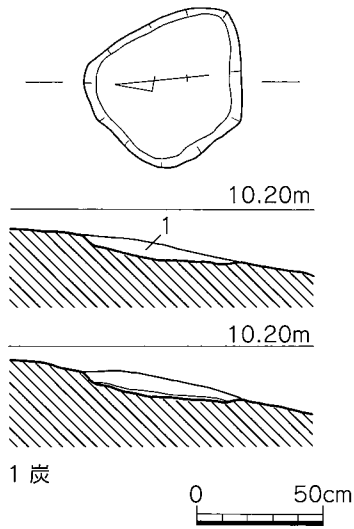


第70图 III区5号土坑出土遗物实测图1(1/4)



第71図 Ⅲ区5号土坑出土遺物実測図2(1/4)

出土遺物(第74・75図)第74図1・2はピット339出土である。1は甕の上半部で、口縁部下にやや垂れた三角突帯がめぐる。2は内外面ともにナデを施す。3はピット201出土で口縁部がやや跳ね上がる。4はピット334出土である。5・6はピット347出土である。5は甕でやや内傾した口縁部をもつ。6は内外面ともに丹塗りである。7・10・15はピット253出土である。7は小型の甕で、10は壺の底部である。15は図上で完形に復元される鉢である。胴部にはハケメを施し、その中位には黒斑をもつ。口縁は立ち上がり、平底である。8はピット3出土の大型の鉢である。9はピット304出土の甕の底部である。11はピット14出土の甕の底部で、12はピット345出土の壺の底部である。13はピット159出土の、14はピット347出土の甕の底部である。いずれも外面にハケメを施す。16・18はピット216出土品である。16は頸部のしまりは弱く、口縁部内面に黒斑をもつ鉢である。18は頸部のしまりが弱く、外面に黒斑をもつ甕である。17はピット243出土の壺の破片である。胴部



第72図 III区焼土坑実測図(1/30)

に焼成前に開けた窓がある。窓を開けたときに端部を指でなで
ており、内外面ともに粘土が盛り上がる。19はピット242出土の
高坏である。器壁を薄く仕上げる。20はピット331出土の甕で外
面下部にヘラケズリを施す。21はピット247出土の器台の脚裾
部である。22はピット299出土の土器の底部である。反転復元
すると径が5.1cmでミニチュア土器の可能性も否定できない。
底部には焼成前穿孔が4つ確認できるが、被熱痕はない。第75
図1・3・5はピット304出土である。1は布留甕の口縁部である。
3は鉢で器壁が薄く、外面に黒斑をもつ。5は小型丸底壺で、口
縁部が肥厚し、外面が黒斑で覆われる。2はピット301出土の高
坏の坏部。全体的に肉厚で口縁端部の調整も甘い。4はピット

149出土のミニチュア土器で手づくね成形である。6はピット131出土の小型丸底壺で胴部が小型
化し、口縁部が発達する。7・8は土師器の坏身である。7はピット30、8はピット41出土。9はピット
112出土の須恵器長頸壺の底部か。10・11はピット41出土の甕で口縁部が肥厚する。12～14は青
磁碗である。12はピット84出土、13・14がピット2出土。15は素焼きの把手でピット216出土である。
16はピット46出土の白磁碗。17はピット115出土の合子の身か。18～25は土師皿である。18がピ
ット46、19がピット119、20がピット5、21がピット76、22・24・25がピット25、23がピット7出土品
である。

(8) 包含層

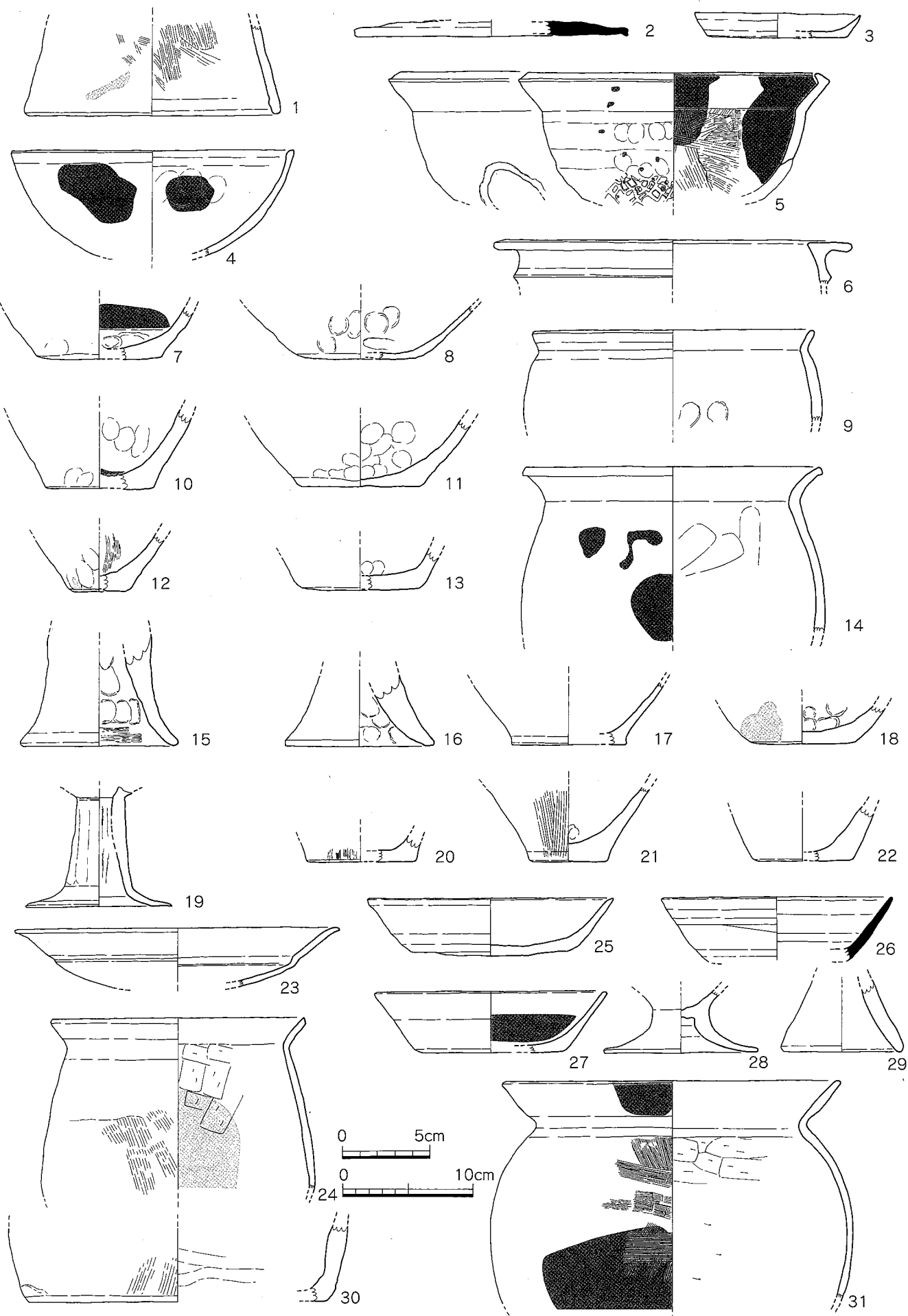
出土遺物(第76図) 1は大型の壺の頸部付近である。頸部には断面方形の二重突帯をめぐらし、
口縁部は開きながら立ち上がる。下部を欠くが張りのない胴部をもつと思われる。2は大型の甕であ
る。頸部に断面方形の二重突帯をめぐらす。口縁端部の調整は丁寧で、内外面ともにハケメを施す。
3は壺の底部である。4は鉢で器壁は薄く、丸底である。底部付近に黒斑をもつ。5は支脚で外面に黒
斑をもつ。内外面ともにハケメを施す。6・7は土師器の坏身である。8・9は青磁の碗。9はやや後出
する。10は青磁の皿である。脚台端部は露胎である。

(9) 石器・鉄器・土製品(第77・78図)

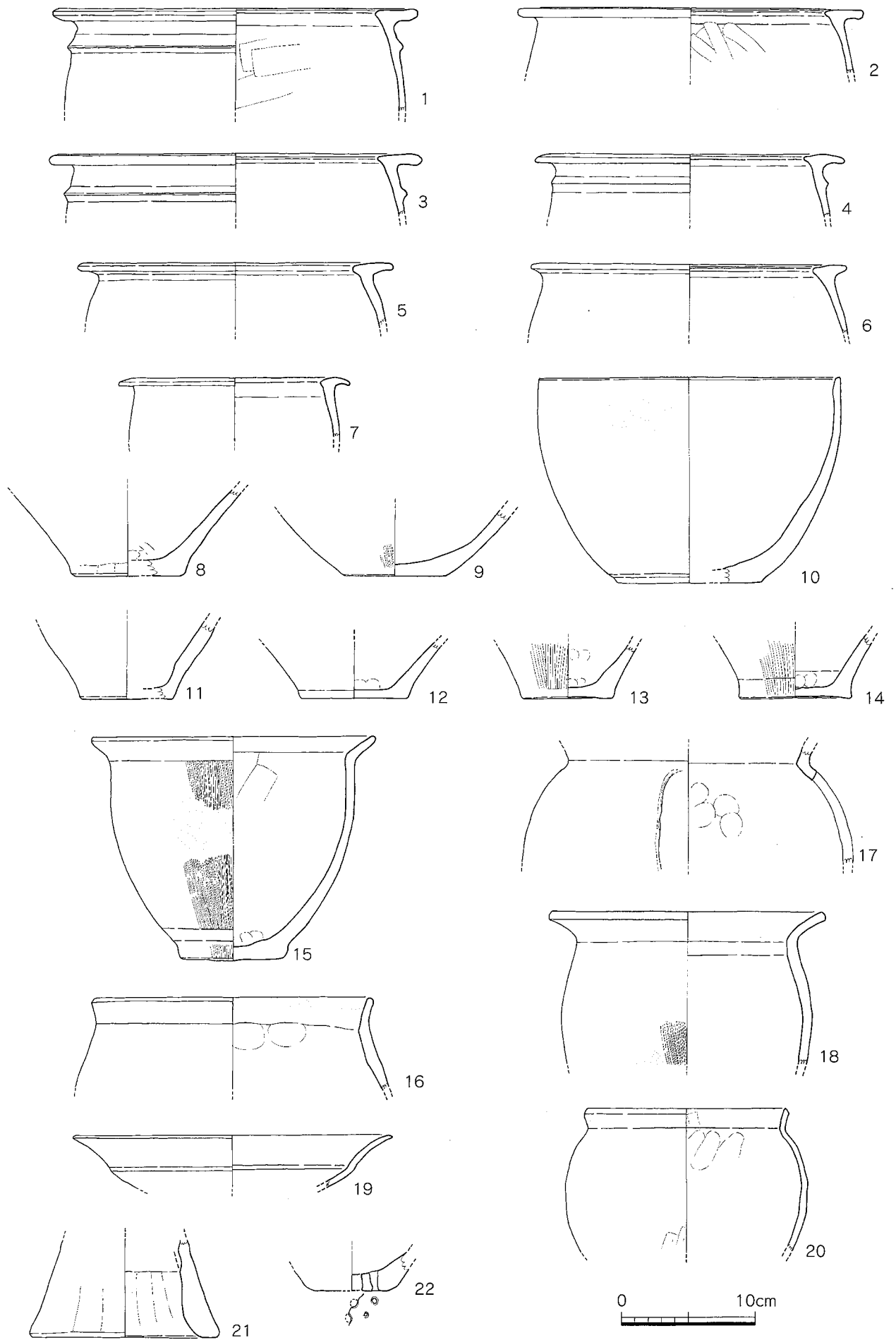
第77図1は遺構面検出の打製石斧である。3は24号溝出土の砥石で、5はピット216出土の砥石
である。6は包含層出土の土製投弾である。7は表採の磨製石剣か。8は黒色包含層出土の薄手の
紡錘車である。11はピット83出土の石鍋片である。12は包含層出土の滑石石鍋転用の滑石スタン
プである。15・17は黒色包含層出土の筒形土錘と有溝石錘である。第78図3は黒色包含層出土の
黒曜石製打製石鏃である。6はピット243出土の土製勾玉である。10はピット185出土の鉄鏃で茎
部を欠くが状態は良い。11・12はピット310、ピット328から出土した鉄滓である。14は5号溝出土
の近代の軒平瓦片である。瓦当部左側に「今宿三右…」という刻印がある。これは「今宿三右衛門」
であろう。前田時一郎氏によると元禄のころから代々操業し、昭和61年に廃業したとのことである。長
い操業期間のため、生産量も多く、糸島地域で多くみられる刻印である(前田2002)。

【参考文献】

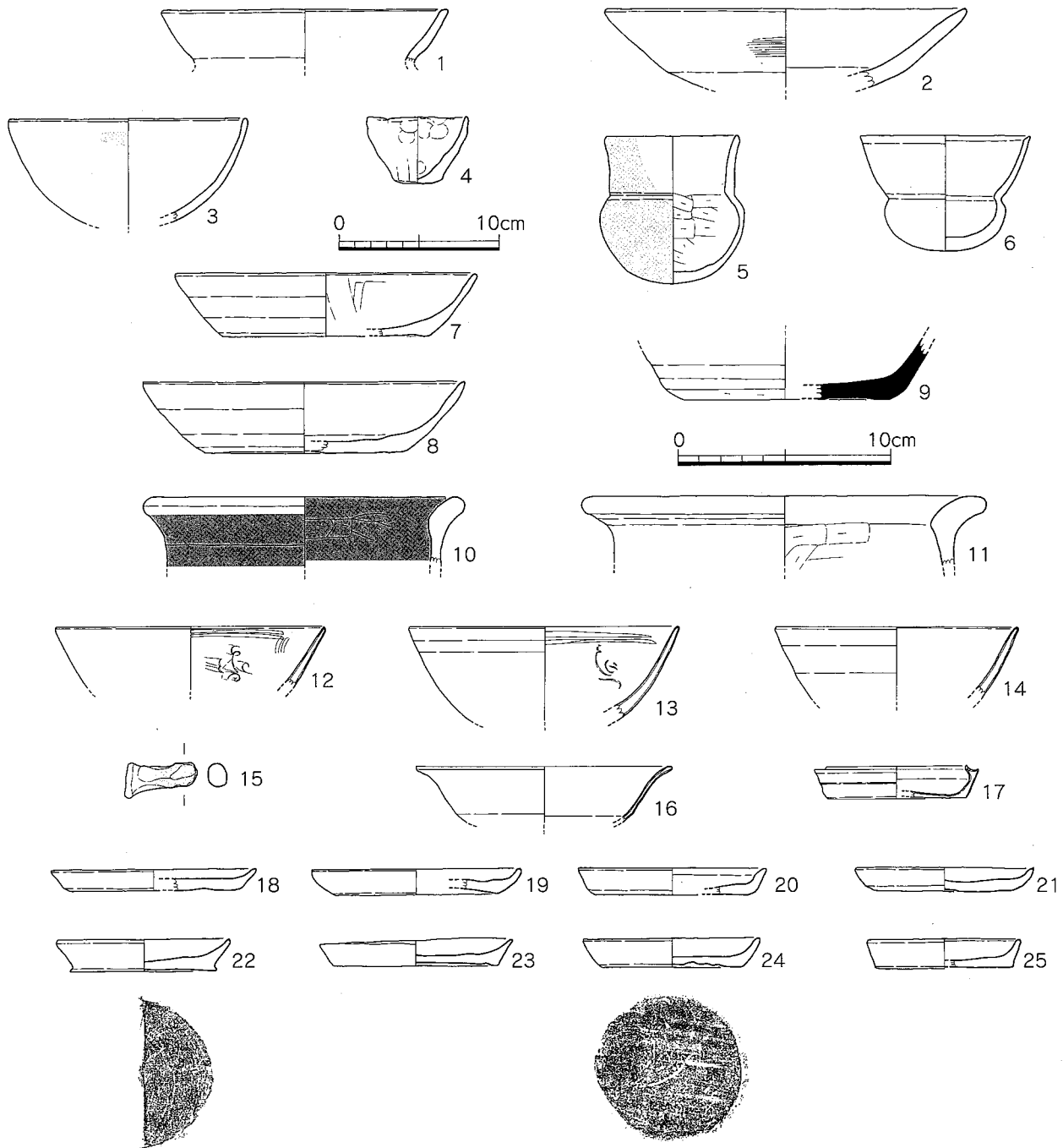
伊都国歴史博物館 2004『伊都国歴史博物館常設展示図録』



第73图 III区满出土遗物实测图(1/3·1/4)



第74図 III区ピット出土遺物実測図1(1/4)



第75図 III区ピット出土遺物実測図2(1/3・1/4)

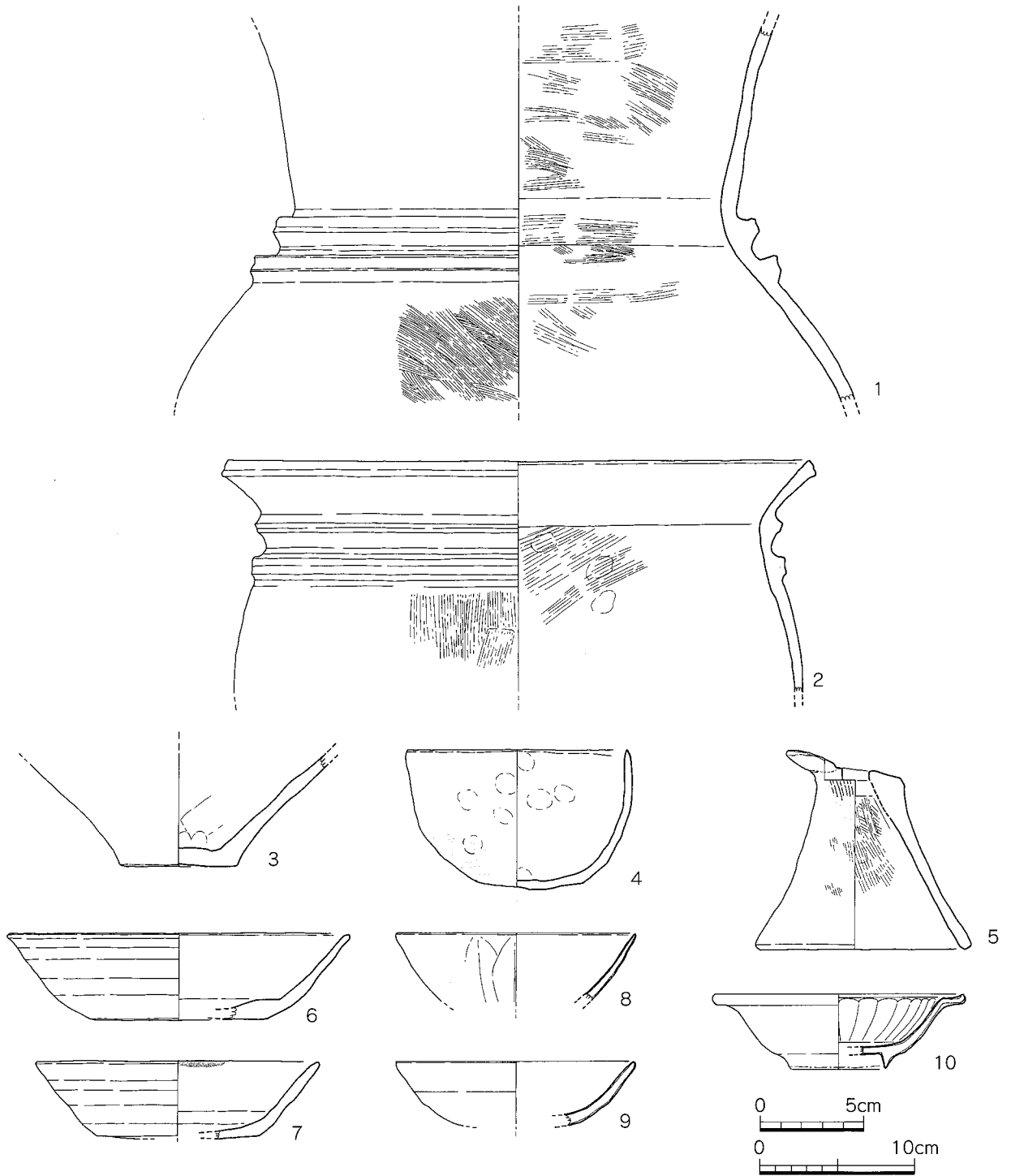
林覚編 1992『井原塚廻遺跡』前原町文化財調査報告書第38集

前田時一郎 2002『街道筋のサンネモン—続編・糸島の瓦業者—』

前田義人編 2001『長野小西田遺跡2』北九州市埋蔵文化財調査報告書第262集

Ⅲ. まとめ

泊リュウサキ遺跡では旧石器時代から近代までの遺構・遺物が確認され、この地が長期間にわたり活用されていたことがわかる。本来ならばそれぞれについてまとめを記述すべきであるが、本報告では(1)穿孔土器について、(2)井戸出土木筒について記述しまとめに変えたい。

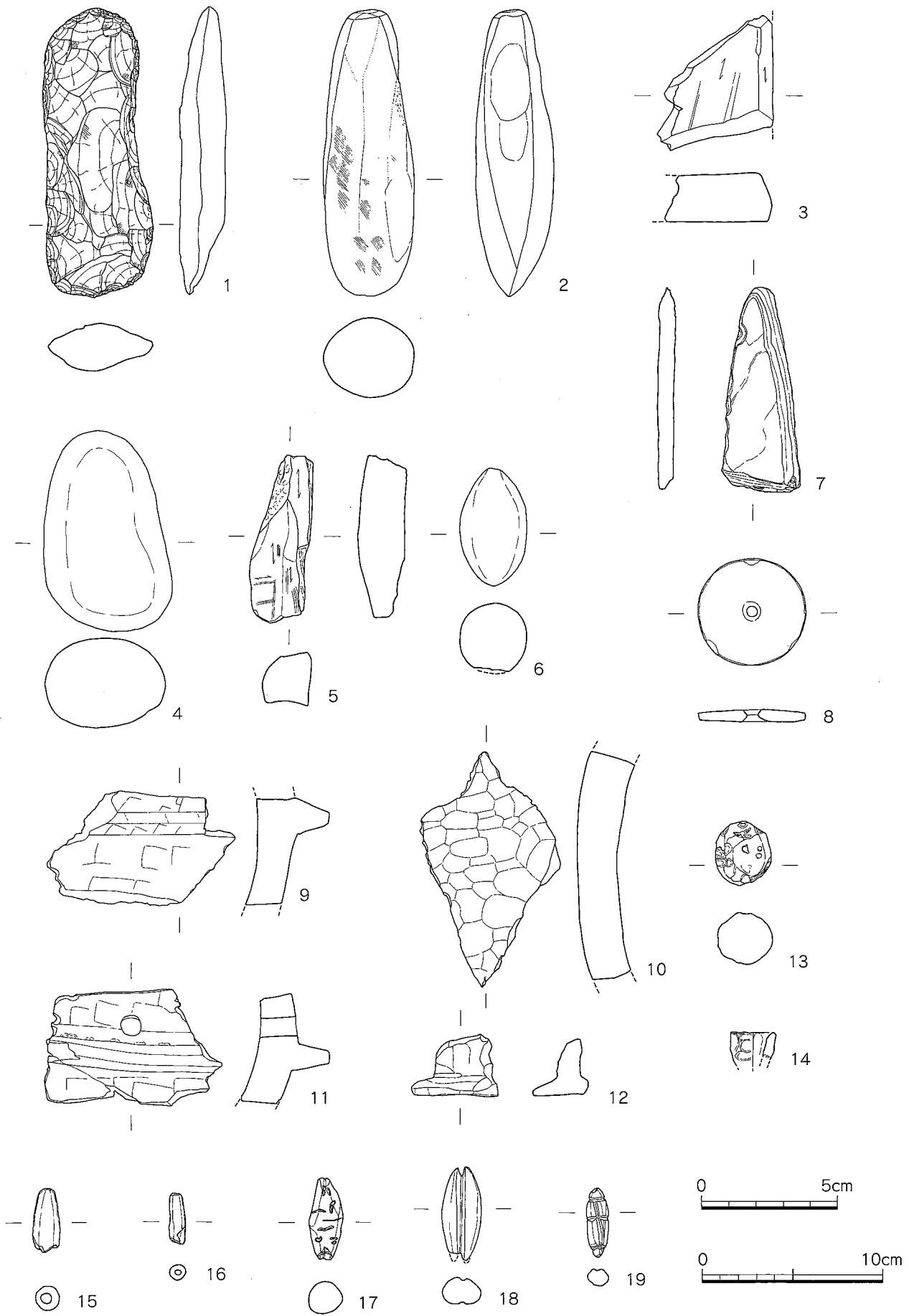


第76図 III区包含層出土遺物実測図(1/3・1/4)

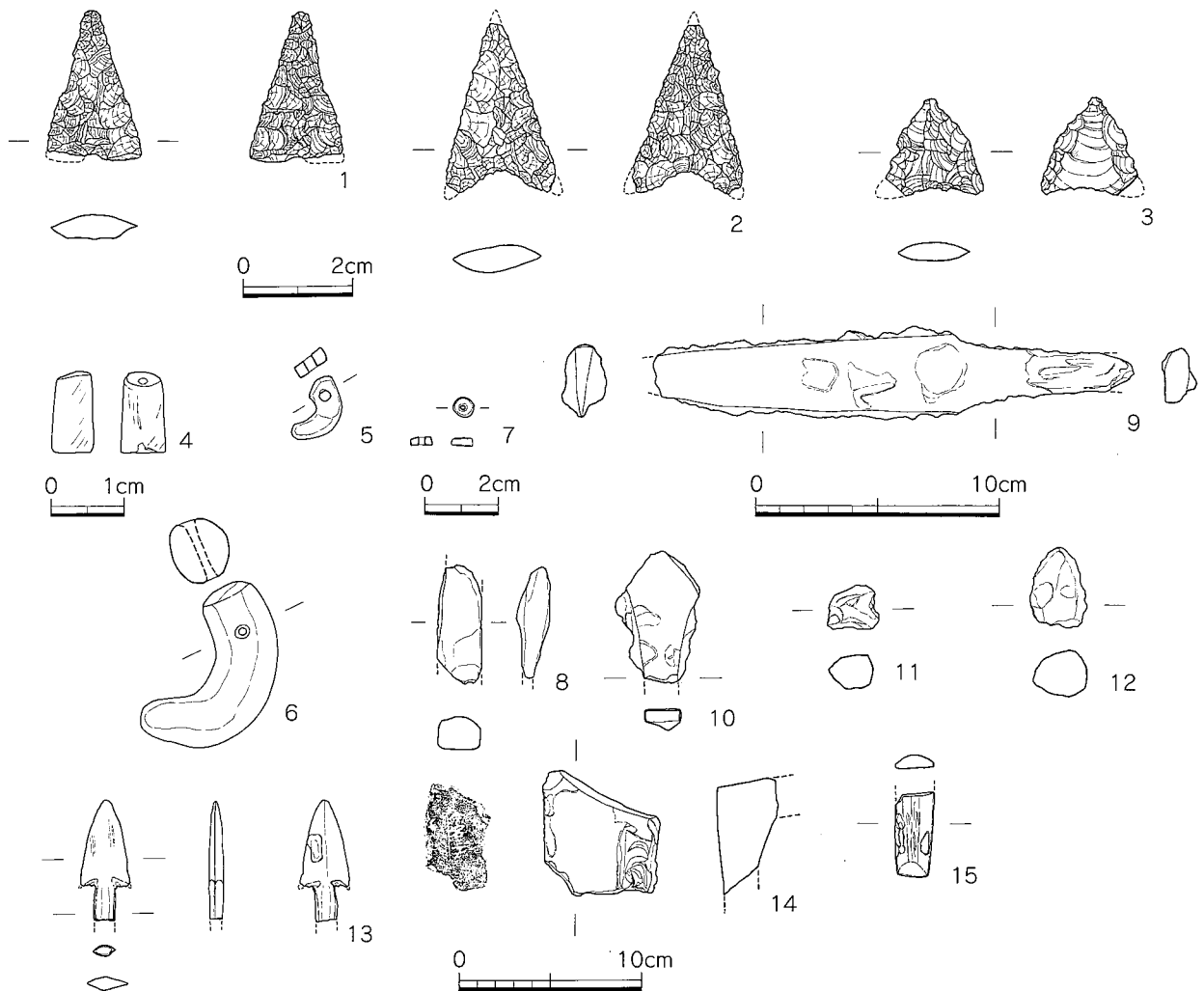
(1) 泊リュウサキ遺跡出土の穿孔土器について

1 穿孔方法と穿孔土器の時期的変遷

穿孔方法には焼成後穿孔では打撃穿孔と敲打穿孔、回転穿孔がある。打撃穿孔は大きな力で一回もしくは少ない回数で孔を開ける方法である。孔形はいびつで、力を加えた反対側の剥離が著しい。敲打穿孔はコツコツと小さい力で回数を重ねて孔を開ける方法である。力を加えた側と反対側に剥離をのこすが、その範囲は狭く、円か円に近い孔形になる。回転穿孔は錐などの工具



第77图 III区出土石器·鉄器·土製品実測图1(1/2·1/3)



第78図 III区出土石器・鉄器・土製品実測図2(1/1・1/2・1/3・1/4・3/4)

具で開けるもので、剥離はほとんどない。孔形は正円が大半である。焼成前穿孔では筒状の工具で底部を貫通させるか、刃物で底部をくりぬくもの、最初から底部をつくらないものがある。また穿孔後に孔の周辺をなでて調整するものと未調整のため孔周辺の土が盛り上がるものがある。孔の数については、1個のものは一孔式、2個以上のものは多孔式とする。

底部穿孔土器の時期的変遷を概観すると、弥生時代前期には甕の焼成後穿孔が多く出土するが、弥生時代中期以降減少し始め、焼成後穿孔された壺が少量出土する。そして鉢の焼成後穿孔が出現する。弥生時代後期の穿孔土器の資料は全体的に少ない。その中で甕・壺の資料は鉢に比べ少ないが焼成後穿孔が古墳時代前期まで認められる。鉢は焼成前穿孔のものが弥生時代後期に少量出土し、弥生時代終末期から古墳時代前期にかけて増加するが、古墳時代中期には減少する。

2 研究略史

底部穿孔土器の研究は樋口清之氏に端を発するが(樋口1929)、その多くは一孔式の底部穿孔土器の用途の追求が主であった。用途としては、主に甕と考えられ、他に濾過器、水切り具などが想定されていた。この研究史の問題点は弥生時代前期に出現する甕の底部穿孔土器から、弥

生時代後期頃に出現し古墳時代中期頃に減少する鉢の底部穿孔土器までを全て同じ用途と想定し、追求している点である。この問題点を指摘したのは岩崎卓也氏で、時期、出土遺構、器種が異なる底部穿孔土器を検討することなく全て同じ用途とする研究に疑問を呈した(岩崎1965)。近年の研究においては、時期を限定して用途を特定する研究もみられる(岡田2003)。筆者も穿孔土器の時期的変遷を概観し、穿孔する土器の器種や穿孔方法を検討した結果、出土する遺構が時期により異なる状況で、底部穿孔土器を全て同じ用途で使用したと判断することができず、岩崎氏と同様の立場をとる。

3 資料の観察

底部穿孔土器はI～III区で出土しており、詳細は本編に記述しているため繰り返さないが器種などをまとめると表の通りになる。今回はII区の土坑、III区の住居跡、土坑出土のものを取り上げる。I区の穿孔土器は谷部包含層より出土のため、III区のピット出土の多孔式のものとは時期が特定できないため除外している。穿孔土器は概ね三時期に分かれる。

	出土遺構	番号	器種	焼成前後	孔数	孔径(cm)
1期 (弥生時代後期)	II区土坑	図28-3	壺	後	一孔	計測不可
		図28-4	鉢	前→後	一孔	計測不可
2期 (弥生時代終末～古墳時代初頭)	III区9号住居	図57-22	鉢	前	一孔	0.9
	III区4号土坑	図67-3	底部(甕か壺)	前	一孔	0.8
		図67-17	底部	前	多孔	0.6～0.7
3期 (古墳時代前期後半～中期時代初頭)	III区1号住居	図52-14	底部	前	多孔	1.5～2
	III区5号土坑	図71-8	鉢	前	一孔	2.4

1期はII区の土坑出土の壺(図28-3)と鉢(図28-4)である。図28-3は焼成後、外側からの打撃穿孔である。図28-4は焼成前に穿孔後、更に焼成後に外側の孔の周辺に敲打を行った痕跡がみられた。時期は若干古くなるが、このような例は福岡市西区今宿五郎江遺跡2次調査SD-100から出土した鉢でもみられる。これは1度、孔径1cmの焼成前穿孔を行った後、0.5cmほど外側の孔壁を削り、孔を広げている。

2期の資料は共伴遺物より弥生時代終末～古墳時代初頭とした。多孔式の甕は主に古墳時代中期頃より広まるが、古いものとしては古墳時代前期の西新町遺跡の例がある。図67-17は更に古い多孔式の甕となる。図57-22は鉢の焼成前穿孔である。柳田康雄氏が外来系A類としている鉢だが(柳田 2002)、北部九州よりも畿内(大阪府池島福万寺遺跡、恩知遺跡、亀井北、亀井南遺跡、京都府芝遺跡)などで多く見られる。図67-3はやや丸みをもつ甕か壺で、底部中央に穿孔されている。この時期の穿孔土器の資料は少なく、ほとんどが鉢の焼成前穿孔で、図67-3のようなものは非常に珍しい。総じて泊リユウサキ遺跡の2期の資料はその前後の時期に比べると孔の径が非常に小さい傾向にある。この3つともに底部の形状は異なるが、焼成前穿孔で孔径が1cm弱という点、穿孔に使用した工具は筒状のもので、片側か両側から穿孔し、孔周辺を調整している点が同じである。

3期は図52-14は平底の多孔式の甕で、時期が近いものとして井原塚廻遺跡や三雲ヤリミゾ遺跡(437番地)にて出土している。図71-8は底部に穿孔を施すというよりも、体部を成形し、最初から底部を作っていない。図71-8のように鉢の焼成前穿孔のものは北部九州では福岡市野方遺跡、入部遺跡、次郎丸遺跡、他に大分県北原遺跡、熊本県方保田東原遺跡でも確認できるが、宮崎県、鹿児島県では未確認である。

4 まとめ

以上、泊リュウサキ遺跡から出土した底部穿孔土器を概観したが、以下のことが明らかになった。

まず、各穿孔土器の孔径である。孔径を表に示したが、一孔式、多孔式関係なく、2期で小さくなり、3期に再び大きくなる。多孔式、一孔式別に見てみると、図67-17は、確認できる孔径3つともに0.6～0.7cmと非常に小さい値を示す。4号土坑の資料と比較的時期に近い資料として、西新町遺跡13次調査出土の多孔式の甗があげられ、その孔径は概ね1cm内である。その一方、古墳時代中期の吉武遺跡から出土した多孔式の甗の孔径は1cm以上であった。一孔式では2期の図57-22、図67-17の時期に近い資料はなく、3期の図71-8に時期に近い野方遺跡、入部遺跡の資料は1cm以上と大きい値をとる。今回の資料をみると、孔径の値が一孔式と多孔式で関連しあっていた可能性は高い。ただし2期の一孔式(図57-22・図67-3)は他の地域の資料数が少ない上、図67-17もほとんど類例がないので更なる検討が必要である。

また、図28-4のような例は、孔の破損か、使用後の破壊を目的としたか、最初に穿孔した際、孔径が小さいために更に広げたことが想定できる。図28-4は孔の破損や破壊も考慮したが敲打によるものなので、その可能性は低い。今宿五郎江遺跡の資料もケズリによるもので破壊によるものとは考えにくく、この2つの資料は当初に開けた孔が小さすぎ、孔を広げるため、焼成後に敲打かケズリを行った可能性が高い。

図67-17は同時期の資料は国内では確認出来ない。一方韓国では多孔式の甗は、平底で孔径が小さいものとしては全羅北道南原郡斗洛里(トランニ)3号墳外部竪穴出土のもの、昇州郡大谷里トロン遺跡20号住居址から出土したものがあり、丸底で孔径が小さいものとしては慶尚南道金海郡府院洞(プウォン)遺跡や固城(コソン)貝塚などから出土したものがある。図67-17は搬入品かどうか確かめるため胎土や調整などを観察したが本遺跡出土の他の土器との明確な差異は認められなく、在地の土器である可能性が高い。以前、武末純一氏が元岡・桑原遺跡で出土した弥生時代終末期頃の格子目タタキの入った器台を分析し(武末1991)、「文化受容の失敗例」と位置づけたことがある。この図67-17もそのように一度流入したが受容されなかったもののひとつの可能性はある。

最後に当遺跡の資料から穿孔土器の研究史上の問題点について考察したい。穿孔土器の研究史の問題点は繰り返すが

①弥生時代に出現する甗・壺・鉢の焼成後穿孔土器が全て同じ系譜にあるのか(岩崎1965)。

②鉢の焼成後穿孔と焼成前穿孔が同じ系譜にあるのか。

③一孔式の焼成前穿孔の鉢と多孔式のものと同じ用途で使用されていたか。

などがある。

まず①については1期に壺と鉢の穿孔土器が出土するが、穿孔方法が異なるため、系譜が異なる可能性が高い。

次に②については現在、弥生時代後期の穿孔土器の資料が非常に少ない状況にあり、弥生時代中期頃に出現する焼成後穿孔の鉢と弥生時代終末期頃に多くみられる焼成前穿孔の鉢が同じ系譜にあるか不明であった。しかし、今回の1期の図28-4のように焼成前穿孔と焼成後穿孔を行っている資料より関連している可能性が高いと考える。また今宿五郎江遺跡の5次調査SD01から鉢の穿孔土器が出土するが、9層の鉢は焼成後穿孔、その上層の10層の鉢は焼成前穿孔であるため、両

者は関連性が高いと考える。なお、岩崎氏は鉢の焼成前穿孔土器は畿内第V様式より出現するとしたが、今宿五郎江遺跡では後期初頭頃には焼成前穿孔の鉢が出現している。この変化が畿内の影響によるものか北部九州独自のものなのか結論付けることができなかった。

問題点の③については直接わかる資料はなかったが、一孔式と多孔式の孔径の変化が同じなので関連している可能性は高い。

なお、本稿では多孔式の焼成前穿孔のものは甑の可能性が高いと考えるが、一孔式の用途は不明のため、甑や漏斗など機能を特定する名称を避け穿孔土器と称した。また、本遺跡から出土した資料、特に2期の資料については事例が少なく、底部穿孔土器の変遷上の空白をうめる重要な資料であるといえる。

(参考文献) 紙幅の都合上、報告書は割愛した。

岩崎卓也 1965「甑小考」『信濃』第18巻第4号

岡田圭 2003「据え置かれた甑形土器の用途について—群馬県における古墳時代後期の例を中心として—」『筑波大学先史学・考古学研究』第14号

武末純一 1991「福岡市元岡遺跡の器台」『交流の考古学』三島格会長古希記念号

樋口清之 1929「底部に一孔を有する弥生土器」『史前学雑誌』第1巻第3号 史前学会

柳田康雄 1998「2 土師器の編年 2九州」『古墳時代の研究』6 土師器と須恵器 雄山閣出版

(2) 井戸出土木簡について

泊リュウサキ遺跡II区井戸から出土した木簡は5点あり、そのうち文字が判読されるものは4点に限られる。この4点はいずれも上端が宝珠状もしくは上部左右に切り込みがあり荷札木簡と判断される。このうち3点に「(白)米五斗」とあり、脱穀され精米された白米に関する記述であることがわかる。1号木簡の「乙阿子」ならびに3号木簡の「三味」は人名と考えられる。このような「人名+物品名+数量」の事例は東大寺横江荘とされる石川県上茶屋遺跡出土木簡の事例があり、ごく身近の人々とのやり取りに用いられたとする見解もある。ただ、泊リュウサキ遺跡木簡からは、ある人物に米を与えたのか、ある人物が米を持ってきたのかどうか判断できない。

なお、これら木簡の出土から何らかの公的施設の存在が想定されるが、泊リュウサキ遺跡では官衙にみられるような企画性に富む建物群が確認されないことや遺跡が糸島水道に面し、そこから枝分かれした谷に隣接することから、米などを集積したり、運び出したりする港湾施設的性格が想定できる。また、泊リュウサキ遺跡の北東側には古代の製鉄遺跡として著名な元岡・桑原遺跡があり、この遺跡との深い関連性は容易に想像がつく。

元岡・桑原遺跡からは古代の生産遺構のほかに木簡が出土しており、今後は元岡・桑原例とも合わせた形で泊リュウサキ遺跡出土木簡の性格付けを行う予定である。なお、本報告における木簡の釈読は水漬状態で保管している木簡そのものからと赤外線写真から行っており、保存処理後にはもう一度再検討する必要がある。

泊桂木遺跡第3次調査

1 調査に至る過程

平成19年10月24日付で、前原市大字泊字カツラギ地内におけるアパート建築にあたり、および平成19年12月27日付で、アパート建築に伴う道路新設事業にあたり、いずれも地権者である村田笑子氏より埋蔵文化財発掘の届出(文化財保護法第99条)が提出された。当地は周知の埋蔵文化財包蔵地であるため、事前に確認調査を行った結果、弥生時代～古墳時代を中心とする遺物や遺構が検出された。このうち盛土による遺構の保存が可能となったアパート部分と、道路新設部のうちすでに削平されて遺構が確認できなかった微高地を除く約113m²について緊急的に発掘調査を実施した。

発掘調査は平成19年度事業として平成20年2月4日より2月29日まで実施し、その後の整理作業および報告書作成作業は平成20年度事業としてこれにあたった。

2 調査の組織

平成19・20年度の調査に係る組織は以下の通りである。

調査主体 前原市教育委員会

調査総括 前原市教育委員会 教育長 中原一憲
教育部長 坂巻善直
文化課長 久保静代(平成19年度)
谷口正和(平成20年度)

文化課発掘調査係長 角 浩行

調査・整理担当 文化課主任 榑崎直子

3 調査地点の概要

当地は前原市と福岡市の市境にあたる。標高99.2mの石ヶ岳から南西へ派生する尾根上、標高14～15mの地点に位置し、東側および北側へ緩やかに傾斜している。

調査区西側は削平されていたが、遺構は掘立柱建物や土坑など、調査区中央～東側に集中している。調査区と市道を挟んで東側は、現在、九州大学移転・統合に伴い福岡市教育委員会により発掘調査が進められている元岡遺跡42次調査地点にあたり、本調査区とは標高差約4～8mを測る。ここからは弥生時代中期後半～後期を主体とする遺構が検出されているが、殊に北から南への流路からはおびただしい土器に加え、琴や鳥形等の木製品、中国貨幣等、様々な遺物が出土しており注目されている。これら流路出土遺物の多くは旧台地からの流れ込みであると考えられ、その本源は泊地区の丘陵上であった可能性が高く、今回検出された土坑・掘立柱建物等を含む集落遺構の実態解明が重要な鍵を握っているといえる。

4 遺構と遺物

(1) 土坑

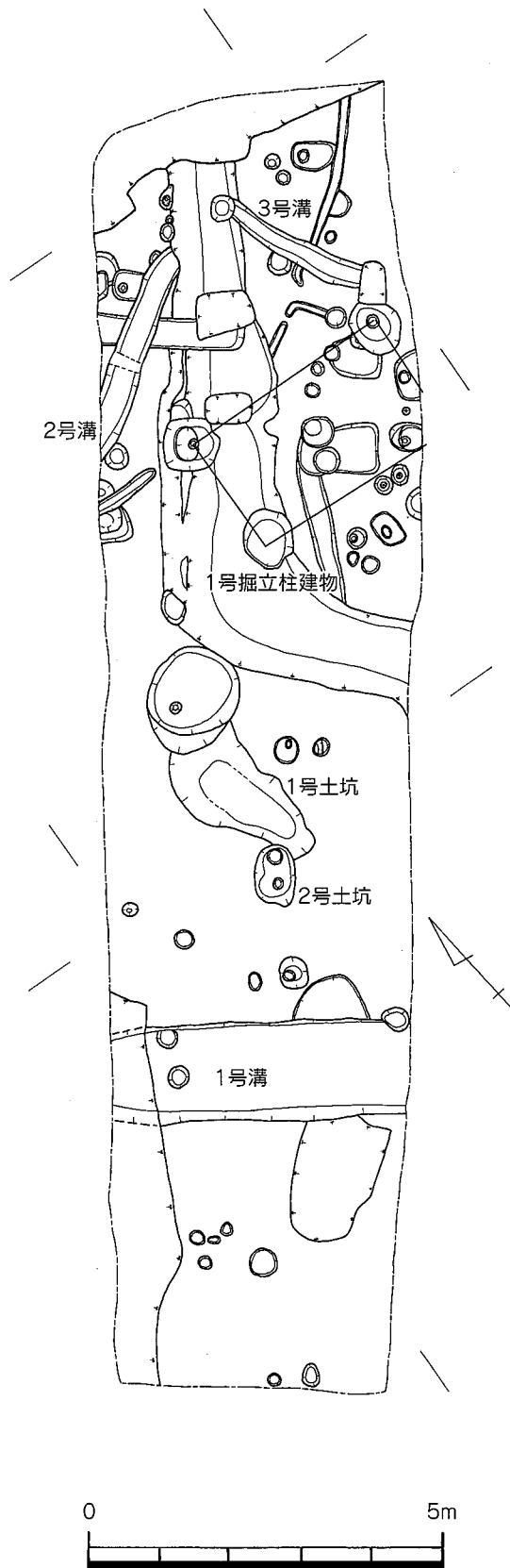
1号土坑(第80図)

調査区中央で検出した。長さ2.9m、幅0.7～1.4m、深さ0.25mを測り、南北に長い不正円形を呈する。底面は平坦で壁は緩やかに立ち上がる。埋土中には焼土・炭が多く含まれており、その傾向が特に顕著であった南側では約10cmの堆積が確認された。

出土した銅鏃・沓形支脚・脚状土製品はいずれも焼土集中箇所からのものである。何らかの祭祀行為があったものと推測される。2号土坑およびP4に切られる。

1号土坑出土遺物(第81図)

1～3は土製品で、1は長さ9.8cm、最大厚4.1cm、器部接合面の傾斜は35度。ほぼ真直ぐな形状である。2は長さ10.1cm、最大厚4.3cm、接合面傾斜角24度。先端を欠損する。器部接着部付近で外反して肥厚する。3は長さ10.3cm、最大厚3.5cm、接合面傾斜角32度(推定)。先端を欠損する。器部接着部がわずかに内に曲がる。いずれも細砂を含む在地の土を使用し、片手で握って成形したような指の圧痕が明瞭に残っている。形状には規則性は認められない。これらは把手か、脚状のものと思われるが、泊リュウサキ遺跡3区からこの時期の多孔式甑と思われる底部片が出土していることから把手と考えたほうが自然か。なお、同時期の脚状土製品としては、三雲仲田遺跡18号住居跡から器部内面と推測される部分が接着した支脚状の土製品が出土している(注1)。4は沓形の支脚で器高9.9cm、上面径7.4cm、底部径12.1cmで、上面端部を指でつまみ出している。中央部の孔は径7mmで貫通せず粘土が内面に押し出されている。外面は刷毛目がわずかに残る。内面は手持ちで回転させながら指ナデによる調整を施す。淡灰褐色で石英・長石を多く含む。5は無茎の銅鏃である。

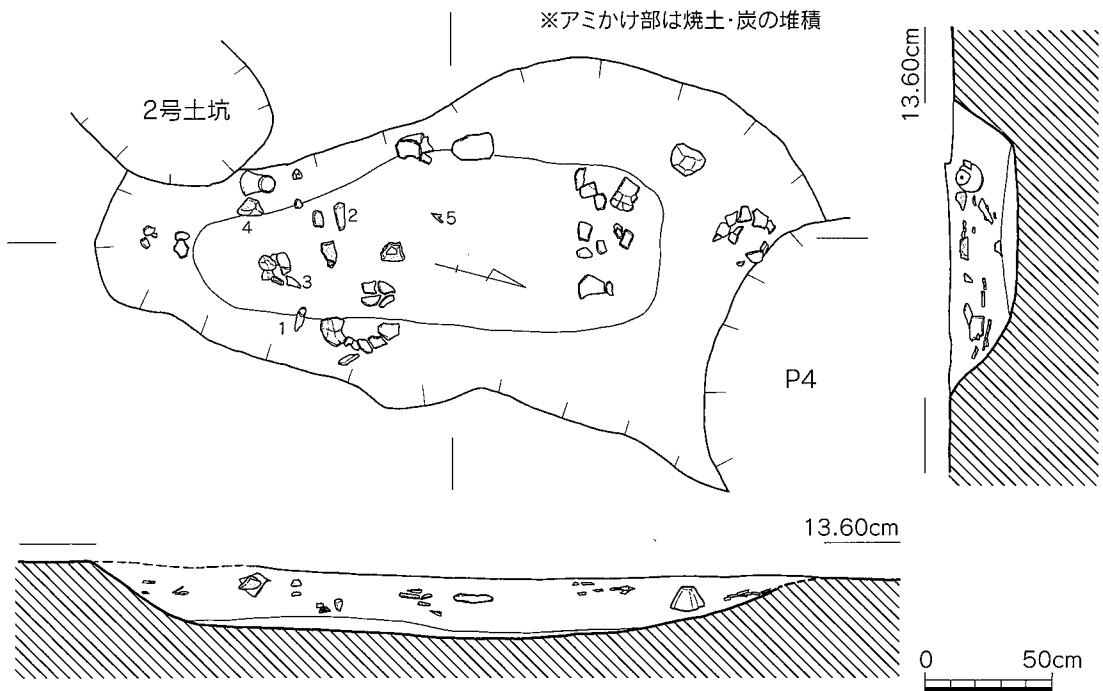


第79図 泊桂木遺跡第3次調査区全体図(1/100)

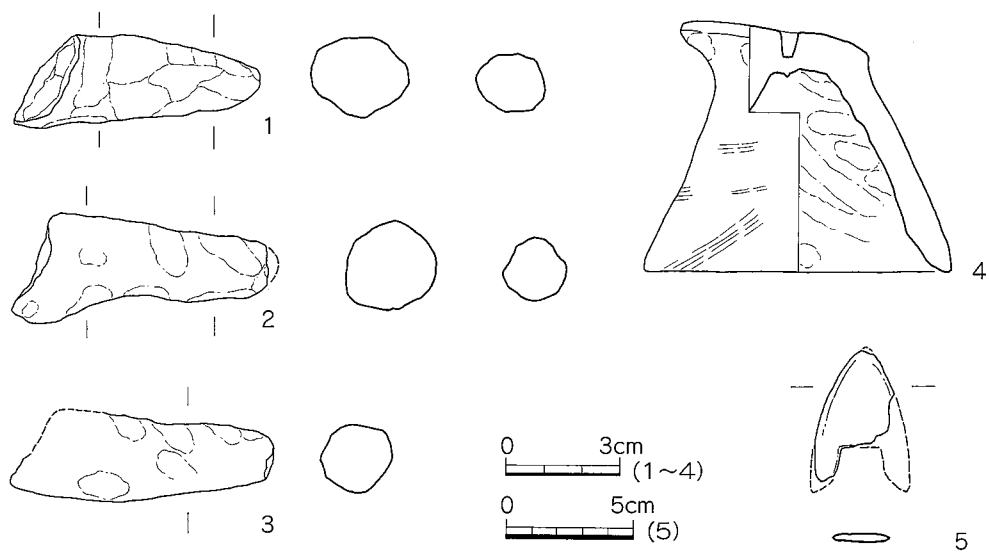
残存長3.5cm、厚さ2.1mmを測る。逆刺端部を欠損するが、推定長は4cm前後である。断面は扁平で錆をもたず、基部はほぼ直角である。劣化が著しく脆弱であるが、鍔身部に稜線が確認できる。無茎銅鍔で基部が直角に近い類似資料は、石川県金沢市西念・南新保遺跡K区1号方形周溝墓出土品や同小松市白江梯川遺跡包含層出土品^(注2)があるが、いずれも鍔身部中央に矢柄固定用の穿孔を有する点で相違が見られる。

※注1) 福岡県教育委員会 1980 『三雲遺跡II』福岡県文化財調査報告書第58集

※注2) 林大智氏(石川県埋蔵文化財センター)よりご教示いただいた。



第80図 1号土坑実測図(1/30)



第81図 1号土坑出土遺物実測図(1/2・1/3)

2号土坑(第82図)

調査区中央で検出した。長さ1m、幅70cmの不正円形を呈する。底面はほぼ平坦で、床全面から西壁にかけて焼土・炭が約2~3cm堆積していた。焼土を剥いだ時点でさらに二つのピットの掘り込みを検出したが、東側のピット上面からは壺の底部が出土した。柱を抜取った後に土器を据えて土坑内で祭祀を行ったものか。1号土坑を切る。

2号土坑出土遺物(第83図)

6は土坑内ピットから出土した残存高5.2cmの壺の底部で丸底を呈する。外面に横~斜めのハケ目がのこる。全体に雑な作りで石英・長石を多く含む。

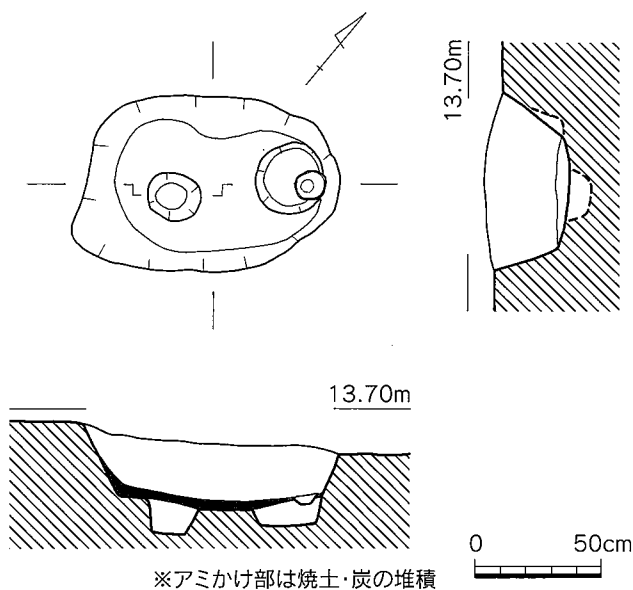
(2) 掘立柱建物

1号掘立柱建物(第84図)

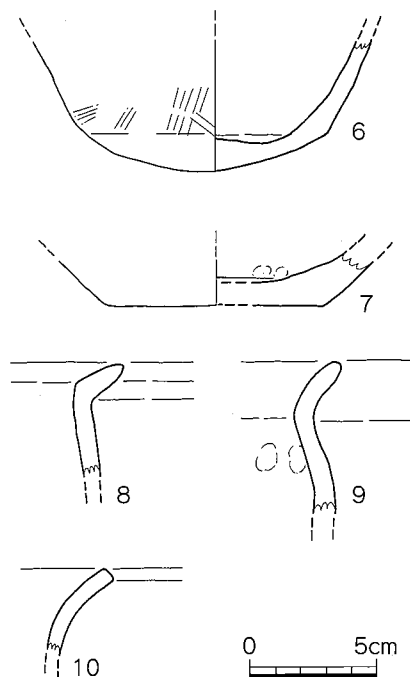
調査区東側で検出した。現状では1間×1間で梁行2.14m桁行3.57m、梁行方位はN-31°-Wにとる。柱穴の平面プランはP1・P2がいびつな隅丸方形を呈するが、P3は円形に近い。いずれも一辺(径)が90~100cmと大型で、P2・P3の中央部で確認した柱は直径24cm程である。調査区外(東側)へ続く可能性がある。

1号掘立柱建物出土遺物(第85図)

11はP1、12・13はP2から出土した。いずれも弥生土器片である。11は甕の底部片で底径は10.2cm(復元)、残存高は6.3cm。全体に摩滅しているが内面に指押さえの痕跡がある。



第82図 2号土坑実測図(1/30)



第83図 2号土坑出土遺物実測図(1/3)

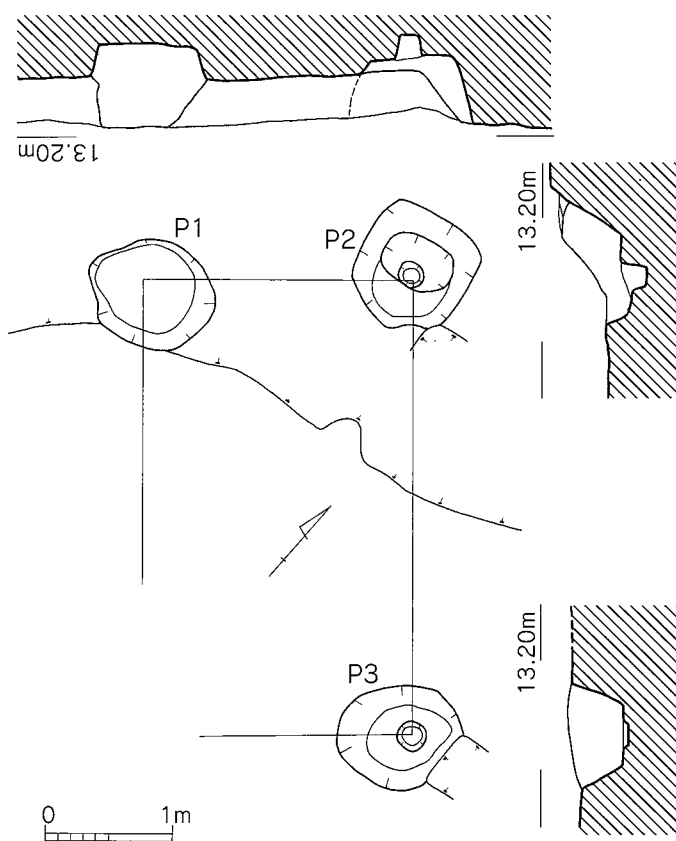
(3) 溝

1号溝(第86図)

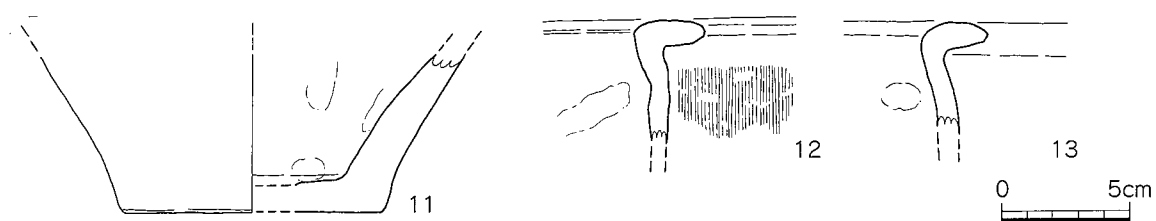
調査区西側で検出した。上部は著しい削平を受けており残存状態は悪い。現状では幅約1.7m、長さ約5mで両端とも調査区外へのびる。底面は平坦で立ち上がりも緩やかである。P53に切られる。弥生土器および土錘が出土している。弥生時代中期後半～末葉と思われる。

1号溝出土遺物(第87図)

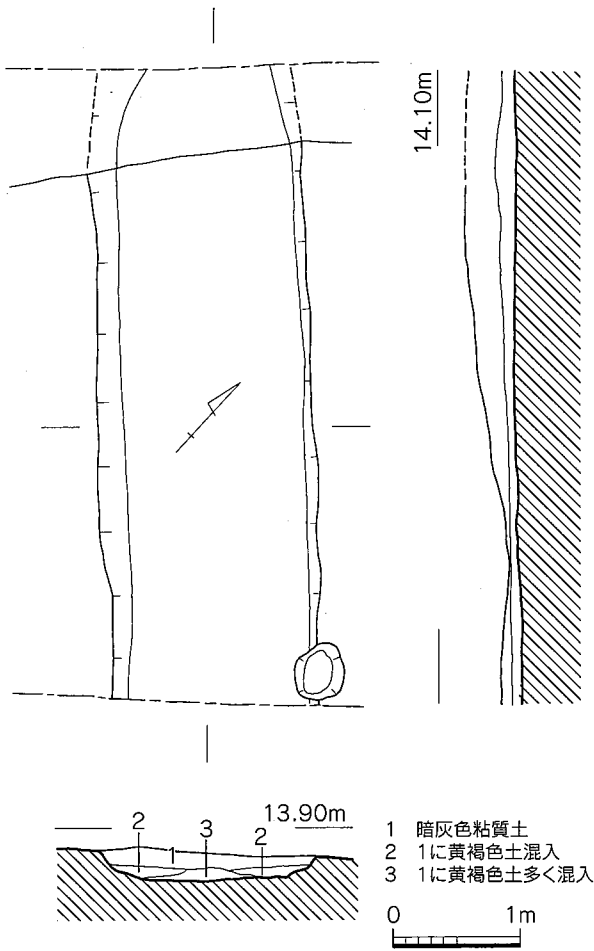
14～16は弥生土器片、17は土錘である。土錘は長さ4.3cm、最大径2.6cm、孔径は8mm。淡橙色で胎土は精緻である。黒斑部に径9mmの貫通しない孔があるが、焼成時にあいたものか。



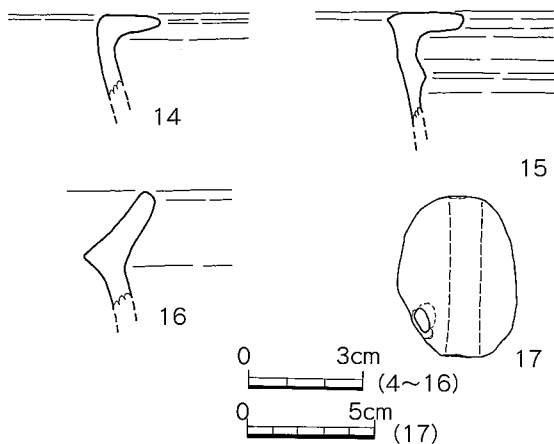
第84図 1号掘立柱建物実測図(1/60)



第85図 1号掘立柱建物出土遺物実測図(1/3)



第86図 1号溝実測図(1/60)



第87図 1号溝出土遺物実測図(1/2・1/3)

2・3号溝(第88図)

調査区東側で検出した。北側の溝を2号溝、東側の溝を3号溝としたが、いずれも幅約50cmであり本来同一の溝である可能性がある。コーナーにあたる部分はピットに切られ、現代溝により削平されている。また3号溝の南端部は攪乱により切られているが、その南側延長部を確認できなかった。L字に曲がる区画溝か、あるいは底面は北から南へ緩やかに傾斜しており何らかの排水溝であった可能性があるが、どの遺構に伴うかは不明である。遺物は2号溝から弥生時代終末期の土器および須恵器が出土した。

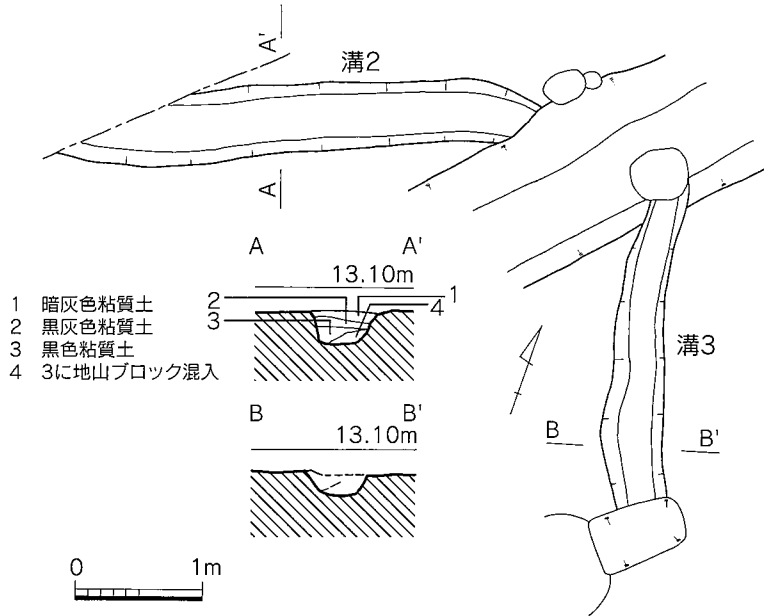
2号溝出土遺物(第89図)

18は薄手の手捏ね土器碗で、口径7.4cm、高さ3.1cm。淡黄褐色を呈する。19は鉢で口径7.5cm、高さ7.7cm。口縁部外面を指押さえによりわずかに外反させる。内外面とも指の圧痕が明瞭にのこる。20は底部片で丸底を呈する。粗雑なつくりで器壁は厚く、底部内面に指ナデ痕がのこる。21は高坏で裾部径15.4cm、残存高12.0cm。内面は指なでし、裾付近を指押さえする。外面はやや斜め方向へなで上げている。器壁が厚く、最大厚は3cmに及ぶ。22は須恵器壺で口縁部～肩部のみ残存する。口径18.2cm、残存高9.0cm。胎土は精緻で肩部外面に平行叩き痕、内面に当て具痕がのこる。

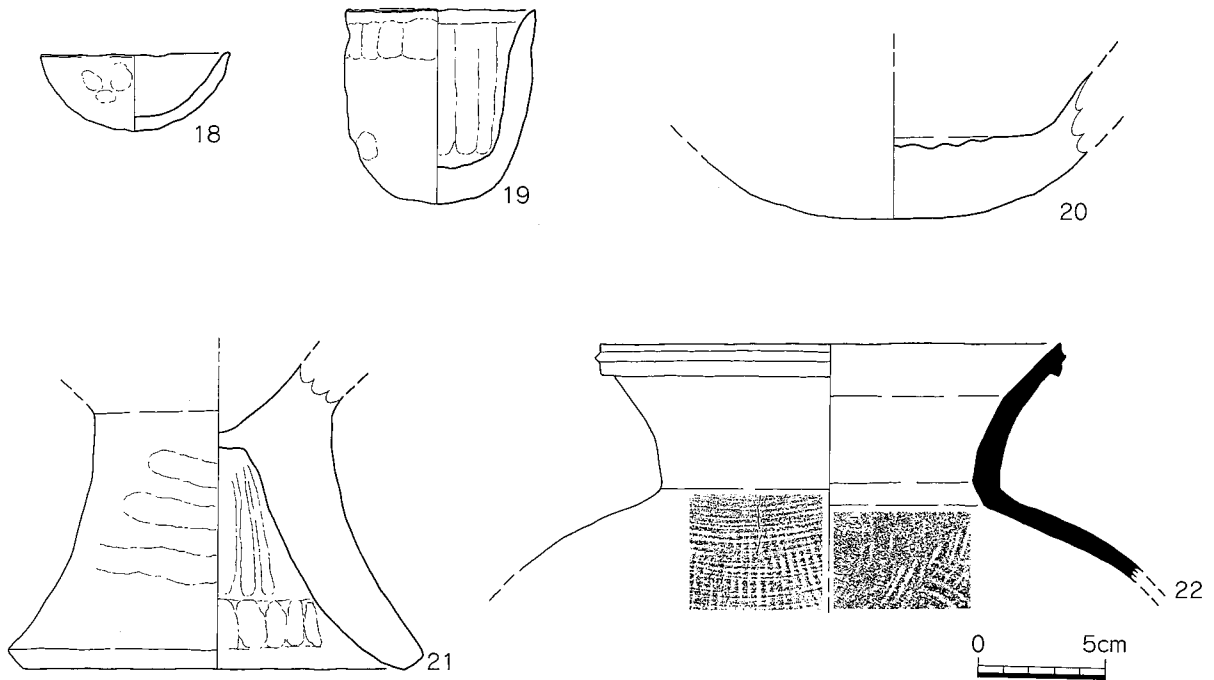
5 まとめ

今回の調査および過去に調査した泊桂木遺跡第1次調査では、弥生時代後期～古墳時代の複数の掘立柱建物が多数検出されている。しかし、いずれも限られた調査範囲であるため集落の全容はつかみにくい。ただし、第1次・第3次調査の中間地点からは、東隣の元岡遺跡谷状遺構へ続くと思われる溝状の平面プランを確認している（盛土保存されたため未調査）。このことから、本来は泊から元岡

へ一連の集落が展開していたと考えられ、入海に臨む湾岸集落として朝鮮半島・中国大陸との交易の一端を担っていたものと思われる。今後の周辺の調査による、居住域等の集落構造の解明に期待がかかる。

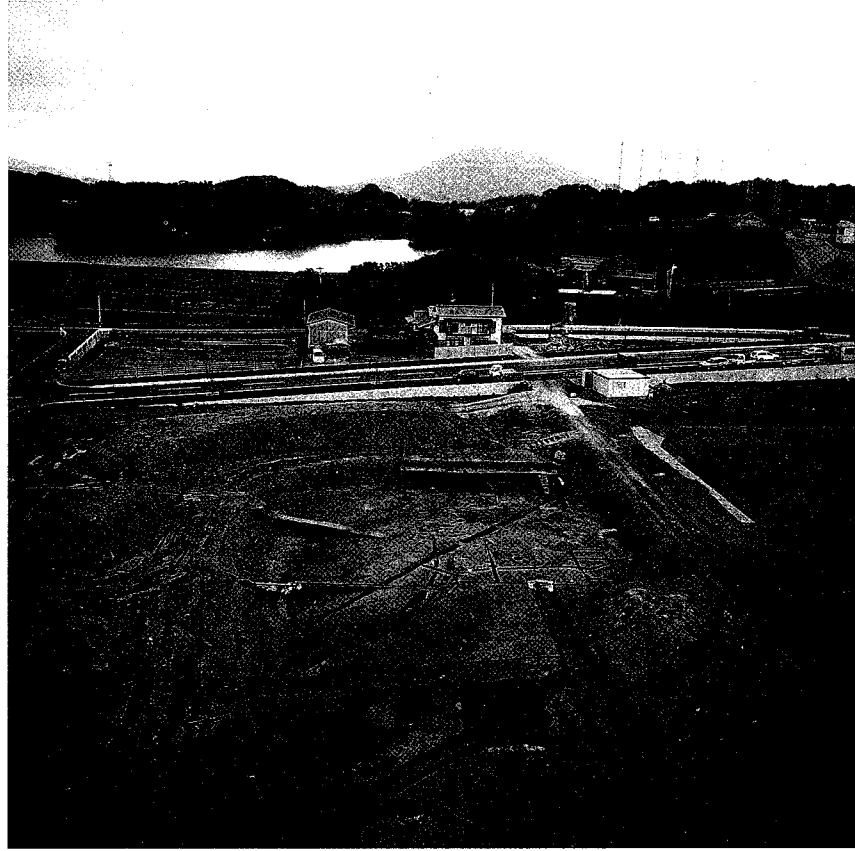


第88図 2・3号溝実測図(1/60)



第89図 2号溝出土遺物実測図(1/3)

写真図版



a I区調査区全景



b I区1~3号住居跡全景

图版2



a I区調査区遠景



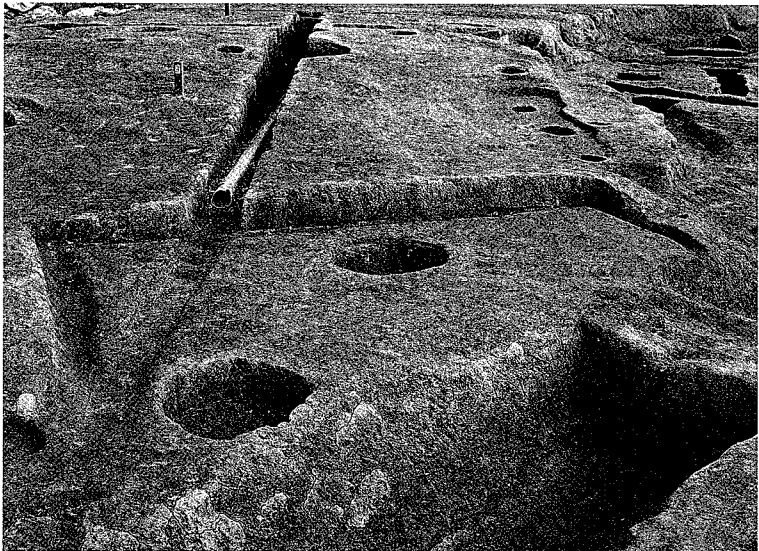
b I区1・2号住居跡遠景



c I区1号住居跡



a I区2号住居跡



b I区3号住居跡

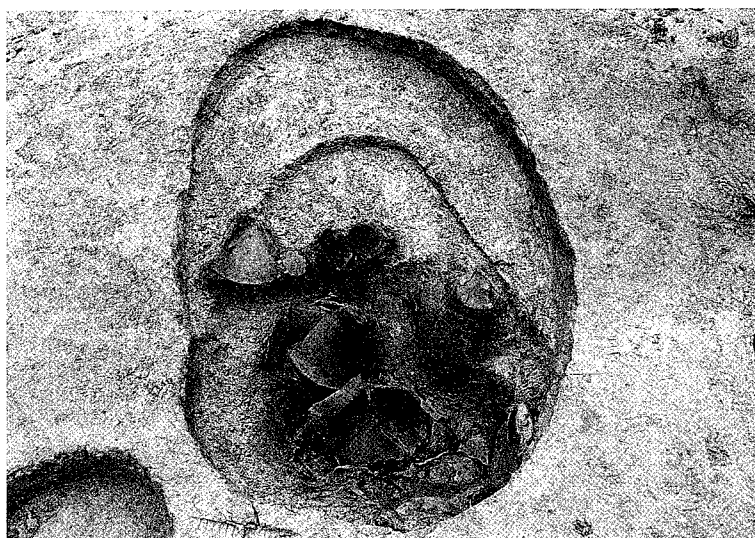


c I区1号土坑

图版4



a I区2号土坑



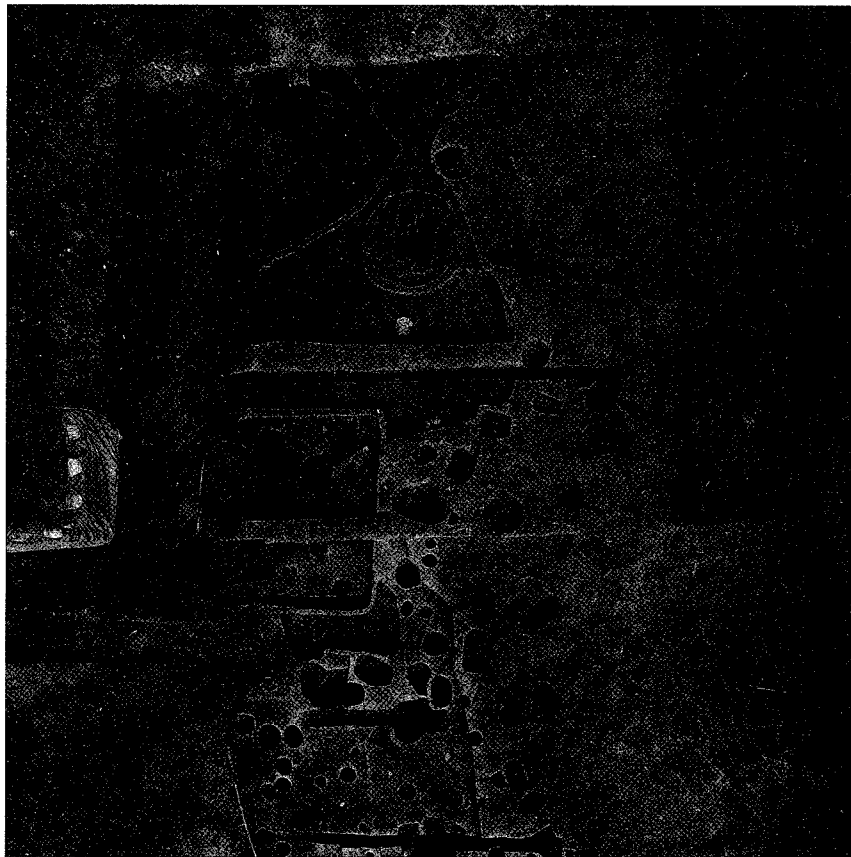
b I区3号土坑



c I区4号土坑



a II区調査区全景



b II区住居跡全景

图版6



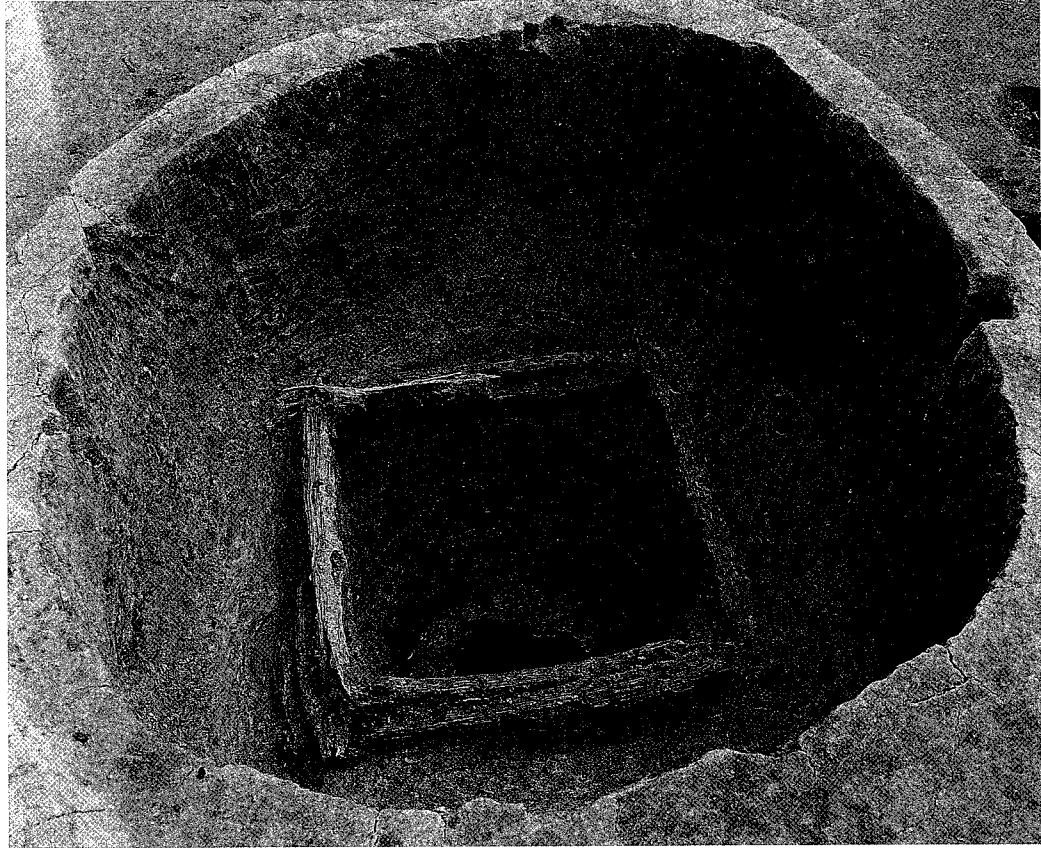
a II区1号住居跡



b II区5号住居跡



c II区甕棺墓



a II区井戸完掘状況



b III区調査区と元岡遺跡遠景

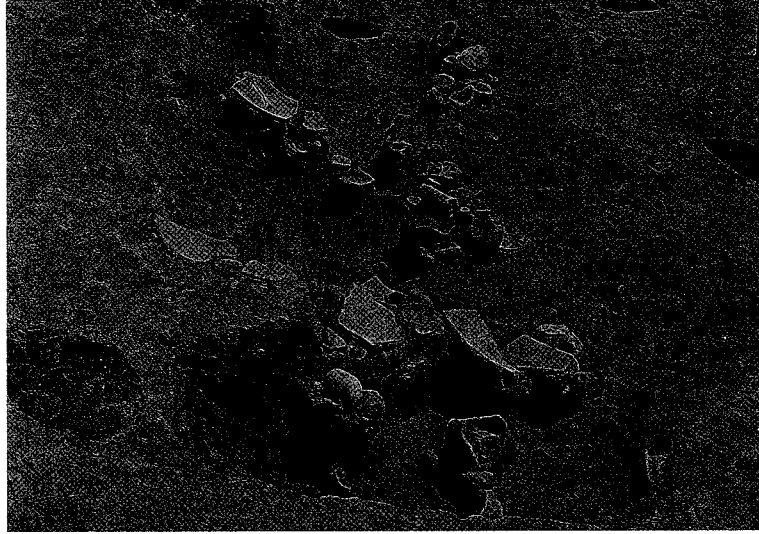
图版8



a III区全景



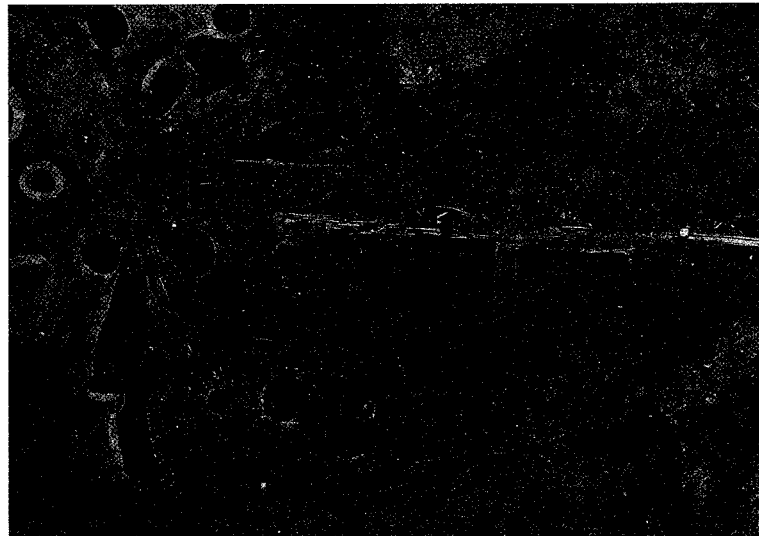
b III区1号住居跡



a III区2号住居跡



b III区3号住居跡

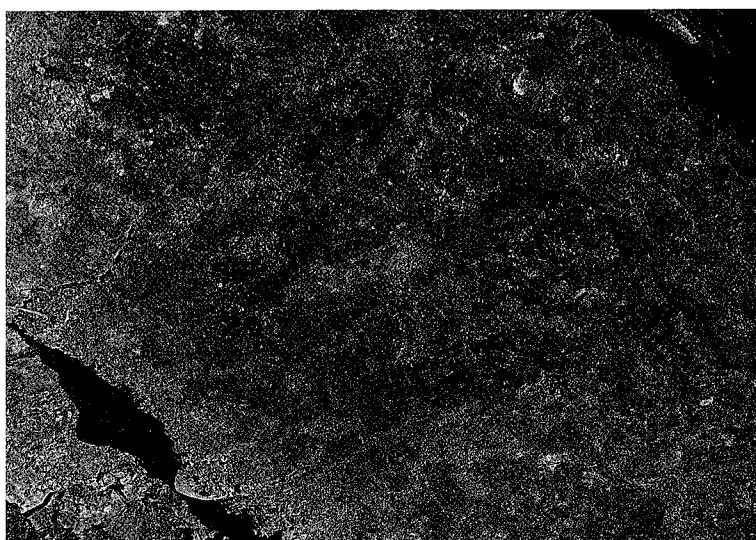


c III区4号住居跡

图版12



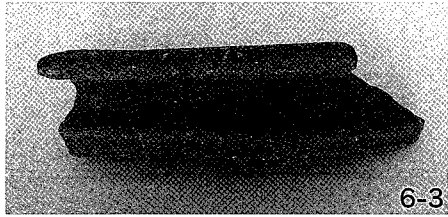
a III区5号土坑2



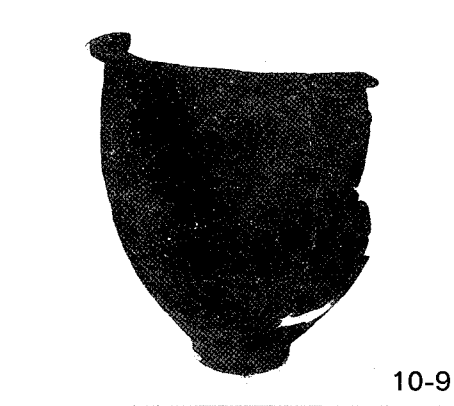
b III区烧土坑



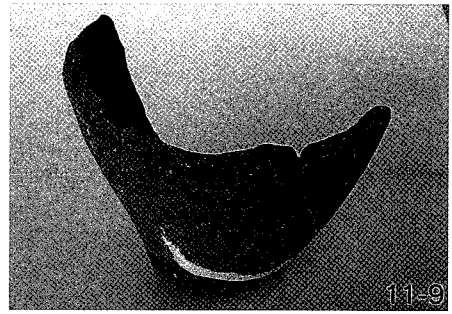
c III区基本层序



6-3



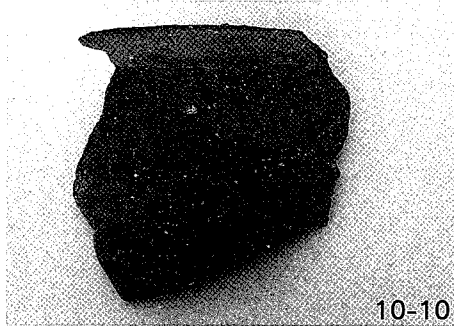
10-9



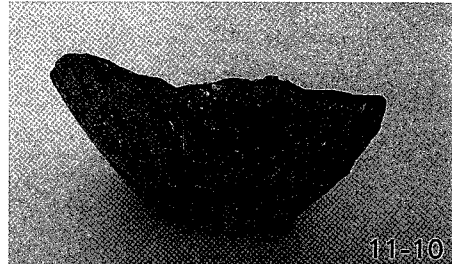
11-9



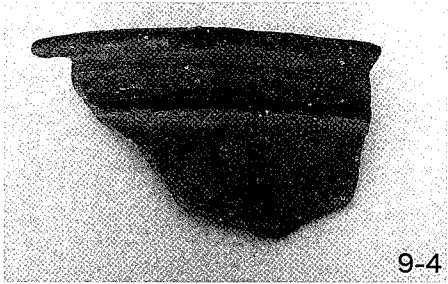
9-2



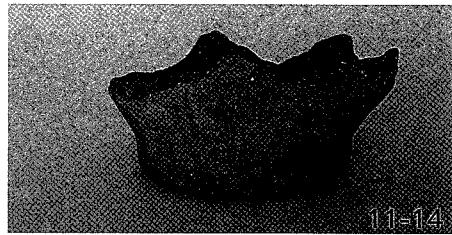
10-10



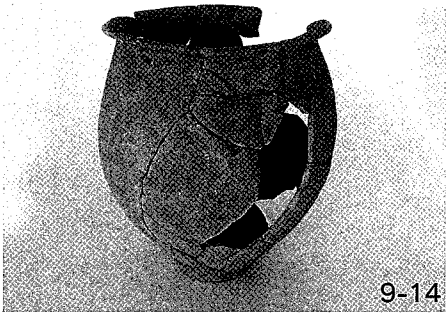
11-10



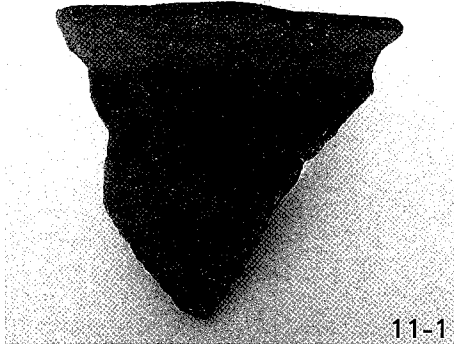
9-4



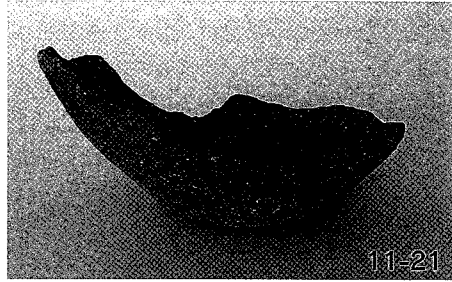
11-14



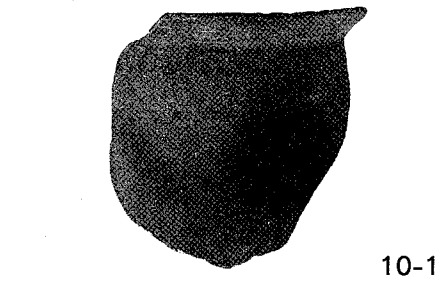
9-14



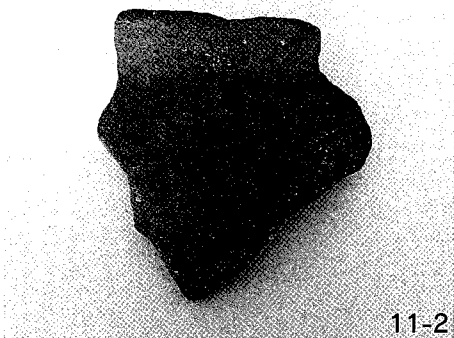
11-1



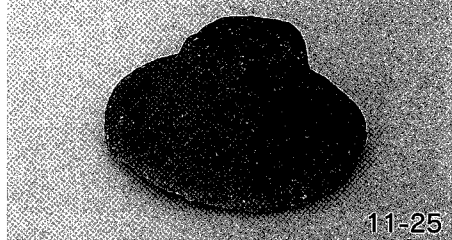
11-21



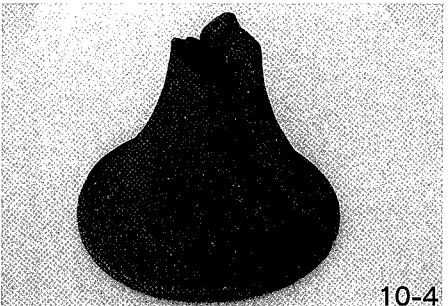
10-1



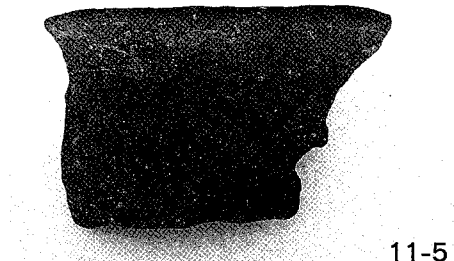
11-2



11-25



10-4



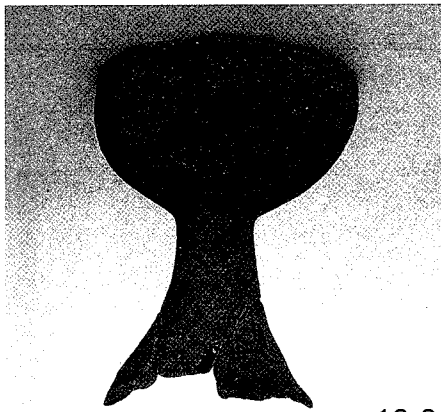
11-5



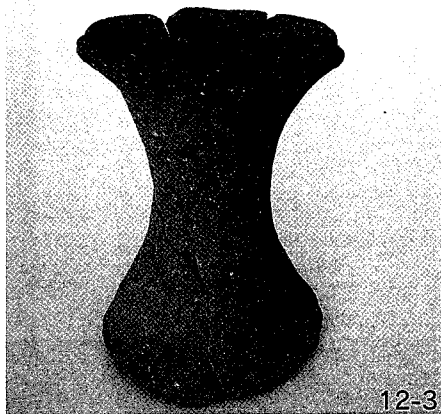
12-1

I区住居跡、土坑、奈良時代水田畦畔出土遺物

图版14



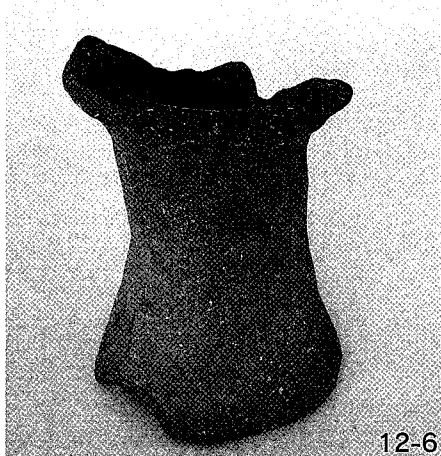
12-2



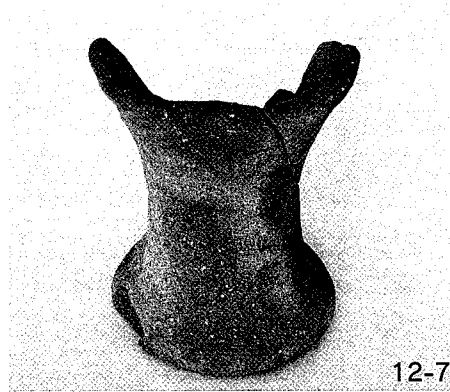
12-3



12-4



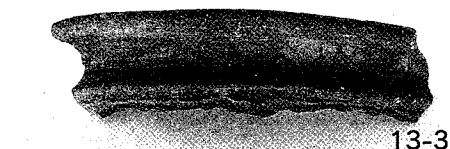
12-6



12-7



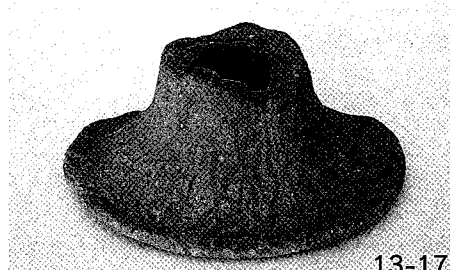
13-2



13-3



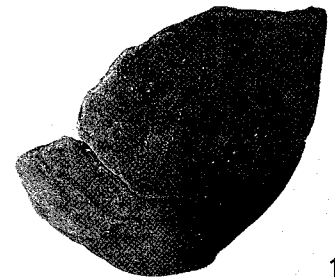
13-5



13-17



13-19



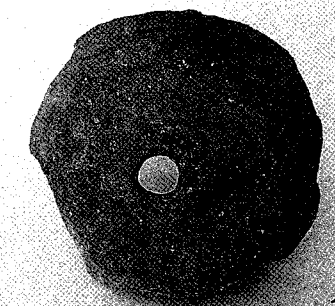
13-12



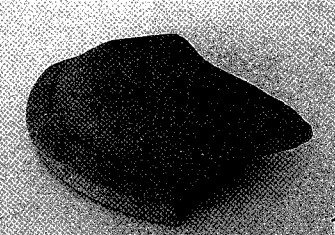
13-12



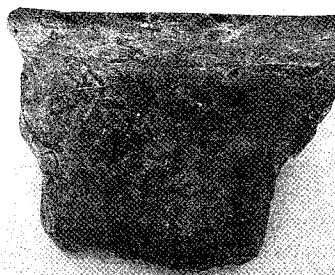
13-13



13-13

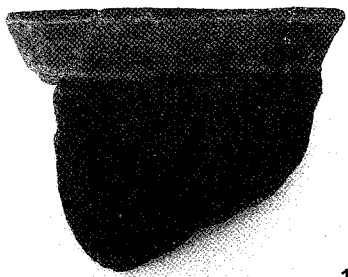


13-23

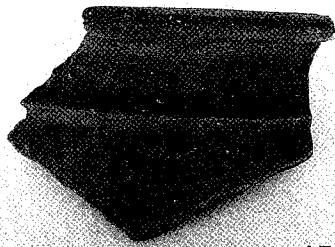


13-4

I区奈良時代水田畦畔、包含層出土遺物



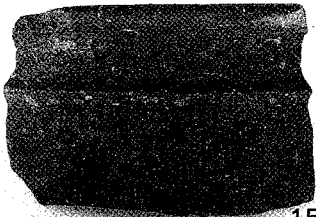
15-3



15-12



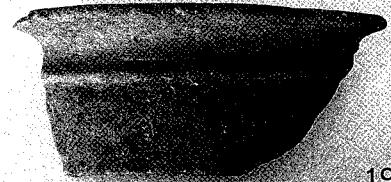
19-1



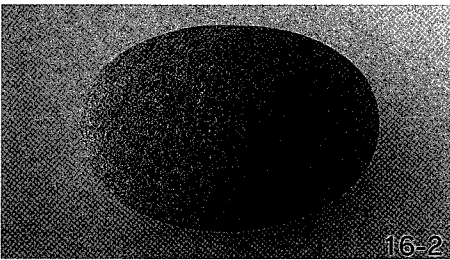
15-14



15-13



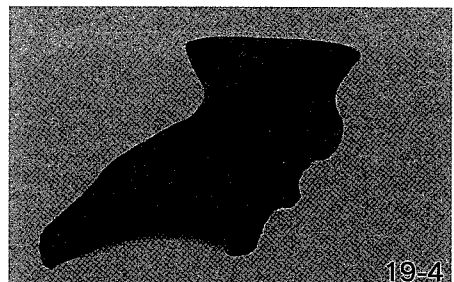
19-2



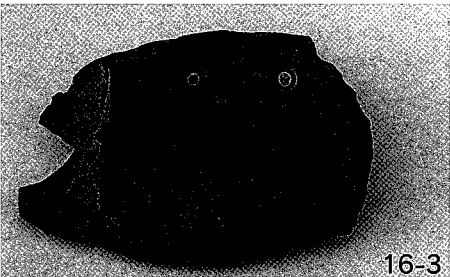
16-2



15-15



19-4



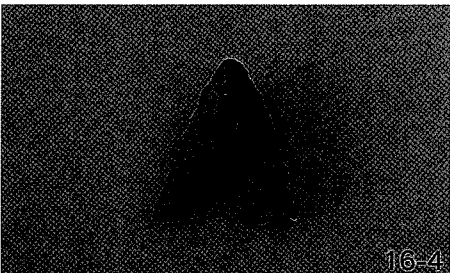
16-3



15-16



19-5



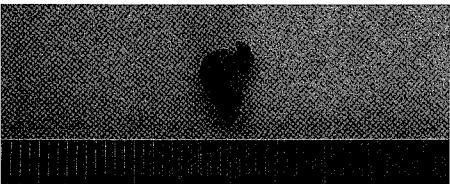
16-4



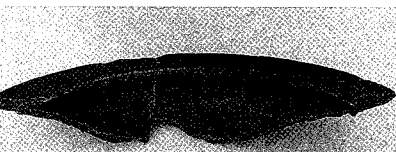
15-17



19-7



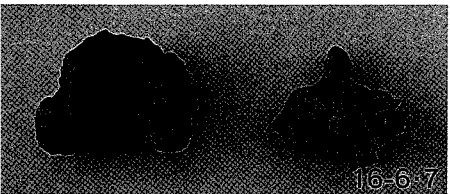
16-5



15-21

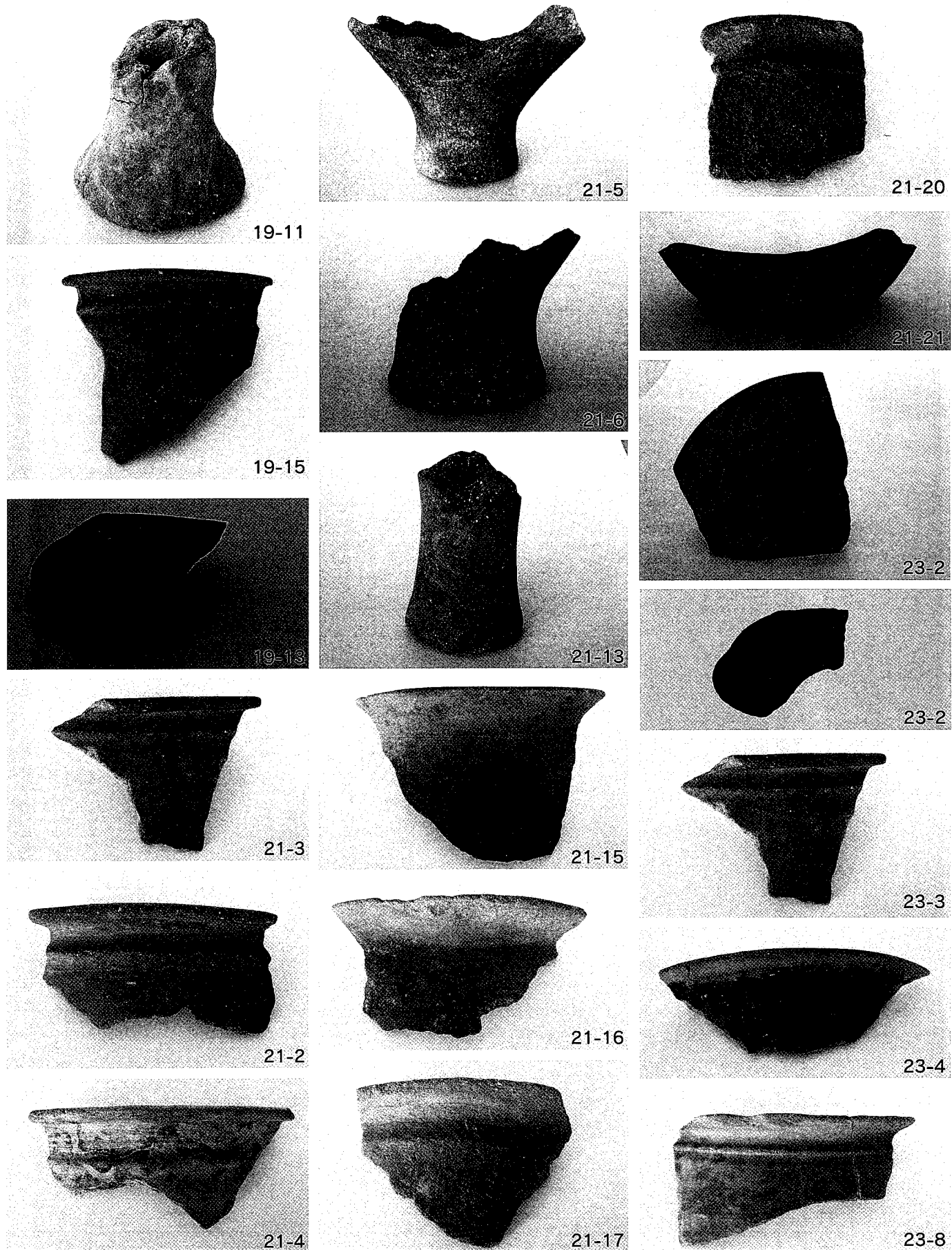


19-8

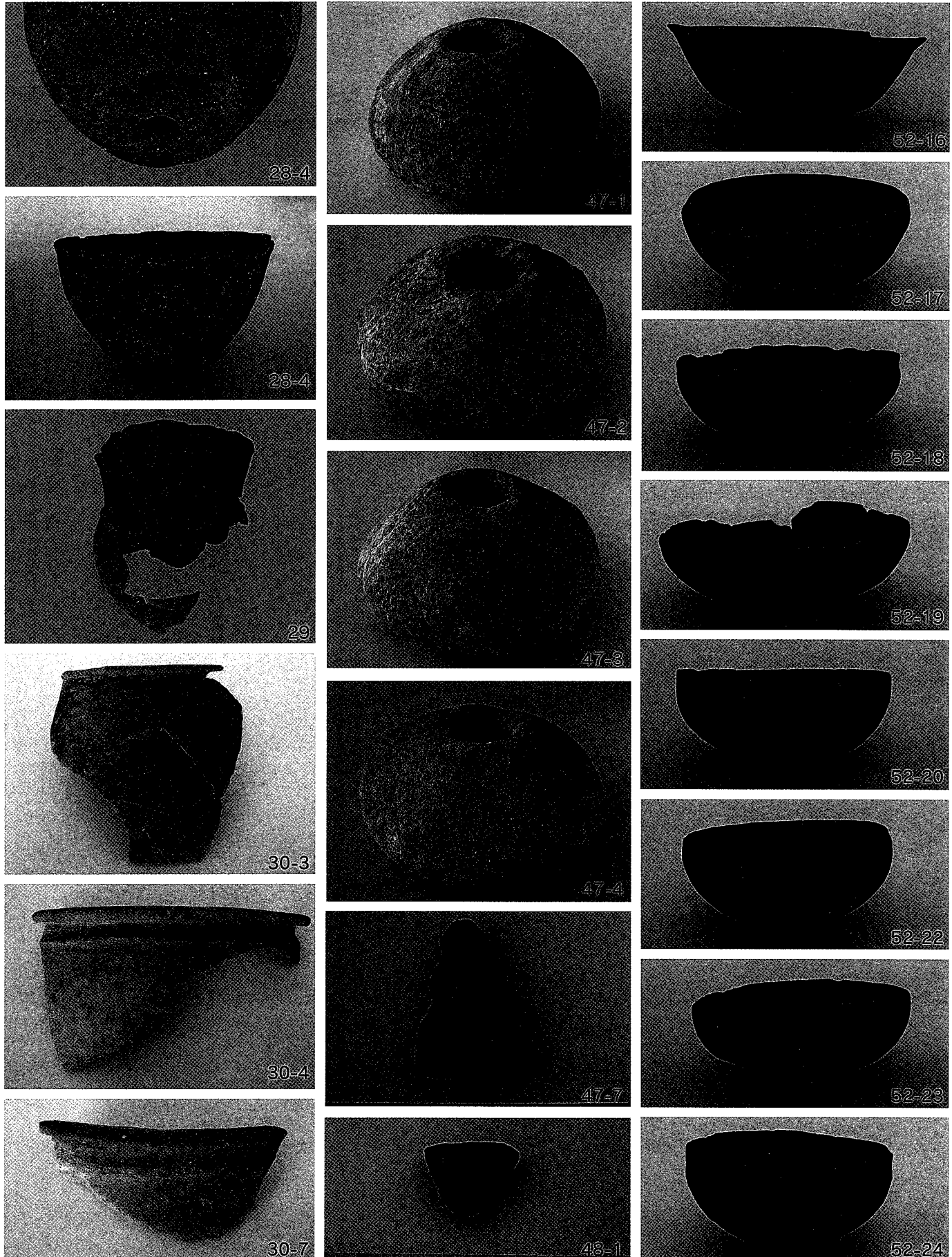


16-6, 7

图版16

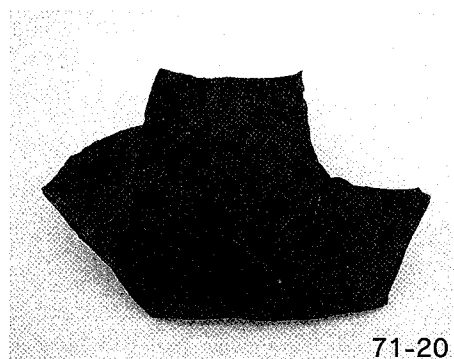
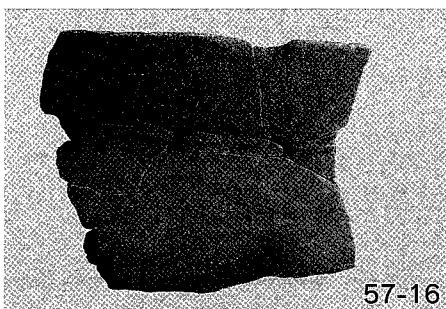
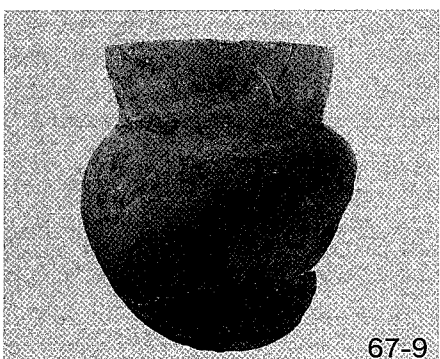
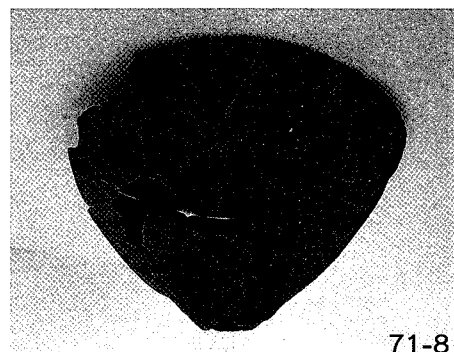
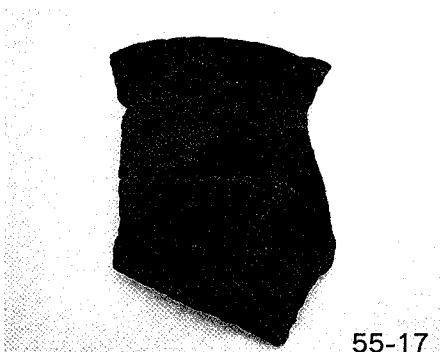
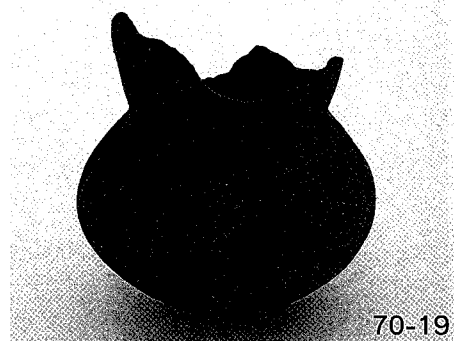
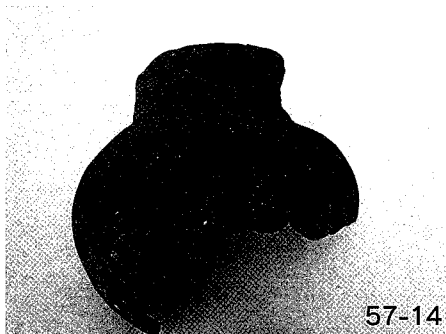
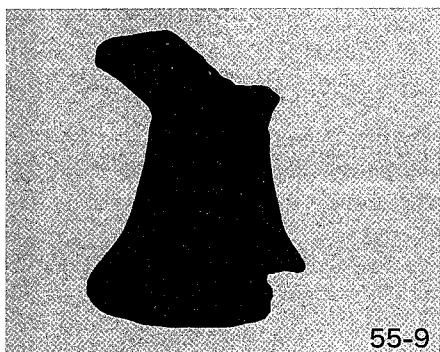
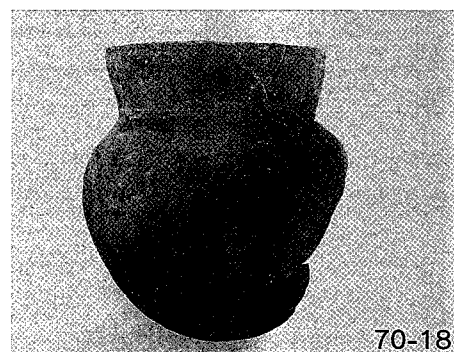
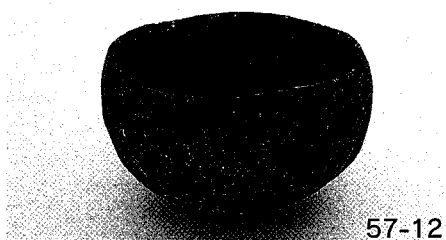
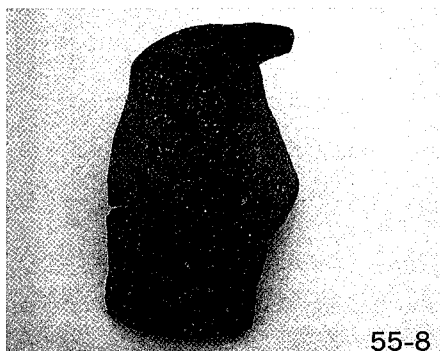
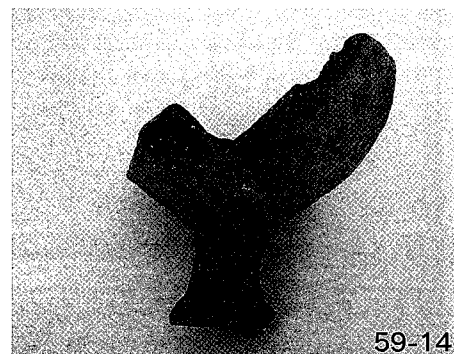
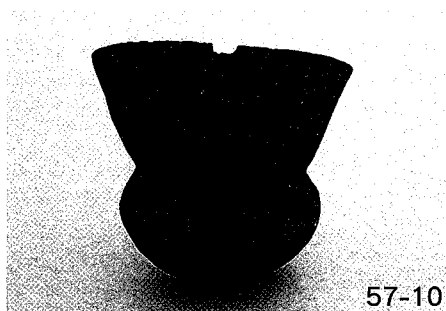
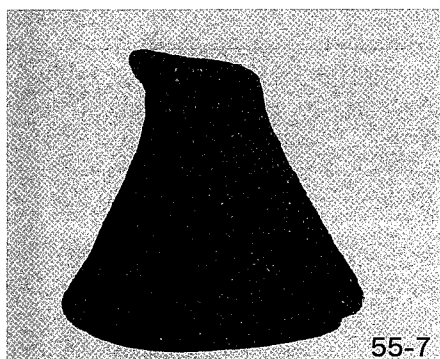


II区3~5号住居跡、井戸出土遺物

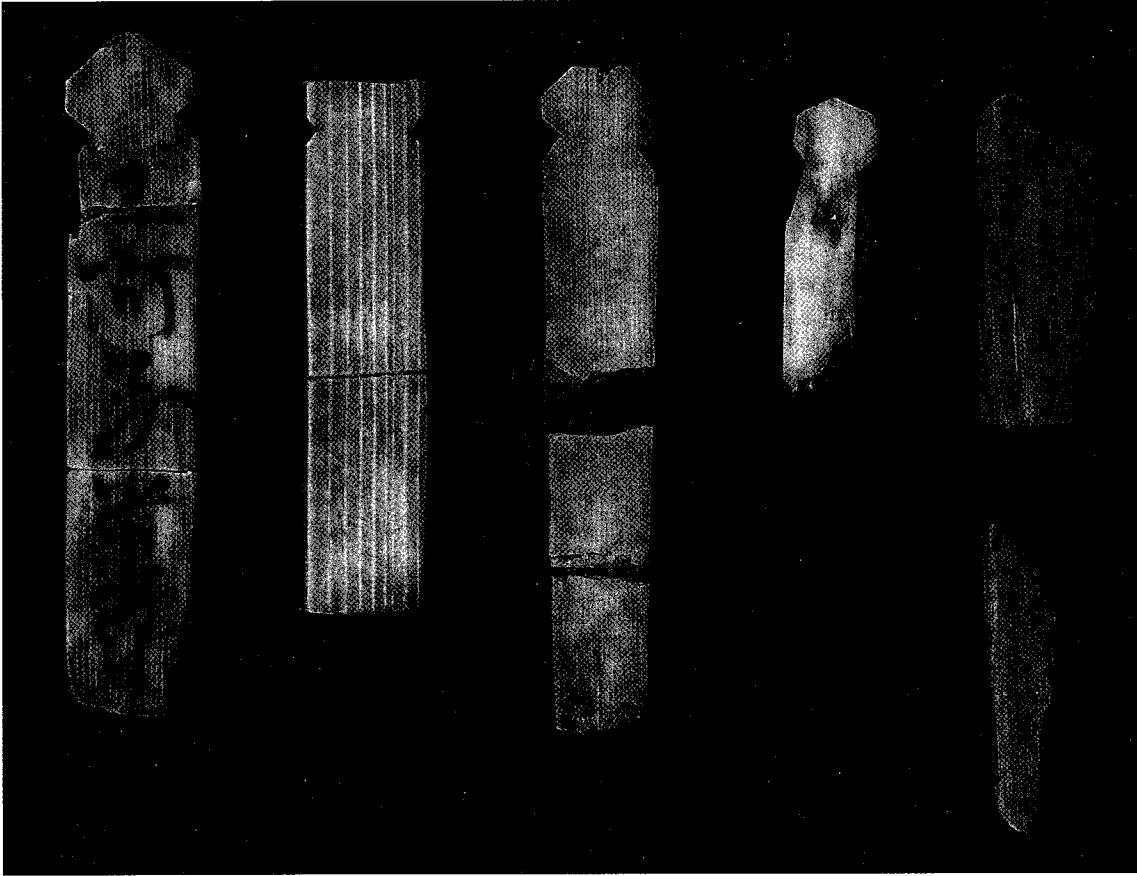


II区土坑、墓棺、ピット、その他の遺物、III区1号住居跡出土遺物

图版18

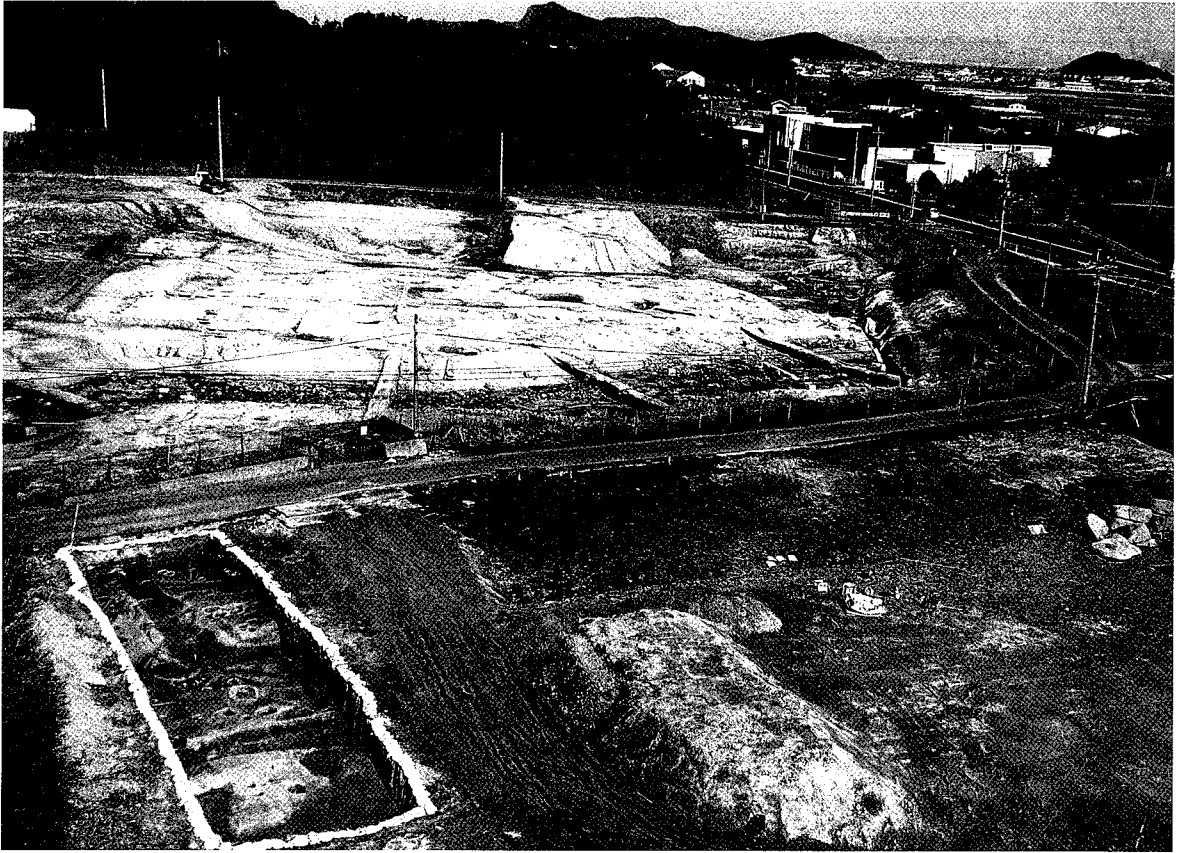


Ⅲ区2~9号住居跡、5号土坑出土遺物



II区井戸出土1~4号木簡

図版20



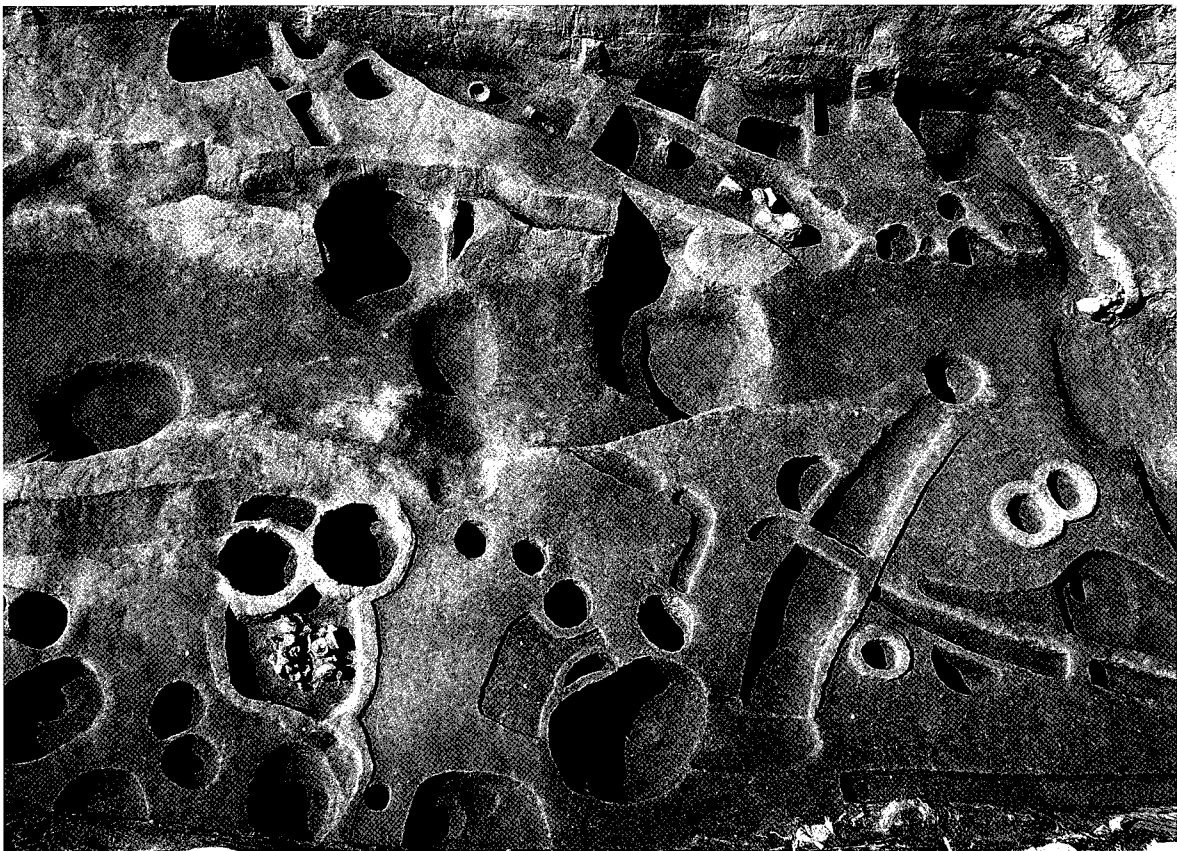
a 泊桂木遺跡第3次調査地点(西から)※奥は元岡遺跡42次調査地点



b 調査区全景(南東から)



a 1号・2号土坑(北東から)



b 1号掘立柱建物および2号・3号溝(南東から)

图版22



81-1



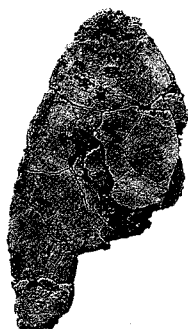
81-2



81-3



81-4



81-5



83-6



85-11



87-17



89-18



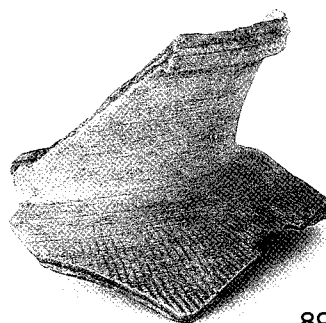
89-19



89-20



89-21



89-22

報 告 書 抄 録

ふりがな	とまりりゅうさきいせき							
書名	泊リュウサキ遺跡							
副書名	福岡県前原市北部研究施設等整備事業に係る文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名	前原市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第102集							
著者名	平尾和久・田中裕美(泊リュウサキ遺跡)、植崎直子(泊桂木遺跡3次)							
編集機関	前原市教育委員会							
所在地	〒819-1192 福岡県前原市前原西一丁目8番14号							
発行年月日	西暦2009年3月31日							
保管場所	[写真] [図版] [遺物]	前原市教育委員会						
保管場所所在地	福岡県前原市前原西一丁目8番14号							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
泊リュウサキ遺跡	福岡県前原市大字泊字リュウサキ	40222		33°35'02"	130°12'53"	2007.12.10~2008.6.23	2,410m ²	研究施設造成
	種類	主な時代		主な遺構	主な遺物			特記事項
	集落	弥生時代~古墳時代、古代		住居跡、掘立柱建物、井戸、土坑、甕棺墓	弥生土器、土師器、須恵器、木簡、細石刃核、銅鏃、石器、玉類			木簡出土
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
泊桂木遺跡3次	福岡県前原市大字泊字カツラギ	40222		33°34'55"	130°12'59"	2008.2.4~2008.2.29	113m ²	道路
	種類	主な時代		主な遺構	主な遺物			特記事項
	集落	弥生時代古墳時代		掘立柱建物、土坑、溝	弥生土器、須恵器、土師器、銅鏃			

泊リュウサキ遺跡

福岡県前原市北部研究施設等整備事業に係る文化財調査報告書
前原市文化財調査報告書第102集

2009年3月31日発行

発行 福岡県前原市教育委員会
〒819-1117 福岡県前原市前原西一丁目8番14号
TEL 092-323-1111

印刷 株式会社 ディスジャパン
〒810-0041 福岡県福岡市中央区大名一丁目9番30号
TEL 092-712-0431

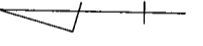
X=64725

X=64720

X=64715

X=64710

X=64705





区 全体图(1/100)



